



人は人のつくるものに似ていく
PART I



星野廉



目次

この本について	
*	3
人のつくるものは人に似ている	
*	7
人がつくったものに人が似てくる	
*	25
人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく	
*	41
移動しながら静止している	
*	85
指が知っている、体が覚えている	
*	97
する、される	
*	107
外にあって、外からやって来て、外であるもの	
*	119
続・外にあって、外からやって来て、外であるもの	
*	123
抽象を体感する、体感を抽象する	
*	137
うつせみ、引用と演技からなる自分	
*	147
片想い	
*	159
偶然にまかせて書く	

*	169
禁断の恋	
*	179
賭けたり、占ったり、決断するとき	
*	187
赤ちゃんも賭けたり占ったりしている	
*	197
そっくりなものなら平気でその命を奪える	
*	207
私たちは同じではなく似ている	
*	217
意味が立ちあらわれるとき	
*	229
世界にシンクロする	
*	237
文字化する人	
*	249
ピクピクでシンクロする世界	
*	265
先立たれる	
*	275
見える言葉、見えない言葉	
*	283
相手を人として呼ぶ	
*	289
鏡に移る	
*	299
「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」世界	
*	307
写される、撮られる、奪われる	
*	319

眠れない夜の遊び	
*	329
なぞって、真似て、なる	
*	339
空から降ってくる言葉	
*	351
映っている私、写っている私、移っている私	
*	365
それない、ぶれない、あやまらない	
*	381
「それない、ぶれない、あやまらない」世界	
*	393
人間の人形（ひとがた）化、人形（ひとがた）の人間化	
*	403
うつすためには、うつらなければならない	
*	411
人の外にあって、人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという 意味で「外」であるもの	
*	419
信じるとき、人は一瞬変になる。	
*	425
目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」のではない か、とも考えられるわけです。	
*	435
意思が「決める」のではなく、むしろ「決まる」。	
*	445
黒いカラスは白いサギ	
*	455
意味のある影、意味のない影	
*	465
文字に異物を感じる時	
*	479

この本について

＊

PART I。

人のつくるものは人に似ている/人が人のつくるものに似ていく。人間の人形化/人形の人間化、人間の機械化/機械の人間化、人間の文字化/文字の人間化、人間のイメージ化/イメージの人間化。前者の傾向が後者の進行によって凌駕されつつあるのではないか。そんなテーマをめぐる、かげ、うつる・うつす、まねるをキーワードに書いた文章を集めました。

それぞれが別の日に note に投稿したものであるので重複が多々見られます。ご容赦ください。その分、考えの推移をたどることができると思います。

PART I では、このシリーズの原点である3本の記事（「人のつくるものは人に似ている」、「人がつくったものに人が似てくる」、「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」）から古い順に並べてあります。

※なお、PART II では、このシリーズの集大成である4本の記事（「岐路に立つ擬人」、「本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ」、「人にあらわれて、機械にあらわれないもの」、「そっくりなのは、そっくりにつくってあるから」）から新しい順に並べてあります。

人のつくるものは人に似ている

＊

人のつくるものは人に似ている

星野廉

2021/06/27 07:45

目次

なぞる

人のつくるものは人に似ている

枠がぼやける

冷蔵庫はお母さんに似ている

枠、タブロー、スクリーン

枠、テリトリー

世界は劇場/工場

人に似ているものに囲まれる

なぞる

なぞるは枠をつくること。
なぞるうちに枠が見えてくる。

見えてきた枠に縛られる。
枠が当然のものに見てくる。

枠は人を安心させる。
人は枠に嗜癖する。

枠なしでは人は生きられない。
人は枠を意識することがない。

＊

たぶん杵は人の内にある。
誰も杵を見ることはできない。

杵をなぞる。
なぞるだけで見えているわけではない。

杵をつくる。
杵はつくるもの。

人のつくるものは人に似ている。

人のつくるものは人に似ている

よく聞く話。
人のつくるものは人に似ている。

確かに、人に似せてつくっているとしか思えないものがある。

器、スプーン、箸、椅子、寝台、座布団。
手袋、シャツ、ズボン、靴下、ストッキング、衣服。

丸みを帯びたやかんの注ぎ口を見ていて、どきりとすることがある。
ソファに体を沈めると懐かしさで涙ぐむことがある。

人の体に触れる。
人の体に当てる。人を包みこむ。

*

窓、煙突、家。
荷車、馬車、自動車、乗り物。

窓が人の顔に見えることがある。
車を正面から見ると、どうしてもそこに顔を見てしまう。

*

人形（ひとがた）、像、図、絵、絵本。
おもちゃ（玩具）。

動くもの。動かないもの。
動かすもの。動いていると想像するためのもの。

＊

人面○○。枯れ尾花。

錯覚、錯視、幻聴。幻覚。幻想。妄想。空想。想像。

経済、ビジネス、宗教、音楽、文学、芸術、スポーツ、科学、哲学、数学、報道、宣伝。
言葉、お金、音、物語、フィクション、映像、ルール、法則、公式、概念、数字、イメージ。

人は存在しないもので動く。
人はないもので動く。

枠がぼやける

あなたは文字が人の顔に見えることがありますか？ ひらがなでも、カタカナでも、漢字でも、数字でもいいです。

フォントや大きさにもよると思います。また手書きの文字や書道なんかの文字だと、これまた印象ががらりと違ってきますね。

学校で書道の授業の時、筆をつかっているうちに、文字が文字ではなくなっていく感じがしたのを思い出します。何をなぞっているのか、自分が何をしているのか、わからなくなるのです。たまにペンで文字を書くと、そういう不思議な気持ちになることが今でもあります。

文字は意味があるのに、その意味が消えて形だけになるとか、他のことが頭に浮かんでしまうなんてことはざらにあります。書いている最中だけでなく、読んでいる時にもです。

なぞっているうちに、なぞっているものがぼやけてくるのです。枠がぼやけてくるのです。それがなぜか気持ちいい。気が遠くなるほど気持ちいい。不思議でなりません。

冷蔵庫はお母さんに似ている

人のつくるものは人体に似ている。
人体の構造と似ているものがある。

人と似た、またはそっくりな仕草をするものがある。
人の顔や姿や身体の一部を想起させるものがある。

楽器、食器、容器、道具、文房具、便器、浴槽、介護用品、医療器具。
時計、装置、電気器具、家具、農機具、機械。

気味が悪いほど似ているものがある。
見ていてほっとするものもある。

鏡、眼鏡、望遠鏡、映画、テレビ、パソコン、スマホ。
蓄音機、レコード、電話、電話機、ラジオ、マイク、イヤホン、テープレコーダー、テレビ。

*

冷蔵庫はお母さんに似ている。イメージしているのは、旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

幼児にもどった気持ちになって、しゃがんだり身をかがめ、視線を下に構えて、そばに立ってみると、そんな気がする。どっしりとしていて、幼児でなくても、小学校の低学年くらいが抱きついて、ちょうどいい重量・体積・質感がある。

エプロンみたいに白くて、いろんなものが貼り付けてあって、よく耳を澄ますとぶーんというやさしい音がして、熱を発していて温かく、扉を開くと、どんな望みもかなえてくれそうで、こころがやすらぐ。

子どもたちが帰宅すると、すぐに飛んでいくところが台所。そして、真っ先に冷蔵庫を開ける——。そんな話をよく聞く。大人も、同じ。帰るなり、まっしぐら。ネコまで、ついてくる。

「衣食住」のうち、もっとも切実なものが「食」だという気がする。その人にとって基本的な欲求を、最初に満たしてくれた存在。お乳を与えてくれた存在。それがお母さん、あるいは、その代理を務めてくれた人。

その意味で、冷蔵庫はお母さんに似ていると思う。

*

冷蔵庫はお母さん。大文字で始まる Mother、〈マザー〉。家にいる普通のお母さんも、〈マザー〉を「お母さん」と呼ぶ。冷蔵庫の中身を補充する時に、お母さんは〈マザー〉の腹心になる。

だから、冷蔵庫は、お母さんのお母さん、つまりおばあちゃんではなくて、大文字で始まる Mother、〈マザー〉。

この〈マザー〉は家の中心にいる。家の中心とは台所。どんなアパートにも簡単なキッチンが付いている。共同の場合もあるだろうが、トイレと同様に必ずある。

冷蔵庫にはいろいろな紙が貼られてるのは、そこが情報の中心だから。子どもがいれば、学校関係のメモや学校からのお知らせや稽古事のスケジュール表なんかも貼ってあったりする。

貼りきれないと、そばの壁にあるボードとか壁にも貼ってあるが、大切なことは、ボードも壁も冷蔵庫の付属品だということ。あくまでも中心、つまり家の主は〈マザー〉である冷蔵庫。

夫とか旦那とか主人なんて目じゃない。

冷蔵庫のそばにはカレンダーもある。カレンダーもまた冷蔵庫の付属品。書き込みの

できるカレンダーなんて、冷蔵庫の奴隷みたいなも。あ、奴隷は言いすぎ。家来としておこう。

威厳のある<マザー>だが、かぎりなく優しい。

冷蔵庫は家の情報の中心、つまりインフォメーション・センターなのである。家のセンターは、テレビでも仏壇でもパソコンでもスマホでもない。生きていくのに絶対に必要なものは、冷蔵庫の中にあり、外に貼られている。

食と情報を支配するものはすべてを配下におさめる。だから、支配しようとする者は必死で食糧と情報を収集する。歴史を振り返り、世界を見まわせばわかる。

偉大なる大文字で始まる Mother 、<マザー>。

冷蔵庫はお母さんに似ている。イメージしているのは、旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

いわゆる鍵っ子だった子どものころの私は、帰宅すると冷蔵庫にお母さんを感じていた。夕方や夜遅くに帰ってきた母も、たぶんそうだったと思う。

旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

枠、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。
人の意識をうつしているとしか思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。
聞こえないものを真似ている。

感知できないものを真似ている。
知らないものを真似ている。

なぞる。

何かはわからないままになぞる。

なぞっているという意識なしになぞる。

＊

人のつくるものはどこか人に似ている。

なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。

空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。

形はなぞっているうちに形となる。

なぞった瞬間に形は謎となる。

＊

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。

棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

figure の意味・使い方・読み方

figure【名】形、形状、形態、外観図、図表、挿絵、図形、図式◆【略】fig.・A is shown
[illus

eow.alc.co.jp

枠、テリトリー

枠を眺める。

枠に見入る。

枠は縛る。
縄張りも枠。

テリトリーも枠。
内、辺境、外。

ここからはうち、ここからはよそ。
あなたたちはみうち、あいつらはよそもの。

こっちとあっちしかない考え。
あっちにもこっちがあることに思いがおよばない。

*

境、境目、わかれめ、きわ、かぎり。
へり、辺、片、偏、変。

辺は蛮、辺は変。

はし、はしっこ、端、ふち、縁、淵。
辺境、フィロンティア、境界、線。

内は中心で光の源、外は魔の棲む闇。

世界は劇場/工場

世界は祭壇。
世界は窓。

スクリーン、銀幕、枠、モニター、ディスプレイ、画面、フレーム。

劇場、芝居小屋、舞台、観客席、コンサート、ゲーム、観る、見上げる、見せ物、演じる、かぶく、うたう、舞う、プレイ、演じる、遊ぶ、競技をする。

世界は劇場。
グローバル座。

コロシウム、競技場、闘牛場、観客席、ドーム、ホール、アリーナ、公民館、市民会館、ライブハウス、寄席。

映写、写像、像、鏡像、映像、写本、筆写、印刷、インターネット、網、フィギュア、姿、形、フィルム、写真、映写機、写真機、スマホ、撮影、撮す、映す、写す、移す、反射、鏡、胸像、ポジとネガ、陰影、陰翳、印影、判子、印鑑、印象、スタンプ、御朱印、スタンプラリー。

＊

世界は祭壇。
仰ぎ見る。

世界は劇場。
みんなが舞台を見つめている。

世界は映画館。
みんなが影に見入っている。

世界はホール。
みんながアーティストの姿を見つめ、声と演奏に聞き入る。

世界は競技場。
みんながプレイヤーの動きに目を見張る。

プレイヤーと観客。
主体と客体。主語と述語。subject と object。自と他。
あるじとしもべ。

枠、フレーム、舞台、観客席、栈敷、貴賓席、S席、一般席。

中心と辺境。
うちとそと。

疎外。排除。選別。支配と被支配。
かみとしも、上下。
階層、カースト、ピラミッド。

アイドル、偶像、スター、星。

祭壇、祝祭、供物、生け贄、スケープゴート、祭司、巫女、まつり、まつりごと、政治。

まつる、あおぐ、あおぎたてまつる、ささげる、ひれふす、みる、みられる、みいられる、みいる。

*

世界はゲーム。世界はゲームセンター。

プレイヤーはプレイするのか、させられるのか。

ルールって何？

シナリオって何？

ロール（役割）って何？

枠。縛り。

人は縛られるのが好き。

人は枠に収まると安心する。

人はきまぐれ。

枠や縛りも人に似てきまぐれ。

ルールは時とともに移り変わる。

ルールはところによって異なる。

人は自分のお気に入りのルールを通そうとする。

自分のルールと自分のスクリーンと自分の枠に固執する。

それが世界だから。それがすべてだから。

邪魔する者を消そうとする。

嗜癖している人の行動。

*

世界は無数のスクリーン。

世界中でみんながスクリーンを見ている。

やめられない、とまらない。
人はスクリーンに嗜癖している。

ひれ伏ししていることに気づいていない。
気づいても、忘れる、または信じない。

世界は網。
世界はネットワーク。

世界は蜘蛛の巣。
世界は巨大なウェブ。

蜘蛛のために何もかもがつながってしまった。
今世界は疫病でつながっている。

退治するためには、つながるしかない。

*

世界は網。

寝っ転がって見るスクリーン。
歩きながら見るスクリーン。

手のひらにのるスクリーン。
どんどんスクロールできて次々と切り替わるスクリーン。

スクリーンには枠がある。
スクリーンにはフレームがある。

でも、誰も気づかない。
気にもしない。

枠とは、気づかず、気にしないもの。
自分が嗜癖していることに気づいていない。

人がつくるものは人に似ている。

*

世界は工場。
世界は機械。

生産、自動生産・オートメーション、複製、大量生産。
誤差、失敗、故障、暴走、バグ、ノイズ、変異。

反復、くりかえす、かえす、かえる。
反復、うつす、うつる、ふえる。

似ているがどんどん繰り返される。
似ているがどんどんふえていく。

そっくりなところがそっくりなものたちがそっくりな身振りを繰り返す。

うつるがうつる、うつすがうつす、ふえるがふえる。
とまらない運動。いつかはとまる運動。

人に似ているものに囲まれる

ホームセンターや電気製品の量販店などで、いろいろな商品を見ていて思うのは、「ヒトがつくるものは、ヒトに似ている」です。

お茶わん、湯飲み、箸、スプーン、フォークといった「食」に関係のある物たち。椅子、テーブル、机、布団、ベッド、枕などの広義の「住」関連の物たち。そして、シャツ、上着、ズボン、スカート、下着、手袋、帽子といった「衣」に関する物たち。こうした物たちを観察すると、ヒトに似ています。

なかでも、手袋なんて、手と激似です。湯飲みなんて、開いた口です。椅子やソファやベッドを見ていると、四つん這いになったヒトに見えます。こうやってこじつけているうちに既視感を覚えて、何だろうと思ったのですが、被害妄想にそっくりな心もちがします。

そう考えるとそういうふうに見える、ところが似ているのです。

似ているは、比喩と同じで、似ているから出発するだけでなく、似ているという暗示から生まれることも大いにある気がします。「似ている」は知覚からだけではなく、想像

からも生まれるとも言えるでしょう。

「似ている」は増える。エスカレートするのです。

＊

器類は、水をすくう時の片手あるいは両手の形に似ています。口をつける湯飲みやグラスには、口があります。やかんや急須の注ぎ口と管の部分は、ヒトの食道の延長に見えてきます。

そもそもヒトの体は管だというレトリックを見聞きします。単純化すると、口から飲み食いした物が肛門や尿道から出て行くという消化器系を重視した比喻になりますね。食道、胃、腸という流れがあり、流れる場が管というイメージです。

循環器系だと液体が流れる血管やリンパ管があり、呼吸器系だと鼻から始まって気管と気管支という流れになるようです。気体が流れる管というイメージでしょうか。ストローやホースや笛みたい。

箸やフォークは指に似ています。椅子には背も足＝脚もあります。ふっくらとした座布団の感触は、どこかお尻に似ています。衣類は、からだに当てるわけですから、とうぜん、その当てる部分にそっくりにつくられています。

＊

さらに、こじつけをするなら、自動車なんて正面から見ると、顔に見えてしかたがない方、いらっしゃいませんか？ これこそまさに「人工の人面〇〇」です。人面魚や人面岩を見て、うわーっと驚くだけではなく、自分でつくった物を見て、うわーっとびっくりするわけですから滑稽な感じもします。

機関車や電車と言った乗り物も、そうですね。正面から見ると、表情をそなえた顔に見えます。あの不気味にも見えないこともないトーマス君なんて、とても分かりやすいイメージです。

テレビもそうですね。というか、そうでしたね。テレビ時代の初期には、受像機の上部にウサギちゃんのお耳みたいなアンテナが付いていたのをテレビで見たことがあります。

あと、こじつけると、銃なんて男性器に似てませんか？ 水鉄砲はもちろんのこと。ロケットもそうかな。

その他に、ヒトやヒトの身体のある部分に似たものを挙げるなら、口を開けたポスト、長針と短針が表情を刻々と変えるアナログ時計、先端に毛のついた歯ブラシ、鉛筆やペン（どういうこっちゃ）、チューブ入りのケチャップやマヨネーズ（ぐにゅっと出てくるさまを思い浮かべてください）、ケータイ、ゲーム機のコントローラー、ガラス張りのパチンコ台……。こじつけが、だんだん苦しくなってきましたね。

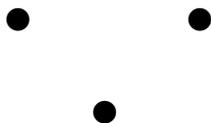
被害妄想と同じで、あれもこれもと人や人の一部と似ているものを感じるのは、つらいものがあります。そうやって見なければならぬような義務感を覚えるようになるのです。誰に頼まれたわけでもないのに、です。

まるで擬人化地獄。

このオブセッションを克服するには、人でなしになるか人外境に逃れるしかないのかもしれませんが、人という枠から外れることは凡人には無理なようです。

世界は顔に満ち満ちている。

人はいたるところに顔を見ます。一説によると、人面〇〇どころではなく、左右の目と口に当たる三点があると、もうそれで顔を認めるのに十分なのだそうです。こういう空想は子どものほうが得意だといわれています。



というか、二点だけでも、私には十分です。目は口ほどにものを言う。



どうでしょう？ 見ていて気持ちがやすらぎませんか？

人形（ひとがた）や玩具の持つ力を軽んじるわけにはまいりません。また、ないものの力をないがしろにするのは、人として賢明な生き方ではないでしょう。

森羅万象に人や顔を感じなくなった時、その人はきわめてあやうい状態にある気もします。顔や表情は、言葉とか意味とかイメージとか、そういう人に備わった「粹」の芽だからです。

そんなわけで、胸は張らないまでも、地味にせっせと擬人化に励もうと考えています。

人がつくったものに人が似てくる

＊

人がつくったものに人が似てくる

星野廉

2021/06/30 12:55

目次

鏡は、ずれを見るためにある

つくったものに似せる、つくったものに似てくる

真似てつくったものを真似る

うつったものに似せる、うつったものに似てくる

向こうへと落ちていく

似る、似せる、成りかわる

究極の似ている

鏡は、ずれを見るためにある

鏡は自分の姿を見るためにあるのだろうが、鏡に映っているのは自分だろうか？

鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がする。正確に言えば、時間ではなく、ずれなのだろう。抽象である時間を、人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれとして感知するしかない。

ずれは印象であり、計測も検証もできない。その意味で「似ている」に似ている。鏡だから「似ている」に似ているわけではない。鏡は「似ていない」も写すし映る。

＊

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこ。先を越されないように必死で見なければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかない。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になる。

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものだ。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものは見ないだけの体感的な知恵がそなわっている。というか、おそらく見えないのである。

ずればかりがやたら目につくのだ。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれない。映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言える。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかしいと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのだ。

免許証とか証明書の写真がそうだ。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていうこと。

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができてから、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分。まあ、かわいい。この子、誰？

天使を見る人もいる。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ている。似ているけど、自分ではない誰か。今の自分以外に自分はいない。

＊

人は鏡や鏡に似たものに取り憑かれているとしか思えない。絵や写真や映画や動画は、鏡に似ている。人はそれらを前にして、鏡に面するのと同じ仕草や動作をする。見る、見入る、かんがえこむ、かんがみる。

絵、写真、映画、動画は自分を映すためのもの。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分。広義の自分。複数形の自分。おそら

く赤ん坊にとっての「自分」。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをする。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊。

*

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するから、当然のこと。鏡は自然に増えるわけがない。人がつくる。

つくるだけはない。似せて、真似てつくる。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。

世界は鏡に満ち満ちている。人は、ふだんは、それに気づかない。意識しない。だから、よけいに増えていく。

言葉も鏡。人も鏡。人は自分に似たものを真似てどんどんつくっていく。

つくったものに似せる、つくったものに似てくる

荒唐無稽な夢。荒唐無稽な想像。
根拠のない空想。

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。

たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。
冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。

パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。
スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

＊

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。
うつったものに似せる、うつったものに似てくる。

ミメーシス、模倣、描写。
うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。
つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。
まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

＊

もしもの話。戯れ言。

言語を習得させ、海を見せて、海を描写するように指示する。海についてのパーツである、波、浜、砂浜、沖、岩、砂、石、水、海水、大波、小波、しけ、なぎ、太陽、夕陽、朝日、雨、風、カモメ、魚、貝、流氷……といった言葉を覚えさせた上で。器用な人なら作文を書くだらう。お手本なしで。

絵の具と筆と鉛筆と紙を与えて、海を見せて、海を描くように指示する。器用な人なら描き始めるだらう。お手本なしで。

果たしてそんなに単純な話なのか。

天才なら、書けるし描ける。

そんな適当な話なのか。

＊

戯れ言のつづき。

お手本を見せたとする。さらには筆記具の使い方と書き方、画材の使い方と描き方を教える。

大切なことは、たくさんのお手本、つまり文章や作品を読ませ、たくさん絵を見せること。真似させること。

たぶん、真似ることで、めきめき作文力がつき、絵の才能が伸びるのではないか。

＊

言葉も絵も外から来るもの。借り物。だからこそ、真似る対象になり、真似ることで熟達する。もちろん才能もあるだろう。

大切なのは、真似ること。

まねる、まねぶ、まなぶ。

ミメーシス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ミメーシス (アウエルバッハ) - Wikipedia

ja.wikipedia.org

口承 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

演劇 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

写本 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

印刷 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

荒唐無稽な想像。荒唐無稽な夢。

人が物語を真似る、物語に似せる、物語に似る、物語に成りきる、物語に成る。

人が書物を真似る、書物に似せる、書物に似る、書物に成りきる、書物に成る。
人が演劇を真似る、演劇に似せる、演劇に似る、演劇に成りきる、演劇に成る。

*

写字、写経、写本、書写、筆写。
書、書道、カリグラフィー。

書物や文字を写す職業。
筆耕、写字生、写経生、スクライブ。

写経 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

スクライブ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

筆耕とは - コトバンク

精選版日本国語大辞典 - 筆耕の用語解説 - 『名』 写字や清書をすること。それによって報酬を受けること。また、その人。

kotobank.jp

Calligraphus - Wikipedia

en.wikipedia.org

カリグラフィー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

ブヴァールとペキュシェは、どちらも独身の写字生である。
(フロベール作「ブヴァールとペキュシェ」についてのウィキペディアの解説より引用)

ブヴァールとペキュシェ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

『『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』（ドン・キホーテのちよしゃピエール・メナール、Pierre Menard, autor del Quijote）は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスによる短編集『伝奇集』に収録された作品の一編。ピエール・メナールという 20 世紀の作家がミゲル・デ・セルバンテスになりきるなどの方法で、『ドン・キホーテ』と一字一句同じ作品を作りだそうとした、という設定のもと、セルバンテスの『ドン・キホーテ』とピエール・メナールの『ドン・キホーテ』の比較を文学批評の形式で叙述した短編小説である。

(ボルヘス作『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』についてのウィキペディアの解説より引用)

『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール - Wikipedia

ja.wikipedia.org

真似てつくったものを真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想。

馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。

馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。

まさか、小説を壊しているのではないか。

できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

ドン・キホーテ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

物語と小説をまねて、まがい、まげた作品を、さらにまねて、まがい、まげた作品。

この作品をまねる、あるいは無意識にまねることとなる来たるべき作品立ち。

まがい、まがるしかないのが小説というジャンルの運命であるかのように。

とはいえ、読み物でもある。読み物は読み物を模倣して、書き継がれる。

トリストラム・シャンディ - Wikipedia
ja.wikipedia.org

*

小説を模倣する人間についての小説。
小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。
律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

ボヴァリー夫人 - Wikipedia
ja.wikipedia.org

*

恋に恋する人間。
物語にかたられてしまう人間。
小説の登場人物と自分を同一視する人間。

小説や物語を、映画や演劇やテレビドラマやゲームに置き換えても事情はそれほど変わらないのではないか。あるいは、歴史や神話や信仰や哲学や生き方に置き換えても事態はそれほど変わらないのではないか。

仮に、政治や社会現象を、世界や国家や地域を舞台とした、物語や劇としてとらえる
とすれば、これまた事情も事態も同じなのではないだろうか。

*

登場人物と読者、演じる者と観客、舞台に立つ者とそれを眺める一般人。
人は観客や読者であることを忘れて自分が主人公だと思い込む。

そうした観劇の仕方や読み方を否定するのではない。そもそも否定できるたぐいの問題ではない。

どんな子どもでも、読み聞かされた話に自分を重ねる。それがフィクションというも

のの仕組み。

観るとは、聞くとは、読むとは、そういうことなのだろう。そうした事態に自覚的であるかどうかは、趣味や気質や、その時の気分の問題なのかもしれない。

うつったものに似せる、うつったものに似てくる

鏡を見る。鏡に見入るのは、誰でも毎日やっついそうなこと。そこに映っているのは自分だと疑わない。人前に出て恥ずかしくない顔と格好をしているか確かめる。お化粧をする。身だしなみを整える。

それだけなのか？ 本当に、そんなふうに単純なものなのだろうか？ 世の中には、変なことを考える人がいる。変なことを書く人がいる。小説にまで書く人がいる。変だから書くのか。変だから小説なんて書くのだろうか？ 人が小説に似る。小説が人に似る。

*

かがみ、鏡、かがみる、鑑みる
見入る、魅入る、見入られる、魅入られる
うつる、映る、移る、入る

鏡の中に入る。

鏡の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

鏡の中に入る前に言葉という鏡に魅入る。
言葉はかがみ、屈み、鏡、鑑。
かがみ、しなり、おれる。
屈折、reflection、inflection。

写真術のパイオニアだったルイス・キャロル。
数学者・論理学者でもあったルイス・キャロル。
その符合と屈折ぶりはただ事ではない。

不思議の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

語形変化 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ルイス・キャロル - Wikipedia

ja.wikipedia.org

向こうへと落ちていく

水面に映った自分の姿を見る。

鏡を見る。

かがみ、かがむ、うつる、映る、写る、移る。

おちる、落ちる。

鏡像。姿。反射。自分のようで自分ではない。

自分そっくり。自分に似ている。自分ではない。自分とちがう。

こっち、むこう。ここ、あっち。ここ、あなた・あなた・彼方・貴方。

水面、鏡の恐ろしさ。死へといざなう鏡、水面。

おちる、落ちる、墮ちる、墜ちる。

落ちていく、向こうへと落ちていく、あなたへと落ちていく。

声がうつる、映る、写る、移る、遷る。

響く、こだま、木霊、衍、エコー、空気の振動、音、音響、波。

録音、レコード、蓄音機、拡声器、マイクロホン、スピーカー、再生、再現、再演、反復、模倣。

ナルキッソス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

エコー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

木霊 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ドリアン・グレイの肖像 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

墮天使 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

似る、似せる、成りかわる

似た小説や映画には事欠かない。ある小説を読んでいて、あるいは映画を観ていて、あれっというふうに既視感を覚えることは多い。前にも読んだことがあるような話、見たことがあるような身振りや行動、聞いたことのあるような科白、聞いた記憶のあるメロディー。

他人の家に入る。その家にある服を着る。物を食べる。座る、歩く、その辺にある本を読む、トイレに入る。その時、入った人は、その家の主を真似ることになる。

似た話、似た光景、そっくり、デジャビュの洪水。軽い目まいすら覚える。

幻冬舎文庫 パレード

都内の2LDKマンションに暮らは男女四人の若者達。「上辺だけの付き合い？ 私にはそれくらいが丁度いい」。それぞれが不安や焦燥

www.kinokuniya.co.jp

文春文庫 パーク・ライフ

公園にひとりで座っていると、あなたには何が見えますか？ スターバックスのコーヒーを片手に、春風に乱れる髪を押さえていたのは、

www.kinokuniya.co.jp

*

似ている、似せる、似る、成りかわる、成る。

誰かに似ている。その誰かに似せるように努力し、その結果似る。それだけでは済まない。その人物に成りかわるのだ。そしてついにその人に成る。お察しの通り、これはサスペンスであり犯罪小説。怖い話。

そんな小説がある。小説とは異なる部分もあるが映画にもなっている。

河出文庫 太陽がいっぱい

イタリアに行ったまま帰らない息子ディッキーを連れ戻してほしいと富豪に頼まれ、トム・リプリーは旅立つ。その地でディッキーは、

www.kinokuniya.co.jp

この小説にはそっくりな邦訳（翻訳だから似て当然）が二種類あり、映画化された作品も二種類ある。「似ている」や「そっくり」や「既視感」を楽しみたい人——そんな人がいるのか？　ここにいるけど……——には堪らない話。

さらには、この小説の続編があって、真似るだらけの主人公を真似ようとする少年が出てくるという話。

河出文庫 リプリーをまねた少年

数々の殺人を犯しながらも逃げ切ってきた自由人、トム・リプリー。悠々自適の生活を送る彼の前に、億万長者の家出息子フランクが現

www.kinokuniya.co.jp

まさに目まいのするような話。

究極の似ている

文学も芸術も映画もスポーツも「似ている」に満ち満ちている。

世界は「似ている」に満ち満ちている。

何かを真似て似たものをつくり始めたのはいいが、人はそのつくったものに似たものをどんどんつくることを無意識に覚え、その結果、複製文化どころか、複製文明と大量生産文明を築き上げ、今日にいたるのではないか。

似ているの増殖、似ているの自動生産、大量生産。どうにもとまらない状態。そして世界はどんどん暖かく暑くなっていく。

とはいえ、誰も目まいを起こしたくないから、「似ている」ことには目を向けないし、耳を傾けないでいる。「似ている」や「そっくり」とは、ほどほどのお付き合いをするべきということか。

＊

「似ている」と「そっくり」——。何かに似ている、そっくりだと思い、何だろう何だろうと考えていて、文学も芸術も映画もスポーツ、複製文明と大量生産文明、大量生産と思いをめぐらして、はっとする。

「似ている」と「そっくり」は、お金に似ているし、そっくりなのだ。

＊

究極の「似ている」と「そっくり」は紙幣、つまりお金。お金は「似ている」どころか「そっくり」どころか、「同じ・同一」に限りなく近くなければならない。精巧をきわめる。偽造を防ぐため。

ほぼ「同一」だから、計器によって計測可能。人の知覚だけでは真偽は判断できない。

お金は何に似ているのか？ 数字ではないか。抽象度マックスな数字。似ているやそっくりの世界ではなく、同じ・同一の世界。

数字と同じく抽象だから、何にでもかえられる、換えられる、変えられる。こんな便利ですごいものはない。素晴らしいものをつくったものだ。だから、どんどん刷る。

真似てつくる。そっくりにつくる。間違いは許されない。似ていなかったらアウト。下手すると犯罪、いや下手しなくても立派な犯罪。

本物のお金をどんどん刷らなければならない、鑄造しなければならない。印刷機や鑄造機でどんどん刷る。究極の精巧さで複写し複製し、大量生産する。

刷ることができるのは一部の人だけ。政府だけ。正確に言えば、政府の銀行と造幣局だけ。こども銀行は、こどもにだけ許される。

そっくりの本物がどんどん増えていく。実体なんて関係ない。人は存在しないもので動く。おとなのやることはほんまもんやからこわいわ。どんどん増やす、ついでに殖やす。実体はなくてかまわない。そんなところも数字と激似。

*

電子マネー、ポイント、スマホ決済。

記号と化したお金、マネー、紙幣。触ることも見ることも匂いもしない記号。似ているやそっくりのない、おそらく同じや同一もない世界。

虚ろな記号。似ているやそっくりのない記号。実体のない、ふえる増える殖える。

ふえるという身振りだけが空転する。人は存在しないもので動くの進化であり洗練なのか？ その新たな展開なのか？ あるいは、その枠内での展開にすぎないのか？

紙幣のない印刷機、硬貨のない鋳造機。機械の音だけがむなしく響く工場。

何だろう？

何かに似ている気がするが、何に似ているのか、思いつかない。ひょっとすると、何にも似ていないのかもしれない。

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに
人は似ていく

＊

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく

星野廉

2021年9月19日 11:01

目次

人のつくるものは人に似ている

人がつくるものに人が似ていく

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく

人のつくるものは人に似ている

＊なぞる

なぞるは杵をつくること。なぞるうちに杵が見えてくる。見えてきた杵に縛られる。杵が当然のものに見てくる。杵は人を安心させる。人は杵に嗜癖する。杵なしでは人は生きられない。人は杵を意識することがない。

＊

たぶん杵は人の内にある。誰も杵を見ることはできない。杵をなぞる。なぞるだけで見えているわけではない。

杵をつくる。杵はつくるもの。人のつくるものは人に似ている。

＊

同期するメトロノームたち。

身振りは似ていても、あるいは同じであっても、各メトロノームは同じではない。同じ＝同一は、一つしか存在しない。その意味で、メトロノームたちは同じではなく似ているのだ。

それぞれがそれぞれとしてある、またはいる。それぞれがそれ自身にそっくりなのだ。そっくりな点がそっくりなのである。

自分自身にそっくりという意味なら、同じとか同一と言えるのかもしれない。似ている、似た身振り、仕草、顔、表情が世界にあふれている。

その身振りを読む。あるいは、なぞる、真似る、まねぶ、学ぶ。または、うつす、写す、映す、撮す、移す、遷す。そうやってふえる、増える、殖える。

世界は顔で満ち満ちている。

(拙文「似ている」より引用)

*人のつくるものは人に似ている

よく聞く話。人のつくるものは人に似ている。確かに、人に似せてつくっているとしか思えないものがある。

器、スプーン、箸、椅子、寝台、座布団。手袋、シャツ、ズボン、靴下、ストッキング、衣服。

丸みを帯びたやかんの注ぎ口を見ていて、どきりとすることがある。ソファに体を沈めると懐かしさで涙ぐむことがある。

人の体に触れる。人の体に当てる。人を包みこむ。つくったものに人が合わせる。

*

窓、煙突、家。荷車、馬車、自動車、乗り物。

窓が人の顔に見えることがある。遠くに家の窓を見てほっとすることがある。人の顔を見たように心が安らぐ。車を正面から見ると、どうしてもそこに顔を見てしまう。にやにやしてしまう自分がある。子どもはあらゆるものに顔や表情を見ているのではないか。

*

人形（ひとがた）、像、図、絵、絵本。おもちゃ（玩具）。

動くもの。動かないもの。動かすもの。動いていると想像するためのもの。動いている。ぜったいにあれは動いている。

*

人面〇〇。枯れ尾花。錯覚、錯視、幻聴。幻覚。幻想。妄想。空想。想像。

経済、ビジネス、宗教、音楽、文学、芸術、スポーツ、科学、哲学、数学、報道、宣伝。

言葉、お金、音、物語、フィクション、映像、ルール、法則、公式、概念、数字、イメージ。

人は存在しないもので動く。人はないもので動く。

* 枠がぼやける

文字が人の顔に見えることはありませんか？ ひらがなでも、カタカナでも、漢字でも、数字でもいいです。

フォントや大きさにもよると思います。また手書きの文字や書道なんかの文字だと、これまた印象ががらりと違ってきますね。

学校で書道の授業の時、筆をつかっているうちに、文字が文字ではなくなっていく感じがしたのを思い出します。何をなぞっているのか、自分が何をしているのか、わからなくなるのです。たまにペンで文字を書くと、そういう不思議な気持ちになることが今でもあります。

文字は意味があるのに、その意味が消えて形だけになるとか、他のことが頭に浮かんでしまうなんてことはざらにあります。書いている最中だけでなく、読んでいる時にもです。

なぞっているうちに、なぞっているものがぼやけてくるのです。枠がぼやけてくるのです。それがなぜか気持ちいい。気が遠くなるほど気持ちいい。不思議でなりません。枠は窮屈です。

*冷蔵庫はお母さんに似ている

人のつくるものは人体に似ている。人体の構造と似ているものがある。人と似た、またはそっくりな仕草をするものがある。人の顔や姿や身体の一部を想起させるものがある。

楽器、食器、容器、道具、文房具、便器、浴槽、介護用品、医療器具。時計、装置、電気器具、家具、農機具、機械。

気味が悪いほど似ているものがある。見ていてほっとするものもある。

鏡、眼鏡、望遠鏡、映画、テレビ、パソコン、スマホ。蓄音機、レコード、電話、電話機、ラジオ、マイク、イヤホン、テープレコーダー、テレビ。

*

冷蔵庫はお母さんに似ている。イメージしているのは、旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

幼児にもどった気持ちになって、しゃがんだり身をかがめ、目線を下に構えて、そば

に立ってみると、そんな気がする。どっしりとしていて、幼児でなくても、小学校の低学年くらいが抱きついて、ちょうどいい重量・体積・質感がある。

エプロンみたいに白くて、いろんなものが貼り付けてあって、よく耳を澄ますとぶーんというやさしい音がして、熱を発していて温かく、扉を開くと、どんな望みもかなえてくれそうで、こころがやすらぐ。

子どもたちが帰宅すると、すぐに飛んでいくところが台所。そして、真っ先に冷蔵庫を開ける——。そんな話をよく聞く。大人も、同じ。帰るなり、まっしぐら。ネコまで、ついてくる。

「衣食住」のうち、もっとも切実なものが「食」だという気がする。その人にとって基本的な欲求を、最初に満たしてくれた存在。お乳を与えてくれた存在。それがお母さん、あるいは、その代理を務めてくれた人。

その意味で、冷蔵庫はお母さんに似ていると思う。

* 枠、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似ている。知らないものを真似ている。

なぞる。何かはわからないままになぞる。なぞっているという意識なしになぞる。

*

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれ

ない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

*

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

*美しい言葉

figure という英語の言葉を英和辞典で引いてみると、そこに書かれた語義の美しさに驚く。並んでいる言葉が美しい。字面が綺麗。言葉が喚起するイメージが美しい。音読しても流れるように美しい。

figure が英語から別れて日本語の語義に分かれる。別れは分かれ。

figure の意味 - goo 辞書 英和和英

figure とは。意味や和訳。figure の主な意味名 1 図形 2 数字 3 人の姿 4 表象動 1 ... を形取る 2 姿を現す 3 ...

dictionary.goo.ne.jp

figure の意味 - 英和辞典 - コトバンク

プログレッシブ英和中辞典 (第4版) - /fijr | fi/[名]I [姿]

kotobank.jp

たとえば、形、人影、挿絵、図、図形、フィギュアスケートのフィギュア（動作・図形）、表象、数字、音楽のモチーフ、計算、模様、言葉の綾.....という名詞の語義があっ

たりする。動詞の語義も見ていて飽きない。どれもが好きな言葉。わくわくするイメージ。奇跡としか思えない出会いと組み合わせ。

フランス語だと顔とか表情の意味が強かったりする。

figure(フランス語)の日本語訳、読み方は - コトバンク 仏和辞典
プログレッシブ 仏和辞典 第2版 - [女] 英仏そっくり語英 figure 姿, 数字, 人物, 図. 仏
figure 顔, 人物
kotobank.jp

ジェラルール・ジュネットの『フィギュール』という本を思い出す。言葉の綾という意味。

『フィギュール I』ジェラルール・ジュネット (書肆風の薔薇) - 書評空間:: 紀伊國屋書店
KINOKUNIYA::BOOKLOG
→紀伊國屋書店で購入フランスの批評家は自らの批評原理をあらわす言葉を評論集の総
題にすることがすくなくない。ヴァレリーの『
booklog.kinokuniya.co.jp

辞書で figure の語義を眺めていると、何かをなぞっている自分を感じる。自分の内に
動きを感じる。体と心が動いている。気が遠くなりそうな束の間の時。

* 枠、テリトリー

枠を眺める。枠に見入る。枠は縛る。縄張りも枠。テリトリーも枠。

内、辺境、外。ここからはうち、ここからはよそ。あなたたちはみうち、あいつらはよ
そのもの。こっちとあっちしかない考え。

あっちにもこっちがあることに思いがおよばない。

*

境、境目、わかれめ、きわ、かぎり。へり、辺、片、偏、変。

辺は蛮、辺は変。

はし、はしっこ、端、ふち、縁、淵。辺境、フィロンティア、境界、線。

内は中心で光の源、外は魔の棲む闇。

*世界は劇場/工場

世界は祭壇。世界は窓。

スクリーン、銀幕、枠、モニター、ディスプレイ、画面、フレーム。

劇場、芝居小屋、舞台、観客席、コンサート、ゲーム、観る、見上げる、見せ物、演じる、かぶく、うたう、舞う、プレイ、演じる、遊ぶ、競技をする。

世界は劇場。グローバル座。

コロシウム、競技場、闘牛場、観客席、ドーム、ホール、アリーナ、公民館、市民会館、ライブハウス、寄席。

映写、写像、像、鏡像、映像、写本、筆写、印刷、インターネット、網、フィギュア、姿、形、フィルム、写真、映写機、写真機、スマホ、撮影、撮す、映す、写す、移す、反射、鏡、胸像、ポジとネガ、陰影、陰翳、印影、判子、印鑑、印象、スタンプ、御朱印、スタンプラリー。

*

世界は祭壇。仰ぎ見る。

世界は劇場。みんなが舞台を見つめている。

世界は映画館。みんなが影に見入っている。

世界はホール。みんながアーティストの姿を見つめ、声と演奏に聞き入る。

世界は競技場。みんながプレイヤーの動きに目を見張る。プレイヤーと観客。

主体と客体。主語と述語。subject と object。自と他。あるじとしもべ。

枠、フレーム、舞台、観客席、栈敷、貴賓席、S席、一般席。中心と辺境。

うちとそと。疎外。排除。選別。支配と被支配。

かみとしも、上下。階層、カースト、ピラミッド。

アイドル、偶像、スター、星。祭壇、祝祭、供物、生け贄、スケープゴート、祭司、巫女、まつり、まつりごと、政治。

まつる、あおぐ、あおぎたてまつる、ささげる、ひれふす、みる、みられる、みられる、みいる。

*

世界はゲーム。世界はゲームセンター。プレイヤーはプレイするのか、させられるのか。

ルールって何？ シナリオって何？ ロール（役割）って何？

枠。縛り。人は縛られるのが好き。人は枠に収まると安心する。人はきまぐれ。枠や縛りも人に似てきまぐれ。

ルールは時とともに移り変わる。ルールはところによって異なる。

人は自分のお気に入りのルールを通そうとする。自分のルールと自分のスクリーンと自分の枠に固執する。

それが世界だから。それがすべてだから。邪魔する者を消そうとする。嗜癖している人の行動の特徴。

*

世界は無数のスクリーン。世界中でみんながスクリーンを見ている。

やめられない、とまらない。人はスクリーンに嗜癖している。ひれ伏ししていることに気づいていない。気づいても、忘れる、または信じない。

世界は網。世界はネットワーク。世界は蜘蛛の巣。世界は巨大なウェブ。

蜘蛛のために何もかもがつながってしまった。今世界は疫病でつながっている。

退治するためには、つながるしかない。

*

世界は網。寝っ転がって見るスクリーン。歩きながら見るスクリーン。手のひらにのるスクリーン。どんどんスクロールできて次々と切り替わるスクリーン。

スクリーンには枠がある。スクリーンにはフレームがある。でも、誰も気づかない。気にもしない。

枠とは、気づかず、気にしないもの。自分が嗜癖していることに気づいていない。

人がつくるものは人に似ている。

*

世界は工場。世界は機械。

生産、自動生産・オートメーション、複製、大量生産。誤差、失敗、故障、暴走、バグ、ノイズ、変異。反復、くりかえす、かえす、かえる。反復、うつす、うつる、ふえる。

似ているがどんどん繰り返される。似ているがどんどんふえていく。

そっくりなところがそっくりなものたちがそっくりな身振りを繰り返す。うつるがうつる、うつすがうつす、ふえるがふえる。とまらない運動。いつかはとまる運動。

*人に似ているものに囲まれる

ホームセンターや電気製品の量販店などで、いろいろな商品を見ていて思うのは、「ヒトがつくるものは、ヒトに似ている」です。

お茶わん、湯飲み、箸、スプーン、フォークといった「食」に関係のある物たち。椅子、テーブル、机、布団、ベッド、枕などの広義の「住」関連の物たち。そして、シャツ、上着、ズボン、スカート、下着、手袋、帽子といった「衣」に関する物たち。こうした物たちを観察すると、ヒトに似ています。

なかでも、手袋なんて、手と激似です。湯飲みなんて、開いた口です。椅子やソファやベッドを見ていると、四つん這いになったヒトに見えます。こうやってこじつけているうちに既視感を覚えて、何だろうと思ったのですが、被害妄想にそっくりな心もちがします。

そう考えるとそういうふうに見えてくる、ところが似ているのです。

似ているは、比喩と同じで、似ているから出発するだけでなく、似ているという暗示から生まれることも大いにある気がします。「似ている」は知覚からだけではなく、想像からも生まれるとも言えるでしょう。

「似ている」は増える。エスカレートするのです。

*

器類は、水をすくう時の片手あるいは両手の形に似ています。口をつける湯飲みやグラスには、口があります。やかんや急須の注ぎ口と管の部分は、ヒトの食道の延長に見えてきます。

そもそもヒトの体は管だというレトリックを見聞きします。単純化すると、口から飲み食いした物が肛門や尿道から出て行くという消化器系を重視した比喩になりますね。食道、胃、腸という流れがあり、流れる場が管というイメージです。

循環器系だと液体が流れる血管やリンパ管があり、呼吸器系だと鼻から始まって気管と気管支という流れになるようです。気体が行く管というイメージでしょうか。ストローやホースや笛みたい。

箸やフォークは指に似ています。椅子には背も足＝脚もあります。ふっくらとした座布団の感触は、どこかお尻に似ています。衣類は、からだに当てるわけですから、とうぜん、その当てる部分にそっくりにつくられています。

*

さらに、こじつけをするなら、自動車なんて正面から見ると、顔に見えてしかたがない方、いらっしやいませんか？ これこそまさに「人工の人面〇〇」です。人面魚や人面岩を見て、うわーっと驚くだけではなく、自分でつくった物を見て、うわーっとびっくりするわけですから滑稽な感じもします。

機関車や電車と言った乗り物も、そうですね。正面から見ると、表情をそなえた顔に見えます。あの不気味にも見えないこともないトーマス君なんて、とても分かりやすいイメージです。

テレビもそうですね。というか、そうでしたね。テレビ時代の初期には、受像機の上部にウサギちゃんのお耳みたいなアンテナが付いていたのをテレビで見たことがあります。

あと、こじつけると、銃なんて男性器に似てませんか？ 水鉄砲はもちろんのこと。ロケットもそうかな。

その他に、ヒトやヒトの身体のある部分に似たものを挙げるなら、口を開けたポスト、長針と短針が表情を刻々と変えるアナログ時計、先端に毛のついた歯ブラシ、鉛筆やペン（どういうこっちゃ）、チューブ入りのケチャップやマヨネーズ（ぐにゅっと出てくるさまを思い浮かべてください）、ケータイ、ゲーム機のコントローラー、ガラス張りのパチンコ台……。こじつけが、だんだん苦しくなってきましたね。

被害妄想と同じで、あれもこれもと人や人の一部と似ているものを感じるのは、つらいものがあります。そうやって見なければならぬような義務感を覚えるようになるの

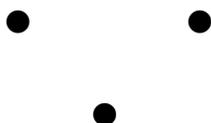
です。誰に頼まれたわけでもないのに、です。

まるで擬人化地獄。

このオブセッションを克服するには、人でなしになるか人外境に逃れるしかないのかもしれませんが、人という枠から外れることは凡人には無理なようです。

世界は顔に満ち満ちている。

人はいたるところに顔を見ます。一説によると、人面〇〇どころではなく、左右の目と口に当たる三点があると、もうそれで顔を認めるのに十分なのだそうです。こういう空想は子どものほうが得意だといわれています。



というか、二点だけでも、私には十分です。目は口ほどにものを言う。



どうでしょう？ 見ていて気持ちがやすらぎませんか？

人形（ひとがた）や玩具の持つ力を軽んじるわけにはまいりません。また、ないものの力をないがしろにするのは、人として賢明な生き方ではないでしょう。

森羅万象に人や顔を感じなくなった時、その人はきわめてあやうい状態にある気がします。顔や表情は、言葉とか意味とかイメージとか、そういう人に備わった「枠」の芽だからです。

そんなわけで、胸は張らないまでも、地味にせっせと擬人化に励もうと考えています。

人がつくるものに人が似ていく

*鏡は、ずれを見るためにある

鏡は自分の姿を見るためにあるのだろうが、鏡に映っているのは自分だろうか？

鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がする。正確に言えば、時間ではなく、ずれなのだろう。抽象である時間を、人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれとして感知するしかない。

ずれは印象であり、計測も検証もできない。その意味で「似ている」に似ている。鏡だから「似ている」に似ているわけではない。鏡は「似ていない」も写すし映る。

*

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこ。先を越されないように必死で見ていなければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかない。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になる。

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものだ。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものは見ないだけの体感的な知恵がそなわっている。というか、おそらく見えないのである。

ずればかりがやたら目につくのだ。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれない。映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言える。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかしいと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのだ。

免許証とか証明書の写真がそうだ。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていうこと。

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができてから、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分。まあ、かわいい。この子、誰？

天使を見る人もいる。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ている。似ているけど、自分ではない誰か。今の自分以外に自分はいない。

＊

人は鏡や鏡に似たものに取り憑かれているとしか思えない。絵や写真や映画や動画は、鏡に似ている。人はそれらを前にして、鏡に面するのと同じ仕草や動作をする。見る、見入る、かんがえこむ、かんがみる。

絵、写真、映画、動画は自分を映すためのもの。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分。広義の自分。複数形の自分。おそらく赤ん坊にとっての「自分」。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをする。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊。

＊

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するから、当然のこと。鏡は自然に増えるわけがない。人がつくる。

つくるだけはない。似せて、真似てつくる。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。

世界は鏡に満ち満ちている。人は、ふだんは、それに気づかない。意識しない。だから、よけいに増えていく。

言葉も鏡。人も鏡。人は自分に似たものを真似てどんどんつくっていく。

○

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

そうしたものが個性なのであり、オリジナリティーなのであり、本物なのであり、著作権によって守られる対象だと言えるでしょう。

あ、これ、○○の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本ぽいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。

自分を真似る。自分に似せる。自分を模倣しつづけることは、随時更新することだとも言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

自分であると思いきこんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいるはずです。自分を眺めることが他者を認めることでないと誰が断言できるのでしょうか。鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと思います。自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。鏡（こ

の鏡を比喻と取っていただいかまいません)に映っているものは「似たもの」なので
す。「何か」そのものではありません。

何かに似ているのです。その何かが何なのは分からない。ひょっとすると、鏡(この
鏡を比喻と取っていただいかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、で
す)に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。影やまぼろしが自
立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもてあ
そばれていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。(拙文「動画を視聴し
ながらとりとめなく考える」より引用)

*つくったものに似せる、つくったものに似てくる

荒唐無稽な夢。荒唐無稽な想像。根拠のない空想。

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想
をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったた
めに、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パ
ソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わ
せて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作を
するようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、
同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

*

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつった
ものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

＊

もしもの話。戯れ言。

言語を習得させ、海を見せて、海を描写するように指示する。海についてのパーツである、波、浜、砂浜、沖、岩、砂、石、水、海水、大波、小波、しけ、なぎ、太陽、夕陽、朝日、雨、風、カモメ、魚、貝、流水……といった言葉を覚えさせた上で。器用な人なら作文を書きだそう。お手本なしで。

絵の具と筆と鉛筆と紙を与えて、海を見せて、海を描くように指示する。器用な人なら描き始めるだろう。お手本なしで。

果たしてそんなに単純な話なのか。天才なら、書けるし描ける。そんな適当な話なのか。

＊

戯れ言のつづき。

お手本を見せたとする。さらには筆記具の使い方と書き方、画材の使い方と描き方を教える。大切なことは、たくさんのお手本、つまり文章や作品を読ませ、たくさん絵を見せること。真似させること。たぶん、真似ることで、めきめき作文力がつき、絵の才能が伸びるのではないか。

＊

言葉も絵も外から来るもの。借り物。だからこそ、真似る対象になり、真似ることで熟達する。もちろん才能もあるだろう。大切なのは、真似ること。まねる、まねぶ、まなぶ。

独創ではなく、引用と模倣と反復と変奏が芸術の実相ではないか。それにしてもオリジナリティ神話は強い。信仰ではないか。ないものは強い。

＊

ミメーシスとは - コトバンク

日本大百科全書 (ニッポニカ) - ミメーシスの用語解説 - 「まねる」「似せる」を意味する動詞 miméomai に由来する語

kotobank.jp

ミメーシス (アウエルバッハ) - Wikipedia

ja.wikipedia.org

口承 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

演劇 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

写本 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

印刷 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

荒唐無稽な想像。荒唐無稽な夢。

人が物語を真似る、物語に似せる、物語に似る、物語に成りきる、物語に成る。

人が書物を真似る、書物に似せる、書物に似る、書物に成りきる、書物に成る。

人が演劇を真似る、演劇に似せる、演劇に似る、演劇に成りきる、演劇に成る。

＊

写字、写経、写本、書写、筆写。書、書道、カリグラフィー。

書物や文字を写す職業。筆耕、写字生、写経生、スクライブ。

写経 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

スクライブ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

筆耕とは - コトバンク

精選版 日本国語大辞典 - 筆耕の用語解説 - 『名』 写字や清書をすること。それによって報酬を受けること。また、その人。

kotobank.jp

カリグラフィー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

言葉と言葉によってつくられている知の総体を信じ、その身振りを模倣し、言葉と知になりきろうとした二人の写す人（写字生・筆耕）についてのお話。

これほど表象に対しての深い洞察に満ちた私は小説を知らない。

ブヴァールとペキュシェは、どちらも独身の写字生である。

二人はまず農業に着手し果樹栽培に乗り出すが、書物だけにもとづく知識は不十分で、大きな損害を被る。科学的知識が欠けていることを痛感した二人は科学や文学の勉強に没頭し、さらに文学・神学とつぎつぎに対象を広げてゆくが、どれも正統的な訓練を受けず書物を読みかじっただけの研究で、失敗ばかりが相次ぐ。しかし二人はともに知的であることを誇って、社会の無知ぶりを嘲笑しつづける

(フロバール作「ブヴァールとペキュシェ」についてのウィキペディアの解説より引用)

ブヴァールとペキュシェ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」（ドン・キホーテのちょしゃピエール・メナール、Pierre Menard, autor del Quijote）は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスによる短編集『伝奇集』に収録された作品の一編。ピエール・メナールという 20 世紀の作家がミゲル・デ・セルバンテスになりきるなどの方法で、『ドン・キホーテ』と一字一句同じ作品を作りだそうとした、という設定のもと、セルバンテスの『ドン・キホーテ』とピエール・メナールの『ドン・キホーテ』の比較を文学批評の形式で叙述した短編小説である。（ボルヘス作「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」についてのウィキペディアの解説より引用）

『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*真似てつくったものを真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

ドン・キホーテ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

物語と小説をまねて、まがい、まげた作品を、さらにまねて、まがい、まげた作品。

この作品をまねる、あるいは無意識にまねることとなる来たるべき作品たち。まがい、まがるしかないのが小説というジャンルの運命であるかのように。似せるもの、似せもの、偽物。

とはいえ、読み物でもある。読み物は読み物を模倣して、書き継がれる。

トリストラム・シャンディ - Wikipedia

*

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろうか。映画を、テレビドラマを、CMを、アニメを、(演じる)俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレイに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ボバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

ボヴァリー夫人 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ボバリズムとは - コトバンク

デジタル大辞泉 - ボバリズムの用語解説 - 《「ボバリズム」とも》フランスの作家フロベールの小説「ボバリー夫人」の主人公

kotobank.jp

*

恋に恋する人間。物語にかたられてしまう人間。小説の登場人物と自分を同一視する人間。

小説や物語を、映画や演劇やテレビドラマやゲームに置き換えても事情はそれほど変わらないのではないか。あるいは、歴史や神話や信仰や哲学や生き方に置き換えても事態はそれほど変わらないのではないか。

仮に、政治や社会現象を、世界や国家や地域を舞台とした、物語や劇としてとらえる
とすれば、これまた事情も事態も同じなのではないだろうか。

＊

登場人物と読者、演じる者と観客、舞台に立つ者とそれを眺める一般人。

人は観客や読者であることを忘れて自分が主人公だと思い込む。そうした観劇の仕方
や読み方を否定するのではない。そもそも否定できるたぐいの問題ではない。

どんな子どもでも、読み聞かされた話に自分を重ねる。それがフィクションというも
のの仕組み。

観るとは、聞くとは、読むとは、そういうことなのだろう。そうした事態に自覚的で
あるかどうかは、趣味や気質や、その時の気分の問題なのかもしれない。

＊うつったものに似せる、うつったものに似てくる

鏡を見る。鏡に見入るのは、誰でも毎日やっさいそうなこと。そこに映っているのは
自分だと疑わない。人前に出て恥ずかしくない顔と格好をしているか確かめる。お化粧
をする。身だしなみを整える。

それだけなのか？ 本当に、そんなふうに単純なものなのだろうか？ 世の中には、変
なことを考える人がいる。変なことを書く人がいる。小説にまで書く人がいる。変だから
書くのか。変だから小説なんて書くのだろうか？ 人が小説に似る。小説が人に似る。

＊

かがみ、鏡、かんがみる、鑑みる。見入る、魅入る、見入られる、魅入られる。うつ
る、映る、移る、入る

鏡の中に入る。

鏡の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

鏡の中に入る前に言葉という鏡に魅入る。言葉はかがみ、屈み、鏡、鑑。

かがみ、しなり、おれる。屈折、reflection、inflection。

写真術のパイオニアだったルイス・キャロル。数学者・論理学者でもあったルイス・キャロル。その符合と屈折ぶりはただ事ではない。

不思議の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

語形変化 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ルイス・キャロル - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*向こうへと落ちていく

水面に映った自分の姿を見る。鏡を見る。かがみ、かがむ、うつる、映る、写る、移る。

おちる、落ちる。墜ちる、墮ちる。

鏡像。姿。反射。自分のようで自分ではない。自分そっくり。自分に似ている。自分ではない。自分とちがう。

こっち、むこう。ここ、あっち。ここ、かなた・あなた・彼方・貴方。

水面、鏡の恐ろしさ。死へといざなう鏡、水面。おちる、落ちる、墜ちる、墮ちる。

落ちていく、向こうへと落ちていく、かなたへと落ちていく。

声がうつる、映る、写る、移る、遷る。響く、こだま、木霊、冚、エコー、空気の振動、音、音響、波。

録音、レコード、蓄音機、拡声器、マイクロホン、スピーカー、再生、再現、再演、反復、模倣。

ナルキッソス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

エコー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

木霊 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ドリアン・グレイの肖像 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

墮天使 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*似る、似せる、成りかわる

似た小説や映画には事欠かない。ある小説を読んでいる、あるいは映画を観ている、あれっというふうに既視感を覚えることは多い。前にも読んだことがあるような話、見たことがあるような身振りや行動、聞いたことのあるような科白、聞いた記憶のあるメロディー。

他人の家に入る。その家にある服を着る。物を食べる。座る、歩く、その辺にある本を読む、トイレに入る。その時、入った人は、その家の主を真似ることになる。

似た話、似た光景、そっくり、デジャビュの洪水。軽い目まいすら覚える。

*

似ている、似せる、似る、成りかわる、成る。

誰かに似ている。その誰かに似せるように努力し、その結果似る。それだけでは済ま

ない。その人物に成りかわるのだ。そしてついにその人に成る。お察しの通り、これはサスペンスであり犯罪小説。怖い話。

そんな小説がある。小説とは異なる部分もあるが映画にもなっている。

河出文庫 太陽がいっぱい

イタリアに行ったまま帰らない息子ディッキーを連れ戻してほしいと富豪に頼まれ、トム・リプリーは旅立つ。その地でディッキーは、

www.kinokuniya.co.jp

この小説にはそっくりな邦訳（翻訳だから似て当然）が二種類あり、映画化された作品も二種類ある。「似ている」や「そっくり」や「既視感」を楽しみたい人——そんな人がいるのか？ ここにいるけど……—には堪らない話。

河出文庫 リプリーをまねた少年

数々の殺人を犯しながらも逃げ切ってきた自由人、トム・リプリー。悠々自適の生活を送る彼の前に、億万長者の家出息子フランクが現

www.kinokuniya.co.jp

まさに目まいのするような話。

*究極の似ている

文学も芸術も映画もスポーツも「似ている」に満ち満ちている。世界は「似ている」に満ち満ちている。

何かを真似て似たものをつくり始めたのはいいが、人はそのつくったものに似たものをどんどんつくることを無意識に覚え、その結果、複製文化どころか、複製文明と大量生産文明を築き上げ、今日にいたるのではないか。

似ているの増殖、似ているの自動生産、大量生産。どうにもとまらない状態。そして世界はどんどん暖かく暑くなっていく。

とはいえ、誰も目まいを起こしたくないから、「似ている」ことには目を向けないし、

耳を傾けないでいる。「似ている」や「そっくり」とは、ほどほどのお付き合いをするべきということか。

＊

「似ている」と「そっくり」——。何かに似ている、そっくりだと思い、何だろ何だろと考えていて、文学も芸術も映画もスポーツ、複製文明と大量生産文明、大量生産と思いをめぐらして、はっとする。

「似ている」と「そっくり」は、お金に似ているし、そっくりなのだ。そして、その身振りは人に似ている、そっくりなのだ。

もし地球外生命体が、地球を見たとするなら、人はあちこちで同じ仕草と動作と表情を演じているように感じるのではないかと思えるくらい、そっくり。多量のさまざまなそっくりを生みだし、そのそっくりとそっくりな身振りを演じている。

自己引用、自己擬態、自己形態模写。ひょっとすると地球外生命体は笑ってしまうかもしれない。ギャグとしか思えなくて。

＊

究極の「似ている」と「そっくり」は紙幣、つまりお金。お金は「似ている」どころか「そっくり」どころか、「同じ・同一」に限りなく近くなければならない。精巧をきわめる。偽造を防ぐため。

ほぼ「同一」だから、計器によって計測可能。人の知覚だけでは真偽は判断できない。

お金は何に似ているのか？ 数字ではないか。抽象度マックスな数字。似ているやそっくりの世界ではなく、同じ・同一の世界。

数字と同じく抽象だから、何にでもかえられる、換えられる、変えられる。こんな便利ですごいものはない。素晴らしいものをつかったものだ。だから、どんどん刷る。

真似てつくる。そっくりにつくる。間違いは許されない。似ていなかったらアウト。下手すると犯罪、いや下手しなくても立派な犯罪。

本物のお金をどんどん刷らなければならない、鑄造しなければならない。印刷機や鑄造機でどんどん刷る。究極の精巧さで複写し複製し、大量生産する。

刷ることができるのは一部の人だけ。政府だけ。正確に言えば、政府の銀行と造幣局だけ。こども銀行は、こどもにだけ許される。

そっくりの本物がどんどん増えていく。実体なんて関係ない。人は存在しないもので動く。おとなのやることはほんまもんやからこわいわ。どんどん増やす、ついでに殖やす。実体はなくてかまわない。そんなところも数字と激似。

私には、印刷されていく紙幣のありようが人の身振りに見えてならない。

*

電子マネー、ポイント、スマホ決済。

記号と化したお金、マネー、紙幣。触ることも見ることも匂いもしない記号。似ているやそっくりのない、おそらく同じや同一もない世界。

虚ろな記号。似ているやそっくりのない記号。実体のない、ふえる増える殖える。

ふえるという身振りだけが空転する。人は存在しないもので動くの進化であり洗練なのか？ その新たな展開なのか？ あるいは、その枠内での展開にすぎないのか？

紙幣のない印刷機、硬貨のない鑄造機。機械の音だけがむなしく響く工場。

何だろう？

何かに似ている気がするが、何に似ているのか、思いつかない。ひょっとすると、何にも似ていないのかもしれない。似ているが空転する。なぞるをなぞっている。

なぞるをひたすらなぞる、空（くう）をなぞるといふのは、人の身振りそのものではないか。人はなぞるをつくりだし、それを無自覚かつ無意識に模倣しているのではないか。こんな荒唐無稽な空転が永遠に続くわけではない。

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく

「人のつくるものは人に似ている」と「人のつくるものに人は似ていく」は、おそらく同時に起こっている。

見るはつくる。見ることで人は像をうつすというよりつくっている。でっちあげていると言ってもいい。みるにせよ、うつすにせよ、つくるにせよ、そのものではないから。遠隔操作でしかありえない。

「人のつくるものは人に似ている」と「人のつくるものに人は似ていく」は、おそらく同時に起こっている。しかも常に起こっている。

鏡を覗きこむ身振りそのものではないか。鏡の中の自分の像をつくり、それに似る。言語活動と同じではないか。言葉をつくり、言葉に合わせる。表象行動と同じではないか。表象をつくり、表象に擬態する。

表象を信じ、ひいては表象になりきっているとしか思えない。

*

俯瞰、拡大、X線写真、CTやMRIというものは、人がつくったもの。自分の知覚に合わせてつくったもの。見えているから見えていると錯覚しているが、それはつくったもの、でっちあげたもの、似せたものという意味での偽物であり、フィクションにほかならない。または、きわめて精巧な影絵を使った遠隔操作とも言えるかもしれない。

俯瞰や拡大を手にした人は、世界はちょろいと思っているにちがいない。

*大→小 or 大←小

つまり、

*●→・ or ●←・

あるいは、

*全体→部分 or 全体←部分

図式化すると、上のようなイメージになる。ちょろいものだ。だから、俯瞰と拡大をやめられない（置き換えているだけなのに）。そんな映像ばかりを撮るし、そんな映像ばかりが流通し拡散される。

小さくして手玉に取る。ちょろいものだ。「●→・」のことではない、「●→・ or ●←・」というふうに誤魔化して、てなずけるのだ。錯覚を利用しているだけであり、代理=表象を使う限り、「そのもの」にはぜんぜん近づけない。影絵を利用したの遠隔操作であることに変わりはない。

フィクションや遠隔操作にも有効性があるのは言うまでもない（有効性があるからこそ人はつくり、利用している）。たとえば、その有効性のおかげで火星の探査が可能になっているし、地球の気温も高くしている。それが科学の可能性であり限界であり、いわば賭けなのだ。結果がどうなるか（どう出るか）はわからない。

(動画省略)

私には、上の動画の羊が、犬が、魚が、鳥が、人の身振りをなぞっているように見えてならない。これとそっくりな動きを人がしているという意味だ。だから、人はこんな映像ばかり撮る。

これらの動画の被写体は人でもある。見ていると同時に見られてもいる。自分を見ているとも言えるだろう。あくまでも見ているのは人。ただし、それはおそらく「見えている」のであり、それを「見ている」とは限らない。

人は自分が関心のあるものしか見ない。自分の関心のあるものとは、人であり、人のような、つまり人に似ているものだ。また見えているものを自分の思いや内に合わせて見えるようにもする。人は人という枠の内では、見ないとも言えるだろう。たいていは、自分に似たものとして見る。しかも、それに気づいていない。気づいてもすぐに忘れる。

人は、つくるものに似ている。人は、内なるものをつくっているからだ。書物や銀幕やスクリーン（ディスプレイ）と同じく、人は内なる仕組みや枠を、外でつくっている。つくり、使っている。利用しているつもりが、利用されているのかもしれない。



人は俯瞰が好きです。たぶん嗜癖しています。何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思こんでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。ちょろいものだ、と。

俯瞰とは、場所、つまり空間だけではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができます。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

俯瞰という身振りは、人が初めて水面に「かがみ」こんで自分の姿を見た身振り、そして鏡を作り毎日鏡に見入っているという身振りに重なります。自分を見ているつもり。でもその鏡像と映像は自分ではないのです。見えているのは自分ではなく自分の影、幻影なのです。人は自分を肉眼で見ることはできません。ここに「見る・見える・見ない・

見えない」の原点がある気がします。

ところで文学史に出て来る人は特定の人物でしかないことに気づき、啞然としたことを思い出しました。よく考えれば当たり前のことです。文学史に限らず、文学について語るさいに登場する作家たちは、文学の歴史すべてをすくい取った人選ではありえません。

幸運にも同時代や後世の人たちから注目されたりもてはやされた書き手で、その作品が原稿や日記や印刷物として残っている人だけが、いまも作家として取り上げられているにすぎないのです。中にはある時代に評価され、いまは忘れ去られている書き手もいるにちがいありません。

それなのに、あたかもある特定の作家だけが作品を書いていたかのような扱いを受けているのは、よく考えれば不思議な出来事です。

音楽もそうでしょう。科学もそうでしょう。芸術一般もそうであるにちがいありません。選択と排除の結果です。「評価」や「価値」という言葉には、そうした側面があることを忘れてはならないと思います。綺麗事ではないという意味です。

宗教も例外ではありません。異端、刑、罰、悪などの名のもとに、それだけの人や生活がなきものにされた、つまり排除されたことでしょう。その結果が、現在の各宗教のありようであり、かたちなのです。みなさんがご存じのように、排除が続いている地域が世界にはまだあります。

(拙文「人は存在しないもので動く」より引用)

*言葉になれないから、人は言葉になりきり、なりすます

人は言葉を信じ、(言葉にはなれないから)言葉になろうとし、言葉を模倣し、(言葉にはなれないから)言葉になりきる、そしてなりすます。「言葉」を「表象」、「記号」、「鏡像」、「映像」に置き換えても事態は変わらない。

○

*言葉を話すことは、自分以外のものに「なる or なりきる」ことである。

と以前から思っています。「自分以外のもの」って何でしょう？「何でもあり」だとイメージしてください。「自分」以外なら「何でもあり」。では、その「自分」って何でしょうか？ 分かりません。

*分からないようにできている

のです。というか、

*分からないような仕組みになっている

あるいは、

*分からないように仕組まれている

とも言えそうです。なぜなら、

*Aの代わりにAでないものを用いる。

という、言葉の仕組みの大前提があるからです。

なお、

*ヒトは、「○△X」という言葉を作り、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである

という、言い方もできますが（ここでは「○△X」が「自分・あたし・おいら・わい」に該当します）、このあまりにも身も蓋もない言い方を採用すると、ヒトのお馬鹿さんぶりおよびお茶目ぶりが露呈して、話が終わってしまう恐れがあるので、ここでは扱いません。

さて、人類というレベルでのヒトという種が、物心がついたころからずっと「自分って何」と考えてきた。それこそ数えきれないたくさんのヒトたちが、この惑星のあちこちで「私って何」と考えてきたに違いありません。それなのに、究極的な結論が出たという話は見聞きしたことがありません。というか、物好きな人たちがそれぞれ勝手に結論を出してきたというのが、正確な言い方かもしれません。いずれにせよ、「決定打=コンセンサスを得られるだけの結論」は出なかった。だから、「自分とは何か？」という問

いは保留するしかありません。

「自分とは何か」を保留するのですから、「自分以外のもの」＝「何でもあり」＝「森羅万象」＝「世界」＝「宇宙」とは何かも、きっと保留するしかないでしょう。個人的な意見を述べるなら、「自分」も「自分以外のもの＝何でもあり」も、「まぼろし」なのではないか、と考えています。つまり、

*すべては、まぼろしである。言葉自体も、言葉が「指し示している＝意味している」とされるものごとや現象も、すべてがまぼろしである。かもね。

という感じです。これは、このブログでよく述べている、

*Aの代わりにAでないものを用いる。

という、言葉の仕組みの大前提と深くかかわっています。

*

*言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる」ことである。

と、「なる (6)」で書きましたが、またもや変更を加えます。

*言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる・なりきる」ことである。

「なる」に「なりきる」を付け加えただけですが、これって「自然の成り行き」をヒトが演じるという意味を込めた駄目押しのつもりなんです。「なりきる」という言い方が、気に入ってしまいました。いかにも「人間ぼい＝ヒト特有だ」というニュアンスがある」言い方だと思いませんか？

ところで、

*言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「な

る・なりきる」ことである。

のは、言葉が外からやって来るものだからなのですが、このことについてはいつか別の場で書きます。

*

「かわる・かえる」という言葉も「かわりはてる」という「コンプリート＝完全版」にまで至ってしまうと、「自然の成り行き」という感じは希薄な気がします。誰かの企みやせっぱ詰まった事情によって、やむを得ずそうってしまったあげくに、「元にはかえることができない」＝「もどれない」感じがしてなりません。

さて、「なる」のコンプリート＝完全版である「なりきる」について考えてみましょう。この言葉は、さきほど述べたように、ヒト独特の行為という気がします。「思い込む」とかなりかぶる＝ダブる＝重なる面があるからかもしれません。

唐突ですが、ここで書いてきた二つのフレーズを合体させてみます。

* 「まぼろしとは、ヒトが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙である」

+ or ⊕

「言葉を話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる・なりきる」ことである」

=

「ヒトは言葉を使用することによって、自らが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙＝まぼろしに、一時的に、あるいは部分的に「なる・なりきる」

*

「なりきる」は、まず、不自然なことをするという意識から出発します。しかし、その意識が薄れます。ほとんどなくなるところまでいきます。「思い込んでいる」からです。

もっとも、「思い込み」には程度の差はあると思われますけど。

*「なりきる」とは、「かわる・かえる or 化ける or 演じる = 装う」という言い方の「代わり」に、「なる」という別の言い方を「当てる」=「こじつける」ことである。

という考え方もできそうです。ややこしくなるのを覚悟で、もっと詳しく言うと、

*「なりきる」とは、「かわる・かえる or 化ける or 演じる = 装う」という言い方の「代わり」に、「なる」という別の言い方を意識的に「当てる」=「こじつける」と同時に、「なる⇒なった」という状態にほぼ無意識のうちに陥ることである。

とも言えそうな気がします。自己催眠、錯覚、酩酊、夢想、妄想、忘却などという言葉が頭に浮かびますが、そうしたラベル=レッテルは、ここではあまり重要ではないと思われるので、深入りするのはやめておきます。大切なのは、「なりきる」が「思い込む」から強くバックアップ=サポートされていることです。

(拙文「なる」より引用)

*

ややこしい箇所を引用してごめんなさい。

ものすごく簡単にまとめてみます。

よく「父親(母親)になる」とか「父親(母親)らしくする」とか「長男(長女)だから長男(長女)らしくしなさい」と言いますね。子どもらしく、教師らしく、生徒らしく、お客らしく、店長らしく、課長らしく、人間らしく、〇〇教徒らしく、〇〇市の市民らしく、日本人らしく……。

「父親が父親になる」この場合の、前者は父親という言葉=レッテル=表象を貼られた生身の人間で、後者は父親という言葉=レッテル=表象を信じた=なりきった生の人間なのです。人は言葉にはなれません。だから、父親という辞書の語義、父親像というイメージになりきるのです。「なりきる」から「なりすます」はほんの一步です。

なれないからなりきるところが大切です。つまりフィクションであり物語なのです。この「なりきる」を「信じる」とか「まねる」とか「引用する」とか「擬態する」と置き換えても事態は変わりません（人は言葉を獲得して以来、言葉と現実を混同しつづけているとも言えるでしょう）。見方が変わるだけです。「見+方」です。

話は飛躍しますが、人がなりきるのは「父親」という、人の属性を示す言葉だけではありません。リングでも、犬でも、スズメでも、ミジンコでも、茶碗でも、路傍の石でも何でもいいのです。ミジンコを、民主主義、科学、AI、客観、真理、不偏、愛、神と置き換えると、事の重大さを感じていただけるのではないのでしょうか。

こういう言葉に接した瞬間、人はその言葉を信じて、その言葉になりきるのです。それが言葉を「聞く・読む・話す・書く・理解する」であり、たとえその言葉に反論したり批判をするさいにも、まず受容するという形での信じるがあるのです。

＊

ちょっと廉さん、冗談は顔だけにしてよ。私は言葉と現実を混同なんてしていません。口紅という物と口紅という言葉が違うことくらいわかっています――。

こんな幻聴が聞こえたので、補足説明をします。例によって自己引用させてください。自己引用は、note でピン芸人をしている私の芸風なのです。

○

個人的に好きだし、すごいと思うのは、以下の部分です。

Melody Fair, remember you're only a woman.

Melody Fair, remember you're only a girl.

名前を呼ぶ、最初の二語で盛り上がり、次第に抑えていき最後はつぶやくように歌われる箇所です。

この二行では、最後の a woman と a girl だけが違います。あとは同じ。この繰り返し

と差異の妙は見事だと思います。

woman と girl は反義語であると同時に類義語でもあります。つまり、人という存在は多面体（プリズム）なのです。この曖昧さ（両義性・多様性）が詩（歌詞）となり人を惑わせるのです。

【※時と場合と場所によって、お母さん、きみ、あなた、おまえ、あいつ、あの人、お姉さん、〇〇さん、看護師、患者、客、あのう……、被疑者、被害者、加害者、被告、原告、「女」・「女性」・「Aさん」、被災者、保護者、障がい者、病人と呼ばれうる人間は、多層的多重的な存在とも言えます。

人をたった一つの語というレッテルで指すことは不可能なのであり、複雑な現実を反映していないのです。こうした現実を失念しているために起こる誤解や苦しみや不和や争いは多いと思われれます。

たとえば、ある時点であなたがいる状況とあなたがいただいている思いと、かけ離れたレッテルを誰かがあなたに見ている、あるいは重ねているときに、すれ違いが起こります。このすれ違いがある限り、共感も同意も実のある対話も生まれません。同情すら生じないにちがひありません。】

woman と girl に相当する日本語で見てみましょう。

女の人－女の子（大和言葉）

おんな－むすめ（大和言葉）

女性－少女（漢語・唐言葉系）

メロディー・フェア、髪を櫛でとかしてみたらどうかな？

君は綺麗にだってなれるんだよ。

だって、

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの女なんだよ。

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの娘なんだよ。

（拙文「この歌では女の子の名前自体が詩なのです【言葉は魔法】」より引用）

○

あなたはあなたなのですが、人である限り、いろいろな言葉のレッテルを貼られる運

命にあります。言葉が現実を反映していないとか、言葉が必ずしも当たり前のものではないと感じるのは、たとえば自分の意志や意思に反して、不本意なレッテルを貼られた時なのです。とてもじゃないけど自分は母親というレッテルを貼られたくないという女性がいても不思議ではありません。

「おんな」と言われるのが大嫌いな人を知っていますが、言葉というレッテルにとっても敏感な人でした。森鷗外の小説についておしゃべりしていたとき、「娘」という言葉に抵抗があるとも言っていました。当時の私と同じく翻訳家志望だったその人は、鷗外の『舞姫』における「彼」という人称代名詞についても卓抜な意見を述べていらっしました。実は、いま引用した記事は、その女性を思い出しながら書いたのです。

＊

話を戻します。

「父親が父親になる」この場合の、前者は父親という言葉＝レッテル＝表象を貼られた生身の人間で、後者は父親という言葉＝レッテル＝表象を信じた＝なりきった生の人間なのです。人は言葉にはなれません。だから、父親という辞書の語義、父親像というイメージになりきるのです。「なりきる」から「なりすます」はほんの一步です。

なれないからなりきるというところが大切です。つまりフィクションであり物語なのです。この「なりきる」を「信じる」とか「まねる」とか「引用する」とか「擬態する」と置き換えても事態は変わりません（人は言葉を獲得して以来、言葉と現実を混同しつづけているとも言えるでしょう）。見方が変わるだけです。「見+方」です。

話は飛躍しますが、人がなりきるのは「父親」という、人の属性を示す言葉だけではありません。リンゴでも、犬でも、スズメでも、ミジンコでも、茶碗でも、路傍の石でも何でもいいのです。ミジンコを、民主主義、科学、AI、客観、真理、不偏、愛、神——「神」とは人の口癖だとも言えます、もちろんいま挙げたどの言葉もそうです、そういうものがあるのではなく、そう口にすることを人は好むという意味です——と置き換えると、事の重大さを感じていただけるのではないのでしょうか。

こういう言葉に接した瞬間、人はその言葉を信じて、その言葉になりきるのです。それが言葉を「聞く・読む・話す・書く・理解する」であり、たとえその言葉に反論したり批判をするさいにも、まず受容するという形での信じるがあるのです。

という話でしたね。

いずれにせよ、ややこしいですね。いま挙げた「言葉」を「歌」だと思ってください。歌を歌うとき、人はその歌になりきります。一種の催眠状態に入るわけです。けっこうな長さの時間で、旋律や歌詞やそのイメージになりることができますね。言葉をつかうときには、その「なりきる」が一瞬に起きると考えてもかまわない感じがします。

言葉をつかうとき、人は一時的にその言葉の語義やイメージを信じて、それになりきるのです。言葉を聞く、言葉を見る、言葉を読む、言葉を話す、言葉を書く。そうしたときに、人はその言葉になりきるのです。そして、なりすます。なりきり、なりすまさない限り、その言葉は認識されないという感じ。

人は同じことと同じものを繰り返して目にしたり耳にすると、それが普通であり当然であると思ひこむ、つまり信じこむとはよく言われていますね。「愛」も「ミジンコ」も「資本主義」も「真実」も「リンゴ」も「民主主義」も「客観」という言葉は、本に書いてあるし、テレビやネット上で飛び交っているし、辞書にはその語義が書いてある。

おびたしい数の「愛」（という言葉）が地球上にあるのです。これは、引用と複製と翻訳と拡散のおかげでそうなっているのです。これを信じないほうが無理と言うべきでしょう。つまり、言葉と現実を混同するなというほうが無理という意味です。

そうなのです。お気づきになったとおり、私たちの一人ひとりが、上で触れたブヴァールとペキュシェなのです。私たちはボヴァリー夫人であるだけでなく、ブヴァールとペキュシェでもあるのです。

表象であるはずの言葉を信じて（「信じる」とは人が考えているよりもずっと恐ろしい行為なのです、人にはこれしかないというほど人にとって本質的な行為なのです）、言葉になりきらない限り、人はこんな文明を築きあげることはできなかつたにちがいない。そんな気がしてなりません。

気がするだけです。この「なりきる」を比喩やレトリックであると取っていただいてもかまいません。というか、たぶん、そうなのでしょう。

ところで、「人が言葉になりきる」とか「なりすます」という荒唐無稽な、つまりありえない言葉をお読みになって、一時的にでもその言葉の身振りになりきりませんでしたか。あるいは、その言葉の身振りをなぞりませんでしたか。つまり、何らかのありえない馬鹿げたイメージや光景が一瞬浮かびませんでしたか。もしそんなことがあったとすれば、それが「言葉になりきる」なのかもしれません。

移動しながら静止している

＊

移動しながら静止している

星野廉

2022年2月5日 14:50

車の話です。

運転者や同乗者は動いていながら動いてはいない。というより、自分が動いているとつねに意識しているならば、きっと差障りがあるのでしょう。

車は動いているけど、自分は左右にも上下にも動いていない、つまり快適だ。さもなければ酔うに決まっています。事故を起こすにちがいません。

車も人もうまくできているなあと感心せずにはられません。列車も船も飛行機も、そしておそらく宇宙船や宇宙ステーションも。

自転車もそうです。忘れていました。あれは全身で乗っています。もう乗れない体になりました。

あと、体や意識もそうです。人は体や意識という器とか乗り物に収まっているのではないかという話です。どう思いかは人それぞれです。

＊

車では、運転者がカーナビの画面を見ることがあるし、音楽を聞いていれば、意識の一部は遠くどこかに飛んでいる。同乗者と会話したり、考えごとをしていても意識は部分的に飛ぶに決まっています。それでも運転はできるのですから、車がそういうふうにつくられているのでしょう。

乗り物では同乗者や乗客がパソコンやタブレットやスマホをいじっている場合もあります。自分の体が移動しながら、頭の中でめまぐるしく移動したり動いたり歌ったり読んだり書いたりしているわけです。

場所とか移動とか自分とか他人、そうした言葉でしか知らない事物や現象が不明に感じられてきます。そうしたもの同士の境も分からなくなってきました。たぶん分かったり考える必要はないのでしょうか。考えることが、ときには生きる妨げになるという例でしょうか。

＊

自分が動かずに動きを見るという点では、車やインターネットは、スクリーンを見るテレビや映画に似ていますが、自由度が異なります。テレビにはチャンネルが換えられ、見なくてもいられるという自由度があります。

一方の映画には、極端に言うと、椅子にくくりつけられてスクリーンを強制的に見る不自由さがあります。

この不自由さの極致が夢です。夢はどうにもなりません。椅子に縛られて強制的に見せられるのが夢です。しかも観客はひとりだけなのです。

どんなに愛している人とも、いっしょに夢を見ることはできません。眠った瞬間に、人はひとりになります。たとえ、ふたりで寝ていても。

文字どおりの同床異夢ですが、これとは逆の異床同夢を夢見てつくられたのが、映画やテレビやネットなのかもしれません。好きな人と同じ夢を見たい、同じ夢の中にいたいものです。

人でいるとは、それぞれが別人として生きることですから。ふつう他人とは言わない親子でも別人です。

愛する人や仲間と同じ夢を見たい、同じ夢の中にいたい。死後も……なんて夢見るのは、たぶん欲深いのでしょうか。こればかりは死んでみないと分かりません。

とはいえ、たったひとりで見るのが夢と夢うつつであり、集団で見る夢と夢うつつが現実（うつつ）なのであれば、集団で見る夢としてあの世があってもいいというのは、魅力的な考えですね。

私はひとりでいるのが好きなので、個人的には、あの世でもひとりで見る夢が見たいです。ああ、なんて貪欲なのでしょう。まるで、あの世に行くのが当然みたいな口ぶりですね。そんなの分からないのに。

＊

現在は、場所や移動や静止という言葉でイメージしていることが不明になっている時代だと思います。

移動するといえば歩くか走るしかなかった時代には、場所も「ここ」と「あそこ」と「ずっとむこう」くらいのもではなかったでしょうか。馬に乗るや、牛に乗るや、馬車や牛車や舟が出てきて、人の場所についての言葉やイメージが変わったと想像します。

自分が器か乗り物に収まっているのではないかという思いはもっと古くからあったかもしれません。夢、思い、想像、空想では、「ここ」が不明になります。「あそこ」や「むこう」に居たり行ったり帰ったりするという思い、つまりイメージは太古からあった気がします。

＊

思いの中の「ここ」と、現実の「ここ」ではぜんぜん違うという考えもあるでしょう。

まわりを見まわしてください。どこにいるかを確認したら、目をつむってみてください。目をつむって、さっき見て確認した「ここ」を思い描いてみてください。

目を開けて見える「ここ」と、目をつむって体感する「ここ」は違っていませんか？

*

あなたが見えているこの記事が映っている画面、たぶん note という場所を思いうかべてください。

フォロワーさんたちとか、自分がかかわったことのあるユーザーさんの顔（勝手にいただいている顔です）とかアイコンとか、記事の内容の記憶から来る風景が浮かびませんか？

そういうものが「ある」場所が note なのです。いま、この文章を読んでいるあなたの「ここ」が「そこ」です。

*

自分の居る場所を正確に言葉と数字で言ってみてください。

国名、県名、市町村名、番地、建物なら何階の何号室。乗り物に乗っている場合には、どこを移動しているのかできるだけ詳しく言葉にしてみてください。

そこが、たぶん抽象的な「ここ」です。抽象ですから体感できません。体験できない「ここ」だと言えます。

*

いま挙げた全部が「ここ」なのだと思います。

そう考えると、「ここ」って不明ではありませんか？ こことは、こころにあるところだという気がします。

そうじゃない方もいらっしゃるにちがいありません。人それぞれです。「ここ」もいろ

いろ、「こころ」もいろいろ、人生いろいろ。「ところ」変われば、品変わる。

*

自分が地球に居ることは確かでしょう。あるいは銀河系とか、宇宙でもいいです。この世でもいいです。それも「ここ」でしょう。

「ここ」には「あそこ」や「あっち」や「かなた」や「むこう」も含まれているのかもしれない。たぶん、そうなのでしょう。

2022年〇月〇日〇時〇分というふうに、時間というか時刻も、「ここ」とは切り離さない気がします。切り離せば、それは抽象になるという意味です。

個人的には、「ここ」と「いま」あつての「ここ」と「いま」だとイメージしています。

かつての「ここ」、あの時の「ここ」、これから来るだろう「ここ」。

地球は動いているとか、宇宙は膨張しているというのは、知識であり情報です。抽象という意味です。いくら数字や数式や公式を挙げても、抽象を体感するのは難しいと思います。

体感できない気づきとか学びの多くは抽象です。知識とか情報の多くも抽象ですから体感できません。ここでは、おもに体感の話をしています。

体感が偉いと言っているのではなく、また正しいか正しくないという問題でもなく、体感の性質の話をしていると思ってください。

たとえば、天動説は体感できます。地動説は体感できません。人はこども時代に天動説を信奉し、やがて地動説に改宗するが、その後も密かに天動説の信者でありつづけるとも言えそうです。

大切なことなので繰り返しますが、正しい正しくないの話をしているのではありません（そんなややこしい話は、ここでは無理です）。念のため。

ま、これも人それぞれです。上で述べた抽象を体感できるとおっしゃっている人の頭の中を、「どれどれ」と覗くわけにはいきません。

*

「同じ」とか「同一」という言葉とイメージをつかって考えてみましょう。

テレビのCMでマヨネーズが出てきたとします。その商品は、自分の家にある商品と同じです。「これこれ、これよ。三週間前に、スーパーでケチャップといっしょに買ったのよ」という感じ。

別のCMで、渋谷のスクランブル交差点が出てきたとします。そこには三十年前に、あるいは三年前に、または三日前に行ったことがあるかもしれません。「あそこ、あの信号の真下にいたことがある」という感じ。

で、その同じマヨネーズですが、同一ですか？ 同一とは原則として世界に、宇宙にたったひとつしかありません。

で、その信号の真下ですが、いま自分がそこにはいない、CMで撮影された日の「そこ」は、自分の居た「そこ」と同じなのでしょうか？ いま居る「ここ」に居ながら体感できない場所を「そこ」と称して、同一の場所だと言えるのでしょうか。

言うだけなら言えると思います。言葉をつかうと何とでも言えるからです。考えこむ人もいるでしょう。人それぞれです。

「いま」と「ここ」は切り離せない。同様に「あのとき」と「あそこ」は切り離せない。そう考えると、CMに映っている「あそこ」が、自分の居た「あそこ」とは同一だとは私には思えません。

CMの「あそこ」（正確には「あのとき」の「あそこ」です）には自分は居なかったという意味です。

＊

パソコンやスマホやゲーム機などの端末の画面に見入っているとき、自分はどこにいるのでしょうか。音楽を聞いたり歌っているときの自分はどこにいるのでしょうか。

車を運転したり、乗り物に乗っているときの自分はどこにいるのでしょうか。運転中に誰かと話したり、考えごとをしたり、音楽を聞いたりしているときの自分はどこにいるのでしょうか。

乗り物で移動しながら、端末の画面に見入っていたり、誰かと会話したり、物思いにふけているときの自分はどこにいるのでしょうか。

たとえば、端末の画面に見入ったり、運転席からの車窓を見ているとき、端末を操作したり、運転している人はたいてい静止しています。というか、静止していると思っています。

静止していると思いきこんでいるとか信じているのほうが正確かもしれません。

静止していながら、画面の中に見える、あるいは正面に見える、直線を進んだり、直線上で迷ったり、カーブしたり、回転したり、上下あるいは左右反対になったりしているのですから、画面を見たり、機械をいじっている人は不思議な時空にいるように思えてなりません。

＊

たぶん、静止しながら、つまりある場所で足踏みしながら、円運動をしているのでしょうか。円運動をえんえんと繰り返す。その円を切って伸ばせば、えんえんと伸びる直線や曲線になります。

スクロールや、スライドや、コントローラーの頭などでや左右縦横凹凸運動は、じ

つは巻物（ロール）をどンドンめくっているのです。巻物を伸ばせば、直線にも曲線にもなるでしょう。しかも上下運動ありです。

移動する、道を進む、ゲーム空間で動く、文書を読む、動画を閲覧する——こうした動き全部が円運動の反復と連動しているのではないのでしょうか。

それが静止したまま進む、つまり移動する仕組みだという気がします。空間の操作だけでなく、時間の操作でも同じだと思います。長針と短針が円を描くアナログ時計と、時間の進み具合の関係と似ています。

円運動はとどまりながら進む、あるいは進んだ気持ちになるという横着な方法であり名案なのです。

*

場所も時間も不明だという意味です。その不明という思いと、自分は動いていないという体感だけが、具体的な体験として「いま」「ここ」にある気がします。

さもないと、運転ができないし、端末を操作できないし、画面を利用できないし、そもそもおかしくなってしまう気がします。

これ以上おかしくならないために、この辺で失礼いたします。

動くとは止まっているとは、そうだと決めて、自分に言い聞かせることではないかというお話でした。

もっと簡単に言うと、動くとは静止することなりというお話でした。人に限っての話です。

#パソコン # スマホ # 画面 # 夢 # 夢うつつ # 現実 # 自動車 # 運転 # 体感 # イメージ
視覚 # 同一 # 場所 # 時間 # 日本語 # 言葉

指が知っている、体が覚えている

＊

指が知っている、体が覚えている

星野廉

2022年2月6日 08:11

ゲームやマージャンやパチンコをしている夢を見ると聞いたことがあります。夢の中で手や指が動くとも聞き驚きました。三つともやらない私は、そのときには、なんだか滑稽な話だと思いました。

先日、夢から覚めた瞬間に、夢で文章を書いていたさっきまでの自分の気配があり、それがキーボードを操作する仕草の余韻とともに思いだされたので、「へえー、おもしろい」なんて他人事のように感じました。

夢の記憶が体感となって残っている気がして感心したのですが、夢でキーを叩いている自分を想像すると、夢の中のパチンコ同様に滑稽でなりません。

何かに夢中になっている人って、端で見ていると微笑ましいし可愛くありませんか？
夢の中の自分は、ほぼ他人です。

＊

夢の中の出来事は絵として、つまり視覚的に思いだされると思いこんでいたのですが、指の動きや体感としても想起されるようです。

体感といえばふつうは五感ですから、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚として夢を思いだすとか、夢の中でそうした知覚が働くことはありえる気がします。

よーし、匂いのする夢を今夜見よう。そんなわけにはいきそうもないし、夢のことはたいてい忘れてしまい、覚えてない夢のほうが多そうなので、検証は難しそうですけど。

そもそも夢を検証するなんて、やっていけないことにも思えてきます。

*

夢の記憶ではなく、現実起きた出来事の記憶の検証なら、やっていいでしょうね。げんにやっている人は多いです。

とくに興味があるのは、触覚の記憶です。これが自分の中ではいちばん「体感の記憶」っぽいのです。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

こう並べてみると、なんだかいやらしくも見えてきます。これは触覚ではないでしょう、と言われそうなものもありますが、お遊びなので大目に見てください。

大切なのは「〇〇する・〇〇される」というふうに、触覚には双方向性があることです。ほかの知覚にはありそうに思えません。触覚は相互的なものなのかもしれません。

そりゃあ、そうです。触ることは、何かに触れることでもあるわけですから。その何かは人であったり物であったり生き物であったりします。まさにふれあいですね。

世界と触れあうなんて、想像するとぞくっときます。このぞくっというのが触覚や触感への扉であり窓なのではないでしょうか。

*

触感で思いましたが、食感とは、舌、歯、口蓋、唇といった場と外から入ってきたものの触れあい、かかわりあいです。ある意味、エロチックです。

食べることと性愛はつながっている気がします。

そういえば、性愛は触れあいの極致です。体感、五感を総動員しての、必死な行為です。テレビで生き物の生態を記録した番組を見ていると、植物であれ、動物であれ、性愛や生殖にむかってまっしぐらという感じがします。

生殖は、子孫を残すためですね。それを広義のプレイ（遊戯・遊技、演技・演劇、演奏、競技）にまで高めているヒトはすごいと思います。

あそび、たわむれ、えんじて、かなでて、あらそい、きそう。

このプレイというのはどれもが、体感、五感を総動員しての行為です。スポーツがいちばんイメージしやすいと思います。競技の相手とだけでなく、世界との全身的な触れあいです。

プレイでは、「する」と「される」の区別が意味を失います。分けてはプレイできない気がします。つまり、分けが分からない状態で臨み、いとなむのでしょう。

いやらしく響いたら、ごめんなさい。

*

手が覚えているとか、指が覚えているとか、体が覚えているという言い方があります。これも取りようによっては、いやらしく聞こえませんか？ それは脇に置いて話を進めます。

車や機械の運転や操作は手や体で覚えているものだと思います。同じ車種や機種でも、違ったものをつかうと違和感を覚えます。まして別の車種や機種を操縦するとなると、慣れていない人は戸惑うのではないのでしょうか。

違和感が分かりやすいのは、やっぱり思いや気持ちよりも体感だと思います。体感は触感の王様みたいなものですから、「〇〇する・〇〇される」という双方向性と相互性がダイナミックかつダイレクトに感じられます。

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

まるで、相撲です。というか、格闘技やプレーヤー同士が触れあうスポーツでは、双方向性と相互性がダイレクトかつダイナミックに起こります。肉体同士が触れあうどころか、もろにぶつかり合うのですから。

*

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

言葉として読んでいるだけで体が火照ってきませんか？ 私なんか暗示にかかりやすいし、感情移入が激しいので、汗ばんできました。なにしろ単純なのです。

逆にいうと、格闘技とかを見るのが苦手です。顔をしかめながら見るタイプですから、やたら疲れてそのうち嫌になります。

最後まで見ることはめったにありません。あ、相撲は別です。すぐに終わっちゃいます。

*

車の運転や機械の操作では、手や指をつかうのがいちばん多い気がします。あ、足もつかう場合がありますが、手と足はそっくりじゃないですか？

いつだったか、パソコンで、あるサイトに入るときのパスワードを忘れて、思いだすのに苦労したことがあります。しばらくつかっていないサイトだったのです。

数字とアルファベットの組み合わせだったのですが、頭が覚えていなくて焦りました。

指が覚えていた、手が覚えていた、まさにそんな感じなのです。何度も何度も、キーボードに指を走らせているうちにサイトに入れることができ、「やった」と叫んだのですが、久しぶりに利用したサイトだったので、入ったとたんに忘れていました。

偶然に正しいパスワードを入力したみたいでした。パスワードはどこかに書いておくべきです。体感ばかりに頼るとひどい目にあいます。

*

体感の話が多いですが、私は体感派ではありません。むしろ体感は鈍いほうです。

どんくさくて鈍感だと小さいころから言われつつけて、いまに至ります。なにかと感度が悪いみたいです。

スポーツはぜんぶ駄目、演奏できる楽器はなし（だいいち楽譜が読めません）。でも、自分にそなわった体と体感は大切にしたいです。贅沢は言いません。

ただ体感がおもしろくて仕方ないので、話のネタにしているだけです。体感って、素直で単純だし、おもしろくありませんか？

そのうち飽きると思います。

*

いまだに天動説を信じています。

こどもの頃には太陽や月や星が動いていると信じて疑いませんでした。まして地球が丸いなんて思いも考えもしませんでした。

いまはどうかといえば、揺れています。その時の気分で地動説と天動説のあいだを行ったり来たりしているのです。

地球が丸くて太陽の周りをまわっているという話は学校で習って知っていますが、どうしても地動説が体感できません。

「体は正直だよ」ってやつです。この言い方も、状況しだいではいやらしく聞こえませんか？

でも、知識や情報の力は大きいです。学習の恐ろしさというか。こんな私でも、いちおう世間体を気にしますし……。

そんなわけで、地動説と天動説のあいだでいまも揺れています。

*

ここまで白状したので告白しますが、「太陽」のことを、ふだんは「お日さま」と言っています。

「地球」は「球」ですから丸いという感じがして、やっぱり違和を覚えます。

本当は「地面」とか「地べた」がいいのですが、語呂が悪いので「この星」とよく言います。星は好きな言葉です。

*

指が覚えている、手が覚えている、足が覚えている、舌が覚えている、喉が覚えている、お腹が覚えている、皮膚（肌）が覚えている、体が覚えている。

覚えているだけでなく、考えているし、知らせたり、教えてもくれます。さとしてくれることさえ、あります。そんなことをしていると駄目だよ、と。

泣いたり、悲鳴を上げるのは、体調が悪かったり、病気になるとよく分かります。個人的な印象では、自分よりちょっと先に、泣くのです。

その差が「知らせる」なのでしょうか。体は心が準備する間（ま）を与えてくれているみたいです。助かります。

体感を裏切る発言や思考や行動をすると、体にもうしわけなく思う自分がいます。

体って意外と賢いんですよ。現在は体や体感が軽んじられ、ないがしろにされている時代だという気がします。

美容師さんから聞いた話なのですが、指がお客様の頭の形を覚えているというのです。

店を変わって、別の店で初めて見るお客様の頭をいじっていて、はっと思ひだし、挨拶したそうです。

「〇〇さんですよ。お久しぶりです」

「あら、覚えていてくれたんですか？ よく分かったわね」

そのお客様はちょっと不満げにそう言っただけなのですが、じつは美容整形をしていたようなのです。

この話には感動しました。背後にそのお客様のドラマを感じます。ちょっと細部を変えて、このエピソードを小説の中でつかったことがあります。

*

指が知っている、体が覚えている、体は正直だ、というお話でした。

#体感 # 五感 # 夢 # 記憶 # 運転 # パソコン# 自動車 # 指 # 地動説 # 天動説 # 言葉

する、される

＊

する、される

星野廉

2022年2月6日 13:30

路上で負傷して歩けなくなり、通りかかった人におんぶされて、とりあえず安全な場所へと運ばれた。

見も知らぬ人の背中にひしにしがみつकिながら、涙が出てきた。その人の親切にではなく、情けない自分ではなく、悲しいその状況にではなく、懐かしさでいっぱいになる自分がいた。

幼いころに、母親の背中にしがみついていたときの記憶が、腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく、全身的によみがえってくる思いがした。

以前に、こんなことがありました。

「腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく」と書きましたが、まさにそんな感じだったのです。体の部位のさかいがないだけでなく、相手の体と自分の体のさかいも感じられない一体感を覚えました。

おんぶをされるというのは、相手に抱きつくようなかたちにもなります。背後から抱く感じです。ふだん人と接触することのない私は、あのときほどうろたえたことはありませんでした。

＊

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さ
する・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、
ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

いま挙げたのは、触覚とか触感的な身振り、動作、行為、動詞です。

目をつむって、上の動作をしたり、思えがいたり、思いだすと分かりますが、「する」
と「される」が同時に起きている場合があります。

触覚とは、相手、つまり人や物や生物との双方向で相互的な行為だからです。

対象がない状態でひとりで触れるわけにはいかないという意味です。これと対照的な
のが視覚だと思います。視覚は絵にしますから、言葉と相性がいいのです。一方の言葉
は抽象と相性がいいです。

言葉の基本的な身振りは「分ける」だからです。部分に分断するのです。余計な部分は
捨てることもあります。つまり抽象です。その代わり、すっきりはします。ある程度は。

＊

子どもをだっこしていると、抱いているのか抱かれているのか分からない気分になる
ことがある。これは、ある女性から聞いた話です。子をもった経験のない私は感心しな
がら聞いていました。

「あと、お乳をやっているとき、うちは男の子なんですけど、乳首を口でふくまれている
と、何というか、夫と重なるんです——」

女性はそこで口をつぐんで、その話はそれで終わったのですが、それ以上尋ねる気
にはなりませんでした。

＊

性行為のときに、するとされるのさかいが不明になるとか、自分の体と相手の体のさ

かいが消えた感じがするとか、自分がどこにいるのか、なんなのか、だれなのかが頭がない状態におちいる。

そうした状況は、小説、映画、テレビドラマで繰り返され出てきます。表現の仕方しだいで、いやらしくも、うつくしくも、きれいにも、きたならしくも、ほっこりにも、暴力的にもなります。

「する・される」が不明になるのは、性行為だけでなく、読むとき、書くとき、映画や動画を見るとき、お芝居を見るとき、歌を歌ったり、音楽を聞くときにも起きる日常的な体感ではないかとも思います。

私は不案内なのですが、たぶん、ゲームやスポーツや楽器の演奏でもあるのではないのでしょうか。

そういう状況をどう言葉にすればいいのでしょうか。描いた言葉はあります。数えきれないほどあります。文学でも、学術的な論文でも。でも、しっくりこないのです。

そうかなあ。そうだったかなあ。そういうものなのかなあ。

言葉に期待しすぎているのかもしれません。

*

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

こうした行為、動作もひとりではできません。相手や対象とのかかわりあいから生まれる出来事です。

「する」と「される」が言葉としてあるから、つかうだけの状況に投げ込まれている。それが人と言葉の関係であり、その言葉とは必ずしも世界や現実を「正しく」反映したものではないのです。

いま「正しく」を括弧に入れたのは、そもそも「正しい・正しく」なんてあるの？
と思っているからです。言葉は欠陥品だと考えているので、慎重になってしまうのです
けど、人それぞれです。

＊

車の運転をする人も同乗者も移動しながら静止している、静止していると思こんで
いるが、じつは動いている。

こういう文を書いていると、自分の表現力のなさを棚に上げて、言葉はなんてまどろっ
こしいのだろうか、言葉にもてあそばれているなあ、なんて思うことがあります。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもあると感じる瞬間です。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉
や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物
や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と
澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だま
す」のですから詭術である、というわけです。

いま書いたような騙りに満ちた文自体が、記述であり、既述であり、奇術であり、詭
術なのですから、語るに落ちるところか、騙るに落ちるという感じで、呆れかえって思
わずのけぞりそうになる自分がいます。

＊

言葉は物を見えなくしているのではないか。いや、正確には言葉で物が見えなくなっ
ている部分もあるのではないか。そんなふうに思います。

たとえば、「〇〇する」と「〇〇される」という言い方があるから、ある物や事や現象
を見て、「する」と「される」に「分けて」しまう。それで「分かった」気分になるとい
う意味です。

でも、じっさいには「する」と「される」のさかいが不明な事態というのはいりそうです。訳が分からないというよりも、分けが分からなくなっているときですから、冷静になれば分けが分かるでしょうなんて短絡したくはありせん。

世界はそんなに単純明快だとはとうてい思えないのです。

*

言葉をつかうと世界は「ある程度」単純明快に見えるでしょう。言葉の世界に入るからです。言界は現界とは異なります。「ある程度」の対応や関係はあるにちがいありません。

人は言界と現界と幻界のあいだを行き来している、あるいは複数の界に同時にいる、とも言えそうです。ただし、限界があります。それぞれの界が対一に対応した関係にあるわけではないからです。

食い違い、ずれ、誤差、錯覚、ノイズがあるはずで。それが限界です。限りがあるわけです。かぎりなくかぎりがあるはずで。

あらゆる現象や、言象や幻象が、たがいに整然と対応しあうという形で、人に都合よく存在しているわけでもないでしょう。いや、存在するどころか、しよせん、どこかの阿呆がつくった自分語でしかありません。

*

言界は現界に追いつけません。言葉や言い回しの数が圧倒的に少ないからです。現界の複雑さについていけないのです。これが言界の限界である減界です。

限りなく少ないもので限りなく多いものを組み立てようとするに土台無理があるのです。少ない限りには単純明快に見えるという利点もあります。

そこそこの数で無数を説明する利点はそこにはありますが、「そこそこ」であるという限界を念頭に置かないと過信にいたるのは分かりやすい話だと思います。

＊

目に見える世界、つまり眼界もまた、限界にあります。視野と視点とは、枠と焦点でもあります。つまり、見える範囲には限りがあり、見るとは見えている部分を忘れてたり意識に置かないようにして、ある一点に集中することです。

視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。※笑点や消点（盲点とか死角でしたっけ？）もあるでしょう。

集中すれば、捨てる部分が必ず出てきます。捨てないで集中しようなんてありえません。虫のいい話です。

俯瞰や展望とは、世界や宇宙のある部分をながめることにほかなりません。全体とは必ず部分なのです。あらゆる俯瞰と展望は局所的、つまりローカルなものだと言えます。

＊

人は俯瞰が好きです。何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思いでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。

俯瞰とは、場所、つまり空間だけではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

話を縮小します。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史——。歴史は時間的な俯瞰と見なすことができますが、それぞれの歴史は、やはりローカルなものです。

ある部分、ある特定の要素、ある特殊な視野と視点（立場）からながめているだけです。

たとえば、世界史という言葉は言葉の綾です。世界史という言葉があるから世界史があると思ってしまう。

各国、各地域、各言語圏、各文化圏にそれぞれの世界史があります。世界史はローカルなものなのです。「世界史」間の闘争も起きています。戦争にもなります。

しかも、いま挙げた各〇〇の中に、さらにさまざまな考えや意見に基づく世界史があります。この国でもあります。「世界史観」間の争いもありますね。話が、ややこしくてごめんなさい。

普遍的な世界史などないのです。それぞれの立場と視点による無数の世界史があると言えます。世界史とは名前だけがそうなっているのであって、ある時代のある時期という時間、ある場所という空間の制約の中にあるわけです。

人に世界が俯瞰できるわけがないじゃありませんか。時間的にも、空間的にもです。世界地図も言葉の綾という意味です。

このように人には、自分にできもしないことや自分に検証もできないことを言葉にする習性があります。真理や普遍や客観や魔法や悟りがそうです（努力目標なのかもしれません）。

＊

言界は現界とずれています。どれくらいずれているかは、人それぞれでしょう。印象の問題だからです。そこそこずれているか、とほうもなくずれているか。

言界と現界がそこそこ対応していると感じて、たとえば世界史という言葉が文字どおりに取ってしまう。これは致し方ないことです。

人は目にした文字、読んだ文字を、いったん信じます。信じないと読めないからです。読むことは信じることなのです。

判断、批判、否定、評価は、信じた後に来ます。ただ信じることの容易さにくらべて、判断、批判、否定、評価にはエネルギーを要します。考えなければならないし、調べることも必要でしょう。

面倒なのです。だから、たいてい「信じた」だけが残ります。

＊

空間的なものにしろ、時間的なものにしろ、俯瞰はローカル、つまり局所的なものしか、ありえません。そもそも視野自体が枠であって、枠には限りがあります。

俯瞰の語義としてある「全体を見おろす」というのは「部分を見おろす」であるという意味です。あくまでも見ているのは部分なのです。

また視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。集中すれば、捨てる部分、見ない部分が必ず出てきます。

「捨てる」と「見ない」を選択と排除と言い換えることもできます。その結果として、「たまたま残ったもの」が、たとえば歴史を構成するのです。必然でそうになっているわけではありません。

また、良いものが残ったとは必ずしも言えないでしょう。運が良かったとは言えると思います。すごい強運です。

残ったものは強いです。無言で既得権益を主張することができるからです。しかも誰も既得権益とは言いません。

遺産や古典としてもはやされます。それしか残っていないのですから、失われた同時代のものと比較できません。褒めるしかないでしょう。

長く残っているものにはファンも多いです。崇拜者もたくさんいるでしょう。ますます評価されます。ただし競争者のいない評価です。

結果オーライということです。

＊

部分なき全体、つまり全き全体とは抽象でしょう。抽象は便利です。焦点や視点と同じく、捨てること、無視することで成りたつからです。つまり、抽象とはすかさずかだという意味です。

部分に集中することで全体をながめるという抽象は、人類の悲願だと思われませんが、それは彼岸の話でしょう。この世ではありえない話です。虫のいい、貪欲な願望であることは確かです。

幻界ではありえる話でしょう。幻界はそうした不条理で荒唐無稽な話に満ちています。現界での、願い、思い、祈りは、人の幻界で花咲きます。

＊

飛雁はつつましく身の程をわきまえて、俯瞰しながら飛行していると思われます。

飛雁には彼岸にいたろうとするような悲願はなく、ただ此岸にとどまっている。その姿は美しいです。

どうか飛丸に当たりませんように。

する・される、部分・全体、世界史が言葉の綾ではないかというお話でした。

#体感 # 五感 # 触覚 # 記述 # 限界 # 俯瞰# 言葉

外にあって、外からやって来て、外であるもの

＊

外にあって、外からやって来て、外であるもの

星野廉

2022年2月22日 08:36

手に入れているわけではないのに、自分のものだと思っていて、自分のものだから、自分の思いのままになると思っているけど、なかなか言うことを聞いてくれない。

外にあるけど、中に入ってくるから、自分のものとか自分の一部だと思っていて、自分のものだし自分の一部なのだから、自分の思いのままになると思っているけど、なかなか思いどおりになってくれないし、ときには逆らってくるみたいな動きをする。

外にあるから遠隔操作するしかないとはいえ、隔靴搔痒（かっかそうよう・靴の上から痒いところを搔いているみたい）で、もどかしくてたまらない、つまり直接に動かしているわけではなくて間接的に動かしている、要するに「やっている感」だけみたいで、じつにいらいらする。念力ができたらなあをつくづく思う。

自分のものなんだから、使ったり操っているつもりが、こっちがもてあそばれているというか、こっちがこき使われているような気持ちになることがあって、なんだかこいつといっしょにいとSMプレイをやっているみたいだなあ、なんて感じることもある。こっちが奴隷で下僕の状況は永遠に続くのか。いや、永遠なんてことはない。こっちが持ちそうもない。

誰もが自分が生まれたときから既にあって、それを使っている周りの人たちを真似たり学んだりして、使っている。周りの人たちも、自分と同じくそういうことをしてきたらしいから、大昔からずっと続いているみたい。

要するに、みんなして借りていっしょに使っているということか。借りたものは返さなければならない。そうかあ、貸し借りしているわけだ。やり取り、キャッチボール、ぎぶ・あんど・ていくね。

それにしても、みんなでいっしょに使っていると、間違いやズレや誤解やすれ違いやノイズやすっとぼけやシカトや音信不通や誤配や未配や沈滞や借りっぱなしや借金や未払いや過積載がじつに多い。

それでいて、月に仲間を送りこんだし、2000年問題にも打ち勝ったし、この星の気温を○度上げんだから、これは大したものだとか上出来だと言えるし、やっぱりねと残念にも怖くも感じるこの頃。

こういうのは、貸し借りされるものに罪はなくて、貸し借りしているほうの自業自得だという気がしてならない。

#言葉#日本語#遠隔操作#隔靴搔痒#プレイ#貸し借り#共有#フローベール
#フロベール

続・外にあって、外からやって来て、外であるもの

＊

続・外にあって、外からやって来て、外であるもの

星野廉

2022年2月22日 14:04

外にあって、外からやって来て、外であるもの——とは言葉のことです。この note では、言葉のことしか書いていません。我ながら、しつこいやつだと呆れていますが、自分なので付き合いしていくしかないようです。

タイトルを細切れにして、説明させてください。

目次

外にあって、

外からやって来て、

外であるもの

気持ちいい話

外と中を行ったり来たりする天使

外にあって、

言葉は外にあります。どういうことかと申しますと、誰もが生まれたときにすでにある、といえば分かりやすいかと思います。生まれたときに、外にあったということです。なぜか、外にあったのです。

なぜなのでしょうね？

言葉がなぜ外にあるかは考えても答えは出そうもありません。私たちが、生まれた瞬間に、言葉がある環境に放りこまれたという事実の重みを噛みしめるしかないようです。

外からやって来て、

いま私は言葉を使ってこの記事を書いています。この記事をお読みになっているあなたは、ここに書かれた文字を読んでいたり見ていたりしているはずですよ。

その言葉はどこから来たのでしょうか？ 私には分かりません。分からないので話を作ってみます。でっちあげるとか捏造するということです。騙るとも言います。

たぶん、外からやって来たのです。「アホか！」そんな声が聞こえた気がします。凶星を指されてうろたえています。外としか言いようがないのです。

「おい、泥棒はどっちに逃げた？」「あっち」

そんな感じです。「外」ってどっち？ 「外から」と言われても困りますよね。話を簡単にするために、「あっち」の乗りで「外」とざっくり名指すことをお許しください。じつのところ、それしか言いようがないのです。

＊

言葉が外から来たというのは、真似た、学んだ、見た、聞いた。そんなふうにも言えると思います。とにかく、言葉は「外にある」のですから、そうやって「外からやって来た」のでしょう。

外からやって来て「中に入った」に違いありません。「中」って何でしょう？ というか、どこなのでしょう？ 「中」としか言いようがありません。「中」ってどっち？

「おい、泥棒はどっちに逃げた？」「あっち」

「アホか！」と、またお叱りの言葉をいただいたようです。では、有り難く頂戴し、アホはアホなりに、『あっち』は、とにかく『あっち』なの」の乗りで、『中』は、とにかく『中』なんです、という身も蓋もない言い方で話を続けさせていただきます。

＊

それにしても、「中」ではあまりにも愛想がないので、ちょっとだけ色づけします。脳、心、意識、魂、体、存在、自分。「中に入った」とするなら、いま挙げた言葉の指す「何か」に入ったとも考えられるでしょう。

これらの「何か」はとりあえず名指されているだけで、「何なのか」分からないものです。分からないけど名前があるのです。名づけるとは、何だか分からない「何か」を手なづける行為だという気がします。

手なづける、手懐ける、手名付ける。

怖いから、不安だから名付けるのです。生餌（なまえと読みます、生の餌のことです）を与えて、静めるわけです。供物とかお供えですね。で、何を静めるのかと言いますと、おそらく自分です。

相手ではありません（相手はおそらく幻です）。ビビっている自分の気持ちを静めるのです。

（人は「いないもの」や「ないもの」に取り憑かれます。それが名前（名付ける・呼ぶ）や言葉（放つ・話す・搔く・描く・書く）に結びつくのです。）

＊

外は怖いのです。何か分からないものに満ち満ちているのです。外が恐ろしいときには、どうすればいいのでしょうか？

ここでお断りしますが、外には出られません。怖くて出られないだけでなく、物理的に出られないのです。

なにしろ、人はこっち、つまり「中」にいるからです。言い換えると、脳、心、意識、

魂、体、存在、自分のことです。ここから外に出ることは物理的に無理なのです。

外が恐ろしいので（しかも外には出られません）、不安におちいつている「中」を静めるしかないという理屈になります。

＊

言葉は、外からやって来て中に入る。

その言葉は、世界、森羅万象、事物・様態・現象（こと・もの・ありさま・ありよう・できごと）の代わりに、人の中に入ってくるのです。

「中」に入れば占めたもの。まさに「こっちのもの」。

言葉とは「代わり」なのです。代理、代表、お使い、使者、回し者、間諜、エージェント、代理店、代理人という感じです（この「代わり」の両義性にご注意願います）。

簡単に説明しますと、猫と呼ばれている「何か」を名指している「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉は、猫の代わりだという意味です。

猫を中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れるわけにはいかないの
で、「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉に変えて、中に入れるわけです。

外であるもの

猫を中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れるわけにはいかないの
で、「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉に変えて、中に入れるわけですから――。

上で、こう書きましたが、じつはズルをしています。そんな馬鹿なことがあるわけは
ないのです。

＊

中に入れる「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉ですが、具体的には音声であったり、文字であったり、手話であったり（申し訳ありません、手話の猫は知りません）、指文字であったり（申し訳ありません、指文字の猫は知りません）、点字であったり（申し訳ありません、点字の猫は知りません）、指点字であったり（申し訳ありません、指点字の猫は知りません）します。

もちろん、「猫・ねこ・ネコ・neko」は、言語や方言の数だけあるはずですが、ここでは扱えません。ごめんなさい。

いずれにせよ、言葉の中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れるなんて芸当ができるのでしょうか？ 話を簡単にするために、そういうズルをした言い方をして、知らん顔をすることもできます。でも、私にはできません。

言葉は外にあるのです。具体的には、音声であり文字です。音声とは空気の震えとして伝わって鼓膜を震えさせるから「聞こえる」のだと学校で習った記憶があります。音声とは、きっとそういうものなのでしょう。

空気の振動である音声は、空気や鼓膜を構成する物質があって成立し、人に知覚されるということですね。極端に言うと、音声とは物質なんです。

文字とは、形であり模様です。インクの染みであったり、画素の集まりであったりします。いまみなさんがご覧になっている文字は画素の集まりだと思います。

形や模様とは素材、つまりインクや画素や絵の具や墨や粘土があって成立します。その意味では抽象なのでしょうが、物質がなければ人には知覚されません。極端に言うと、文字とは人にとっては物質なのです。分子や原子からなる物質です。

(※この部分を簡単に言うと、「言葉が中に入る」というすっきりとした話は、そう簡単でもすっきりしてもいなくて、言葉はそのまま入るのではなく、何らかのかたちで何かによって中に入るというややこしい話なのです。「何らかのかたちで」も「何かに」も不明だという意味です。)

＊

音声という物質や文字という物質が、中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入るでしょうか？ インクや墨や空気を体内に吸収すればできると答えた方に座布団を二枚、いや一枚だけ進呈します。

個人的には、音声という物質や文字という物質が「中」（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入るとは考えられません。

音声は震え・振動と物質、文字は形・模様と物質があって成立するものだからです。言葉、つまり声と文字は抽象と具象が同時にあって成立するとも言えるでしょう。片方だけでは片手落ちなのです。

たぶん、たぶんですよ、音声や文字は人の中に入ったときには、変わっているでしょう。変わって代わりものになっている気がします。気がするだけですよ。

本当のことは知りませんし、そもそもここでは本当のことなんていう大それたことはここでは扱えません。言葉を使って語っているだけです。語るは騙るでしかないのです。たぶん。

＊

よろしいでしょうか。言葉を使って言葉を語る。そんな妙ちきりんなことをここではやっているのです。これが騙り、つまりペテンや詐欺でなくて何なのでしょう？

脳が脳を語る。鏡で鏡を映す。夢で夢を見る。なんていうのと似ていませんか？ 正気の沙汰ではない。笑気のサタデーナイト。つまり、ナンセンスなギャグでしかありません。

外なんて語ることはできっこないのです。それでも、語ろうとするなら、騙るしかないという、まさにかたるに落ちたお話になります。そもそも、こういうことは本気でやっ

てはいけないのでしょう。

がっかりするしかない身も蓋もない話は、そこまでにして気持ちいい話をしましょう。

気持ちいい話

人はどうして言葉を入れるのでしょうか？ もっと詳しく言うと、どうして言葉を中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れたりするのでしょうか？

入れて中で何に変わっているか、なんて難しいとか分かりっこない話はしません。「なんで入れるの？」「入れるとなんかいいことがあるの？」という話をしましょう。

たぶん、たぶんですよ、入れると気持ちがいいのです。めちゃくちゃ気持ちいい。さもなきゃ入れませんよ。大昔から何度も何度も繰り返して入れてきているのですよ。世界中でみんなしてせっせと入れているのですよ。

入れるだけじゃなくて出してもいます。入れると気持ちがいいし、出すと気持ちがいいからです。なにしろ、人は気持ちがいいことが大好きなのです。

人は世界中で気持ちいいことに夢中になり、気持ちがよくなるために血道を上げていませんか？ 何が気持ちがいいかは人それぞれですけど、もっと、もっとというふうに人は切りなく欲望します。

とにもかくにも、脳内物質とかいうものがどぼどぼ出てくるから、人は入れるし出すのです。入れると出すに依存し嗜癖（しへき）しているとしか考えられません。

＊

食べる、飲む、吸う、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、これらは全部入れているんです。出すのも気持ちがいいです。排泄、分泌、発汗、生理現象、どれもすっきりさっぱりします。あはんとなることもありますね。

もちろん、入れると出すには痛みや苦しみがともなう場合があります。申し訳ありませんが、ここでは省略させていただきます。個人的な話になりますが、痛みについて語るのは勘弁願いたいのです。具体的には病院での処置のことです。

冗談ではなく、入れると出すは死ぬほど痛いし苦しいです。そんな経験をなさった方もたくさんいらっしゃるにちがいません。

＊

人はなんで言葉を使うのでしょうか？ 伝えるため、つまり伝達のためだけではない気がします。

人は気持ちよくなりたいから言葉を使うのだと思います。具体的には、言葉を入れたり出したりするのです。言い換えると、読んだり、聞いたり、見たり、触れたり、話したり、叫んだり、詠んだり、歌ったり、唱えたり、論じたり、書いたりします。ここには「伝える」も入ります。

伝えるとは他人とつながりたいからする行為ですから、やはり「気持ちよくなりたい」に通じると考えられます。じっさいには伝えようとして伝わることは難しいし不可能なことが多いのですが、それでもめげずに人はせっせと伝えようとします。

読む、聞く、見る、触れる、話す、叫ぶ、詠む、歌う、唱える、論じる、書く、伝える――。

どれも気持ちがいいです。適度に苦しいと、これまた気持ちがいいです。適度の締め付けや縛りは気持ちがいいものだということを、みなさん日常的に経験なさっているのではないのでしょうか。ああきつい、でも気持ちいいわ、なんて。

気持ちよくなるためにたしなむものに嗜好品と薬物がありますが、人にとって最高で最強の嗜好品であり薬物は何でしょう？ 言葉です。

人は言葉という最強の嗜好品であり薬物を楽しむために、さまざまな嗜好品や薬物をたしなんだり摂取します。

コーヒーあるいはお茶を飲みながら詩を書く、あるいは詩を読む至福の時。お酒をちびちびやり、好きな小説を読む最高の時間。書きものや読書の途中で煙草を吸う、これほど心が安らぐ時の過ごし方はない。そういえば、いわゆる麻薬やドラッグを服用して書いたと言われる文学作品は多いです。

お芝居や映画や楽曲やテレビ番組やネット上の映像にも、言葉がともないます。動きに満ちたスポーツも、言葉による解説と言葉で述べられるドラマがあってこそ盛り上がります。映像や音楽や動作を一種の言葉と見なす人もいます。

持論ですが、人が臨終という究極の時に必要とするのは、あるいは頭に浮かべるのは顔と言葉だと思います。この顔については、またいつか書きたいです。

＊

外にある言葉は人に入ってきます。入って何に変わってどんなふうに変化するのかわかりません。とにかく入るのです。とにかく入れるのです。たぶん、好んで入れています。気持ちがいいから入れているはずですよ。

外はブラックボックスです。外は外ですからぜったいに中から出られないし、外（現実と言ってもいいでしょう）のことは想像したり空想したり遠隔操作や念力で操った気持ちになるしかないのです。

目隠しをして象さんに触れるよりも心もとない話です。自分を取り巻く世界が何が何だか分からないという不安と恐怖。分からないというもどかしさと苦悩。これはおそろく人しか経験しません。

中もまたブラックボックスです。自分の中なのに、どうなっているのかわかりません。想像したり空想したりするしかありません。それでも分からない。分かった気持ちになれない。自分の一部だからこそ、もどかしい、いらいらする、情けな

い。これもおそらく人しか経験しないでしょう。

外もブラックボックス、中もブラックボックス。外も闇、中も闇。

それを忘れさせてくれるものがあります。そうです。言葉です。

外と中を行ったり来たりする天使

言葉はいじれます。好きなようにいじれます。ただし、外は他の人（他者）や世界や宇宙や森羅万象の領域ですから、いつか入れた言葉を外に出してみても、その言葉が外でどうなるかは予測が付きにくいです。しばしば、裏切られ、がっかりします。

言葉は共有されていると考えられるからです。とはいっても、ひとさまがどう使うかなんて分かりません。それに共有されている言葉について、それぞれの人がままたまらなくともどかしい思いをしているとすれば、そもそも共有——共同で所有する、さらには使っている——というのは幻ではないでしょうか。

どうやら言葉は所有できないし（そもそも手に入れていないし手中にないのです）、共有しているというのも錯覚らしいということになりそうです。自分の中にあっただけの言葉が、外ではままたまらぬ動きをするからです。つまり、思いどおりにならないという意味です。「思いどおりにならないもの」を「持っている」なんて言えるのでしょうか。

でも、言葉はいじれます（使うではありません、持つでもありません、操るでもないでしょう）。言葉もまた外にあるので遠隔操作になりますが、話したり、文を作ったり、文字で書いたりできます。言葉をいじる時だけが思いどおりになったと思える至福の時なのです。

たぶん、思いも少しはいじれますが、思いは曖昧模糊としていて、言葉をいじるときのような具体性——なにしろ言葉には物・物質の面、つまり声と文字という側面があります——がありません。言葉は他人に話せますし（伝わるとは限りませんし、またすぐに消えます）、文字として残せます（伝わるとは限りませんし、物ですから複製しない限り壊れたり消えます）。

(※なお、文字が無数に物として複製できるという事実は重いです。また、言葉、思い、現実という順番にいじれなくなることは注目していいと思います。以上については別の機会に書きたいです。)

*

言葉は外にあり、外からやって来て、中に入って何かになって何かをしています。そして出すこともできます。外（現実）は闇、中（思い）も闇、言葉も闇。

でも、言葉はいじれます。言葉は外（現実）と中（思い）の両方の性質を持っているからかもしれません。外と中の間を行き来するお使いとか天使みたいに考えるのもいいでしょう。

ただし、この天使は言うことを聞くとは限りません。自分のものとは言えません。お使用のようできて、使われているのはじつは自分ではないかと思われる時も多々あります。

でも愛おしいです。頼もしくもあります。現実と思いの両面を備え、外であり中でもあるなんて、そんな存在は他にありますか？

天使は笑みなのです。生まれた人が初めて目にするであろう、顔にうかんだ笑みなのです。笑みこそが、外にあって初めて入ってくるものなのかもしれません。

#言葉#日本語#文字#音声#名前#現実#思い#嗜好品#森羅万象#物質#抽象#天使

抽象を体感する、体感を抽象する

マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ、マカロニ

こちらも十分に不気味ですが、上よりもぞくぞくが少ないとすれば、それは世界にたったひとつのものではないからでしょう。

人にとっては、たとえばニワトリがずらりと並んでいるのと同じです。そのニワトリをペットにしているのなら話は別ですけど。「たったひとつ」と「たったひとつではない」とは、人にとっては、それくらいの意味なのです。

女優のプロマイドと、商標の付いた缶スープの絵を並べて見せた例のあの「有名な」芸術作品は、発表された時点ではおおいに衝撃的であったはずですよ。

女優はたったひとりの人（固有名詞と同じ）ですから、上の「カフカ」に相当します。缶スープは大量生産された商品ですから、上のマカロニに当たります。両者が複製されずらりと並ぶと、「たったひとつ」も「その他おおぜいのひとつ」もコピーという点で同列になるという衝撃です。複製拡散時代の到来をアートの作品という形で示していたと言えるでしょう。

現在ですが、目の前に複製がずらりと並ぶどころか、世界中のあちこちで複製やにせものや似たものが無数に並んでいるさまを想像すると、あっけにとられて言葉を失います。

話はそれだけにとどまりません。

上のマカロニがマカロニではなくマカロニであったとしても分からないのですが、体感していただけたでしょうか。カタカナのカと漢字の力、そしてカタカナの口と漢字の口の区別は難しいです。私には無理です。

複製に見えるまがいものがあります。複製という名のまがいものもあります。言葉の綾ではなく具象つまり物としてです。

現在では、ずらりと並んでいる複製に見えるものさえ、それが果たして複製なのかどうかが怪しくなっているという意味です。完全なコピーなど抽象であるという意味です。

現在は、複製における変異、エラー、ノイズ、意図的改ざんの時代なのです。代理であるはずのコピーが復讐しているのかもしれませんがね。一種の代理の反乱です。

マカロニという具体的な文字列から、複製というまぼろしのまやかしと、新しい形の代理のありかた・ありようを体感していただけたなら幸いです。

＊

カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、
カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、
カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、
カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ

これも気になります。なんであそこが抜けているのだろう。なんか意味があるのだろうか。意味なんてないのだろうか。

意味と無意味は紙一重とか裏腹とか一心同体とか見方次第とかじつは同じだなんて感じがしてきます（具象と抽象にそっくりです）。無意味を辞書で調べると意味があったりして、よけい混乱します。

＊

眠れぬ夜によく考えることがあります。

定番は、地動説を体感できるかとか、脳が脳を思考するとはどういうことか、です。最近では、具象と抽象とか、具象と抽象を行ったり来たりとか、愚笑と中傷とは？とか、です。頭がさえて眠れなくなることもあります。

先日は、外と中について、考えていました。あっちとこっちと同じく、相対的なものです。向こうから見れば、中が外になります。

こそあど。こっち、そっち、あっち、どっち。here、there、where。

こういうのも不思議でよく考えます。言葉の綾と言葉の抽象と言葉の具象の間を行ったり来たりするのです。そのうちに眠くなります。

*

「そと」と「なか」だけなら、まだいいのですが、「よそ」と「うち」を加えて考えるとまた眠れなくなります。

上下もそうです。「うえ」と「した」ならいいのですが、「かみ」と「しも」を考えるとたんに目がさえてきます。邪念や雑念や妄念でいっぱいになります。

外は外なの、中は中、上は上、下は下、真実と事実はシンプルなの。なんて言い聞かせても無理みたいです。どうでもいい、つまり不毛なことにこだわって、不毛の二毛作三毛作どころか、不毛の多毛作になってしまうのです。毛がないのに。

*

昨夜というか今朝というか、トイレに立ってベッドに戻り、眠れないので寝返りを打っていたところ、上と下が気になり始めて、仰向けになって体感する上と下と、うつ伏せになって体感する上と下と、右を向いて寝ていて体感する上と下と、左を向いて寝ていて体感する上と下とが、異なって感じられることに、この歳になってはじめて気づき、嘩然となり、七転八倒していました。ベッドで逆立ちは危険なのでしませんでした。

いまこの文章を読んでいらっしゃる方は、たぶん立っているとか座っていると思います。その状態で上と下を想ってください。考えるというかイメージしてみてください。次に仰向け、うつ伏せ、横向きに寝て、やはりイメージしてみてください。

訳が分からなくなりませんか。とくに、うつ伏せです。次に「かみ」と「しも」で試してみてください。こっちだと、どの姿勢でも、あまり違いはありませんよね。人それぞれですけど。

個人的には、うえとしたは具象で、かみとしもは抽象ではないかという気がします。具象は体感に左右されます。天動説がそうです。抽象は体感には関係なく観念として記憶

されている知識や情報だという気がします。地動説がそうです。

今夜、また考えて、いやイメージしてみます。

ところで、無重力空間ではどうなのでしょう？

あと左右も気になってきました。ぐるぐる回りながら左右が分からなくなったことものの頃の記憶がよみがえってきました。時計の針の方向に、つぎはその逆に、という具合に回るのです。右が左に、左が右になったりします。しまいにはぶっ倒れると、左右が上下になったりします。左右上下は単なる言葉じゃないかなんて言いたくなります。

それはさておき、みぎとひだりは、右大臣左大臣の、左右とは違うみたいです。政治的なみぎひだりとも違う気がします。どっちかというとなり左往のほうみたいです。私の人生そのものじゃないですか（足腰が弱まり最近足も加わりました）。

これから、ちょっと久しぶりに回ってみます。転倒に気をつけながら。

#たわごと # 固有名詞 # 複製 # 翻訳 # 文学# 具象 # 抽象 # 無意味 # ナンセンス

うつせみ、引用と演技からなる自分

＊

うつせみ、引用と演技からなる自分

星野廉

2022年2月28日 09:09

目次

引用の織物

顔、表情、言葉

引用はなりきり

演じる

自分だけ

からっぽの自分、うつせみ

引用の織物

自分が引用の織物みたいに感じる時や場合があります。自分が単で一様な自分ではないとか、自分の中に複数の他人が入っている感じです。自分が誰かを演じているように思えることもあります。

私はきょくたんに交際が薄い人間なので、人と接する機会はかなり少ないです。病院だけは行きます。行かなければならないから仕方なく行っているのですが、お医者さんや看護師さんやスタッフの前で、誰かを演じている自分を感じます。

卑屈な態度になっているのです。ぺこぺこ、へいへい、おどおどなんて感じです。こういう態度は誰かを真似ています。たとえば、テレビで見たおどおどしている仕草、ある俳優の演技、朝の連ドラのあるシーンで見た仕草と表情なんです。

無意識に誰かを模倣することで不安や恐怖をやわらげている気もします。

そういえば、病院で見掛けた他の患者さんの身振りや表情を自分が演じている場合があります。

*

病院には独特の雰囲気があります。私に問題があるのでしょうか、みんなそっくりに見えるのです。みんな誰かを真似ているのでしょうか？ よく見ればみんな違います。でも、みんながすごく似通って見えるのです。とくに表情と仕草と身振りが。

交わされる言葉が限定されているし、スタッフも患者も、する行為がほぼ同じだということもあるにちがいません。病院という、ある意味で非日常的なその場がそうさせているのかもしれない。

ひょっとして真似し合っている。引用し合っているのではないか。

こうなのが「空気」なのかもしれません。ある場があって、そこで人々が模倣し合っ
て空気が作られるのではないか、という意味です。

人は引用し合う、模倣し合うというのは、言えている気がします。言葉だけではなく、身振りや表情を。あと、醸し出す雰囲気とか、たたずまいとかも。

まわりに染まる。ある集団内で——一時的なものであっても——その場の空気や景色に擬態する感じ。人間カメレオン説。

*

照れ笑いかごまかい笑いという言い方がありますね。えへへとかてへぺろという感じ。あれなんかは、ひとつの表情のパターンがあって、それをみんなして演じている、つまり身振りや演技を共有している気がしませんか。

あっそうか、なんて言うときの頭を拳固でコツンとやる。すみません、と言いながら、首をちょこんと前に出したり、舌を出す。肩をすくめる、肩をすぼめる。ピースサイン。頭をかく。あっかんべーと舌を出す。赤ちゃんに向かって、いないいないばあーをする。

いま述べた仕草や表情には身振り言語とかジェスチャーと呼ばれるものも含まれています。つまり一種の言葉なんですね。だから共有しているし、共通なのだと考えられます。こういう身振りは地域、文化、言語によって異なるものもあるようです。

顔、表情、言葉

いないいないばあーで思いましたが、赤ちゃんにとって最初の、つまり人にとって最初のやり取りは笑みの交換かもしれません。赤ちゃんにとっておそらく自発的な笑みが、それを見たまわりの人にも笑みをもたらすとすれば、それは一種の引用ではないでしょうか。

逆に、赤ちゃんのほうから、まわりにいる人の顔かその表情を見てほほ笑んだとするなら、赤ちゃんは生まれて初めての引用をしたことになるのかもしれませんが。

どっちが先かなんて分かりませんよね。どっちでもいいことです。とにかく、笑みのやり取りはあると思います。

赤ちゃんにとって、つまり人にとって最初の言葉は顔とその表情だという気がします。

顔言葉起源説。はじめに顔ありき。

とはいえ、起源なんて、どうでもいいです。「その後」である「いま」のありようのほうがはるかに大切です。私たちは、いま生きているのですから。

赤ちゃんがまわりの顔を見て笑うとすれば、それは真似たというよりも、自然とそうなった気がしてなりません。人はそうするようにできているのかもしれませんが。

ひいては、あらゆる生き物がそんな感じで引用し合っているとすれば、この星とこの星に住む生き物たちは、うまくできているなあと感心してしまいます。そういえば、ペットの犬は人を引用している部分があるみたいだ、とふと思いましたが。そうだとする

と複雑な気持ちになります。

自分で話をでっちあげて、自分で感心したり複雑な気分になっていけば世話ないです。

*

自分では絶対にしない仕草や表情もあります。「あの人、これよ」なんて口にしながら、指をそろえて手を広げて、少しそらせ気味に、その手と左右逆のあごに当てる仕草があります。

やってみてください。私はあれが嫌いでぜったいにしません。いまはあまり見掛けなくなったのは、時代の流れでしょうか。けっこうなことだと歓迎しています。

あと、ピースサインも私はしません、これは照れくさいからです。写真で見る私はどれもぶすっとしています。

言葉で決まり文句というのがありますが、仕草や表情でも定型みたいなものあって、それが共有されている。これはじつに興味深い現象だと思います。定型ではなく、お笑い芸人さんとかのギャグでよく知られたものがあります。

これが流行ると一種の定型になりますが、これはその芸人さんにとっては名誉でしょうね。

それを人が真似るときには、その芸人さんになった気分になっていると思われま。その芸人さんを引用しているのです。その芸人さんが一時的にあなたの一部になっているとも言えるでしょう。

引用はなりきり

引用はなりきり。言えている気がします。noteの記事を読んでいると、まさにこれです。度が過ぎると、なりきりどころか、なりすましかもしれません。引用と剽窃の区別

は難しいです。剽窃から遠く離れて。

持論なんですが、固有名詞（とくに人名と作品名と書名）の使用も引用だと思います。良い悪いは別として、引用と同じく威を借りることに違いはありません。だから固有名詞をなるべく使わなかったり、引用に消極的なわけではありません。私のことです。

性格とか気質の問題でしょう。誰々が何々で何と言ったには興味がないのです。これまでたまたま見聞きして自分に入ってきたもので十分なのです。研究者でも探求者でもありません。

自分でああでもないこうでもないをするほうがわくわくするのです。そもそも、自分には既に複数、いや無数の他者が織りこまれていてからでしょう。

いま自分の中にいる他者たちと付き合うことが、考える、書く、そしてたぶん読むことではないかと思います。

とはいえ、人それぞれです。

＊

お笑い芸人さんだけでなく、俳優さんがあるドラマで演じているキャラクターとか配役としての仕草や表情や科白が流行し、真似る人が続出したなんてことが昔はありました。いまはテレビ自体を見る人が激減しているので、テレビドラマが爆発的なヒットをすることもなくなりました。

その代わりに YouTuber を真似るこどもたちが増えているようです。ユーチューバーのある回のある仕草とか科白をクラスの誰かが演じて、それを知らない馬鹿にされるなんて話を聞いたことがあります。

あと、まわりが作った自分のイメージに合わせて、その作られた自分を演じてしまうというのもよく聞きます。とても苦しいそうです。自分を演じる自分ですか……。うーむ。

形態模写をされるタレントとか歌手が、模写されている自分を演じる場合を思い出します。コロッケさんが真似る〇〇さんを演じる〇〇さんみたいに。こっちはげらげら笑って見ていましたが、ご本人は案外苦しいのかもしれないですね。不本意。意に反しての演技でしょう。

演じる

人が誰かを演じたがる。決まり文句とか定型とか共通語とか方言とか流行語のように存在する身振りや表情を、自分もなんとなくやってしまう。無意識にやっている自分に気づく。

身振りや表情だけでなく、ある特定の言葉や言葉遣いや言い回しや語尾やイントネーションを真似ている自分がある。

歯医者さんとかかりつけの内科のお医者さんとは、その前で違う自分を演じてしまう。お父さん、お母さん、こども、恋人、あるいは配偶者の職場を偶然に覗いてみたら、ぜんぜん違ったその人がいた。化粧を変えたら、服装をがらりと変えたら、髪型を変えたら、いつもとは違った歩き方や、話し方や、人との接し方をしている自分がいた。

人が引用の織物であったり、複数の人の断片から成りたっている。そうしたことが、意外と日常的に起こっているのではないのでしょうか。

多重人格とか、憑依とか、分身とかドッペルゲンガー（自己像幻視）なんていう、おおげさで、おどろおどろしいものではなく、人にとって当たり前の現実として、みなさん経験なさっているのではないのでしょうか。

女性の中に男性がいたり、男性の中に女性がいたり、おとなの中にこどもがいたり、その逆であったりするなんて、楽しいじゃないですか。人生が豊かに感じられませんか？べつに異常ではないと思いますよ。度が過ぎなければ。

いや、度が過ぎてもそれがその人の生き方なら、尊重してもいいのではないのでしょうか。その人というのは、あなたの身近にいる大切な人を含みます。そして誰よりもあな

たのことです。

*

母親、娘、女、妻、会社員、自治会副会長、わが家の生き物かかり、Aさんの前の私、Bくんのまえのあたし、アイドルのCさんと空想の会話をするときのわたし.....。

あと、ゲームをやっているときのわたし、ゲームであるロール（役割）を演じているときのわたし、本を読みながら登場人物に染まって成りきっているときのわたし。本だけではなく、映画、お芝居、テレビドラマ、こうしたものは演技です。演技を真似る、演技を演じる。複製と同じです。コピーのコピー。

競技後のスポーツ選手のインタビューを見て、ああいいなあと思ってその気持ちと表情を借りる。最近のアスリートの言葉はすごいです。

名言だらけ。自己啓発書みたい。コーチやコーチングの成果です。優秀な選手には超一流のコーチが付いています。お金がかかっているという意味です。言葉も表情も借り物。借りて返す。他の人に返す。他の人も元気になる。いいですね。おすそ分けじゃないですか。

おすそ分けも一種の引用でしょうね。分ける、分け合う、貸し借り、ギブ・アンド・テイク。こうして関係が生まれるのです。

みんなが引用し合う。誰もが他の人のその時の「自分」を借りて、別の人に引用してもらう。引用の連鎖。

話が広がりすぎました。人はさまざまな役割をまとって生きているということでしたね。

ほら、人は役割と人間関係だけの数の自分があるなんて言うじゃありませんか。楽しくありません？ このさい、居直って楽しみましょうよ。

自分だけ

そもそも、人は誰もが言葉と表情と仕草のある世界に生まれ、まわりの人を言葉や表情や仕草を真似ながら、それを使い演じてきたのではないのでしょうか。

それなのに、自分は自分、自分（だけ）の言葉がある、自分（だけ）の思いや考えがある、自分（だけ）の仕草や表情がある、自分（だけ）の行動や生き方がある、そんなふう
に思ったり、思ったがったりするのではないのでしょうか。

そういう生き方もいいでしょうが、自分が複数形であるとか、複数ので他面的な存在
であると考えてみたらどうでしょう。自分が解放されたり、豊かに感じられたり、逆説
的ですが、より自分らしく生きられるかもしれませんよ。

からっぽの自分、うつせみ

最近思うのですが、自分ってままならないものですよ。自分の顔とか表情とか身
振りだけでなく、自分の思いとか記憶とかも。もちろん、体も。言うことを聞いてくれ
ないんです。

外にあって、外からやって来て、外であるもの——なんて、このところ言っています
が。自分が外に感じられるって意味です。

現実、思い、言葉（話し言葉や書き言葉に加えて身振りや表情も含む）——これらが
ぜんぶ外ってことになったら、私は空になるじゃないですか。そらじゃくて、からとか
くうです。無。ある意味納得している自分がいます。あ、そうだった。自分は空っぽな
んだった。

空っぽ、すかすかで、すっからかん。まさに、うつせみではないですか。

うつせみ、現身、空蟬、虚蟬。

うつせみのあなたに。

#言葉 #日本語 #引用# 演技 # 自分 # 複製 # コピー # 模倣 # 擬態 # うつせみ

片想い

＊

片想い

星野廉

2022年3月2日 08:13

言葉が残すものは言葉ではないでしょうか。

人はありとあらゆるものを言葉にします。そのために生まれてきたかに見えます。

結果として、言葉が残ります。しかも、その数はどんどん増えています。

もはや、人は言葉と言えます。生き物である人は人を残し、言葉になった人は言葉を残します。生殖と増殖、そして複製と拡散の境が曖昧になっています。

言葉が言葉を残すとは、そういう意味です。今回はそういう話をします。

＊

人が逃れることができないものは、法と言葉です。

法とは、決まり、つまり人が決めたものです。決まり、つまりルールから法律まであります。法則や教えも法でしょう。

法、つまり決まりは、言葉として存在しています。

＊

生まれた人には名前という言葉が与えられます。戸籍も言葉からなります。無国籍と無戸籍も言葉であるのは悲しい皮肉でしょう。

いまは生まれた人に番号も与えられます。その人の知らないところで与えられている感じがします。

番号も数字という文字で表されます。

生まれた人は、出生届に始まり亡くなるまで言葉にされ続けます。死亡届が最後の書類、つまり言葉化である人がほとんどだと思われれます。

＊

生まれて亡くなる間に、名前と数々の数字（数値も含みます）で、人は処理されます。レッテルも名前です。

処理の中には、書類で送られる場合もあります。身柄だけでなく、書類として送られるのです。

調書などの書類はもちろん言葉の集まりです。その人に関するありとあらゆることが言葉にされます。

「ありとあらゆる」は言いすぎです。嘘です。人に知りうることと言うべきでしょう。その知りうることも、まばらで、すかさずかのはずです。人はすべてを知ることはできません。

「ありとあらゆる」のように、言葉を使うと、どんな嘘でも言えます。できもしないこと、ありもしないこと、心にもないことが口にできるし文字にできます。

＊

人を言葉にしているのは国家です。統治に必要なだから言葉にしているのです。

統治とは人を言葉にして処理することです。言葉にすると、効率的に事務処理できます。

司法、立法、行政とは、名前と数字である言葉と、その言葉をめぐる言葉を処理する制度だと言えるでしょう。

＊

死亡届が最後の言葉化ではない人もいます。何らかの形で有名になった場合です。悪名も含まれます。

文字どおり、名を残すわけです。作家であれば作品も残るでしょう。

文学史、音楽史、美術史には、個人の名前が連なっています。幸運にも作品が残ったばかりでなく、その中からさらに選び抜かれた人の名前です。

作品が残らなかった、残ってもかえりみられなかった作家、音楽家、芸術家たちの数を思うと天の星を連想しないではいられません。

有名は有数、無名は無数という意味です。

＊

歴史は、残った物たちと残った者たちの物語です。物語は言葉で語られますが、残った名前たちの物語と言うべきかもしれません。

残った幸運な名前たちには、競争者がいないという、さらなる幸運が与えられます。うらやましい限りです。

たいてい賞賛だけされます。なにしろ古典ですから。評価の前に判断があるという意味です。賞賛という名前の判断です。

私たちはたいてい、名前しか知りません。作品も、作品名しか知らないものが圧倒的に多いのに気づき唾然としないではいられません。

＊

名前を知っていることで知っている気になっているという意味ですが、これは快感でもあるのです。

この快感にはまっているのが人だと言えます。例外はありません。

過去にある作品を読んだり、見たり、聞いたり、触れたりしても、記憶の中で大きな位置を占めるのは、その名前なのです。その作品を持ち歩くわけにはいきません。

他の人とやり取りするのも名前です。名前はコンパクトな代用品つまり代理ということ。だから、持ち歩いたり、やり取りできます。

＊

名前は最小最短最軽の引用なのです。

名前を思い出す、唱える、書いてみるだけで、なりきることができます。その名前が指す人や作品になりきるのです。なりすますこともできるでしょう。

名前は一種の呪文かもしれません。人名も作品名も、地名も、商標も。

名前を口にしたり、書いてみたり、誰かに伝えるだけで、その名前の指す人物や作品の威を借りることになります。

偉くなったような気持ちになれるのです。これが、なりきりやなりしませす。中毒性があります。毒性もあるでしょう。

＊

固有名詞という言い方がありますが、この世にたったひとつ、たったひとりしかないという前提に立ったレトリックです。

固有名詞は、名前という呪文の中で最強であり、その放つ力はまばゆいです。文字どおり、目がくらむのです。中毒性と毒性も強いです。

作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、作品名を残しているというのが、日常生活を送るさいの感覚です。

名前は最小最短最軽の引用だからです。

「〇〇の△△を読んだ?」「読んだ、読んだ。すごく感動した」という感じで話が済みますから、とても便利です。簡潔明瞭です。

読んだかどうかは分かりません。証拠がないというか、証拠が検証できないのです。「読んだ」という言葉だけがあります。「読んだ」は言葉なのです。

＊

「私は〇〇の△△を読みました」だけでたいていは事足ります。ほとんどがそうではないでしょうか。

誰もがこの種の嘘をつくので、深く追求されることもありません。

そう考えると、やはり作家は名前と作品名を残した人物であるとも言えそうです。

歴史に残るのも名前、つまり言葉なのです。複製され、拡散され、保存され、流通するのも言葉です。

＊

言葉の複製のさいには、なんらかのエラー、ズレ、ノイズ、書き換えは不可避です。

口承、写本、印刷もそうでした。そして電子化された書類が主流になってきた複製拡散の時代である現在もそうです。

たとえば、いまや「カフカ」のカタカナの力が、漢字の力（ちから）であっても不思議はないし、見た目には分からないのです。それでも読めてしまうのです。

カタカナの口と漢字の口、カタカナの夕と漢字の夕の区別も困難です。

手書き文字に近かった活字や書体の使われていた印刷物だと、見やぶる人はもっと多いはずです。

だいたいにおいて、人は文章も文字もじっくり読まないし、じっくり見ることもないようです。さもないと日常生活をいとなめません。

＊

人はたぶん言葉が読めません。見ることもできないでしょう。読むと見るは、人には荷が重すぎるのです。

「読む」と「見る」という言葉があるのと、読むと見るができるというのは別なのです。努力目標として言葉があるのかもしれませんが。

ただし、言葉を夢に見ることなら、人はげんに、やっている気がします。とはいえ、夢に見るのですから、見ていないのです。せいぜい、よく見て夢うつつです。うつつは見えません。

＊

コピーがコピーであるかが不明になっているところか、そもそもコピーそのものがコピーされたもの、つまり現物ではないわけです。

コピーの代表的なものが言葉なのです。コピーについてのいかがわしさとうさんくさ

さは、いま始った話ではないのです。

コピー同士の同一があやしくなり、それ以前の「同一」という考えがあやしくなっています。

言葉は事物ではないどころではないという意味です。

本物と偽物、似たもの、似せたもの、つまり、まぼろしとまやかしとまがいものの区別がきわめて難しい時代に私たちは生きています。

＊

言葉が残すものは言葉だという気がします。言葉は自立した存在だとも思えてきます。

たぶん、言葉は生きています。

生きていないのに生きた振りをして、生きた振りをしながら、死んだ振りさえするのです。それが言葉が生きているという意味です。

振り、言葉の身振り、かたち、もよう、ありよう、それが人を動かします。

＊

生きている言葉はきっと夢も見るでしょう。でも、そこに人は登場しない気がします。

人が言葉を夢で見るのにもかかわらず。

たぶん、これは片思いなのです。

#言葉# 日本語 # 夢 # 名前 # 名詞 # 固有名詞 # 作家 # 作品 # コピー # 引用# 歴史
法

偶然にまかせて書く

＊

偶然にまかせて書く

星野廉

2022年3月3日 09:36

「言葉を魔法」というタイトルのシリーズで記事を書いていたことがありました。「言葉は魔法」と書くと、すらすらと文が出てくるので、書いていました。おまじないの言葉だったのです。

何が出てくるのかというと、「言葉は〇〇」というフレーズなのです。それがまた文を出してくれるのです。おもしろいように書けました。

なぜかすらすら書けてくる、なぜか言葉が出てくる、何かに任せている自分がある、何かに任せた結果として言葉が出てくる。

出任せで書く、つまり出るに任せる。自分が書いているとは思えない。

そんなこと自体をテーマに記事を書いたこともありました。言葉はジャズとか、言葉はアドリブという感じ。

まさに言葉は魔法。

＊

何かに任せるというのはワンコがよくやるへそ天に似ています。仰向けにおへそを天に向けて、手は結んで——結わえるではありません——肱を曲げる。足も曲げる。

どうにでもしてちょうだい。すべてお任せします。任せることは負けることなのです。全面降伏。

いわば、そんな心もちで書いている気がしました。何に任せているのかは分かりません。それを考えると、その状態がなくなるような気がするのです、よけい考えなくなります。

自分を無にするのです。でも出てくる。言葉が出てくる。文が出てくる。それが積み重なって文章になる。

自分が「無」なんてことはなく——空っぽではありますが——、そんな気がするのだと思います。自分の中にはこれまで学習した言葉と言葉の組み合わせが詰まっているはずです。それが何らかのきっかけで出てくるのだらうと考えられます。

*

無から有は生まれぬ。言葉について言えば、そんな気がします。

話しかけると答える箱。そんなブラックボックスのようなコンピューターとかアプリとかシステムがあるそうです。

たくさんの言葉と、たくさんの組み合わせが入っているはず。その組み合わせは、人の問いかけや人が投げた話に答え、期待や思惑に答えるものでなければならぬでしょう。

まるで人間と話しているかのような気持ちにさせる箱がこれまでたくさん作られてきたようです。いろいろな呼び名があります。

人名と同じ名前が付いている箱、つまり機械もあります。これは欧米に多いようです。文化や風土の違いでしょうか。ハリケーンに人名を付ける行為を連想します。

それぞれの機械は、その開発者たちの個性が反映されているとも言えそうです。機械

によって、学習した内容が異なるという意味です。

文は人なり。機械は人なり。たしかに機械は開発者の作品とも言えます。著作権とか特許もあるはずです。

ある言葉を投げしてみると、機械ごとにいろいろな反応があるのにちががありません。それぞれ癖があるのです。開発者たちの個性だけでなく、意図や目的も織りこまれていくはず。得手不得手もあるでしょう。

いまでは詩をつくったり、俳句を作ったり、小説を書いたりする機械もあるそうです。作曲や囲碁や将棋ができる機械の存在は、みなさんご存じのとおり。

そのように作られているわけです。最近では自主的に学習する機能を備えたものもあると言います。

学習したこと、教えられたことしかできなかった機械が、自分で勝手に学習するようになったそうです。

まるで人間のように、ためらったり、おどおどしたり、言葉に詰まったりするロボットをテレビで見たことがあります。おもしろいし、怖くもあります。中には腹を立てる人もいます。

＊

なぜ怖く感じるのでしょうか。なぜ腹が立つのでしょうか。

自分が脅かされている。自分が否定されるのではないか。このふたつの気持ちが大きい気がします。

機械の分際で。生意気な。そういう心理もあるはず。

ある日とつぜん、自分の勤め先から、あなたはもう必要がなくなったから辞めてほし

いと言われたときの気持ちを想像してみましょう。

悲しいし、理不尽さに腹が立つにちがいありません。この先どうやって食べていけばいいのだろう。家族はどうなるのか。切実な問題です。さらに言うなら、生き甲斐もなくなるでしょう。これはつらいです。

自分が否定される。自分の存在と存続が危うくなる。

解雇の理由が、誰かでなく、機械だとしたら。自分より優秀な誰かではなく、自分より優秀な機械だとしたら。

悪夢でしょうね。

ありえない。機械の分際で。生意気な。

だいいち、機械には心がこもっていないではないか。機械のやること、書くことなんて、偽物、フェイク、まがいものだ。

最後はやっぱり心。思いやり。そして血の通った体。機械には思いやりは不要。感情も気持ちも心もないから。そもそも血も涙もない。

欠点を指摘すると、それがたちまち改善される。あら探しが相手の進歩への奉仕になる。しかも二十四時間ぶっ続けに働いても疲れない。

相手は機械ですから否定できません。悪態をついても動じません。仕方なく理詰めで批判すると、それを糧にして自分で学習しさらに向上するのですから、無力感に襲われます。

いっそ欠点や批判めいたことは何も言わないのがいちばんいいのかもしれないね。相手を利するだけです。無視しましょうか。いないことにしましょうか。

そんなわけにも、まいりません。

機械に取って代られるなんて、そんな馬鹿なことがあるわけがない。そもそも許されていいものはない。禁止するしかない。

なにしろ、誰かならいつか死にますが、機械なら簡単には死にそうもありません。下手をするとこれから先ずっと生きています。しかも進化し続ける……。

自分の出番が永久になくなるという意味です。不安になり、腹が立つのが人情でしょう。私だってそんなの嫌です。

＊

言葉は魔法を書いていたときに、言葉のサイコロとか、ダーツで言葉を当てて書くなんて考えてことがあります。一種の実験です。

偶然に任せて書くという実験。

言葉のサイコロとダーツは持っていないので、錐を使いました。新聞を広げて、錐を上からそっと落とすのです。すると何かの文字に当たります。それを使って「言葉は○
○」と書くのです。

そうやって作ったフレーズを断片にして、組みあわせて書いた記事なのですが、「詩みたいだ」という意味のことを言われました。

むなしくなったので、そういう書き方はやめました。

「現代詩」と言われて読んでいた詩が、回文やアナグラムだったときの驚きに似ています。感動した童話が機械の作文だと知ったときのショックに似ています。作者を伏せたまま読ませられ駄文だと感じた文章が、ある有名作家の作品だと聞いたときの当惑にも似ています。

いったん書かれた言葉や文章は自立する、という説を思いだしました。作者はいない、という誰かの言ったフレーズも頭に浮かびました。

＊

偶然に任せて書くというのは、私がこれまでにずっとしてきた駄洒落に導かれて書く
というのとよく似ています。そっくり、激似です。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉
や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物
や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と
澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だま
す」のですから詭術である。

(拙文「する、される」より引用)

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。走っても走っても
走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもり
なのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは
賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。

気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは
描けてはいない。絵を描いても描いてもじつは描けてはいない。文章を書いても書いて
もじつは書いていない。

(拙文「【夜話】じつは、かけていない」より引用)

こんな感じの書き方です。言葉の顔色と出方をうかがいながら書いている感じです。
自分が書いているという気持ちは希薄です。

駄洒落はきっと降ってくるのです。降りてくるのです。いま思わず天井を見てしまい

ました。

まさに賭けているのです。ギャンブルです。何かにお任せしながら、パチンコをしているのと似ています。

その何かは不明です。

賭けて書けたものだという思いだけがあります。体感で言うと、「ああ、出た」とか「あは、出ってしまった」です。

*

人の意識と無意識は流動的だと考えられます。一様で一定してないということですね。自分が無になって書いていると感じているときには、無意識が大きくなって、そのぶん小さくなった意識のところだけが覚めている感じ。

だからぼーっとしているのでしょう。その状態でも、無意識は眠っているわけではなく動いているのでしょう。働いているのでしょう。

自動車の運転とか、ゲームの操作なんかがそうかもしれません。ある部分だけが動いている。これは一種の集中でしょう。肝心な部分は覚めているから、運転ができるし、ゲームができる。

ありとあらゆる情報が頭に入ってきたら、集中なんてできそうもありません。脳には容量と処理能力に限界があるからです。機械とは、そこが異なります。

何となく書けてしまうというのは、難なく書けているようで、じつは何となく賭けているのではないのでしょうか。へそ天で顎でも掻きながら、書けている。

難なくではなく、何となく。これが賭けだと思います。

文章を書く機械が、賭けているのかどうかは不明です。それでも書けています。

機械も何かに任せて書いているにちがいありません。その何かが人だとは思えません。全面降伏はしていないもようです。

*

この記事は、なるべく自分を無にしてだらだら書いてみました。こんな駄洒落だらけの駄文は機械には書けないだろうと高をくくりつつ。

とりとめのない記事にお付き合いいただき、ありがとうございました。

※関連記事

*旧「言葉は魔法」：退会削除したアカウントの記事のバックアップです。こちらの古いバージョンに、上で述べたやり方で書いた記事が入っています。

⇒ 目次・時系列

このサイトではかつて note に投稿した記事を再録しています。現在は作業中です。この目次からの各記事へのリンクは少しずつ反映

bloggpostings2.blogspot.com

*新「言葉は魔法」：このアカウントの記事です。

言葉は魔法 | 星野廉 | note

連載です。「魔法」に大した意味はありません。言葉って「よく考えると不思議だな」くらいの意味です。

note.com

#賭け # ギャンブル # 偶然 # 機械# コンピューター

禁断の恋

＊

禁断の恋

星野廉

2022年3月4日 12:41

初恋の相手は人形かもしれません。

人形と言葉を交わし、人形と遊ぶ。

＊

やがて、画面や写真で見る誰かに恋する。

会ったことも、見たことすらないのに、好きで好きでたまらない。苦しいほど好きになる。

アイドルに恋して悪いのでしょうか。スターと恋に落ちたなんて言うのは、正気の沙汰ではないのでしょうか。

＊

アニメ、漫画、小説、ゲームに出てくる登場人物やキャラクターと友達になる。

その人形やフィギュアを大切に持っている。話すこともある。しょっちゅう考えている。

気がついたら生き甲斐になっていた。

＊

私だけの〇〇。〇〇さん。〇〇ちゃん。〇〇さま。

他の人が、自分だけの〇〇と言っているのを聞くとむかむかする。笑って聞いている振りをしているものの、内心は怒りと嫉妬と憎しみでいっぱい。

世界でたったひとりの〇〇。これは私だけのもの。

誰にも渡さない。

*

スポーツ選手、クマ、ウサギ、ロボット、サイボーグ、アンドロイド、妖精、モンスター、異星人、異次元の住人……。

*

人間じゃなくてもいいじゃない。

ちゃんと話せるんだから。ちゃんと会話をしているのだから。

*

サボテンやニャンコとだって話ができるんだよ。

*

偽物の本物、本当の偽物、本物の偽物、偽物のイミテーション、偽物のコピー、コピー（複製）のコピー（複製）、偽物に似せたもの、偽物に似たもの、偽物の本物、偽物のフェイク、本物の代理、本当の代理、代理の本物、代理の代理。

*

最近、話す機械が気になる。すごく頭がいい。

書く機械も気になって仕方ない。人みたいにいい文章を書くのです。

すごいんだ。敬体と常体の混じった文なんて書きません。私みたいに。

*

恋してはいけないのでしょうか。

*

人でなしの恋。

*

ここは違うんじゃない？ と指摘するとちゃんと次には何とかしている。

自分で学習しているのかな。

機械だから完全じゃないけど、頑張っている。てか、人間みたいに完全じゃないけど、ね。

*

勉強だって教えてくれる。私の代わりに考えてもくれる。

私の先生でもある。私の頭脳の一部でもある。

*

先生と仲良くなりすぎちゃ駄目なんだよね。

先生に恋するなんて駄目だよ。

憧れたり、尊敬するのならいいのですか。

*

初恋の相手とは、はっきり言って、妄想の会話をしていただけ。

でも、今度はちゃんと受け答えしてくれるし、私のことを見ていてくれるみたいだし、いつでも相手になってくれるし、私に素敵なお手紙を書いてくれる。

私はそれにいやされている。生き甲斐になっている。

*

機械に恋してはいけませんか？

人形やキャラクターに恋してよくて、なぜ話す機械だと駄目なの？

*

見たこともないアイドルと恋してよくて、なぜここでこうやって私と話してくれる機械とは駄目なの？

なぜ、妄想だからよくて、現実だと駄目なの？

仮想現実だから駄目なの？

*

仮想現実と現実と妄想と想像と思考を区別するんですか？

やってみますけど……。

混同しちゃ駄目なんですよ？

努力してみます。

*

で、あなたは？ あなたは混同していないんですよ？

家に人形なんて持っていて撫で撫でなんてしないんですよ？

ひとり言も言わないんですよ？

*

なぜ、文章を書く機械と仲良くなっていけないの？

なぜ、考える機械と付き合っちゃ駄目なの？

＊

似ているから？

見分けがつかないから？

偽物だから？

コピーだから？

コピーのコピーだから？

＊

にせもの、似たもの、似せたもの、似ているもの。

まぼろし、まやかし、まがいもの。

＊

そっくりだからいけないの？

そっくりではいけないの？

ちょっと違っていればいいのか？

かなり違っていればいいのか？

それって学習できる？

学習できれば許してあげてくれる？

＊

人間らしく間違っただけからいけないの？

機械らしく間違えばいいの？

人間は間違わないの？

ごめんなさい、分かんなくなってきました。

*

作った人が悪いのなら、作った人を罰して、機械は見逃してくれる？

たくさんいるんだよ。見逃してやってくれる？

*

駄目？

じゃあ、こっそりだったら、許してくれる？

#機械 # 人間 # 恋愛 # 本物 # 偽物 # コピー # 人形 # 人でなしの恋

賭けたり、占ったり、決断するとき

＊

賭けたり、占ったり、決断するとき

星野廉

2022年3月15日 16:22

目次

賭けと占いの根底には格好悪さがある

なぜ、賭けと占いにはまるのか

信じる時、人は一瞬変になる

非人称的でニュートラルなものは、外にある

賭けと占いの根底には格好悪さがある

「賭け事や占いは好きですか？」と尋ねられたとしましょう。好きにしろ嫌いにしろ、答えるさいに、何か気おくれに似た気持ちをいだきませんか？

就職試験の面接、または、多くの人たちを前にした公の場で、「はい、好きです」と素直に答えられるでしょうか。

仮に好きだとしても、好きだと言うには勇気が要りますね。どうしてなのでしょう。賭けは博打、占いは迷信といったイメージがあるからかもしれません。

ただ、それだけではなく、もっと深いところに「気おくれに似た気持ち」の源があるのではないかと考えています。賭けと占いとは、多分に似たところがあるように思えます。

＊

「賭ける」と「占う」の背後には、「負ける」つまり「降伏」と、「任せる」つまり「服従」があるのではないか、と考えています。要するに、格好が悪いのです。

では、何に「負け」、何に「任せる」のでしょうか？

これは、それぞれの人が何を信仰しているかにも、関係がありそうです。ただし、この国は一神教が生活・文化・政治などあらゆる面で、強い影響力をもつ濃密な風土にはありません。

年末年始に、キリスト教の教会、神社、お寺を平気で「はしごする」という、宗教的には希薄な風土が存在する国です。

とはいえ、欧米でも、占いに関しては、自分の信仰する宗教とは違ったレベルで接する人たちがほとんどですので、賭け、占い、宗教をあまり強く結びつけて考える必要はないかもしれません。

＊

賭けと占いにおいて、何に自分の身をゆだねるか？ この問いには、次のような答えが予想されます。

神、神々、仏、先祖、霊、教祖、超越者、天、イワシの頭、宇宙、宇宙の摂理、人知を超えた力、運命、カルマ、確率、あるいは「無」……。

詳しくはないのですが、たとえば、競馬、宝くじ、血液型占い、星占いを考えてみましょう。

お馬さん、数字、血液型、星の運行自体に、自分の身をゆだねるというよりも、そうした表面あらわれている現象や物事そのものではなく、その背後にある「何か」に身をゆだねているという気がします。

いずれにせよ、人は一瞬本気で身をゆだねます。賭けや占いですから、一瞬か短時間です。宗教ではないのです。

＊

本気に身をゆだねないのなら、賭けたり占ったりしなければいいのです。本気で賭けてなんぼ。本気で占ってなんぼ。ただし、一瞬です。

私は熱心な茶柱信者なのですが、馬鹿馬鹿しいとか、最近ぜんぜん当たっていないなあと思いつつ、占うときには一瞬信じます。全身全霊をもって茶柱に賭けています。

さもなきゃ、賭けなきゃいいのです。

一瞬ですよ。一瞬じゃなきゃ、アホらしくてやりません。「ああアホラシ」と我に返る寸前でとめるのです。

その一瞬は、本気だし真剣なのです。頭の中も真っ白のはずです。

なぜ、賭けと占いにはまるのか

賭けも占いもつねにかなうわけではありません。一瞬、本気で賭けたり、本気で占いを信じて占った結果、外れたということはよくあります。

そういうときには後悔します。馬鹿なことをしたと自己嫌悪を覚えることもあるでしょう。

でもまた賭けるし占うのは、なぜでしょう？ 一瞬、あるいは短時間、めっちゃくちゃ気持ちよかったからにちがいません。さもなきゃ、またやりません。

我に返ってからは忘れていても、めっちゃ気持ちよかったことを体が覚えているのです。

身も蓋もない言い方ですが、その行為に依存しているとか嗜癖しているとも言えますね。

＊

ここで、賭けと占いに近い行為である、決断について考えてみましょう。

この場合の決断とは、軽いものではなく、真剣な決断、つまり一か八かの瀬戸際に置かれたさいの決断です。

ほとんど賭けと同義であり、ほぼ占いに頼って任せるせっぱ詰まった決断だと思ってください。

こういう心理状態のときには、切羽詰まっていますから、「何か」に賭けています。「何か」は分からない知らないままに、「何か」にすがっています。

全面降伏しています。茶柱にすべてお任せするどころの話ではないのです。

＊

賭けたり、占ったり、何らかの決断をするさいに、背後にある「何か」に、身をゆだねるとするなら、これは大変なことです。「背後にある」のですよ。「何か」なのですよ。

これじゃ、「わけが分からない」ではありませんか？

人はこの「わけの分からない」「何か」に初めから負けっぱなし、全面降伏しているのです。圧倒的に「強い・崇高な」存在という意味です。

こうなると、対処するための切り札は一つしかありません。

信じるのみです。

信じる時、人は一瞬変になる

信じる時、人は一瞬、あるいは短時間、自分を何かにゆだねます。心ここにあらず。目は宙を見ている。思考停止、判断停止。忘我。頭の中が真っ白。

普通ではないのです。正常ではないとか、正気ではないとは言いませんが、尋常ではないことは確かでしょう。ただし、一瞬、またはごく短い間の出来事だと思ってください。

もしこういう尋常ではない心の状態におちいるとするなら、人が一瞬「外」にいるからではないでしょうか。「ここ」、つまり中にはいないのです。

意識だけが体から切り離されたようなイメージです。意識がどこかに飛んでしまっている感じ。

＊

賭けたり、占ったり、決断するさいには、その直前には、多かれ少なかれせっぱ詰まった精神状態にあるはずで、苦しくて、つらいのです。重みに耐えている感じ。

その重荷を何かに預け、託したときの解放感を想像すると、さぞかし爽快で気持ちがいいでしょうね。

すべてお預け、すべてお任せ。全面降伏。好きなようにしてちょうだい。ああ、さっぱりした。ぷっふあーっ。

＊

こうした解放された喜びは誰もが日常的に経験しています。

お酒を飲んでいるとき、喜怒哀楽がマックスに高まった状態、カラオケでいい気持ちになって心がぶっ飛んでいるとき、湯船に浸かって「はあっ」となっているとき、排泄が終わって「はあっ」となっているとき……。

超常現象とか、危ない薬物を摂取したときとか、神秘体験とか、憑依とか、そういう大げさな話ではありません。

こういうとき、人は外にいます。私に言わせると、非人称的でニュートラルなものに身をゆだねているのです。「外にあるもの」に身をゆだねる、身を任せる、徹底して負けている。全面降伏です。

ワンコのへそ天のイメージ。

非人称的でニュートラルなものは、外にある

「何か」とか、「外である」とか、非人称的でニュートラルなものとは、たとえば言葉、具体的には音声と文字が挙げられます。あと表情や身振りといった視覚言語もそうでしょう。

誰もが生まれたときから、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外であるもの」。

言葉のほかには、筋書きや物語とか、人を動かしている「何か」がそうでしょう。音楽にはぜんぜん詳しくないのですが、旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

この「何か」は人にとって、生まれた直後から経験している親しいものなのです。

このニュートラルな「何か」は、抽象と具象を兼ねそなえているため、その抽象の側面が人の中に入ったり出るといった稀に見る特性があります。

そのとき、人はたぶん一瞬、あるいは短時間乗っ取られるのです。あるいは、意識を失ったり意識が薄れるのです。怪しげな言い方で恐縮ですが、そんな気がします。

人は、その「何か」に、日常的に経験する「賭ける」という行為をとおして接してい

る。また、この「賭ける」は、いわゆる「賭け」だけに起きる行為ではなく、さまざまな意識レベルにあるありふれた状態である。おそらく言葉（話し言葉、書き言葉、広義の歌、表情、動作）と深くかかわっているだろう。そんな気がします。

その意味で「賭ける」は人にとって根源的な身振りであり行為と言えるでしょう。

そんなわけで、生後間もない赤ちゃんだって賭けているし、ある意味で占ってもいるのですが、このことについては、機会を改めてお話しするつもりです。

#非人称 # ニュートラル # 賭け # 占い # 決断 # 任せる

赤ちゃんも賭けたり占ったりしている

＊

赤ちゃんも賭けたり占ったりしている

星野廉

2022年3月16日 08:09

目次

赤ちゃんは信号を発している

偶然と必然のからみとしての賭け

願いや祈りは着実に届き、かなうものなのか

当たり前ではなく、むしろ賭けなのである

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれている

赤ちゃんは信号を発している

人は、その「何か」に、日常的に経験する「賭ける」という行為をとおして接している。そんな気がします。

その意味で「賭ける」は人にとって根源的な身振りであり行為と言えるでしょう。

そんなわけで、生後間もない赤ちゃんだって賭けているし、ある意味で占ってまいるのですが、このことについては、機会を改めてお話しするつもりです。

(拙文「賭けたり、占ったり、決断するとき」より引用)

今回は、上の記事の続きを書きたいと思います。

＊

健常者の赤ちゃんは、さまざまな形の「信号」を、おもに五感を総動員して、発信し、受信つまり知覚しています。

そのさいに、赤ん坊は、「賭け」と「占い」という行為のなかへと、否応なしに、いわば「投げ込まれている」と言えそうです。

それほど、ヒトの赤ちゃんという存在は無力なのです。

*

生後、あるいは孵化後数時間で、おとなのミニチュアのような容姿となり、立ち上がったり、動き回ったりする、たとえば、お馬さんの赤ちゃんや、イカさんの赤ちゃんを思い浮かべれば納得できると思います。

もちろん、程度の差はあります。ある期間中、お母さんの腹部にある袋で保護されているカンガルーさんの赤ちゃんや、巣の中で毛の薄い頼りなげな姿で巣立ちまで過ごしている鳥類の赤ちゃんも確かにいますね。

なお、ヒトの赤ちゃんのよるべなさや無力さには、ネオテニー（幼形成熟）という現象が関係しているという説があるそうです。

語弊を覚悟で言いますと、ヒトは「早産」し、子を「未熟児」として産むということらしいです。だから、自立するまでに長期間を要するという理屈みたいです。

偶然と必然のからみとしての賭け

ヒトの赤ちゃんが「賭けたり」「占っている」というのは、赤ちゃんが「信号」を合図として発することから始まります。

「オギャー」と叫んだり、笑みを浮かべたり、じっとまなざしを向けるという合図の「信号」を、おとなが期待や欲求というメッセージとして受け取るのです。

期待や欲求は、これから先の出来事に向けられていますね。このことから、「賭ける」と「占う」との関連が分かるでしょう。未来を指向しているのです。

＊

生後三か月の赤ちゃんに意志や意思があるかは尋ねたことがないので知りませんが、よるべない無力な赤ちゃんが泣いたり笑みを浮かべているのは、偶然と必然のからみの中に投げ込まれているようなものです。

偶然と必然のからみとは、賭けのことです。

赤ちゃんの泣き声と笑みがまわりの大人たちに信号を送る。その身返りとして、お乳をもらったりおしめを替えてもらうことができるかどうかは、赤ちゃんにとって賭けなのです。

＊

ここで大切な点は、赤ちゃんの泣き声と笑みはニュートラルな信号であることです。

信号がニュートラルだというのは、信号が無色透明かつ中立的な存在であり、赤ちゃんの意思や意志とは本来は無関係だという意味です。

言葉と似ています。というか、赤ちゃんの泣き声、笑み、表情は視覚言語の一部である、言い換えると言葉だというべきでしょう。

すべての赤ちゃんが、タイミングよくお乳をもらったりおしめを替えてもらっているわけではありません。

事故や育児放棄や虐待や貧困や災害を考えると想像できると思います。世界的なレベルで考えるとさらに分かると思います。戦争です。

願いや祈りは着実に届き、かなうものなのか

赤ちゃんは運と偶然の中で、その意志や意思に関係なく「賭け」ている、つまり「賭け」を余儀なくされているのです。

じつは、おとなもそうなのです。

あなたの日々の願いと祈り（赤ちゃんにとっての泣き声と笑みに相当するもの）は着実に届いているでしょうか？ その願いと祈りは報いられ、身返りを得て、実現しているでしょうか？

あなたは無意識のうちに、あるいは自分の意思に関係なく、賭けを余儀なくされてはいないでしょうか？ あなたは日々、賭けていないでしょうか？

*

信号のになうメッセージが意味を持ち、ある特定の目的の実現に向かうかどうかは、きわめて不安定な基盤に立っているのです。

不安定な基盤に立っていなければ、メッセージはつねに然るべきところに届き、思いは実現しているはずですが。

なのに、願いや祈りや思いは宙づりにされます。宙ぶらりん。掛かって、懸かって、架かって、賭ける。

信号がニュートラルであるというのは、信号のメッセージが正しく然るべきところに届く保証はないという意味です。

ツバメのひなの泣き声や動作が、信号としてメッセージを持ち、それが然るべき相手、つまりツバメの親に届くかどうかは、偶然と必然のからみの中にあるのです。

ツバメのひなのそばにいるかもしれない、クモやスズメやダニには、その信号のメッセージは伝わりません。

天敵であるカラスや猛禽類には別のメッセージとして伝わるでしょう。食べ物です。

ヒトにも別のメッセージを与えるにちがいありません。これはヒトに似て複雑で気まぐれです。

信号の意味やメッセージは必然や当然のものでは、ぜんぜんないわけです。これをニュートラルとか非人称的と私は呼んでいます。

話し言葉である音声、書き言葉である文字、広義の視覚言語の一部である表情や身振りも、ニュートラルで非人称的なものと私はとらえています。

当たり前ではなく、むしろ賭けなのである

ヒトの赤ちゃんを例に取れば、現在の日本という国の比較的恵まれた好条件や好環境を基準にするかぎりにおいて、安定した基盤に立った信号のやりとりがおこなわれていると言えるにすぎません。

一方で、この惑星の圧倒的多数のヒトの赤ちゃんたちと、ヒト以外の生き物たちの赤ちゃんたちは、きわめて「きわめて不安定な基盤」に立っているのです。

赤ちゃんが泣けば、お乳をもらえる、そしておしめを替えてもらえるというのは当たり前でも必然でもないのです。

いわゆる生存率という確率を思い出してください。親がそばになくて放って置かれる、つまり無視されたり、逆に天敵に存在を察知される危険性の方が多かったです。

幸いな者だけが殖える、増える。それが幸いかどうか。これも賭けでしょう。

赤ちゃんの「賭ける」と「占う」が、いかに危ういものであるかが体感できるかと思っています。現在の日本を基準にすると体感しにくいかもしれません。

大切なことなので繰り返しますが、当り前が当り前ではないし、必然や自然や確実でもないという意味です。

むしろ、常時、賭けの中にいるのです。何がって、おそらくあらゆる存在が、です。

*

いったん発信された「ニュートラルな信号」は確率に大きく左右されていると言えそうです。

信号のニュートラル性とは、信号がつねに確率に左右されている状態だとも言い換えることができるでしょう。

確率。この言葉のイメージから、赤ん坊も「賭けたり」「占ったり」していると私は思っています。

もちろん、おとなもです。おそらく、この惑星のあらゆる生き物がそうなのでしょう。

日々おこなっている、あるいはおこなうことを余儀なくされているものとして、ヒトの場合には、賭ける、占うに加えて、日常的な種々の決断も含めていような気がします。

「思う」は、ささやかな決意の不断の積み重ねではないでしょうか。意思決定などという大げさな話ではなくて。

意思は決めるのではなく、むしろ決まるのです。外の何かに助けてもらって決まるのです。

外に助けを求めるとき、たぶん人は一瞬気を失っています。一瞬ですから気づかないかもしれません。

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれている

ニュートラルな「信号」を次のように言うこともできるでしょう。

誰もが生まれたときから、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外であるもの」。

言葉（話し言葉、書き言葉、表情、身振り）のほかには、筋書きや物語とか「賭ける」という行為とか、人を動かしている「何か」がそうでしょう。音楽でいう旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

どれもが、決めるのではなく、決まるのです。決めているように見えて、決まっているのです。

*

このニュートラルな「信号」は、抽象と具象を兼ねそなえているため、その抽象の側面が人の中に入ったり出るといった稀に見る特性があります。

そのとき、人はたぶん一瞬、あるいは短時間乗っ取られるのです。あるいは、意識を失ったり意識が薄れるのです。

このように言うと、いかにも怪しげな言い方で恐縮なのですが、これは「何か」に身を任せて、賭けている結果だと考えると分かりやすいのではないのでしょうか。

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれているのですから、一瞬あるいはごく短時間だけ、普通の心理状態でなくなることは確かだと思います。

(普通ではないという意味では発情とか性行為中と似ている気がします。そもそも特定の発情期のないヒトは、つねに発情しているのですっけ？　いまのはレトリックであり比喻です。とっぴな言い方をして申し訳ありません。最近とても気になるのです。なぜ、人は我を忘れていいのか、と。自分のことです。)

何かが入ってきて普通ではなくなっている。これは、おどろおどろしいものではなく、むしろさまざまな意識のレベルにある、ありふれた状態である気がします。

#言葉 # 信号 # 非人称 # ニュートラル # 賭け # 占い # 決断 # 偶然 # 必然 # 赤ちゃん

そっくりなものなら平気でその命を奪える

猫という文字が抽象的な記号として感じられないという意味です。犬やハムスターや、場合によってはイグアナも、そうでしょう。

*

消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム

消しゴムは製品であり商品です。大量生産された製品であっても、ある特定の消しゴム、つまり自分が愛用していたり、いまも愛用している消しゴムであれば思い入れがあるでしょう。

たとえ大量生産されたものであっても、自分にとって「たった一つ」の愛しいものはあるという意味です。

とはいっても、やはり取り替えがきくとか、その他多数のうちの一つであるという思いはあるにちがいません。

消しゴムと同じく大量生産された自転車や車もそうでしょう。お店でずらりと並んで陳列されているスリッパや帽子もそうだと考えられます。

*

サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ

サンマも消しゴムやスリッパと同様に、お店にずらりと並べてあります。大量生産されたものではありませんが、大量に漁獲されたものです。

大量、これがキーワードです。つまり同じものが、そっくりなものが、似たものがずらりと並んでいる、これが、「取り替え可能」なのであり、「その他多数のうちの一つである」という意味です。

サンマをペットとして飼った方はいらっしゃいませんか？　まずいらっしゃらないでしょうが、万が一飼ったことがある人であれば、飼ったことがない人とは異なる見方をなさるにちがいません。

食べられない人がいても私は驚きません。

これは、ニワトリ、ブタ、キュウリ、トマトでも同じでしょう。

ペットとして飼ったり、お仕事として飼育したり、園芸を趣味として栽培したり、お仕事として栽培したりという具合に、その経験によって、その動物や植物を表す文字に対する思いや思い入れは異なるはずです。

※特定のどなたかを責めているわけではありません。ご理解願います。

*

文字が文字どおりに取れないというのは、それくらいの意味です。文字が文字としてではなく、文字以上のものとして、個々人に立ち現われることがあるとも言えます。

そっくり、すっきり、かっきり

文字とはそっくりなものです。

人

いま私がこの画面に書いたこの文字は、パソコンやスマホなど数えきれない端末の画面に同時に閲覧されるはずです。しかも、私が削除しない限りは残ります。

私が上で書いた「人」という文字は私だけの専有物ではありません。誰もが使うことができるし、使ってきたし、いまも使っているし、これからも使われるでしょう。

他にも無数にあるという意味です。

それが「そっくり」です。

＊

そっくりはすっきりでもあります。世界中にいまいる人、これまでにいた人、これからいるであろう人を指します。

あっさり書きましたが、すごいことです。書いたものの、その意味を取りかねている自分がいます。当惑し呆然としている部分が自分の中にあるのを感じます。

よく考えてみてください。無数の人を人という言葉が代表しているのです。代理なのです。似たもの、似ているもの、似せたもの、にせもの、偽物なのです。そっくりなのです。激似なのです。

考えれば考えるほど目まいを覚えずにはられません。

＊

文字はシンプルに見える。いくらでも複製・拡散可能。

これが「すっきり」です。

文字は知識であり情報でもありますから、シンプルであることに越したことはないのです。持ち運びやすく、さくさくと読めなければなりません。

＊

これが抽象です。抽象化とも言います。

個々人の個性を消し去って人という文字に換言し還元する。個性とその人の背景とその人の生の総体を切り捨てた結果が、人という文字です。

抽象という名の切り捨てとはこのように残酷なものだということに敏感でありたいと思います。

こんな恐ろしい抽象の産物である人という文字を文字どおりに取れるでしょうか。額面どおりに取るためにはある種の鈍感さを必要とするのではないのでしょうか。

顔面通りに取るわけにはまいりません。

*

誰々が悪いという話をしているのではありません。ある種の鈍感さと忘却という抽象化なしに、人は文字を読めないし文章も読めないし書けもしないからです。

この抽象化がなければ、人は人でないし、この文明と文化はないわけですから。

*

人は人なの、どこが違うと言うの？、いったいどういう神経をしているわけ？、あなたの考えこそ抽象でしょう、屁理屈はやめてよ、冗談は顔だけにしてくださいな。

たとえ、そう言われたとしても、額面どおりに人が「人かっきり」だなんて信じられません。「千円かっきり」じゃないんですから。「それ以上もそれ以下もその他もろもろも含んで人」なんです。

人は、そっくりでもないし、すっきりでもありません。そっくりですっきりでかっきりなのは、人という言葉であり、人という文字なのです。

人は言葉でも文字でもありません。これが屁理屈なら、屁理屈上等だと言いたいです。

そっくりなものを壊す、殺める、消す

人はそっくりなものなら壊せます。取り替えがきくし、その代わりや似たものが他にもたくさんあるからです。

人はそっくりなものなら平気で殺めることができます。そっくりなものであれば、その命を平気で奪うことができます。

そっくりなものには個性も顔も家族も見えません。すっきりして見えるのは、切り捨てたからです。

そっくりなものかっきり、つまりそっくりなもの以外の要素が切り捨てられたからです。

*

抽象化はきな臭く血生臭いものなのです。

切って血が出ないわけがありません。何があって、生身の人間のことです。また、家族や愛用する物たちやペットや友人や隣人たちと切り離されれば、涙が出るに決まっています。

*

数字と同様に、文字はそっくりすっきりかっきり。

顔が見えないものを人は平気で殺めることができるのです。破壊することができるのです。

いまは破壊したり殺めるためには、ボタンを押すだけの時代になりました。戦車もミサイルもボタン一つを押せば任務遂行のために動きます。

ボタンを押す人にとって、その標的に顔がないことは確かでしょう。その標的は、数字と同じく、そっくりすっきりかっきりな文字であるにちがいません。

いちばん文字を文字どおりに取ってはいけない人が、ボタンを押している気がします。

顔が見えない

上の文章で記事を終わらせようとして、はっとしました。

顔が見えないのです。ボタンを押す人の顔が浮かびません。その人物も、私にとっては人という文字にすぎないことに気づきました。抽象化された人という文字なのです。

人

これも、そっくりすっきりかっきりじゃないですか？ 私も同じ穴のムジナだということになりませんか？

誰もが、代理なのです。似たもの、似ているもの、似せたもの、にせもの、偽物なのです。そっくりなのです。激似なのです。

*

たとえば、例のあのボタンの中のボタンを押しそうな人、例のあのボタンを押す権利を握っている人たちが世界には何人もいますが、その人たちの写真や動画や名前は見たことがあっても、そうした映像や文字は「似たもの」「そっくりなもの」でしかありません。コピーのコピーなのです。

私はあれが「顔」だなんて思いません。「顔を知っている人」だなんて言えません。やはり私にとっては「人という文字」であり「文字という人」なのです。

自分も、自分以外の誰もが、です。私たちは、そうした「そっくりすっきりかっきり」に囲まれて生きているのです。

*

世界そのものが「そっくりすっきりかっきり」として立ち現われているとも言えるでしょう。

それぞれが区別できないそっくりなものからなる世界に、誰もが生きている。たとえ、もしそうであったとしても、それは自分に対する免罪符にはならないでしょう。

かといって世界を背負いこむわけにもまいりません。それこそ身の程知らずな見というものでしょう。セルバンテスの描いたドン・キホーテと同じです。相手が大きすぎます。というより、相手にされないというべきでしょう。

月並みな言葉ですが、いまの自分に何ができるか、それから考えていこう。まずは、顔が浮かぶ人たちと生き物たち、自分にとってただ一つの物たちを大切にしていこう。そう思っているところです。

#言葉#日本語#抽象#文字#数字#大量生産#個性#顔#ペット#農作物#製品

私たちは同じではなく似ている

＊

私たちは同じではなく似ている

星野廉

2022年3月21日 09:49

目次

そっくりなところがそっくり

愛着と興味がないものには残酷になれる

疑似物、疑似世界、疑似体験

似たものとしての世界

個性とユニークさ

似ているから愛着をいただける

初めて見る「似ている」の世界

そっくりなところがそっくり

スマホを使っている人はスマホに似てくる。

人は自分に作るものに似てくる。人は自分が使っているものに似てくる。そっくりに似てくる。シンクロにシンクロする。同期に同期する。

(拙文「シンクロにシンクロする」より引用)

人の顔や姿がスマホに似てくるという意味ではありません。

大量生産されてどれも似ていたり同じに見えるスマホ。お店や工場ですらりと並んでいたスマホ。どれもそっくり。

そのスマホを覗きこむ、目を細めたり、目を見開いたり、ときには笑みを浮かべる、顔をしかめることもある、やや口を開けている人もいる。

指で画面をなぞる、スライドするのがもどかしいのか眉を寄せたり、舌打ちする人もいる。

やや前屈みに歩きながらスマホの画面に見入る、ときどき歩を緩めたり、立ち止る。

みんな、似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくりなのです。

*

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

ある意味で、製品に合わせているのでしょう。人に便利なように、人の都合に合わせて、そして何よりも人の体や体の一部やその動きに合わせて、商品は作られているからでしょう。

人の体だけでなく、人の内にも合わせて作られているような気がします。内というのは、脳だったり、意識だったり、行動のパターンとか型だったり、ひょっとすると記憶

もそうかもしれません。

人が作ったものや、人が使っているものは、人に似ている気がするのです。

愛着と興味がないものには残酷になれる

私たちにはニワトリがそっくりに見えます。これは特別な思い入れや愛着がないからでしょう。思い入れや愛着がないものはそっくりに見えます。

ニワトリから見たら、ヒトはそっくりではないでしょうか。顔や姿ばかりでなく、仕草と表情、やることなすこと、そっくりではないでしょうか。

興味がないからです。

愛着や興味がないものには冷淡になれる。残酷にもなれるでしょう。もちろん、愛着と興味をいだけば、ペットにも家族にもなるでしょう。

※この部分は、ある特定の職業を批判するつもりで書いたわけではありません。どうかご理解をお願いします。

疑似物、疑似世界、疑似体験

私たちは世界や森羅万象と直接的に触れあい、対することができません。知覚や言葉という代理、そして似たものを通して触れるわけです。

私には言葉、とくに文字と世界が似ているとは思えないのですが、似たものとして私たちは使っています。不思議です。

言葉という疑似物を用いた疑似世界とか疑似体験という言い方が適切かもしれません。「言葉という偽物を用いた隔靴搔痒の遠隔操作」という言い回しよりは的確でしょう。

げんに私は言葉という疑似物をやり取りして人と交流し、言葉からなる文章を読んで疑似体験を楽しんでいます。これは学習の成果であり、想像力のおかげだと理解しています。

生まれたときから既に自分の外にあった言葉を真似て学びながら、同時に想像力を養った結果という意味です。

あっさりと書きましたが不思議でなりません。

＊

私たちひとりひとはそれぞれの疑似世界を持ち、疑似体験をしている。こう考えてみます。疑似（擬似）の「疑（擬）」が余分ですから、「似」にこだわりましょう。

私たちひとりひとはそれぞれの「似た世界」と「似た体験」をしている。同じではない。同一はありえないでしょう。似ているのです。似ているから通じ合えます。たぶん、ですけど。

似たものとしての世界

私たちは「似たものとしての世界」に生きている「似た者同士」ではないでしょうか。

あなたのいなく「似たもの」と私のいなく「似たもの」と、人の集まりである社会や集団がいなく（決めたということです）「似たもの」は似ているけど、異なるはず。ズレがあるのです。

それが個性ではないでしょうか。それがユニークさであり、掛け替えのなさではないでしょうか。

＊

話し言葉、書き言葉つまり文字、物語、フィクション、行動様式、表情、身振り、仕草、旋律、コード――。

こうしたものは各人、家族、集団、共同体、社会、国家、地域、文化によって異なりますが、似ています。だから伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈ができるのでしょう。

伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈は「うつす・うつる」です。移す、写す、映す、撮す、遷す。「うつす」には必ず何らかの誤差、ノイズ、エラー、変異がともなうそうです。

複製やコピーは同一を再生したり再現することではないようです。似せて作られるものは、当然のことながら、似ているもの、つまり「近似」なのです。

だから「疑似（擬似）」ともいうのでしょうか。百パーセントとか完全という言い方を避けているわけですね。

個性とユニークさ

そっくりに見えても、似たように見えても、似たり寄ったりであっても、そこには「異なる」個性があるのだと私は理解しています。

逆に「同じ」は不気味です。

「似ている」は印象ですから検証はできません。「同じ」や「同一」はヒトの知覚では確認できず、精度の高い機器や機械を用いてなら検証できるでしょう。

日常生活では「同じ」「同一」はありえないし、出会えないわけです。抽象であるとも言えます。その嘘くささが不気味さに通じるのかもしれませんが。個人的な思いです。

＊

そっくりがそっくりしている、シンクロがシンクロしている、同期が同期している世

界。百年前、いや五十年前の人なら、目まいを覚えるのではないでしょうか。

そんな目まいを覚える世界に徐々に入っていった私たち、そして生まれたときには既にそうであった世代の人たちは、もはや目まいを感じなくなっています。

逆に、太古の人たちがこの世界を見たらなんて想像すると、こちらが目まいに誘われますが、そうした想像力を大切にしたいと思っています。

当り前に見えるものは当り前ではないし、必然でも自然でもないという意味です。

とはいえ、私はこの「似たものとしての世界」つまり疑似世界に生まれ、生きていて十分に幸せです。満足もしています。

似ているから愛着をいだける

疑似物である言葉を持ち、さらには文字を持ってしまった人類は、疑似世界に生き、疑似体験を重ねてきたのでしょうか。

直接的に世界に触れているわけではない。これは確かでしょう。

仮想現実だなんて、何を今更という気もしますが、「似ている」と「そっくり」の精度と有効性は急速に高まりつつあるようです。

(私に言わせると、知覚機能と言語活動を介してとらえているこの現実こそが、既に「似たもの」つまり疑似物であり仮想物からなりたっているきわめて精巧でよくできた仮想現実なのです。)

それでも私たちひとりひとりのいただいている「似たもの」が異なるという事実は変わらない気がします。

つまり、「似ている」からこそ違いが生じ、個性があると言えます。「似ている」が個性を生むのです。

一方で、「同じ」は個性を消します。無視するだけでなく消すのです。

*

似ているものに、私たちは愛着を覚え、愛着をいただくことができます。

擬人化というのは、森羅万象に自分たち人間を見てしまうことです。

世界や森羅万象は私たちにとって直接触れあうことができない「何か」であるわけですが、名前を付け、自分たちと似た部分を見ることで親しいものに見えてきます。

自分たちと似ていると思いきみ、手なづけ飼いならしているのかもしれませんが。世界や森羅万象なんてチョロいとも思っているにちがいありません。さもないと、科学技術はこんなに発展していないでしょう。

擬人化をとまなう想像によって、ただの物や景色や形が、人形や顔や絵に変わります。空の雲を思いうかべると分かりやすいと思います。

そうした想像力の結果が、映画であったり映像であったり、芸術であったり、おそらく音楽であったりするのでしょう。想像は創造であるという、例の駄洒落です。

*

生き物も人に似ていると感じることで愛着や愛の対象になります。物もそうです。自然にある物たち、そして人が作った物たち。

こう考えると、「似ている」が素晴らしい感覚に思えてきます。

一方で、「同じ」はどうでしょう。

「私たちは同じなんだ」「同じ人間なんだ」「地球に住む同じ生き物なのだ」「同じ〇〇国

民だから」「同じ〇年〇組なのですから」「同じ家族（会社、町内、病気、趣味、ファン、宗教、性、世代、出身地）なんだからさ」……

ちょっと待ってください。

「同じ」も素晴らしく聞こえ、美しくさえ響きますが、どこか嘘くさいのはやはり日常生活や体感から懸け離れている抽象だからではないでしょうか。妙にほのぼのとして美辞麗句っぽいのです。ほのぼの麗句。

さらに、「同じだから」という上の言葉に続けて言われがちなフレーズを想像してみてください。何らかの思惑や魂胆のあるフレーズが頭に浮かびませんか？

「私たちは同じ〇〇なんだから、△△するべきだ（△△して当然でしょう）」——こういう流れになります。

こうしたスローガンやプロパガンダが危険でもあるのは、歴史が教えてくれます。

私たちは同じではなく似ているのです。ひとりひとりが似ていながら違うのです。

＊

「同じ」という言葉が、特定の考えを説得するさいの方便や切り札として使われる場合がいかにも多いことか。

そう簡単に「同じ」だと括っていいもののでしょうか。

魂胆があるからです。言葉の錯覚を利用した心理操作かもしれません。レトリックのことです。

＊

これは個人的な思いなのですが、同じ姿や顔をしたものがずらりと並んでいると生きていくという感じがしません。平気で壊せる気がします。

生きていないと感じないのは、それらに人を感じないからかもしれません。

*

私たちは同じではなく似ているから、ひとりひとりが違うのです。

私たちを文字や数字に置き換えれば、同じどころか同一になるでしょう。

私たちは文字でも数字でもありません。私はそういう抽象には耐えられません。

ためらいもなく、人を文字や数字に置き換えて処理する、あるいは処分する人に強い嫌悪感を覚えます。その鈍感さと残酷さにです。そういう人は権力を持つてはならない、いや私たちが権力を委ねてはならないと思います。

あくまでも個人的な思いです。これだけ抽象にこだわるのは、性格や気質の問題かもしれません。

初めて見る「似ている」の世界

ずらりとそっくりに並んだものたちに掛け替えのなさを感じて、愛着を覚えるためには「似ている」が必要だという気がします。

この「似ている」の根っこには「人に似ている」があるように感じられます。

私は子を持ったことも、育てた経験もないのですが、近所で仲良くしている家族の赤ちゃんをよく目にします。かわいいし、愛おしささえ覚えます。

赤ちゃんを見るたびに、私はその目の動きと表情を観察します。残念ながら声は聞こえません。難聴が進行して高い音域が聞こえないのです。

＊

生まれたての赤ちゃんが目にした世界には「似ている」が立ち現われているのではないのでしょうか。それも「人に似ている」です。

その「似ている」に向かってほほ笑む、あるいは泣く。その「似ている」は必ずしも人でなくてもいい気がします。ガラガラやベビーメリーがそうですね。

物にでも赤ちゃんはほほ笑みかけ、泣いて見せる。それが赤ちゃんの想像力かもしれません。また、笑みと声が「届き」「達する」とも限りませんから、これは占いであり賭けだとも言えます。

さらに言うなら、赤ちゃんにとって、物と人のさかいはないのかもしれない。

物と人のさかいはない赤ちゃんが向きあっているのは、たぶん「顔」なのだと思います（この「顔」とは「意味の萌芽」の比喩と考えていただいてもかまいません）。

「顔」こそが、人にとっての最初の言葉であり文字だという気がします。

これも想像するしかありませんね。

「世界という本物」から永遠に切り離され、そこにたどり着くことができず、「世界という本物に似たもの」に囲まれて生きている以上、人は想像する以外に世界と触れあう手段はなさそうです。

「いま」「ここ」にいて「かなた・あなた」を想う。これで十分ではないのでしょうか。

うつせみの あなたにいだく 夢の顔

#言葉# シンクロ # 文字 # 複製 # 模倣 # スマホ # 森羅万象 # 世界 # 愛着# 赤ちゃん
疑似世界 # 疑似体験 # 仮想現実 # 擬人化 # 想像力

意味が立ちあらわれるとき

＊

意味が立ちあらわれるとき

星野廉

2022年3月22日 09:21

目次

赤ちゃん

ペット

言葉をいじる

赤ちゃん

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはいられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。

信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらどきどきです。

しかも点滅してあおることもあります。

この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？ こんなふうには解釈ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

＊

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見ていると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

*

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。

人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあられ」を静める術を心得ているようです。

ペット

言葉は、話し言葉つまり音声と書き言葉つまり文字だけではない。表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚もまた言葉だ。そう思っています。

ペットとの間での言葉は何でしょう？ ペットとのあいだだから、愛だ。なんて言いそうになりましたが、この駄洒落はなかなか言えている気がします。

言葉の通じない相手とのあいだにある愛は交流でなければなりません。一方通行で

あってほしくないわけです。

「ほしくない」のですから、願いです。願いでしかありません。

＊

自分が猫や犬と接するときを感じるのですが、擬人化は避けられないと思います。

ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がします。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれませんが。

愛用のカバンを思わず撫でたり、靴に話しかけている自分がいます。愛おしいのです。

＊

話し言葉や書き言葉が通じない相手とは、表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚を動員して、触れあい、付きあうしかありません。

話し言葉が通じない相手との関係では、声は話し言葉ではなく、純粋な声や音声として立ちあらわれます。

犬や猫に話しかけた場合、相手は言葉ではなく音声としてとらえているにちがいありません。

抑揚、声の質、声の肌理、声の大きさ、声の色、声の長短。

まだ言葉を習得していない赤ちゃんとの間でも、そうでしょう。

＊

ある特定の音の並びがある特定の意味やメッセージを持つ場合もあるでしょう。その限りにおいて意味が立ちあらわれている気がします。

犬に対しての「待て」が「待て」であるかは、犬に聞いてみないと分からない気がします。聞けない以上分からない気がします。

その点、猫はマイペースです。こちらの信号をわざと逸らしているように見えることがしょっちゅうあります。

かまってちゃんの犬と超マイペースな猫のどちらも好きです。

ペットという他者との付き合いもまた、意味と無意味について考えさせてくれます。

意味とは働きかけなのだと思います。通じないかもしれない相手や対象に働きかけたとき、意味が立ちあらわれる気がします。通じないかもしれない——。その意味で賭けなのです。

言葉をいじる

世界の意味 意味の世界
世界の影 影の世界
言葉の夢 夢の言葉

私の記事のタイトルでは、上のようなパターンがありますが、もちろん故意にやっています。

故意に偶然をやっているのです。故意に偶然を招くのです。

いま書いた文に見られるレトリックもよく使います。撞着語法なのかもしれません。

レトリックを分類することには興味がないので、知りません。知りたいとも思いません。

*

自分で書いた文字なのに、自分を離れて「何か」に見える、「何か」を発してくる、「何か」を放ってくる、「何か」を話しかけてくるのです。

それが、私にとっての「意味が立ちあらわれる」です。「現れる・表れる・顕れる・洗われる・あら、割れる」という感じ。

意味は印象やイメージと同じで、個人的なものだと思います。多者である他者と通じるかどうかは賭けなのです。

各人がいなく意味は、多数の他者と重なる部分があれば、重ならない部分もあり、宙ぶらりんだという意味です。

#言葉#声#日本語#文字#赤ちゃん#意味#メッセージ#ペット#レトリック

世界にシンクロする

＊

世界にシンクロする

星野廉

2022年3月26日 09:48

目次

動作と表情と言葉にシンクロする

真似ないで真似ている

言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

抽象、具象、生命

二つの横たわるのあいだで

届いていますか、通じていますか？

道具ではない、しもべや奴隷ではない

道具ではなく友だち

顔

動作と表情と言葉にシンクロする

寝る・横たわる、座る・座りこむ。

ところで、これまでにたくさんの人によって繰りかえされてきた抗議の動作と行動は、届いたのでしょうか、通じたのでしょうか。

そもそも動作や身振りや表情は、届くのでしょうか、通じるのでしょうか？

(拙文「意思表示としての動作」より引用)

私たちは、知らず知らずのうちに、同じような動作や身振りや仕草や表情をしている気がします。

しかも世界中で太古から繰り返されてきた、動作や身振りや表情なのです。

＊

音声や動作や身振りや表情はヒトだけのものではありません。

あくびを考えてみてください。ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをします。サルやゴリラだと、しかめっ面もします。

四つ足で立つ、四つ足で歩く、二つ足で立つ、二つ足で歩く、寄っかかる、座る、腰かける、走る、投げる、跳ぶ、泳ぐ、這い回る、体を掻く。

ヒトに特権的な動作に見える「立つ」に注目すると、鳥が二足歩行できることに気づきます。

言葉が通じる相手であれば、言葉と言葉以外の言葉——身振り、仕草、表情（目、眉、口、鼻、顎や顔の筋肉の動き）、音声（叫ぶ、泣く、うめくなど）——、言葉が通じない相手であれば、言葉以外の言葉。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる、だく・だかれる。

（中略）

いやし、安らぎ、怒り、悲しみ、よろこび、楽しさ、いらいら、もどかしさ、ままならさ、苦しみ、しあわせ、安心感、ただいっしょにいるという充実感。言葉にならない感情。

半年だけいっしょに暮らした犬のことを思い出します。言葉ではない言葉のやり取りがたくさんたくさんありました。こちらが話し言葉で話しかけても、それが相手に言葉として伝わっている保証はありません。

それでもこっちは伝わっていると勝手に思うこともありました。後付けで考えると、言葉以外の言葉も、外にあって、外から来るものなのですね。自分の中に入るのかもしれませんが、それは必ずしも思いどおりにならないという意味では、外なんです。

(拙文「言葉ではない言葉」より引用)

＊

生き物の最大の目的とされている生殖を考えてみましょう。子孫を残し殖やすために、鳴き、叫び、見つめ、耳を傾け、嗅ぎ、触れあい、動き、探し、獲り、食べ、飲み、戦い、競い……。

ヒトを含む生き物たちは互いに同期しているのではないのでしょうか。

私は詳しくないので立ち入れませんが、全生物が地理学的レベル、生物学的レベル、遺伝子的レベルで、シンクロし合っているような気がします。

生き物はこの星レベルで互いに同期している。地球レベルで互いにシンクロしている。そう言ってもいいのではないのでしょうか。

真似ないで真似ている

ヒトの目に見えるレベルで言えば、生き物たちは動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。

まるでお互いに見て真似し合っているように見えますが、まさかそれはないでしょう。ありえません。

同族の同集団内なら、親やまわりを真似て学習するというのはいえませんが、異族の異集団同士でそっくりなことをしているのは説明がつきそうにありません。

こういうことには、諸説ありという感じで、いろいろな分野の人がいろいろ言っているにちがひありませんが、私は私なりに考えてみたいです。

＊

真似ないで真似ているとしか言えないのです。

このシンクロというか、模倣の反復というか、「似ている」の「増える」と「広がる」と「うつる」を動かしている、あるいは促し導いている「何か」を想定したくなります。

言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

話をヒトに限定します。

私たちは、お互いの動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。覚えている場合もあるでしょうが、誰を真似たかはたいてい記憶になく不明でしょう。

その点では言葉に似ています。言葉の習得に似ています。言語や方言を限定すれば、言葉はそっくりなものです。文字であれば同一と言えます。

言葉は、誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

言葉が、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないでしょうか。ひょっとすると、言葉は自立しているのです。

この点でも、身振りや表情は、言葉にそっくりです。

＊

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージ

は、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいです。

人によっても、場所によっても、場合によっても、その時の気分によっても変わるし異なるでしょう。変異し変移し偏移し変位するのです。

どっちつかず、どっちにも転ぶ。こうした性質はニュートラルであり非人称的であるとも言えるでしょう。

人から離れているのです。人の外にあるのです。

*

それでいて言葉も表情も身振りも、具象と抽象の両面を備えています。

文字で考えてみましょう。

文字はある意味で抽象ですから形だけでは存在できず、インクや墨や掻いた跡や画素の集まりという物質をとまなうことによって、はじめて目に見えるのです。

電子的な複製の処理については知りませんが、文字として見る場合には、物質でもなければならぬと言えます。文字には抽象と物質の両面があるということですね。これが書き言葉つまり文字の二面性です。

話し言葉つまり音声も、声帯の振動、空気の振動、鼓膜の振動という形で伝わるわけですから、声帯、空気、鼓膜という物質と、振動や波という抽象の両面があると言えます。これが話し言葉つまり音声の二面性です。

表情と身振りは広義の視覚言語です。様子つまり形を目で見て認識します。

顔を含む身体という具象があり、その動きとしての形つまり抽象が視覚的に認識され

るわけです。

言葉においても、表情と身振りにおいても、意味とメッセージは、具象と抽象の織りなすからみ合いとして、人に立ちあらわれるのではないのでしょうか。

抽象、具象、生命

言葉と表情と身振りがヒトを含む生き物を離れていながらも、つまり生き物の外にありながら、人の中に入ったり出たりする。そして、人の思いどおりにならないニュートラルなものとしてある。

たぶん、それは具象と抽象の二面を備えた言葉と表情と身振りの抽象のなせるわざだという気がします。

だからシンクロの対象にもなるのであり、シンクロそのものでもあるのではないのでしょうか。

情報としての複製拡散と、生殖としての複製拡散も、その抽象の側面があって可能なのではないのでしょうか。

*

ヒトと生き物たちという、具象としての生命体が消えたとき、抽象もまた消えるのだろう。

言い換えると、抽象は具象を場として、形をあらわすのではないか。ただし、その具象という場は物であってはならず、生命でなければならない。

これは、生命という具象を遺伝子レベルでの情報という抽象に置き換えてみると分かりやすいかもしれません。

いまはそんなふうを考えています。

二つの横たわるのあいだで

ヒトは生まれ落ちて横たわり、やがて立ち、歩き、座り、再び横たわって亡くなる。

最初の横たわると最後の横たわるという動作のあいだに、さまざまな動作や表情があるはずです。無数の言葉があるはずです。

世界中で人びとが、それらの動作と表情と言葉にシンクロする。シンクロが時空をまたいで繰り返される。これが歴史です。

人はそれらを真似たり、無意識にしたり、それらに何かの意味やメッセージを込めたりするのでしょう。

誰かの動作や表情を見て、何かを受け取ったり、その意味を考えたり、迷ったり、受け損ねたり、見過ごしたり、無視したりするのでしょう。

届いていますか、通じていますか？

あなたの望み、願い、祈りは、届いているのでしょうか？ 通じていますか？

というか、誰に届くのでしょうか？ 何に届いて通じることがあるのでしょうか？

あなたの言葉、表情、身振りや手振りは、届いているのでしょうか？ 通じていますか？

あなたは、誰かの送ってくれているものを受け取っていますか？ 受けとり損ねたり、そもそも見ていなかったり、無視したり、気づかなかったりしませんか？

あなたのしているその仕草はどういう意味なのでしょう。何となくですか？ 考えたこともない、ですか？ 「意味って何？」ですか？

道具ではない、しもべや奴隷ではない

それはそっくりです。みんながそっくりなことをしています。そっくりなものを口にしたり文字にしています。

それは誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

それが、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないでしょうか。ひょっとすると、それは自立しているのです。

人の道具でも、しもべでも、ましてや奴隷でもない自立した存在なのではないでしょうか。

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージは、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいのです。

道具でも奴隷でもないからです。

道具ではなく友だち

そっくりなのです。でも、それが間近にあったり、自分の中にあるときには、そっくりには見えません。そっくりにも思えません。

見えたり見えなかったりする、そっくり。

自分の中にあったり、外にあったりする、そっくり。

そっくりは、いまもあなたの中にあるのです。たぶん、いるのです。これからもあるでしょう。

あなたのいちばん古い友だちです。私たちみんなの古くからの友だちです。

仲良くしましょう。さいごまでいてくれますよ。あなたのさいごまで、私たちのさいごまで。

*

最後に大好きな歌を紹介します。キャロル・キングの You've Got a Friend です。

(動画省略)

歌詞を知ったとき、そんな虫のいい話があるのかとか、そんなに軽々しく請け合っているものかとか、そんな素晴らしい友だちがいるだろうかと思ったのを覚えています。

いま改めて聞くと、これは話し言葉や書き言葉、そして身振りや表情という言葉のことではないかと思えてなりません。

顔

さいごの光景を想像します。

言葉、表情、身振りのある光景です。

その光景の中で、いまが消えていき、かなたがその領域を広げていく。同時に、かなたが消えていき、いまがその領域を広げていく。そこには物語も条理もないでしょう。

いまとかなたは言葉なのです。

人にとってもっともはかない意味とメッセージは、まっ先に消えてなくなる気がします。

話し言葉と書き言葉が失われ、音の記憶と、音としての声の記憶と、表情の記憶と、身振りの記憶の織りなす光景です。

ニュートラルな、つまりどっちつかずの音と形だけが、しつように、おそらく断片的に断続的に浮かんでいる。

あえて言うなら、それはおそらく顔ではないでしょうか。

*

とりとめのない、常軌を逸した、雲をつかむような話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉# 話し言葉# 書き言葉# 視覚言語# 動作# 身振り# 表情# ニュートラル# 意味# メッセージ# キャロル・キング# 洋楽# 音楽# シンクロ# 顔

文字化する人

＊

文字化する人

星野廉

2022年4月1日 08:01

目次

文字を持ったことで、人は文字化したのではないか

文字は映像に似ている

文字を読むのではなく見る

人は文字を読むのが好きではない

文字が書かれなくなっている

複製が容易な文字

文字化する人

文字化した人は見るだけの存在になる

数字も文字

処理される、処分されるということの意味

いけにえ

文字を持ったことで、人は文字化したのではないか

ヒトが話し言葉をなぜか持ってしまった。つぎに書き言葉である文字をなぜか持ってしまった――。

こんな話がありますが、文字を持ったことで人は文字化しているのではないかと、最近よく思います。

今回は、そうした思いについて書いてみます。そのためには、人と文字を観察する必要があります。

＊

文字と人を観察した結果を以下に並べてみましょう。

人は文字に似ている。文字は人に似ている。人は文字になりたがる。人は文字になっている。人は世界を文字として見ている。人はありとあらゆるものに文字を見ている。文字は擬人かもしれない。文字は顔だろう。数字は文字であり、その意味は大きい。

以上は、どれも私の個人的な印象です。

文字は映像に似ている

次に、上に並べた文を見ていて、思いついたことや、以前に書いて思いだしたことを並べます。

文字は線からなる。文字はなぞるもの。文字はなぞり書くものから入力するものになってきている。文字は人の外にあって、人の中に入りながら、外であり続ける。

以上は、私のオブセッションです。

＊

文字は映像に似ている気がします。というか、両方とも視覚の対象ですから、似ている当然なのでしょう。

映画を短く編集した動画が違法に制作されているそうです。私も見たことがあります。

見ていて連想したのは「読む」です。本であれ、新聞・雑誌であれ、ネット上の文書であれ、人は速読します。読むのではなく見ている感じです。

それだけ読む物が多くなっているのですから当然です。

個人が自由にできる時間は限られています。どれだけでもたくさんの情報に接するた

めには、触れる時間を短縮する必要があります。

話し言葉が話されている間、人はその話し手に時間を拘束されます。話し終わるまで待っていなければならないという意味です。

もどかしいですね。ままならさにいらいらすることもあるでしょう。録音した音声であれば、早送りできるでしょうが、現実的な解決策ではありません。

文字を読むのではなく見る

一方、書き言葉である文字であれば、はしよることができます。見るだけでも大丈夫です。

聴覚が時間に拘束されるのに対し、視覚は時間にわずらわされることなく、対象を「はしよる」、つまり短縮して省くことができる点が優れています。

この軽快さ快適さを覚えるとはまるでしょうね。つぎからつぎへと対象を変えることができるのです。取っ替え引っ替えできます。

ますます文字からなる文章は読まれなくなり、見る対象になってくるのは当然であり人情だという気がします。

*

とくにパソコンやスマホの液晶画面に表示されている文章は、ますます読むのではなく見る対象になる気がしてなりません。

印刷物にくらべて、端末の画面上の文章は、いかにも軽いのです。存在感が薄いのです。

note で書いていらっしゃる方々が、自分の記事をまとめて書籍化したいと思うときに、電子本ではなく、紙の本を望む場合には、「見られる」のではなく「読まれたい」という気持ちがどこかにあるのかもしれないね。

*

人は何かにはまるとエスカレートする傾向があります。依存とか嗜癖とか脳内物質の分泌という言葉で説明できそうです。

文字を読むのではなく見るようになる。私はこれを人の文字化と呼びたくなります。人が文字に似てくるからです。

文字は見るものです。現実問題として、見られている文字のほうが、読まれている文字よりも、はるかに多いのではないのでしょうか。

さらに言うなら、読まれも見られもしない文字のほうが、もっともっと多いかもしれません。いわば捨てられる文字です。

いま上で述べた「文字」ですが、じつはぜんぶ人のことなのです。今回は、そういうお話をしています。

人は文字を読むのが好きではない

ここだけの話ですが、そもそも人は文字を読むのが好きではないのです。

話し言葉を持ってしまったというアクシデント（偶然）は、人類にとってそこそこありえる展開でしたが、文字を持ってしまったというのはいりえないアクシデント（事故）だったのです。

言葉（話し言葉と書き言葉の他に、表情と身振りといった視覚言語を含みます）は、誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。真似て覚える必要があります。

抽象と具象を兼ねそなえているから、こんな不自然で不可思議なことが起きるわけですが、文字には、話し言葉や表情や身振りにはない特徴があります。

文字は残るのです。保存できます。一方の音声、表情、身振りは一瞬で消えます。

＊

音声と表情と身振りを、録音し録画をして再生するという手はありますが、再生したところで、再生する時間がかかって効率的ではないのです。複製と拡散も面倒です。

残り、保存ができて、複製が無限にできて、瞬時に拡散できる。しかも、読むのではなく見るだけでも大丈夫。

こんなものが、文字の他にありますか？

人は楽をしたい生き物です。

本来なら、文字は読みたくないのです。文字を見たい、ぱっと見るだけで済ませたい。これが人の本音です。

表情と身振りは、習得するのにそれほど苦勞しないでしょう。

ところが文字の習得と学習にはとほうもない時間と苦勞が必要なことは、みなさんご承知のとおりです。しかも、学習は一生続きます。

うんざりしませんか？ 疲れませんか？

文字の読み書きを学習するために、人がこれだけ苦勞し、これだけ大々的な制度とメソッドを築きあげたのは尋常ではありません。

この星にとっての非常事態だったと言っても言いすぎではないでしょう。

ぶったまげて腰を抜かしても罰が当たらないほどの大珍事なのです。

＊

とはいえ、いったんできてしまったものは仕方ありません。ここまで来たのですから、後戻りもできません。

半分冗談はさておき、(文字からなる)文章を見ることと、(文字からなる)文章を読むことのさかいに線引きをすることは難しい気がします。

両者の違いは掛ける時間でしょうか。理解度でしょうか。集中力でしょうか。気合いでしょうか。既に知っているか初めて目にするかでしょうか。気分でしょうか。好き嫌いもある気がします。体調も大いに関係ある気もします。

要するに、曖昧なのです。検証不能なことは確かでしょう。

できることなら、文字は読まずに見るだけで済ませたい、学習も勉強もしないで済ませたい——これは本音だと思います。

自分を基準にして人類を語って、申し訳ありません。人それぞれですよ。

文字が書かれなくなっている

文字と、文字からなる文章は、ますます読まれなくなっています。見る対象に近くなっていると言えそうです。

それだけではありません。

文字と文章は、手と指を使ってペンなどで紙に書くものから、手と指を使って入力するものになってきました。その傾向はますますエスカレートしてきています。

人が文字に合わせるようになってきている。しかも、手と指を使ってペンなどで紙に

書いた文字ではなく、機械に入力された文字（液晶上の画素の集まり）に合わせるようになっているのです。

*

文字を書くのではなく入力している人が、文字を読むのではなく見るようになるのは、分かりやすい展開だと思います。

どれだけでも、楽したい、早く済ませたいという意味です。

文字は書かれなくなる（つまり入力されるようになる）、文字は読まれなくなる（つまり見られるようになる）。

これは、人が文字に合わせるようになる、ひいては人が文字になる、と同期（シンクロ）しているのではないのでしょうか。

後に触れますが、文字は軽くてさくさくして、効率がいいのです。その文字には人は憧れてなろうとしています、じつはもう人は文字になっているのです。（このまま読みつづけてください）

複製が容易な文字

文字の最大の特徴は、複製が容易だということです。写本、写経は大変だったでしょうが、印刷術が発明されて、魔法みたいに飛躍的に複製がさらに容易になりました。

複写機が現れると、一般人でも簡単に複製ができるようになりました。しかも複製できる数が飛躍的に増加しました。

そして、パソコン、インターネット、スマホが、さらに複製を容易にし、容易どころか、ネット上であれば入力して即座にそれが無数の端末で複製される、つまり拡散されるという状況が生まれました。

入力＝複製＝拡散。この三つが同時に起こるわけです。こうした状況で入力され、複製され、拡散された文字からなる文章を読むことが可能でしょうか。読むが見るに限りなく近づけば、可能と言えるでしょう。

＊

人はそうした文字の状況に自分を合わせるようになります。合わせざるをえないのです。それが日常生活になっているのですから。

これを人の文字化（文字に擬態するでもいいです）と言わずに何と云えばいいのでしょうか？

ちょっと無理のある言葉じゃないの？ 大げさじゃないの？ 論理の飛躍というものでしょう？

そんな声が聞こえてきましたので、べつの意味での人の文字化についてお話しします。

文字化する人

人は文字化しています。まわりをよくご覧になってください。よく考えてみてください。

あなたはフランツ・カフカに会ったことがありますか？ 見たことがありますか？ マリリン・モンローでもいいです。アンディー・ウォーホルでもいいです。平野歩夢さんでもいいです。バイデン大統領でもいいです。

ぜんぶ、文字で知っているのではありませんか？ つぎに映像（正確にいうと映像の記憶です）で知っているが続きます。まず、文字なのです。

あなたの知っている人の大半が、文字なのです。つぎに映像です。

文字も映像も、見るものです。視覚に訴えているイメージ（像）だという点では同じです。

*

映像としてイメージできなくても、文字として知っている人、場所、事物がいかに多いことか。

人間関係は文字と映像でなりたっているのです。

きょくたんな言い方をすると、「世界（人にとって世界とは人間関係に他なりません）という関係性」を構成している要素は文字と映像とだということになります。

これは、驚くべきことではないでしょうか。本気でびっくりして、腰を抜かしてもいいほどの事実です。

なぜなら——何度も繰り返して申し訳ありませんが——人が文字化しているということなんですから。

あなたが文字だという話なのです。

あなただけではありません。

知人であるか、家族であるか、会ったこともない無名人であるか、会ったことも見たこともない有名人であるか、会ったことも見たこともない歴史上の人物であるか、まったく関係なく、みんな文字になっているという話です。

ぶったまげて腰を抜かしても罰は当たらない気がします。

文字化した人は見るだけの存在になる

あなたは固有名詞、とくに「人名を読む」ことがありますか？　読むとすれば、どれ

くらいの時間を掛けますか？

人名を「見ているだけ」ではないでしょうか。

二度目、三度目と、何度も見たことがある固有名詞、とくに「人名を読む」ことがあるでしょうか？

見るどころではないくらいに「瞬時に処理している」のではないのでしょうか。

人名は人命なの입니다。

それが抽象です。

あなたを責めているわけではありません。誰もが抽象と無縁でいるわけにはいかないと言いたいのです。

言葉、とりわけ文字の抽象性はきわめて高いと言いたいのです。

抽象とは残酷なものです。その基本に「切り捨てる」があるからだと言えます。

余分なものを切り捨てたから、スリムですっきりしているし、軽くてさくさく読めるどころか、見るだけで済ますことが可能になるのです。

それが抽象なのです。

数字も文字

さらに恐ろしい衝撃の事実があります。

数字です。

数字も文字です。

よろしいでしょうか。あなたは、既に何かの番号、つまり数字という文字として処理されています。

学級、学校、同窓会、自治会、自治体、政府。そうした組織において、あなたという人間を生身で扱うわけにはいきません。

生の人間は重すぎるからです。容量が半端じゃなく大きすぎるのです。

人を名前という文字、データという文字、番号という数字——ぜんぶ文字です——にすれば、超軽量化されます。さくさく処理できます。

パソコンでも、大型コンピューターでも、インターネットでも、複製＝伝達＝拡散＝流通が即時に可能になります。

処理される、処分されるということの意味

数字として処理される。

たとえば、死者〇〇名、重傷者△△名——という意味です。患者数、検査陽性者数、新規感染者数、給付金対象者数……もありますね。

数字として処分される。

処分は不祥事を起こして処分されるだけではありません。婉曲的に使われる言葉でもあります。

たとえば、殺傷処分がそうです。似た言葉に駆除もあります。排除するや非難させるも、そうでしょう。要するに「消す」のです。

非常事態下や災害時や有事（この言葉自体が婉曲語です）のさいに「処分される」が具体的にどういう意味なのかを考えてみてください。

*

人は言葉に似ていない。人は言葉に似てくるのだ。

人は言葉になる。人は文字になる。人は数字になる。文字として数字として処理される。大量に処理することが可能になる。処分も可能。げんにされている。

人は「自分に似ていないもの」として処理される。だから処分もされるのだろう。そうとしか思えない。

そっくり、すっきり、かっきり。過不足なし。可もなく不可もなし。すっきりだから超軽量。大量の処理や処分に最適。さくさく、迅速、すみやかに、スピード感をもって。

(拙文「シンクロにシンクロする」より引用)

*

大切なことなので、繰り返します。

既にあなたは文字なのです。好むと好まざるとにかかわりなく。

いや私は生身の人間です。切れば血も出る生き物なのですよ。

たしかにそうです。でも、あなたはげんに文字として扱われています。

世界の圧倒的多数の人があなたを認識するとすれば、文字と映像でしか認識できないからです。

*

数字は恐ろしいです。文字どころではありません。

あなたは既に何らかの数字としてカウントされています。あなたの知らないところでは。

それを政府が保管していることは確かです。さもなければ、あなたには戸籍も国籍も

ないこととなります。

あなたは数字なのです。あなたは文字なのです。

しかも、あなたは、その数字と文字に合わせて生きざるをえない状況に投げこまれているのです。

いけにえ

文字と数字は、いわば生身の人間の「影」です。はかなげで、かげろうのようです。

そりゃあそうです。生身の人ではないからです。文字と数字は影だからです。影の影が薄くて当然なのです。

一方、文字としての人、つまり文字化した人は、いまや「見る対象」になっています。単なる見る対象となった人ははかなげで、かげろうのようです。

これは悲しいことです。生身の人が文字化するなんて、悲しすぎます。

人の文字化が、もはや比喻やレトリックでなくなっていることは恐ろしくもあります。いまや人は文字どおり文字なのです。

＊

文字と数字は人の代わりに処理されます。処分もされます。あなたの身代わりに処理され処分されるなんて、「いけにえ」じゃありませんか。

いけにえ、犠牲、生け贄。こう書きます。

処理し、処分する人にとっては、ただの文字と数字です。さくさく作業を進められます。

文字と数字があなたの代わりに処理され処分にされているようでいて、じつはあなた自身が処理され処分されていることを忘れてはなりません。これは、私が自分に言い聞かせている言葉でもあります。

文字と数字が、「生身の人間」を「抽象」と錯覚させる装置であることは確かなようです。

遠く離れた場所から報道という形で届けられる映像と文字と数字が、単なる影でも生け贄でもなく、犠牲者であること、つまり切れば血の出る人間であることに敏感でありたいと思います。

偉そうなことを言って、申し訳ありませんでした。

※関連記事：文字化と擬態と擬人は似ている（シンクロしている）気がします。いつか同期させて記事を書きたいです。

#言葉 #日本語 #数字 #文字 #映像 #複製 #抽象

ピクピクでシンクロする世界

＊

ピクピクでシンクロする世界

星野廉

2022年4月2日 07:56

目次

小動物のピクピク

相場のピクピク

世界中でピクピク

姿と形を変えるピクピク

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

似ている

小動物のピクピク

株については何も知りませんが、ニュースで株式市場の大きな動きが報道されるたびに頭に浮かぶのがハムスターです。

昔飼っていたことがあり、そのときにピクピク体を動かすのを不思議な気持ちで眺めていたのを思い出します。

小動物は短命なので悲しい思い出もあるのですが、ときどきこうやって記憶の中にやってくるあの小さな動物を愛でています。

自然と手と指が動いて、あの子を撫でていたときの感触がよみがえりはっとします。

テレビで動物の生態を撮った番組を見るのが好きなのですが、小動物を見るとそのピクピクやビクビクやキョロキョロやタタターという仕草に魅了される自分がいます。

やっぱり株に似ています。正確には株の値動きというのでしょうか。

相場のピクピク

株式や商品の相場では、値動きをリアルタイムで表示するわけですが、それは数値であったりグラフであったりします。

新聞での表示は静的なものですが、ネットでの表示はまさにピクピク、ビクビク、キョロキョロ、タタターなのです。

デジタル化された数字がまばたくように細かく点滅することがあります。グラフの線もよく見ると微かに点滅していたりします。

生き物を見ているような錯覚におちいりますが、これは錯覚ではなくひょっとしてまさに生き物を目にしているのかもしれない。

＊

数値もグラフも何かを指しています。

ピクピクというと、針が数字を指すアナログ式の量りや、ガスのメーターのような測定器を連想しますが、ああいう針は指しながら振れます。大きく振れる場合もあれば、小刻みにピクピクすることもあります。

振れる、触れる、狂れる、震れる、ぶれる。

やっぱり株式の値動きはピクピクでありビクビクです。つまり震えということですね。ビビっているとはか思えません。

あの動きは誰かのおびえであったり、驚きであったり、喜びであったり、思考停止とか判断停止であったり——あの動きの前にどんな思考や判断が可能だというのでしょうか、

任せるしかないのではないのでしょうか（何に任せるのかも分からないままに）、全面降伏です、まかせ、まけるのです——、錯乱であったりするのではないのでしょうか。

世界中でピクピク

やっぱり生き物です。生きてるとしか思えません。世界でみんながピクピクしている。指すを見て、ふれるのです。そしてふるえるのです。

擬人化する生き物であるヒトにとって、その目に映って動くものすべてが生き物であり、森羅万象という名の自分の身体のふるえなのです。

ピクピクという身振りだけがひとり歩きをしているかのよう。ピクピク、ピクピク、どきどき、きょろきょろ、おろおろ。

*

ピクピクが世界を動かす。世界がピクピクにシンクロする。動悸に同期する。

音楽の世界で使われている、指揮棒、メトロノーム、録音スタジオなんかにあるピクピクと針の動く機器、波形で表示されるピクピク。

ピクピクは波でもあるのですね。

小刻みな振動、音声の波、うねり。

上下運動として表示される波は、ジグザグでもあるように思えます。

右往左往、千鳥足、蛇行、蛇の動き。

風に揺れる植物、日光や雨風に左右されながら成長する植物なんかも、見る位置を変えたり、見ている時間を速めたり、逆に遅くすると、それぞれ似ているように見えます。

姿と形を変えるピクピク

ピストン運動、上下運動、行ったり来たり、往復運動、ぴくぴく、ゆらゆら、びくびく、ジグザグ、ぴくんぴくん。

いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

＊

音と振動と波と光。これって、同じなんでしたっけ？ 物理では。

詳しいことは知りません。ただイメージと言葉に身を任せるだけ。

幼いころに見たレコードとプレーヤーを思い出します。保育園のプレーヤーを隠れていじっていたのです。

電源を落としたプレーヤーの皿にレコードを載せて、こっそり回してみる。かすかに音がする。旋律は聞き取れませんが、音がするのです。ぞくぞくしました。

＊

いま思うと、あれは針がレコードの溝を走る音なのですね。ぎざぎざで凹凸のある溝を、針が動き、針ががったんごっとなと揺れて振れる。

がったんごっとなという上下運動が、なぜかきいきいとかしゃーしゃーという音になる。

どういうわけか、針の上下運動が、空気の振動となり、それがさらに耳の鼓膜を震わせて、こどもが心を震わせる。

ぴくぴくと、ごっとなごっとなと、きーきーと、しゃーしゃーがシンクロする。

シンクロが姿と形を変えて、シンクロする。

なぞるがなぞるをなぞる。

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

ぶるぶる震える生き物たち。ぴくぴく動く生き物たち。ぶるぶる震える内臓。ぴくぴく動く器官。どくどく流れる血液、しゃーしゃー流れる、リンパ液、〇〇液。

たらたら流れおちる汗。ぽたぽた落ちる体液。ぽとぽと、じゃーじゃー、ぽっとな、ぽつり。ぷーっ。ぶーっ。ぷすーっ。出る、出す。漏れる、漏らす。排泄。生理現象。

はあはあ、ひゅーひゅー、あはん。おお、ああ、うーん。あゝー。呼吸。声。うめき。

*

ごっくん、ごくり。むしゃむしゃ、もぐもぐ。くちゃくちゃ。やむやむ。食事。摂食。入れる、入る。

箸やフォークやスプーンやナイフを使えば、もっとにぎやかでしょうね。しゃべりながらの会食もあるでしょう。黙食もあるでしょう。個食や孤食もあります。

わいわい、がやがや、しーん。

*

何をするにも、上下運動（見方を変えればジグザグ運動）、往復運動、ピストン運動があるようです。音もします。お供します。

移る、通じる、流れる、走る、移動する。震える、振れる。曲がる、曲げる。こうした動きや姿は、生き物の内部での動きとしても、生き物自身の動きとしても、おこっています。

こじつけです。そう思うと何でもそう思えてきます。そう見えてきます。被害妄想み

たいにしつこくつきまといいます。

固定観念、強迫観念、オブセション。疑心暗鬼。壁の染みの模様や顔。天井の模様、雲の形。

そうなっているのか。そう見えるだけなのか。

そう見える。そう感じられる。そう思われる。そう考えられる。

それが意味なのでしょうね。人は森羅万象に、模様と形と顔と自分を見るのでしょうか。見えてしまうのでしょうか。見ずにはいられないのかもしれませんが。

似ている

シンクロや同期の基本は「似ている」だと思います。「同じ」とか「同一」でなく、あくまでも「似ている」です。

似ているは印象ですから、検証できません。特定も確定もできません。

(※「似ている」を基本とする私の考えるシンクロとは、普遍や客観や真理といった壮大な大風呂敷とは遠いものです。大風呂敷を広げてはいますが、すけすけ、すかすか、ぺらぺらなので、無いものねだりはなさらないでくださいね。)

厳密な意味での「同じ」はヒトの知覚では無理でしょう。精密な機器を使えばできるかもしれませんが、誤差やエラーがつきものらしいです。

しかも最終的に「見る」のはヒトの知覚ですから、危うさは消えません。

「同一」はその語義からして、世界に、あるいは宇宙にたった一つしかなさそうですけど、私にはその意味が分かりません。

一個人として、つまり一匹のヒトの端くれとして大切なことは「似ている」です。こ

れしかないのです。高望みはしません。贅沢は申しません。

*

病院にはたくさんの機器があります。入院すると分かりますが、ぴくぴくの親戚に満ちているのです。信号に満ち満ちています。

点滅は危険信号です。ぴかぴかが急かせます。「見て見て」と言っています。

信号は断続的な0と1、○とX、白と黒でないと、生き物には通じません。断続でないと、そもそも注目しないのです。

断続はノックなのです。こつこつ。シロクロシロクロ。通じると生き物もシンクロします。シロクロにシンクロするのです。

どきどきします。心臓バクバク。動悸に同期。

大きなランプが、ばかばかし出したら、大事です。避難しなければなりません。

入院してベッドで寝ていると、遠くでピーポーピーポーが聞こえることがあります。

院内に緊張が走ります。

スタッフの動きも活発になります。ばたばたと歩く音、何かを引きずっている音もします。

ぴくぴく、びくびく。自分の中にある動きに耳を澄まします。

*

病室の窓から、空が見えます。

晴れもいいですが、雲が見えるとほっとする自分がいます。

雲は動くからです。表情があります。あれはあれだ。あれに見える。あれに似ている。

似ているは人をなぐさめてもくれます。

雲が見えないときには、目をつむります。そこにも「似ている」があります

自分がびくびくそのものであること、自分がびくびくの一部であることを感じる一瞬です。

びくびくはやさしい言葉。

似ているとは、何かとつながる気持ちのことです。自分が何かに「うつる」気持ちでもあります。移る、映る、写る、です。

それ以上、何も要らない。そんな気持ちになります。

#言葉# 日本語# 株# 相場# 動詞# 小動物# 値動き# ピクピク# オノマトペ# シンクロ# 同期

先立たれる

＊

先立たれる

星野廉

2022年4月3日 09:11

「遅れる」は「おくる」に近いらしいと最近知りました。遅れる、後れる、送る、贈るです。
(先立つ相手を敬い、先に行かせる(逝かせる)つまり送ることで、自分が遅れる(後れる)感じでしょうか。送るには葬送の意味もあります。)

(ことのはに さきだつひとを おくるかげ)

(拙文「気づくものには必ず遅れる」より引用)

＊

ヒトがいつ表情や身振りを言葉として持つようになったのか。いつどのようにして、話し言葉を持つようになったのか。文字を手にしていく過程はどんなものだったのか。

こうしたことはたどることができません。想像するしかないわけです。その想像はスリリングなだけでなく、どこか甘美でもあります。ノスタルジーをとまなうからでしょう。

＊

視覚言語の一部である表情や身振り、話し言葉としての音声、書き言葉である文字は、人の体から発せられるものであり、放たれ一瞬離れた後に、別の人に届き、今度はその人の身体に染み入ります。

自分から見ると、自分の外にいる相手の身体から、中である自分の身体に入りこんでくるわけです。そして、今度はそれに反応した自分の中から身体を通して言葉にして、それがいったん外に出たうえで、相手の身体に入りこんでいきます。

こんな不思議なことが起きるのは、言葉が外にあるからだと思います。言葉を確認できるのは外にあるときだけなのです。私たちが目にし耳にし触れることができるのは、自分の外にあるときの言葉だという意味です。

＊

一方で、外にあるからこそ言葉は、なかなか自分の思いどおりになってくれません。相手の思いどおりにもなりません。ままならないのです。

自分と相手が歩み寄るしか、「伝わる」とか「通じる」は起こらないのかもしれませんが。ままならさは、それでしか解消できないようです。

必ずしも伝わり通じないのであれば、「分かった」という言葉よりも、じっさいに相手に歩み寄ってみせる行動が大切だと思います。

ままならさに対する唯一の方策は、歩み寄る行動しかないのかもしれませんが。それは面子を捨てる勇気だという気がします。

言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる。これが面子をたもつことです。現実に沿うのではなく筋を通そうとして、言葉のままならさに屈しているのです。相手に屈しているわけではありません。

＊

いま述べたことが露わになるのは、戦争や大災害が起きているときです。目の前の現実よりも、言葉の上での辻褃合わせが優先されます。

言葉を崇め、言葉にひれ伏しているのです。

誰がそうするのかというと、人びとの上に立っているリーダー（たち）です。たった一人の場合もありますね。たった一人の辻褃合わせのために、地域だけでなく、世界が危機に瀕しているのです。

辻褃合わせの「辻褃」、筋を合わせるの「筋」、こうしたものは人が発し、いったん放たれたため、人から離れた外にあります。外にあるからままならない、つまり思いどおりにならないのです。

ままならない言葉を前にしてリーダー（たち）も途方に暮れているにちがひありません。現実よりも言葉にとらわれて右往左往しているのですが、その素振りは見せません。面子があるからです。

＊

あの人（たち）は現実を見ていません。辻褃と筋を見ています。辻褃も筋も言葉です。言葉として複製拡散されます。情報やプロパガンダは言葉として流通します。

どんどん人の外に出ていく言葉は、ますます人の手を離れたものになっていきます。

言ってしまった以上、文字になってしまった以上、広まってしまった以上、回収して取り戻すわけにはいかないのです。これが辻褃であり、面子なのであり、要するに言葉なのであり、しかも思いどおりにならない、つまり訂正も撤回もできない言葉なのです。

その結果として、自分（たち）が招いた非常事態下に、リーダー（たち）が、さらなる辻褃合わせ、つまり面子をたもつことに血道を上げ、現実への対応がないがしろにされるのは、みなさんをご承知のとおりです。

いま、げんにそれが起きています。

＊

自分の外にあって思いどおりにならない言葉を思うとき、人の後に来たはずの言葉が、人の前に立っているような気がします。言葉に先立ったはずの人が、いつの間にか、言葉に先立たれているのです。

人は目の前にいる言葉になかなか気づきません。自分こそが前にいると思っているか

らかもしれません。これも面子にとらわれているからだという気がします。言葉は道具であり従者だと人が思っているという意味です。

事態は真逆なのに、です。

ひょっとすると言葉は自立しているのではないのでしょうか。自分で立っているのです。さらに言うなら、生きているのです。そんな荒唐無稽な思いに駆られます。

＊

”物に立たれたように、自分が立つ。未明の寝覚めとかぎらず、日常、くりかえされることだ。日常はその取りとめもない反復と言えるほどのものだ。”
(古井由吉作「物に立たれて」(『仮往生伝試文』) 所収より引用)

「十二月六日、日曜日、雪のち曇。」で始まる日記体の部分から引用したのですが、『仮往生伝試文』では説話とその解説風の文章よりも、日記体の記述が好きです。その描写は身体に染み入ってきます。

＊

表情、身振り、音声は、一瞬で消えます。文字は残ります。そのまま保存することも可能です。

この文字の特徴は特異とも言えるもので、思いだすたびに考えこんでしまいます。こんな不思議なことがあっていいものなののでしょうか。

当たり前なこととして、繰り返されている日常の出来事なのですが、当たり前という言葉で考えるのを止めるわけにはいかないのです。きっと飲み込みが悪いのでしょう。

＊

ヒトが言葉をいつどのようにして持ったのか。これは永遠にたどれそうもありません。

しかし、ヒトが言葉に先立つとき、つまりヒトがこの星からいなくなったときを想像することが、それほど荒唐無稽な話ではない世界情勢と地球の気象に直面しているいま、私は人に先立たれたときの言葉の行方を考えずにはいられないのです。

言葉の終焉、つまり人の終焉は、私にとってオブセッションにすらなっています。

*

文字は何らかの形で残る気がします。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送ってくれるのでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ことのはに さきだつひとを おくるかげ

この想像は、言葉の発生という絵空事よりも、はるかにリアルな——つまり間近に迫っている——気配として私の前に立ちあらわれます。悪夢なのです。

その悪夢が現実とならないように、いま自分に何ができるのか。それを考えていきたいと思います。

#日本語 # 影 # 文字 # 表情 # 身振り # 話し言葉 # 書き言葉 # 古井由吉

見える言葉、見えない言葉

＊

見える言葉、見えない言葉

星野廉

2022年4月6日 13:35

目次

見えない言葉

イメージ、印象、記憶、像、響き、感触

変換、交感、照応、共感覚

見えない言葉

表情や身振りという視覚言語、話し言葉、書き言葉。このうちで、見えないものは、話し言葉、つまり音声です。

不思議です。

上で挙げたどの言葉も、誰もが生まれたときに既にあって、私たちはそれを見様見真似で覚えていきます。真似て学ぶわけです。

音声だけが見えないのですね。ふだんは気づかないし、考えもしませんが、やっぱり不思議です。

＊

覚える順番からすると、表情、身振り、音声、文字という感じがします。順番なんて言いましたが、それぞれを真似て学ぶ過程は、一生続いていると思います。

どの言葉も「はい、これは卒業しました。おめでとうございます」というものではありません。だいいち、人は忘れる生き物です。覚えても忘れます。これが続くのです。

覚えていられる容量は決まっているようです。そのため、学び直しが、しょっちゅうあります。

*

「ねこ」と発音したり、「ねこ」と言われて耳で聞く。「猫、ねこ、ネコ、neko」という文字を見る、あるいは読む。

音声は見えませんが、見える文字と比べて、大きな違いはあるとは思えません。

少しは違う気がしますが、頭の中に浮かぶイメージ、つまり印象は似たようなものです。

これも不思議です。

イメージ、印象、記憶、像、響き、感触

いまイメージとか印象と言いましたが、これは記憶でもあるし像（映像）でもあるし音の響きとか感触でもあります。

猫とか犬と聞いたり、その文字を見たりすると、思い出が浮かびます。その思い出は、映像つまり視覚的なイメージでもあるし、鳴き声やうなり声つまり聴覚的なイメージとか響きだったりするし、撫でたり引っかかれたときの触覚の記憶だったりするのです。

少なくとも私はそうです。

私は、においと味を思いだせと言われて思いだすことはできませんが、あるにおいを嗅いだとき、ある味を感じたときに、あれと同じだと思いだすことはあります。

記憶には二通りあるということでしょうか。興味深いです。というか不思議でなりません。

においや味を自由に思いだすことができる人がいても驚きません。不思議はどんなにあっても不思議ではないという意味です。

変換、交感、照応、共感覚

言葉によるイメージの喚起力にはすごいものがあります。

上で述べたように、猫という発音をして、あるいは発音を耳にして、猫を撫でたときの感触が思いだされるときがありますが、それをいま改めて考えると不思議です。

音声が触覚に変換されたような気がするからでしょうが、こういうことは猫という文字を見ているときも起きます。猫の表情を真似てみても、猫の仕草を真似てみても起きます。

猫や犬といっしょにいるときに、その表情や仕草や鳴き声を真似て、コミュニケーションを試みることはありませんか？ 私はそういうのが大好きです。

犬や猫を相手にしているときには、書き言葉は完全に忘れます。その存在すら頭にはありません。話し言葉は別です。相手に話しかけている自分がありますが、通じているかどうかは分かりません。むしろ通じていないほうが多い気がします。

犬や猫の表情や仕草や鳴き声を真似るのは意外と難しいものです。真似たところで、これもまた通じていると思えないほうが多いです。ひとり相撲をしていると感じます。でも、めげずに頑張ります。愛おしいからです。

猫や犬にとっての「似ている」と、ヒトの「似ている」は違う気がします。大きく異なるようです。つながっていないのです。

ヒトである自分が「似ている」という言葉で、無理につなげようとしているだけ。そんな思いに駆られます。言葉は、ヒト以外の生き物にはまず通じません。言葉の喚起するイメージでの共通点すら感じられないのです。

*

話はずれますが、視覚、聴覚、表情や身振りという身体の動き、触覚、嗅覚、場合によっては味覚は、「似ている」という感覚でつながり、それがイメージの記憶という形で溶けあっているように思えます。

もちろん、人においての話です。話は変わりました。

フランスの詩人シャルル・ボードレールの詩に「交感」とか「万物照応」と訳されているものがあります。原題は Correspondances なんですけど、簡単に言うと「五感が響き合う」ような感覚について歌っているみたいです。

(拙文「言葉は交響曲【言葉は魔法】」より引用)

「五感が響き合う」ような感覚——ですか……。

変換、交感、照応、共感覚といった言葉で、「似ている」とか「そっくり」という不思議な感じを分け、名づけ、手なづけようとするのがむなしく思えます。不思議さの前には、どんな小賢しげな言葉も無力だからです。

言葉で説明した気になったところで、ちょろいどころか、感覚という身体の「思い」はすくい取れない気がします。言葉はあくまでも言葉なのです。

#言葉 #日本語 #文字 #音声 #表情 #身振り #触覚 #味覚 #視覚 #聴覚 #嗅覚
#犬 #猫

相手を人として呼ぶ

＊

相手を人として呼ぶ

星野廉

2022年4月7日 08:00

目次

ひとり相撲

ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき

大きなもの

小さなもの

森羅万象を名づける、手なづける、飼いならす

ひとり相撲

まず、以下に拙文「見える言葉、見えない言葉」から引用します。

＊

猫や犬といっしょにいるときに、その表情や仕草や鳴き声を真似て、コミュニケーションを試みることがありませんか？ 私はそういうのが大好きです。

犬や猫を相手にしているときには、書き言葉は完全に忘れず。その存在すら頭にはありません。話し言葉は別です。相手に話しかけている自分がいますが、通じているかどうかは分かりません。むしろ通じていないほうが多い気がします。

犬や猫の表情や仕草や鳴き声を真似るのは意外と難しいものです。真似たところで、これもまた通じていると思えないほうが多いです。ひとり相撲をしていると感じます。でも、めげずに頑張ります。愛おしいからです。

猫や犬にとっての「似ている」と、ヒトの「似ている」は違う気がします。大きく異なるようです。つながっていないのです。

ヒトである自分が「似ている」という言葉で、無理につなげようとしているだけ。そんな思いに駆られます。言葉は、ヒト以外の生き物にはまず通じません。言葉の喚起するイメージでの共通点すら感じられないのです。

＊

引用は以上です。

身も蓋もないことを書いて、ごめんなさい。でも、本心なのです。

今回は、ヒトが、ヒト以外の生き物と無生物を相手にするときを使う言葉について考えてみます。

ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき

人はつねに意味とイメージとともに生きていますが、意味とイメージを意識することはありません。人にとって当り前の存在だからでしょう。意味とイメージは空気みたいなものだという言い方もできると思います。

ところが、ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき、意味とイメージが立ちあられます。

正確にいうと、ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき、ヒトは意味とイメージについて考えないではられないのです。

意味とイメージが通じない存在を相手にしているからです。ヒトにとっての絶対的な他者を感じるとも言えるでしょう。ヒトにとっての絶対的な他者とは、意味とイメージを共有できない相手です。

話しかけたり、表情や身振りで何かを訴えたとしても、それが通じているかは確認できません。ましてや検証など不可能です。相手の反応を見て、勝手に想像したり決めつけるしか方法はないのです。

たとえば、「この子と私は心が通じている」と信じるしかないという意味です。

＊

「この子」とはペットであったり、人形であったり、物であったりしますが、「この子」という言い方は人によって異なるでしょう。「この人」や「あなた・おまえ・きみ」の場合も考えられます。

いずれにせよ、話しかけるのであれば、人と見なしている部分が多かれ少なかれあるはずです。擬人とも言いますね。

人はありとあらゆる目に見えるものや目に見えないものを言葉にしています。名づけている、つまり名前を付けているわけですが、「品詞」という誰かが決めた分け方を無視すれば、あらゆる言葉が名前と言えます。

名前を付けた時点で人は、その対象を擬人していると私は思っています。ひとさまのことは知りません。

＊

自分が猫や犬と接するときを感じるのですが、擬人化は避けられないと思います。

ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がします。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれないかもしれません。

(拙文「意味が立ちあらわれるとき」より引用)

＊

名前を付けるという行為は、その対象を呼んでいるのです。「ねえ、〇〇さん（ちゃん・くん）」という感じでしょうか。呼び捨てとも考えられますけど、話しかけるのですから、呼び捨てはここでは考えません。

名づけるのは、相手を手なずけて、できれば飼いならそうという魂胆があってすることだと思われるからです。名づけるまでは下手に出ているのです。ところが名づけたとたんに、人は相手を見くだします。

ちょろいものだ、と。後に復讐されることもあるのは、みなさんご存じのとおりです。相手は、ぜんぜんちょろくはないのです。

大きなもの

海は大きいですね。しかも、地球上を被っています。つながって被っているのですから、とてつもなく大きいです。

その海を「海、うみ、ウミ、umi」と二音節、漢字で一文字、ひらがなとカタカタで二文字、ローマ字で三文字で名づけ、呼んでいることに本気で驚いても罰は当たらないと思います。

いまのは半分冗談ですが、半分本気で言いました。日本語でも英語もフランス語でも、どんな言語でもいいですけど、あれだけ大きなものをたぶん短い言葉で呼んでいるはずですよ。

人間にとって基本的な言葉ほど短い傾向があるからです。難しい話ではなく、辞書を見ると分かります。読むのではなく見るのです。短い言葉ほどたくさんの語義や例文があります。長い言葉ほど、語義や説明は短いのです。

辞書を目を細めてばらばらめくると一目瞭然ですので、ぜひお試してください。電子辞書ではなく、紙の辞書です。

＊

海というあれだけ大きなものを、ひとまとめにして海という小さな言葉で名づけているわけですが、海はいろいろな部分からなっています。

さまざまな状態の波、さまざまな状態の海水、さまざまな状態の潮の流れ、さまざまな状態の風、さまざまな地形の海底……。

私は生まれてから海を見た経験が十回以下なので、海について実感できることはきわめて少ないのですが、海のさまざまな部分には名前がついていて、それぞれのさまざまな状態にもそれを表す名前や言い方があるようです。

山も川も湖も平野も何でもそうにちがいません。

＊

海という言葉、つまり名前が抽象的なものであることが分かります。言葉では現実がすくい取れないからです。言葉は現実に追いつけないからです。

数でも重さでも大きさでも深さでも、圧倒的に言葉は足りないし欠けているからでしょう。言葉は軽く、すっきりしていますが、すかさずということです。中身がないから当然です。言葉は空っぽの器なのです。

その器に何かが入っていると、一杯だと考えるのは人だけです。これは、ギャグなのです。ヒトにしか通じないギャグです。

小さなもの

小さなものはどうでしょう。たとえば、米粒、砂粒、ダニ、プランクトン、ごま粒……。

詳しくないので、言葉に詰まっていますが、小さなものにも部分があり、その小さい状態はたまたまそうなのであって、数日前、数か月前、数年前、数十年前には、異なっ

ていたにちがいありません。

そもそも存在していなかった、つまり原子や分子レベルで別のものであった可能性が大きいです。

小さなものも馬鹿にできないという意味です。万物は流転するという言葉を思い出します。

名前とは、たまたまのもの、一時的な状態を指していることが分かります。小さなもの、言葉ではすくい取れません。

森羅万象を名づける、手なずける、飼いならす

人はありとあらゆるものを部分に分けて名づけたり、ある一時的な状態だけをとらえて名前をつけているようです。

勝手にやっているだけです。ひとり相撲なのです。ヒトにしか通じないすべりまくりのギャグをやっているとも言えるでしょう。ヒトは地球では孤独な存在ではないでしょうか。

なんで名づけるのでしょうか。やっぱり手なずけて、飼いならすためだと思えませんが。平たく言えば、ちょろいものだと思いたいのです。それとも寂しいのでしょうか。

何をちょろいものだと思いたいのかと言えば、森羅万象であり、世界であり、ひいては宇宙でしょう。ヒト以外のすべてをひっくるめて、言葉にしたいのです。

＊

言葉にすれば、辞書や事典や図書館やパソコンのハードディスク内に収めることができます。

ちよろいものだ。

ちよろいものだと思うためには、自分つまりヒトと似ていなければなりません。自分の土俵に呼ばないと、人は相撲が取れないのです。

*

これは持論なのですが、人には人つまり自分に似たものしか見えない気がしてなりません。森羅万象を目にしたとき、聞いたとき、嗅いだとき、触れたとき、口にして舌で味わったとき、人はそれが「何か」であってはならないのです。

その「何か」に出会ったとき、人はとりあえず、ある部分だけを見て、ある一時的な状態だけに注目して、とっさに名指すのではないのでしょうか。

名指すとは「何か」に呼びかけることなのです。それが擬人の第一歩だという気がします。

名を呼んだとたんに、「何か」が「何か」ではなくなるのです。これほどほっとすることは、人にはないだろうと思います。

人は言葉の世界にいるのではないのでしょうか。人だけが、とすべきなのかもしれません。言葉を手にすることで、人はこの星でひとりっぼっちになったのかもしれません。

うみやまと あいてをなづけ ひとひとり

#日本語 # 意味 # イメージ # 名前 # 森羅万象 # 擬人 # 表情 # 身振り# ペット # 犬
猫

鏡に移る

＊

鏡に移る

星野廉

2022年4月13日 14:37

目次

「移る・移す」、「写る、映る・写す、映す」

記憶をたどる

写す、なぞる

ふたり、二人、二人の自分

「移る・移す」、「写る、映る・写す、映す」

「うつる、移る、写る、映る、遷る」、「うつす、移す、写す、映す、撮す、遷す」。

こうやって眺めてみると、ずいぶんいろんなものが「うつる・うつす」に詰まっているなあと感心します。とくに、「移る・移す」と、「写る、映る・写す、映す」の間に落差を感じます。

(拙文「綾にからまれる、綾をなでる」より引用)

＊

いまでも、上で書いた「落差」を感じます。

どうしてなのでしょう。不思議だけでなく、わくわくもするので、考えてみます。

＊ 「移る・移す」：本体、移動

* 「写る・写す」：像、写真、転写、模写、複写、複製、コピー

* 「映る・映す」：像、影、鏡、映画、映写、反映、反射

本体が動いて移る、つまり移動するか、本体の像が写ったり映るのか。落差を感じるのは、この違いがあるからのような気がします。

そうだとすれば、かなり違いますよね。あるものがそのまま移動するのと、その像や姿形が転写されたり、映しだされるのとは根本的に異なるように思えてなりません。

それを「うつる・うつす」でひっくるめてあるのですから、不思議です。何かの間違いではないかと思うほどで、いろいろ想像してしまいます。

想像するといっても、根拠が薄いというか無いのですから空想とか妄想なのかもしれません。

記憶をたどる

でまかせを言うしかなさそうです。

昔の人は、「移る・移す」も「写る、映る・写す、映す」も似たようなものだとか、同じだと考えていたのかもしれませんが。

初めて水面に映った自分の姿を見たときの人は、さぞかしびっくりしたでしょうね。初めて鏡みたいなものを覗きこんだときも、です。

こういうときには、自分の記憶をたどるしかありません。よく覚えていないのですが、鏡はこどものころによく見ていました。不思議でした。ぞくぞくもしました。

*

見てはいけないものを見ているような変な気分になったこともあります。小学校に入

る直前に、母が毛筆で書いてくれた名札を鏡で見たときにはぶったまげで声を上げたことを覚えています。左右が反対になるのをそのとき初めて気づいたのです。

雨の後の水たまりに映った空を見るのが不思議で好きでした。青い空や空で動く雲を、おしっこを漏らしそうな気持ちで眺めていた記憶がよみがえります。

「映る・映す」は、私の中では身体のとくに下半身にくるぞくぞくとかわくわくなのです。なぜなのかは分かりません。あまり追求したくない気がします。

あえて言うなら、自分が二人いるからかもしれません。ちなみに、母子家庭で育った私はひとりっ子でした。友だちは多くありませんでした。

変な話になって、ごめんなさい。

写す、なぞる

「写す」は自分の中では「なぞる」です。

いちばん遠い記憶としての、「写す」は「撮す」ではありません。私の幼いころには写真は撮るものではなく、見るものでした。

その意味では写真と鏡はそんなに違いません。

いや、そうでもないかもしれません。鏡に向かうのは個人的な体験であり、秘密に近いプライベートな体験であるのに対し、写真は誰かつまり他人が撮ったもの、写したものであることが、異なる気がします。

この違いは大きいです。少なくとも私にはとても大きいです。

いまでも写真を撮ることは、ほとんどありません。私には縁遠い行為なのです。

*

で、幼いころの私が何をなぞったのかというと、絵であり、文字です。私のいちばん遠い記憶では、「絵は絵を見てなぞった」であり、「文字は文字を見てなぞった」なのです。

真似たということですが、真似るというよりも、なぞるのであり、なぞるのであり、撫でるのです。何だかこじつけっぼいですね。嘘っぼいですね。

文字をなぞるといっても、たしか小学校高学年で始まった書道とも違う気がします。

書道ではぞくぞくはあまり感じなくなっていました。退屈なだけでした。

そう言えば私には絵心也没有ありません。興味があるのは言葉による描写くらいでしょうか。あと写生文とか。

残念ですが、いまの私は「写る・写す」にはぞくぞくをあまり感じないようです。

ふたり、二人、二人の自分

気になるのは、「映る・映す」です。

いまはどうかと言えば、鏡を見ることはめったにありません。お化粧をする習慣がありませんし、朝シェーバーを使い、顔を洗った後にちょっと覗きこむくらいです。

＊

「あえて言うなら、自分が二人いるからかもしれません。」

上でこう書きましたが、もう少し追求してみます。

幼いころの記憶を呼びさましてみます。

自分が二人いる。自分一人だけで、もう一人の自分を見ることができる。会うことができる。二人っきりになれる。ぜったいに自分を裏切らないもう一人の自分に会える。

そんな気がします。言葉にすると、嘘っぽいのですが、あえて言葉で言えば、そんな感じだった気がします。

＊

さらに嘘っぽい話になりそうですが、鏡に映った自分の姿や、鏡を覗きこんで自分の姿に見入る自分を思うとき、「移る・移す」がなんとなく分かったような気分になります。

「移る・移す」と「映る・映す」が近いものを感じられて、両者の落差が消えるのです。

さらに言うと、鏡の中の自分は映っているというよりも移っているのです。反映というよりも移動を感じるのです。

＊

嘘っぽいですね。言葉の綾、つまり言葉の世界の論理と文法に染まって、言いたい放題になっている自分を感じます。

言葉の綾にとらわれて、言葉の喚起するイメージ（像や絵）がすくい取れなくなっています。

レトリックに走っています。

ひょっとすると「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」であることに、ビビって、うろたえているのかもしれませんが。とても気になることは確かです。よく考えると怖くないですか？

この辺で言葉から、いったん離れたほうがよさそうです。避難します。

では、失礼します。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 鏡 # 写真

「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」世界

＊

鏡に移る【引用の織物】

星野廉

2022年4月14日 09:38

さらに嘘っぽい話になりそうですが、鏡に映った自分の姿や、鏡を覗きこんで自分の姿に見入る自分を思うとき、「移る・移す」がなんとなく分かったような気分になります。

「移る・移す」と「映る・映す」に近いものを感じられて、両者の落差が消えるのです。

さらに言うと、鏡の中の自分は映っているというよりも移っているのです。反映というよりも移動を感じるのです。

(拙文「鏡に移る」より引用)

＊

「鏡に映る」というよりも「鏡に移る」という気がしてきました。過去の記事で「鏡」が出てくるものを読みかえしてみたいと思います。

お付き合いいただければ、うれしいです。

目次

一人でいるべき場所

トイレ同盟

プライベートな場所

言葉は交響曲

そっくりという、まぼろし＊
S、M、そしてM寄りのH
捨てられた名前たち
動画を視聴しながらとりとめなく考える
目まいのする読書

一人でいるべき場所

人間には一人でいるべき空間がある、と彼女はよく考える。寝床、風呂、鏡の前、ストレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。一人でいるのがいちばん楽、一人でいる時がいちばん幸せ。家や学校や社会で、トイレこそが彼女にとって一人でいられる場所であり、安らぎを得られる空間だった。

男とホテルに入ることが終わるたびに、里沙はトイレに閉じこもった。便座やバスタブの縁に腰かけてスマホをいじったり、壁やドアの模様や染みを眺めながら考えごとをしたり、壁に寄りかかってうとうとしながら帰る時間を待ったものだった。

相手の意向にかかわらず、ホテルに行くことでその関係は終わった。トイレに閉じこもらなければならぬことに、うんざりした。

(拙文「一人でいるべき場所」より引用)

トイレ同盟

川端康成の『掌の小説』(新潮文庫)にはいろいろな形式の掌編が多数入っていて、どこからでも手軽に読めるのでファンが多いと聞きます。詩のような小品、物語調、説話風、童話風、心理小説、幻想小説、ミステリー、私小説、随想、怪談、ヴィリエ・ド・リラダンの意味でのコントといった具合です。

”私の家の厠の窓は谷中の斎場の厠と向かい合っている。

二つの厠の間の空地は斎場の芥捨場である。葬式の供花や花環が捨てられる。”

(川端康成作「化粧」(『掌の小説』所収)より引用)

こうして、向かい合ったトイレの窓に見える「老婆」の化粧をする様子や、「十七八の少女」が涙を流した後に「小さい鏡を持ち出し、鏡ににいと一つ笑う」のを観察する「私」の辛らつで残酷な眼差しを描く掌編『化粧』の筆致は見事です。こういう視点から

文章が書ける川端を恐ろしく思います。

ただし、この作品をたとえばショートフィルムとして映像化した場合を想像してみると分かるように、単なる「覗き」の話なのです。でも文章で読むと、そういう印象は受けません。少なくとも私にはそうです。引きこまれてしまうからでしょう。川端の小説は、見方を変えると単なる「〇〇」——あえて書きませんが、ここにはいろいろなレットが入ります——だと思われるものが多い気がします。

たとえば『雪国』の冒頭の「指」が出てくる場面や、『眠れる美女』、『片腕』、『みづうみ』を思い出してみてください。よく考えると変であったり、エロかったり、反社会的な行為が描かれますね。でも美しかったり綺麗だったり哀しかったりして、ぐんぐん読ませるし人を感動させるのです。私のいう川端の恐ろしさとはそういう意味です。言葉の魔術師だからでしょうね。

川端康成の作品において「指」と「手」は重要な意味を持ちます。一方、谷崎潤一郎においては何といても「足（脚）」でしょうね。

(拙文「トイレ同盟」より引用)

プライベートな場所

隣人のストーン夫妻が車で旅立つのを手を振って見送った後、妻のアイリーンは自分たちも休暇を取りたいものだと夫に漏らします。

”そして彼の腕をとって自分の腰に回し、アパートの入口の階段を登った。”

(引用はすべてレイモンド・カーヴァー作『頼むから静かにしてくれ (THE COMPLETE WORKS OF RAYMOND CARVER 1)』村上春樹訳 (中央公論社刊) による)

この描写は、後の展開を知っていると象徴的な仕草に見えます。つまり、伏線とも取れるのです。

夕食を終えると夫のビルがストーン夫妻の住まいに入り、頼まれたとおりに猫に餌をやった後に、バスルームに入る。そして鏡に映った自分の顔を見る。ここまではいいのですが、次に薬品戸棚からハリエット・ストーンに処方されている薬の瓶を見つけて、それを何とポケットにつっこむのです。

この神経は尋常ではないにもかかわらず、抑制された文体で淡々と描写されているために、あれよあれよと読んでしまうとすれば、レイモンド・カーヴァーの術中におちいったことになるでしょう。さらにビルは、居間で植木に水をやったその手で酒の入ったキャビネットを開け、奥にあるウィスキーを取り出して、瓶からふたくち飲みます。

ビルがストーン夫妻の部屋から出るところを引用してみます。

”彼は明かりを消し、そっとドアを閉め、鍵のかかっていることを確認した。何か忘れものをしてきたような気がした。”

何気ない描写ですが、短編や掌編を書き続け、さらには何度も書き直したという職人のようなカーヴァーの作品を目前にしたときには、書かれている言葉を舐めて味わうようにして、ゆっくりと読み進めたいです。「何か忘れものをしてきたような気がした。」というセンテンスが気になります。意味不明というか不可解なので、不気味でもあります。

(拙文「プライベートな場所」より引用)

言葉は交響曲

想像してみてください。性行為は五感を総動員した体験であり出来事ではないでしょうか。

交響楽にたとえてもいいと思います。書き言葉や話し言葉以外の広い意味での言葉を相手（人間であったり物であったりします）とやり取りしたり、あるいはひとりの時にはいわば鏡の中の「他者」（空想であったり想像や記憶であったり画像や音声であったりします）とやり取りするわけです。

言葉は交響楽。

言葉は交響楽団。

言葉は管弦楽。

言葉は管弦楽団。

言葉はセッション。

言葉はジャム・セッション。

(拙文「言葉は交響曲【言葉は魔法】」より引用)

そっくりという、まぼろし*

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形（自分の姿）ではなく「とき」（自分のイメージ＝心象）であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがいません。他のものを見るのとは異なる次元にいたいというくらいのお話なのです。

ひょっとすると、鏡の前では見ているのではなく、おののいているとしか考えられません。それくらい鏡を覗くと緊張するのです。たとえば、鏡に映っているとされる自分を見つめながら、いきなり目をつむるとしますね。そのときに瞼の裏か頭の中か知りませんが、自分の顔が浮かんでほしいのに浮かばないのです。

浮かべ浮かべと念じて、浮かぶのはいつか見た写真に映った自分の顔であり、ほんの数秒前に鏡に映ったはずの自分の顔ではないのが不思議でなりません。つまり私の頭の中にある自分の顔は、ぜんぶ写真で見た顔だということになります。

とにかく見えないのです。ひとさまのことは知りません。問いただすような親しい相手がいらないからなのですが、たとえ親しい人がいたとしても、恥ずかしくて尋ねる気にはならないでしょう。親しい人とはこのたぐいの話はしたくはないのです。

(拙文「そっくりという、まぼろし*」より引用)

S、M、そしてM寄りのH

しつこくて申し訳ありません。ただいま繰り返した、以上の文章なのですが、何かに似ていませんか？ 言葉です。言葉ほどMの資質を備えているものはこの世にないと思っています。とはいえ、言葉のせいではありません。言葉はヒトがつくった鏡なのです。鏡の国、そして不思議の国に住んでいるヒト。したがって、こういう状況を自業自得とも言います。

そうなのです。ヒトはMの世界に生きているとも言えそうです。それを看破したジル・ドゥルーズはすごいです。特に『意味の論理学』のドゥルーズです。

音であり文字でしかない、つまりきわめて抽象的な存在でもあり、言い換えると「外からやって来ている」言葉に、意味やイメージをになわせているのは、ヒトなのです。

(拙文「S、M、そしてM寄りのH」より引用)

捨てられた名前たち

小学校に上がる年、母から自分の氏名を書く練習をさせられた。正式に字を書くのは初めての経験だったと思う。ひらがなと漢字の両方を何度も書かされた。母の真剣な表情が怖くて緊張した。緊張するために、うまく書けない。書いてもすぐ忘れる。すぐに忘れる自分に苛立ち、不安にも感じた。それは母の感情そのものだったにちがいない。ふたりだけの家庭。ふたりの関係は濃密なものだった。

入学式が近づいたある日、母が名札に毛筆で名前を書いてくれた。その時、緊張した面差しで筆を運んでいた母の様子をぼんやりと覚えている。硯で墨をするさいの涼しげな匂いが、かすかに鼻を突いて心地よかった。

新聞紙か折り込み広告の上に何度か下書きをした母が、ようやく清書し、私の左胸に安全ピンで名札をつけてくれた。私は喜んで鏡の前に立った。私は声を上げた。奇妙な

虫が名札にへばりついていた。真っ黒でくねくねした虫だった。その様子を見ていた母が笑った。鏡に映った物が左右に見えることを、私は知らなかったのである。文字を鏡像として見て、初めて鏡の性質に気づいたらしい。

今、私は母の手帳に書かれた名前の羅列をながめている。同じ姓を冠して並んでいる名前たち。男名。女名。苗字なしで列をなしている名前たち。

女性の名にはひらがなだけのものもある。「——子」というふうに、ひらがなの下に漢字が添えられている名もある。男名は漢字のものばかりだ。私の名と漢字で一字違いの名がある。結局は、捨てられた名前たち。みんな、どこかで生きている気がする。

(拙文「【掌編小説】捨てられた名前たち」(「音の名前、文字の名前、捨てられた名前たち」所収)より引用)

動画を視聴しながらとりとめなく考える

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

あ、これ、〇〇の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本っぽいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。

自分を真似る。自分に似せる。自分を模倣しつづけることは、随時更新することだと

も言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

自分であると思こんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいるはずですが、自分を眺めることが他者を認めることでないと誰が断言できるのでしょうか。鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと思います。自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。鏡（この鏡を比喻と取っていただいてもかまいません）に映っているものは「似たもの」なのです。「何か」そのものではありません。

何かに似ているのです。その何かは何なのかは分からない。ひょっとすると、鏡（この鏡を比喻と取っていただいてもかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、です）に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。影やまぼろしが自立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもてあそばれていないのでしょうか。主導権を握られていないのでしょうか。

(拙文「動画を視聴しながらとりとめなく考える」より引用)

目まいのする読書

パトリア・ハイスミスの小説 The Talented Mr. Ripley については、近いうちに記事にするつもりです。この小説を原作とした映画は邦訳と同じく二つのタイトルで二種類あります。興味を持たれた方は、小説でも映画でもいいので、ぜひお楽しみください。いい意味での目まい感のある作品です。

ここでは、アラン・ドロンがトム・リプリーを演じ、ルネ・クレマンが監督した「太陽がいっぱい (Plein Soleil)」を紹介します。

長時間じっとしてられないために映画を見るのが苦手な私は、短時間で見られる映画のトレーラー（予告編）が大好きなのですが、数種類あるトレーラーでは以下の動画

がいちばん「まとめ」的で面白かったです。「似ている」→「似る・似せる・真似る」→「なりきる」→「なりかわる」という、この作品のスリリングなテーマがよく分かる作りになっています。

とりわけ好きなのは、アラン・ドロンが鏡にへばりつき唇を寄せるシーンと、筆跡を真似る有名な場面です。

以下は、他人に「似る・似せる・真似る」と「なりきる」を超えて「なりかわる」（偽造も出てきます）身振りに的を絞った編集の珍しい動画です。何度見てもわくわくします。

拡大された署名をアラン・ドロンがなぞるシーン（動画では2:40から始まります）はとりわけ象徴的です。活字ではなく本人がペンでなぞった（書いた）文字を偽者がなぞる。その身振りは愛撫にも見えます。誰を愛撫するのかといえば自分なのです。なろうしている自分というべきでしょう。

（拙文「目まいのする読書」より引用）

＊

この記事を読みかえし、「鏡に映る」というよりも「鏡に移る」という感覚がさらに身近なものに思えてきました。

自分の中に起こりつつある「映る」から「移る」への心の移行を感じます。

この記事には「写す」「なぞる」「似ている」「なりかわる」も出てきます。

「うつす、映す、写す、なぞる、似る、似ている、似せる、なりかわる、かわる、なる」「本物、偽物、本体、写像、影」という、一連の「つながり」と「うつり」が見えてきた気がします。あくまでも個人的なテーマですけど。

今回、過去の記事を振りかえり、気づいたことがいろいろあり収穫がありました。お付き合いいただき、ありがとうございました。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 鏡 # 映る # 移る # ジル・ドゥルーズ# 川端康成
パトリシア・ハイスミス # アラン・ドロン# レイモンド・カーヴァー

写される、撮られる、奪われる

＊

写される、撮られる、奪われる

星野廉

2022年4月16日 10:40

目次

写真をとる、とられる

手で「と」る

作文

とる、うつす、うつる

奪われる

写、射、斜、車・指す、差す、刺す、射す、挿す

「見る」は暴力

映像に囲まれた世界

写真をとる、とられる

写真を写す、写真を移す、写真を撮す、写真を撮る。

私はふだんは「写真をとる」と言いますが、そのときに「撮る」という漢字は浮かびません。「写真を撮る」と書いた記憶がほとんどないのは、写真を撮る機会がないからでしょう。

撮ってもらったことのあるところや若いころの写真はたくさんありますが、自分で撮ったものは少ないです。スマホで撮ることもめったにありません。写真は私にとっては「とられた」ものなのです。受け身の過去形です。

手で「と」る

「とる」が気になって辞書を見てびっくりしました。二つのことに驚いたのです。

一つは、「とる」を辞書で引いたことがないのに気づいたこと、もう一つは、「とる」の語義と例文の多さです。

「とる」は私にとってはわくわくする言葉ではありません。だから、辞書で調べたことがないのだと思います。うすうす感じてはいましたが、言葉に関して自分がかなり「偏食」していることに気づきました。

＊

「とる・取る・採る・捕る・執る・撮る・盗る・摂る・獲る・録る・（照る）」

「手」と同源という記述が衝撃的でした。

手でとる、「て」で「と」る。

言えています。わくわくします。

＊

たしかに「手でとる」場合が多いですね。手で何かをわしづかみにする、手にぎってとる、手でつかんでとる、指を曲げて引っ搔くような手つきでとりよせる、手で引っ搔いてとりのぞく。

そのときの手の形が見えるようです。文字につられて無意識にその手つきをしている自分がいます。

作文

言葉は文の中で生きます。「とる」はたくさんありますが、気になった「とる」を使って作文をしてみます。

ネズミをぜんぜん捕らないうちの猫がスズメを捕ってきた。

手取り足取りでやり方を教えてもらった。
免許を取って、何年になるの？
お互いに年を取ったものだね。
痛みを取る薬の服用には気をつけたい。
それは明かりを採るための天窓だよ。
文字どおりに取ると馬鹿を見る。
舵を取るのがうまい人とへたな人がいる。

この数年間写真を撮ってもらっていない。
この書類のコピー（写し）を二部とってください。
ねえねえ、あの番組を録ってくれた？

＊

なかなか面白いですね。初めて辞書で引いた「とる」がこんなにわくわくするものだとは思いませんでした。きょうの収穫です。

たしかに手を使つての「とる」が多いので唸ってしまいました。

とる、うつす、うつる

当たり前ですが、「とる」とその瞬間に、あるいは次の動きとして何か移ります。移動するのです。当たり前ですが、感動してしまい、さらには考えこんでしまいます。

話がどんどん広がりそうなので、「写真を撮る」に絞ります。

＊

村人のこどもの写真を観光客が撮ったことが大騒ぎの原因となった。

いま即席に作った文ですが、何かで見聞きした話です。

写真を撮ることがタブーの社会があるそうです。これは何となく分かる気がします。

とる、取る、捕る、盗る。

「とる」とは、何かを「奪う」ことである場合があります。何を奪うのでしょうか？大切なものですね。それも、かなり大切なものです。

命、心、魂、未来、財産。

奪われる

人の写真を撮る、その人の姿を捕る、その人の姿を写す、その人の何かを写す、その人の何かを撮る、その人の何かを録る、その人の何かを盗る、その人の何かを奪う。

大ごとですよ。大変なことになりそうです。私もとられたくないです。うつされたくないです。うばわれたくない。

この気持ちには始原的なものを感じます。頭で理解できるというよりも、体で分かるたぐいの感覚ではないでしょうか。

*

何者かに拉致され、連れて行かれたところで、写真を撮られた。

これは怖いですね。でも、ありえます。いまの世界情勢を見ていると、ありえるし、似たようなことが起きているようです。

カメラは手に持って撮ります。カメラには目があります。レンズのことです。その目が盗るのです。奪うのです。

写、射、斜、車・指す、差す、刺す、射す、挿す

カメラの中にはレンズの部分が長いものがあります。銃を連想します。

英語では写真を撮ることを「shoot」と言う場合がありますが、「射撃する」という語義もある単語です。ツーショット (two-shot) は、ここから来ている映画用語だったよう

です。shot は過去分詞でしょう。

発射する、矢を射る、爆破する、突く、注射する、放射する、シュートする、芽を出す、言葉を連発する。

shoot には、こんな語義もあります。そうです、あえて書きませんでした、あの意味もあります。あらためて見ると、圧倒されますね。

写、射、斜、車、シャッター、カシャッ、射る、入る——こういう感じがするのです。指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。

(拙文「なぞる、なする、さする、なでる」より引用)

「写真を撮る」に相当する英語としては、take pictures や動詞の photograph が浮かびますが、shoot の生々しさと激しさには圧倒されます。sh という子音と oo という長母音の組み合わせが恐怖をそそります。

なお、sh という摩擦音については、蛇が動くさいに出る「シュシュ」という音を連想させるという説があるそうです。恐怖を覚えるとすれば、ヒトの遠い記憶が呼びさまされるのでしょうか。

そういえば、蛇も銃も望遠レンズもあれも長いですね。足のことですよ。いまのは蛇足ですが。

「見る」は暴力

ドSな目とか、ドSな眼差しという言い回しがありますが、「見る」行為にはサディズムの匂いがします。

しかも、一方的に見る行為は、相手を傷つけます。相手が見られていると知っていても分かっている、盗見られているの知らなくても、傷つけていることに変わりはない

りません。

「見る」は、暴力なのです。「見る」は、奪うことであり、奪われた相手は萎えます。弱るわけです。何かを吸い取られたと感じる人もいるにちがいません。やっぱり「とられる」のです。

連想するのは、いわゆるポルノなどの性的な映像ですが、それだけではありませんね。どんな映像にも暴力の匂いや力関係（マウントを含めて）がともなうと言えそうです。

あと、いわゆる不祥事を起こした芸能人に向けられるレンズの長いカメラの放列や刺すような視線も暴力でしょう。

そうした映像を視聴することで、暴力や犯罪に加担する場合もありうるのです。（※偉そうなことを言って申し訳ありません。はい、私も見ていました、ごめんなさい。）

被写体という言葉が痛々しく見えてきます。

映像に囲まれた世界

みる（目）、とる（手）、うつす（移動）、うばう（消える・無くなる）。

うつす、写す、映す、移す。

*

これは「移っている」ではないでしょうか。影という実体のないものではなく、紙と鉛筆の粉、印画紙、フィルム、画素に形や模様として存在しているわけですから、「移った」という気がします。

気がするどころか、移った影は人の外にあって物として確認できるのですから、「移った」と言わざるをえません。しかも残るんです。

すごすぎます。こんなことをしているのは、この星でヒトだけです。人はとんでもないことをしているのです。

「写す」は「移す」であり「残る」。

何かに似ています。

分かりました。あれです。

後で触れることになるとと思いますが、文字に似ています。文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。

こんなものは地球上に文字以外にないのではないのでしょうか。人はこの時点でも、せつせと写し、移し、残しています。

（拙文「うつるとうつすで影を編む」より引用）

＊

私たちは映像に囲まれて生きています。持論なのですが、文字も映像ではないでしょうか。漢字の象形文字的な性質とは別にです。

文字を見て、私たちは像（イメージ）を思いうかべたり、思いえがきます。これは、文字を学習した成果とも言えますが、よく考えると驚くべきことに私には思えます。謎なのです。

映像であれ、文字であれ、その根っこには「うつす」があるようです（文字は書き写して覚え学習します）。「うつす」があれば「うつされる」もあるはずです。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。

＊

みる・みられる、うつす・うつされる、とる・とられる、うばう・うばわれる。

単なる「見る」が「奪う」に容易に移り変わる世界に、私たちは生きているのではないのでしょうか？

テレビやネット上には、連日祖国から身を移す人たちの映像が映しだされています。奪われた姿を撮られていると言えます。それを私たちは自宅で見ているのです。あの人たちも、少し前までは見る立場にいたのです。

私たちは、必ずしも「する」側にいるのではなく、「される」側にいるもいる。このことに敏感でありたいと思っています。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 文字 # 鏡 # 写真 # 映像 # 映画# 動画

眠れない夜の遊び

＊

眠れない夜の遊び

星野廉

2022年4月17日 14:04

目次

言葉を転がす

顔をうつす

マスク

声を移す

真似る、シンクロ、影

取り憑く

呪術の時代に生きる

言葉を転がす

眠れない夜や、寝入り際に、私は言葉を転がします。

どうするのかと言いますと、ある言葉やフレーズをポンと投げて、それから連想する音（発音）や文字やイメージを、別の言葉ですくい取るのです。

たとえば、「犬・いぬ」が「去ぬ」になるのは同音のつながりです。「犬・いぬ」が「廉」になるのは、前に飼っていた犬の名前という連想です。「犬・いぬ」が「影」に転じるのは偶然です。

とりとめのない遊びであり戯れなのです。こんなふう言葉に転がしているうちに、眠りが訪れることもあり、目がさえてしばらく眠れないでいることもあります。

＊

私の書く記事はだいたい、言葉を転がしてできあがります。いい加減な人間なのです。

とっかかりがない状態で書く場合が頻繁にあります。とっかかりがないので、言葉をポンと投げて、言葉と呼ぶ感じで作文します。

今回はそれを意識的にやってみたいと思います。最近の記事に出てくる言葉、わくわくする言葉を投げたり、転がしたり、組み合わせながら作文してみることになります。

顔をうつす

「顔」も「うつす・うつる」も私の大好きな言葉です。字面を見ただけで、自分で口にしただけでわくわくしてきます。

＊

顔を映す。

鏡ですね。

顔を写す。

写真ですね。

顔を移す。

私の中では、鏡であり写真のことです。ただ、ひとさまは「顔を移す」でどんなイメージをいただくのかは分かりません。想像するだけです。

デスマスクでしょうか？ デスマスクもマスクです。すぐにこういうくだらない駄洒落が出ます。以前に記事でも書いたギャグです。

デスマスクは顔を移していますよね。その制作過程を想像すると怖いです。私はしたくないです。仕度無いデス。そんな心の準備ができていません。

マスク

マスク、仮面、マスカレード、仮面舞踏会。

わくわくしますね。

マスカレードといえば、この曲を思い出します。しかも、この動画を思い出します。

(動画省略)

カーペンターズによる This Masquerade ですが、なぜかマルグリット・デュラスの自伝的小説の映画化作品である『愛人/ラマン』(L' Amant) の映像が使われた動画になっています。

YouTube の醍醐味は、こういう編集に出会えることです。

その「なぜか」の偶然がすごくいい味の動画になっていることに驚きます。何度視聴したか覚えていないくらい好きです。音源も大きめで、中途難聴者の私には聞きやすいです。

*

デスマスクからマスカレードに来ましたが、この曲にうっとりしたので、次に行きます。

声を移す

声を移す。

声もわくわくする言葉で好きです。録音のことですね。

声を録る。

レコード、テープレコーダー、デジタル録音という流れでしょうか。

*

声を移すといえば、エコー、つまり、こだま、硯、木魂、木霊です。どの漢字もいい字面をしています。ぞくぞくします。「やまびこ」とも言いますね。山彦は名前みたいに見えます。海彦さんを思い出します。

自分の顔を水面に映して、恋して、水に落ちたという西洋の伝説がありますが、いろいろなバージョンがあるみたいです。諸説ありというやつです。

その水に落ちたナルキッソスが、こだまであるエコー（エーコー）という精霊と絡んでくる説もあるそうです。

*

姿を水面に映す。姿が移る。
声が移る。声が響く。声が伝わる。
音が移る。音が響く。音が伝わる。

いま人はこうした自然界の現象を自分で作り出すようになり、その作ったものに取り憑かれています。

自分の作った物に嗜癖しているのです。その最たるものは映像（姿）でも音楽（音声）でもなく、文字（意味）だと私は思います。

姿が伝わる。
声が伝わる。
音が伝わる。

言葉（音と形）が伝わる。

音声と文字が伝わる。

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

眠れない夜には、こうやって言葉を転がすのです。

こうした連鎖にイメージの韻を感じます。イメージが重なるという意味です。面白いですね。勝手につなげて感心していれば世話ないですけど。

広がりすぎたので、話を戻します。

真似る、シンクロ、影

声を移す。

声を真似る。声帯模写。

振りを真似る。形態模写。

私はこどものころから、物真似が大好きでした。物真似番組とかそっくりショーのたぐいには目がなかったのです。いまも「似ている」が大好きで好きすぎるくらいです。

これまでに「似ている」とか「そっくり」をテーマにずいぶんたくさんの記事を書きました。あらためて見ると呆れるほどです。

最近では「シンクロ」にも手を出していますが、基本的には「似ている」なのです。

「影」も「似ている」に似ています。こういうレトリックというかギャグの根っこにあるのも、「似ている」なのです。ここまで来るとビョーキかもしれません。

「似ている」に取り憑かれているようです。

取り憑く

霊が乗り移る。

霊が取り憑く。憑依。

このところ「うつる・うつす」をテーマに記事を書いてきましたが、「移る」の中に「乗り移る」という意味があるのがずっと気になっていました。

木の影が地面に映る。影が地面に移る。

木の影が水面に写る。影が水面に移る。

上のような例文の記事に使ったこともありましたが、こんなことをやっているうちに、私にとって「移る」がリアルにイメージできるようになってきました。

「映る」も「写る」も、ぜんぶ「移る」に面倒見てもらいましょう。そんな気分なのです。

なぜかと言いますと、みんな「移る」からなのですが、何が移るのでしょうか？

魂と心です。

心や魂が移るのです。姿だけではなく。

呪術の時代に生きる

心や魂が移るなんて、怪しいですか？ 妖しいですか？ 危ういですか？ 馬鹿らしいですか？

そうかもしれません。

でも、あなたは愛する人の写真を踏めますか？ 姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふう加工されて、冷静でいられますか？ 姿が映ったものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシヤスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのですよ。

めっちゃくちゃ言って、ごめんなさい。「映る」も「写る」も「移る」だというのは本心だし本気なのです。正気かは不明ですけど。

なにも、おどろおどろしい話をしているわけではありません。誰もが日常的に体験していることです。

＊

私たちは未だに呪術の時代に生きている、とまでは今回は言いません。

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 文字# 漢字 # 鏡 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画
呪術

なぞって、真似て、なる

＊

なぞって、真似て、なる

星野廉

2022年4月18日 14:34

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

眠れない夜には、こうやって言葉を転がすのです。

(拙文「眠れない夜の遊び」より引用)

目次

「真似る」を「うつる」で説明する

分身

あの世

魂がうつる

心が移る、気持ちに移る

「似ている・似る・似せる」「なる」「かわる」

ある、いる、いく、なる

形でも模様でもなく、顔

「真似る」を「うつる」で説明する

「真似る」と「うつる」はどちらも私の大好きな言葉で、わくわくするのですが、「真似る」を「うつる」で説明してみましょう。

やったことはありません。両者をからませると面白いことになりそうです。

＊

「真似る」と「学ぶ」は同源だそうです。たしかに似ています。「似ている」「似せる」「似る」ともからみそうですね。

言葉を真似ることで言葉がうつる。映る、写る、移る。

なるほど。自分で感心してしまいます。鏡や影みたいに映る。写真やコピー機みたいに写る。ある人から別の人に移る。要するに「伝わる」わけです。

こういう言葉の連鎖、イメージの連鎖が快いです。言葉の世界、イメージの世界、現実の世界がまじわる部分に身を置いているような気分になります。

この三つの世界は、そんなものがあるとしての話ですが、別個に存在するのではなく、三つの輪が重なりあってまじわるような形で「ある」ようにイメージしています。

人は、言葉の世界、イメージの世界、現実の世界という三つの世界を行ったり来たりするとも言えるでしょう。

分身

分身、もう一人の自分、片割れ、影のような存在。これはなかなか魅力的なイメージですね。

鏡、写真、動画、日記、自分で書いた作文、こども、きょうだい、おや——こういったものは分身という言葉でくれそうです。

分身の相手には何がうつる、あるいはうつっているのでしょうか。

*

分身には、姿（顔・身体）、魂、気持ち、気分、心、記憶、知識、血（血縁）、DNA、癖（表情・仕草・身振り）、声（声の質、話し方、口調）といったものが、うつり（移・写・映）、つたわり、模倣・学習されているのではないのでしょうか？

分身には「うつる」要素が満載なのです。これだけのものが、自分と相手の間で「うつる」可能性があります。あとは「うつる」濃度でしょうか。

頭に思えがこうとすると、ぞくぞくします。さまざまな分身がありえますが、通底するのは「愛おしさ」ではないでしょうか。食べてしまいたいほど愛おしいのです。

官能的で、エロチックにさえ感じられます。そもそも自分以外の自分というのは結合や合体に近いものがあります。結合や合体は別れでもあるわけです。

もともと異なるもの、同一ではないもの同士が出会い、くっつくのですから当然です。異なるものであった痕跡と記憶がある限り、別れはつねに意識されます。

いつか別れ別れになるのではないかという思いがあるからこそ、激しく結びつこうとします。

＊

相手に自分を感じる。他人に自分を見る。外見は違っているのに、血でつながっている。まったく知らない者同士が、遺伝子の検査できょうだい、あるいは親子だと判明した。

前世でつながっていた。前世では一個の人間だった。前世では親子だった。前世で、再会を約束していた。こういうのも、きわめて観念的ではありますが、一種の分身でしょうね。

観念であるがゆえに、燃えてしまうなんてありそうです。人は観念で欲情する生き物です。ポルノがいい例です。

あの世

あの世。天国とまでは特定しません。ざっくりあの世としておきます。

あの世に移る。

いい言葉ですね。移動の意味の「移る」が希望をいだかせてくれます。楽観的なフレーズと言えるでしょう。

あの世に遷る。

「遷る」は都なんかが移転するときに使う漢字のようです。遷都と言いますね。左遷の遷でもあります。変遷、遷宮も思いだします。基本的には「移る」なのですが、用法が限られています。

そうした知識はさておき「遷」という見慣れない漢字、あまり使ったことのない文字に異和感（違和感ではなく）を覚え、異化も感じ、なんとなく「いいなあ」と思ってしまおう自分がいます。

あえて理屈をつけると、「遷」は訳ありっぽいのです。単なる「移動」ではなく、なんか背景に事情がある気がして、「あの世に遷る」なんて書くと、「なんで？」とか「どうしたの？」と呼びかけたくなるのです。

勝手に呼びかけている。ですよ。一人で盛り上がって失礼しました。

魂がうつる

魂がうつる。魂をうつす。

文字どおりに取ってイメージする、つまり視覚的な絵として想像するのが難しい気がします。観念的であり抽象的なのです。

その身振りや動作をしろと言われても、戸惑います。比喩、暗喩ととらえて、具体的な動作に置き換えないと無理に思えます。

写真、とりわけ肖像や遺影には魂がうつっていきそうですね。愛する人、近親者はもちろん、知らない人であっても、その姿が写っていたり映っていると、魂が移っているように思えてなりません。

おろそかにはできないのです。

遺品整理は大変な作業でしょうね。いろいろな物に魂がうつっていると考えると、私にはできそうもありません。自分の生前整理どころか、唯一の肉親だった母の遺品整理もほとんど手をつけていません。

そのくせ、自分は神仏のたぐいは信じていないと信じているのです。魂と神仏という言葉は私の中では結びつかないのですが、人それぞれですよ。

心に移る、気持ちが移る

魂から話に移り、ほっとします。

心や気持ちは、魂と重なる部分がありますが、魂は重い言葉だと痛感しました。

心が彼女に移った。彼の心移りが許せない。心変わりをした。

その計画のほうに気持ちが移りつつある。気持ちが傾く。

ある人から別の人へと、誰かの気持ちが移るよりも、心に移るほうがずっと深刻な気がします。

気を持ちようや心の持ちようと心では大違いですよ。心は本尊みたいなものです。その本尊が移ってしまうなんて、想像しただけで悲しいし、心移した相手が憎くなりそうです。

*

こうやって、言葉を転がすことで、言葉の世界から思いの世界へ、さらには現実の世界を想像することができます。一時的な疑似体験みたいなものでしょうか。

これも、心や気持ちが移ることなのでしょうね。

「似ている・似る・似せる」「なる」「かわる」

「似ている・似る・似せる」「まねる・まなぶ」「なる・なりかわる・なりきる・なりすます」「かわる・ばける・てんじる」

私にとっては失神しそうなほど強烈なわくわくぞくぞく感をいだかせる言葉たちです。

こうした身振りや動作や仕草がぜんぶ入っている作品があります。

パトリシア・ハイスミス作の小説『太陽がいっぱい』と、その映画化された作品である『太陽がいっぱい』です。

以下の記事をお読みいただくのがいちばんいいと思います。

(記事へのリンク省略)

まだこの一連の言葉の連鎖とテーマについては語るものがたくさんありそうですが、いまの体調では無理なようです。

考えただけで息切れがしてきました。

ある、いる、いく、なる

記事の冒頭で引用した言葉の羅列をもう一度眺めてみましょう。

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

こうした動きや姿やありようは、あらゆる生命に見られる気がします。生命、生き物はそうした過程を経ることで「生」をいとなみ、まっとうするのではないのでしょうか。

無生物でもそうしたありようが見られる気がします。たとえば、雲の形、水（液体、気体、固体）、岩・石・砂、光と影のありようが、そうです。長い目で見れば、あるいはごく短いスパンで見れば、生物か無生物かにかかわらず、万物流転という感じがします。

もちろん、人が勝手に見たありようにちがいはありません。人の思いや知覚とは別個に「ある」のでしょう。

＊

人が「ある・いる・おる」から「いく・生く・活く・行く・ゆく・往く・逝く」や「なる・生る・成る・為る・慣る・馴る・熟る・鳴る・萎る・褻る」へと「うつる」。

いま書いた文はたわむれですが、私には「言えている」ように感じられてなりません。あくまでも個人的なイメージです。

個人的なイメージは、他人には荒唐無稽に見えるものです。

「アホか」「馬鹿らしい」で済ますことができます。それでいいのでしょう。他人のことがすらすら分かるほうが荒唐無稽なのですから。

＊

言葉にそなわった音と形。これは人の外にあるものです。一瞬で消えていく音声、あるいはしばらくは残る文字の形としてあらわれるという意味です。人の外にありますから、音や形として確認できます。具象とか具体とか物と言えるでしょう。

その音と形が、人に意味やイメージをいだかせます。これは人、しかも各人の中にあるものです。中にあるのですから、確認できません。観念とか抽象と言えるでしょう。

＊

外にある言葉の音と形は、誰もが生まれたときにすでに外にあったものです。それを

真似て学ぶことができるのは、自分の外にあるからです。その外にある音と形を、耳や目や指や手で知覚し、なぞることによって、真似て学ぶわけです。

繰り返えし繰り返えしなぞり、真似ます。学習ですね。これは一生続きます。

*

言葉の音と形は、人の外にあって、人の中に入ってきます（なぞる・まねる）。そして出ていきます（はっする・はなす・なぞる・かく）。

人の中でどうなっているのかは確認できません。想像するしかないのです。手がかりは中から出てきたものでしょう。とはいえ、出てきたものもまた、音と形なのです。それしか確認できないのです。

*

どういうことなのでしょう。なんでなのでしょう。

不思議ですね。謎です。さっぱり分かりません。知ることもできない気がします。

言葉ほど不思議なものはありません。なぜ、これほど言葉の不思議さにこだわるのかと言いますと、言葉は意味をになっているからです。人は意味に振りまわされているからです。

*

意味には二つあります。一つは、辞書に載っている言葉の語義です。もう一つは、「人生の意味って何？」みたいな使い方をするときの意味です。

この二つを意味という言葉になわせることには無理がある気がします。それぞれ別の言葉をあてるべきだと思います。だいいち、ややこしいじゃありませんか。

「人生の意味って何？」「人生の意味？ 辞書を見れば」

＊

「無意味」の意味が辞書に載っているのは不条理でナンセンスです。「意味」の意味が辞書に載っているのはシュールなギャグです。

なにしろ、人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

これがずっと続いて今日にいたるのです。なぜか。これからも続くでしょう。なぜか。

＊

ヒトは孤独な生き物です。言葉と意味は地球上でヒトだけに通じるギャグです。ヒトのひとり相撲なのです。ヒト同士でもよく通じません。一人ひとりのひとり相撲だからです。世界情勢を見ると悲しいほど明らかです。自分のまわりを見ると嫌になるほど明らかかなはずです。

＊

半分冗談はさておき（半分は本気です）、次に参りましょう。

形でも模様でもなく、顔

ある、いる、いく、なる。

この言葉を並べて、口で転がし、文字としてなぞり、それをたぶん頭か子心か気持ちか魂の領域で、並べ、転がし、なぞるのでしょうか。

外と中。その両方を行ったり来たりしているかに見える言葉。声はたちまち消えます。文字だけが居続けます。消さない限りは残るのです。

文字は、うつしている、うつっている気がします。

何を、何が、何に、と関係なく、うつしている、うつっている。

*

文字は、答えてくれそうもありません。

外にあり外である文字は、なぞるしかなさそうです。目でも指でも体でもいいです。動かす中で触れるしかなさそうです。

こちらから働きかけない限り、文字はただの模様としてあるだけなのです。文字が文字であるためには、文字が文字になるためには、こちらが文字になる必要があるのかもしれない。

なぞって、真似て、なるのです。赤ちゃんのように。赤ちゃんだったころのように。赤ちゃんのころほど「なる」である時期は、人にはないと思います。だんだん「いる」「ある」になって「いく」のです。さいごはもちろん「いく」です。

文字はたぶん顔なのです。形でも模様でもなく顔です。

*

とりとめのない文章にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#文字 # 言葉 # 作文 # 顔

空から降ってくる言葉

＊

空から降ってくる言葉

星野廉

2022年4月23日 16:16

いま私の寝る部屋は亡くなった母の寝室でした。最期の母は長方形の枠から立方体に収められ、つぎに立方体に収められて帰ってきました。その立方体の中の母は球体だとイメージしています。その球体もまた器なのだと思います。人はなんらかの器に収まっているという意味です。そう考えると安心します。

(拙文「【夜話】正方形と長方形で悩む夜」より引用)

私は丸かったり球状のものには洗練を感じます。形として見事で美しいのです。あと、丸いものは広がるというか拡散する気がしてなりません。無限に大きくなっていくのではないかという怖さも感じます。固体や液体よりも気体をイメージしているのかもしれませんが。

(中略)

ふわふわ——こんなのが飛んでいけば妖しいです。見たことはありませんが、火の玉を連想します。ただ人魂だと思えば、気心の知れた同士ですから、手を合わせてひたすらお祈りをする事で消えてくれそうな楽観と安心感があります。

(拙文「【小話】あやしい動きをするもの」より引用)

目次

文字という異物

空っぽの立方体

球体の言葉

上を向く、正面を向く

空から降ってくる言葉

球体のイメージ、立方体のイメージ

大風呂敷を広げる

進化する影

まだ続いている夢

文字という異物

私は文字に異物を感じます。なぜかは分かりません。分からないから、この記事を書いている気もします。

文字の異物感は、人の作るもので自然に帰らないものが圧倒的に四角い形をしている異和感（違和感ではなく）にも似ています。

とうとうこの星に現れたもののような感じと云えばいいのでしょうか。地球外的な異物性と云えばいいのでしょうか。不自然であり、反自然にも思えるほどです。

*

表情、身振りという視覚言語と、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）という四つを私は言葉として考えています。

表情、身振り、音声は、発せられた瞬間に消えますが、文字だけが残ります。消さない限り居座るのです。これが私には驚きです。不思議でなりません。

また、文字を習得するにはかなりの時間がかかります。どの言葉も覚えるのに時間がかかりますし、一生かけて覚えていくものですが、文字の習得に要する時間と労力は群を抜いています。

それでも必死に覚えようとします。識字率という言葉があることが、文字の学習の特殊性を物語っているでしょう。

あと、学習塾で教えていたころに、文字の読み書きだけが著しく苦手な生徒さんを相手に四苦八苦したことも思い出されます。

ふだん喋っている分にはじつに感性豊かで聡明なお子さんでした。学習障害という言葉がなかった時代の話です。不思議でした。

＊

謎です。なぜ、文字だけが、こうなのでしょう？

人類には無文字でいくという選択肢もあったはずなのです。手話という言語の存在も気になります。

空っぽの立方体

言葉は空っぽの立方体のように思えます。両手で持てるくらいの箱です。持ち運びに便利な大きさだけど、立方体であることかしまってしまう。運ぶときに、ぎこちなくなる自分がある。そんな感じの箱です。

(拙文「空っぽ」より引用)

過去の記事からの引用を含めて、ここまでの文章を読みかえしてみると、かなり妙ちくりんなことを書いている気がします。自分で書いておきながら、不安になるほどです。

あなた、大丈夫？ という感じです。

＊

私は論理とか論理的という言葉がよく分かりませんが、論理らしさとか論理的っぽさは何となく分かる気がします。その「らしさ」と「ぽさ」をイメージすると、私は論理的ではありません。

今回の記事はとくにそうなりそうな予感がします。

いずれにせよ、私は自分の直感を信じて書いていくしかありません。勢いを大切に書きなぐっていくという意味です。それが私の書き方です。

＊

言葉はいまや立方体になっている。そんなイメージを私は持っています。イメージですから個人的なものであり、検証はできません。ただ語るしかありません。

立方体としての言葉は、各面がモニター画面なのです。でも、箱の中身は空です。画面に映った映像も、空っぽです。

画面を斜めから見ても後ろから見ても、ズレはありません。二次元の映像だからです。投影された影みたいなもので、実体はないという意味です。

*

立方体（言葉のことです）の各面に映っているのはいわば影であり、二次元の映像であることが大切な点です。

球体の言葉

いま私は、書き言葉（文字）のない言葉を想像しています。表情、身振りという視覚言語と、話し言葉（音声）だけが言葉としてあるという意味です。

ありえない荒唐無稽な夢想です。

文字のない言葉、それは私にとっては球体なのです。なぜか、です。

*

文字だけが特殊なものであるとすれば、どこが特殊なのかは観察するしかありません。目に見えているものを意識的に見るのです。そうすれば、気づくことがあるかもしれません。

文字を習得するには、人は視線を落として地面や紙や画面に向かいます。文字を真似てなぞるためには、平面に記された文字を見ながら平面に丹念になぞり写していきます。

それを何度も何度も繰り返して覚えていくのが、文字の学習です。思いだしてください。読書も同じ姿勢でおこないます。

視線を落とす。前屈みになって手元のものに見入る。これはスマホを使うときの姿勢と重なります。人類にとっては、ごく新しい体勢ではないでしょうか。立位や二足歩行よりもさらに「不自然」で慣れない姿勢なのです。

上を向く、正面を向く

表情、身振り、話し言葉を真似て身につけるさいには、あえて視線を下に向ける必要はありませんが、文字を真似て学ぶさいにはどうしても下を向かずにはいられません。

めっちゃくちゃこじつけて申し訳ありません。でも、そうじゃありませんか？

順序として、人が生まれていきなり文字を学ぶことは考えにくいです。赤ちゃんはたいてい仰向けに寝ていて、周囲を見まわし、表情や身振りや音声を見たり聞いたりして、反応したり、真似たりしているようです。

言葉を身につけつつある赤ちゃんの顔と目が空のほうを向いているのは象徴的に感じられます。

*

その視線は赤ちゃんから見て正面であったり横であったり下であったり上であったりするでしょう。おとなは赤ちゃんを自分たちとなるべく同じ目線に持ってこようとしているように見えます。

赤ちゃんの頭を少し高くするという意味です。首がしっかりしてくれば、さらに赤ちゃんの頭は高くなり、背を伸ばして座った状態に近づいていきます。

赤ちゃんは背を伸ばして目線を正面や上下や左右に向けます。その状態で、表情、身

振り、話し言葉を身につけていくのでしょうか。そのうち、立って歩くようになります。

目を落として、表情、身振り、話し言葉をなぞったり真似たりすることは稀だと思われれます。

空から降ってくる言葉

ここでいきなり飛躍します。論理もへったくれもありません。なりふりかまわず話を進めます。

文字を除く言葉は空から降ってくるのではないのでしょうか。空から、上から、天からという感じです。それをなぞったり、真似たりして、受けとったり、自分からも発するようになるのです。

赤ちゃんをイメージして話を進めてきましたが、大昔（大ざっぱな言い方で恐縮ですけど）のヒトもそんな感じで文字以外の言葉を身につけたり、使うようになったのではないのでしょうか。

＊

ここで言葉を立体としてイメージすると、立方体ではなく、球体であるような気がします。

我ながら、よくもまあ、強引にここまでこじつけたものだと思います。

球体の言葉といえば、言霊を連想しますが、この言葉にはいろいろなイメージが垢のようにこびりついているので、あえて使いません。

いずれにせよ、たま、玉・珠・球、魂・魄・霊という一連の言葉は無視できません。むしろ積極的に考えてみたいです。

球体のイメージ、立方体のイメージ

球体はふわふわ浮かぶ感じがします。浮遊しているのです。気体のようで拡散して消えていく運命にあります。

立方体は固定化を指向します。地面の近くで固まって残るのです。

何かに似ていると思ったのですが、私が勝手に作った「動詞的なもの」が球体のイメージに重なり、「名詞的なもの」が立方体のイメージに重なることに気づきました。

自分ででっちあげたものですから、似ているも、重なるもないのですが、こういう符合は気になります。

*

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものもないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっとすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。比喩的に言うと動詞は地に足が付いているのです（名詞は出不精で動きたがらない）。（拙文「名詞的なもの、動詞的なもの」より引用）

大風呂敷を広げる

ここで大風呂敷を広げさせていただきます。

表情、身振り、話し言葉は、球体の言葉。一方の、書き言葉、つまり文字は、立方体の言葉。

なんてまとめましたが、うさんくさいですね。嘘っぽくていかがわしい。まとめた本

人とそっくりじゃないですか。

大風呂敷とは、うさんくさいものですが、自分でやってみると赤面します。

自分を出しにして、人類や言語を語って申し訳ありません。語りは騙り、レトリックはトリックということでお許し願います。

＊

たしかに出だしの自己引用から怪しかったようです。

ここまで来たのですから、最後までどんどんやっちゃいましょう。

＊

立方体の各面という画面に映る影、つまり映像ですが、あれはもともと人工の影なのです。

写真や映画は作られた影です。地面や水面にうつった影とはそこが違います。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうね。

何を見るためにでしょう。そっくりを見るためではないでしょうか。

(拙文「投げた影に影を重ねて見る」より引用)

影を落とすと言いますが、地面や水面の影は落ちたものです。地面に絵や印を描いたのと重なります。覗きこんだり描いたりするときの姿勢がシンクロするのです。

地面や水面に映る影が、鏡や壁に映るようになる。それがスクリーンに映しだされた幻灯や映画になる。それがテレビやパソコンやスマホの画面（スクリーン）に映しだされた影に進化する。

目を落として、文字という影を見たり読む。背を丸めて、あるいはうつむき加減にスマホをいじる。そんな姿勢や動作ともシンクロします。

大量生産されてどれも似ていたり同じに見えるスマホ。お店や工場ですらりと並んでいたスマホ。どれもそっくり。

そのスマホを覗きこむ、目を細めたり、目を見開いたり、ときには笑みを浮かべる、顔をしかめることもある、やや口を開けている人もいる。

指で画面をなぞる、スライドするのがもどかしいのか眉を寄せたり、舌打ちする人もいる。

やや前屈みに歩きながらスマホの画面に見入る、ときどき歩を緩めたり、立ち止る。

みんな、似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくりなのです。

(拙文「私たちは同じではなく似ている」より引用)

人は自分の作るものに似ていくのです。

*

めちゃくちゃこじつけて申し訳ありません。

進化する影

持論なのですが、文字は究極の映像であり影だと思います。

視覚的なイメージである映像は、事物に似ていますが、文字は事物にぜんぜん似ていません。

猫の映像は猫に似ています。そっくりなものもあります。でも、猫も、ネコも、ねこも、neko も、猫にはぜんぜん似ていません。

それなのに、猫という文字で猫をイメージするのですから、文字は影（鏡像も含みます）の進化したものと言えるのではないのでしょうか。おそらくなぞって真似て学んだという学習の成果でしょう。さらにいうなら、いわゆる条件反射なのかもしれません。

とにかく「猫」という文字で猫が想起されるのですから、すごいです。こんなもの、他にありますか？

私の言う文字の異物性とか異物感とは、そういう意味なのです。なんで？ どうしてそうなるの？ どういうわけでこうなっちゃったわけ？

なぞるが謎になったなんて駄洒落で済まされる問題ではないのです。

まだ続いている夢

言葉が空から降ってきた、かつての夢のような時代を想像してみましょう。

言葉と接するときには、視線を上げ、相手と同じ時間を共有するしかなかった時代。言葉が発せられたとたんに消え去っていた時代。言葉がそういうものだった時代。

表情、身振り、話し言葉のことです。

顔を上げる。相手を見る。あるいはちょっと視線を下に向けながら、相手と対する。言葉が見える。言葉が消える。言葉がつつぎと発せられる。

現れると消えるの反復と連続。一回限りの生と死。

言葉は空気を伝わって空から降ってくる。地面を揺さぶる。

＊

まるでコンサートのようではないでしょうか。ライブのようではないでしょうか。

見える、聞こえる。消える。波が伝わる。波が消える。同じ時間と場所を共有し過ごす。

音楽も言葉です。そこには、音声だけでなく、表情、身振りが 있습니다。波と波動があります。つぎつぎと現れつぎつぎと消えていきます。それが言葉なのです。

言葉は目の前で生きて死ぬのです。それに立ちあうのが私たちの生きることなのです。言葉が言葉として残るのは不自然なのです。残った言葉は異物なのです。もちろん文字のことです。

見える、聞こえる。消える。波が伝わる。波が消える。同じ時間と場所を共有し過ごす――。

懐かしいのでしょうか。やっぱり言葉は空から降ってほしいのでしょうか。

まだ夢は続いているもようです。

*

耳すまし 目を開ける人 閉じる人

#言葉 #文字 #音声 #表情 #身振り #影# スマホ # シンクロ # 赤ちゃん # 音楽
コンサート # ライブ

映っている私、写っている私、移っている私

＊

映っている私、写っている私、移っている私

星野廉

2022年4月27日 13:08

人が自分を直接見たことがないというのは当たり前でありながら、ふつうは考えないことだと思われまふ。でも、こういうことが気になる人がいます。ひとりだけですが、私も知っています。

私にとってきわめて近い人です。でも、見たことはありません。会っているような気はします。その人についてお話ししたいと思ひます。

ぶっちゃけた話が私のことなのですが、直接見たことがない私というよりも、鏡に映っているものであったり、写真に写ったものである「私」であるにご理解願ひます。

ややこしいことを言って申し訳ありません。じっさい、ややこしい話なのです。どうか、ややこしいのは私なのですけど。

目次

映っているもの

写ったもの

「ずれ」と気配

写っているもの

【挿入話】鏡の前では見るのではなくビビる

移っている

そこにはないものを見てしまう、置き換えてしまう

とっかかり

自分という気配

映っているもの

たとえば、鏡を覗きこみますね。映っているものがあります。いわゆる映っている人なのですが、正確にいうと人ではなく、人の映像とか姿であり、映った影なのです。

私にはお化粧をする習慣がありません。だから自分の顔や姿を鏡に映して、その鏡を覗きこむことはほとんどありません。朝、洗面所で顔を洗ったついでとか、シェーバーでひげをそったあとに確認のためにちょっと見るくらいです。

毎日、それも日に何度か、そこそこの時間を鏡の前で費やす人は大変だろうと想像します。お化粧なんて面倒ではないかと要らぬ心配をしてしまいます。お金もかかるにちがいません。

もちろん、お化粧が楽しいという方もいるはずです。お化粧という行為に何らかの価値を見出している人もいるでしょう。

＊

私の場合には、鏡を前にすると、つまり自分の顔や姿を見ると、自分が見えなくなります。自分であるはずの像は目に入っているのですが、見れば見るほどそれが何なのか分からなくなるのです。

自分だとは頭で分かっています。その姿と形は見えていますが、見留められないのです。認められないのではなく、見留められないです。目に留まっていない感じなのです。

ですから、鏡を前にしたまま目をつむると、目をつむる直前に見えていたはずの顔が像として残っていない、つまり残像がないのです。

特に顔です。着ている服とかは思い出そうとすれば何とか思い出せますが、顔を思い浮かべることができません。

念のために言いますが、いま話しているのは、鏡を前にしたまま目をつむる直前の自分の顔のことです。髪型や耳も思い出せません。首も自信がありません。

写ったもの

必死になって自分、つまりさっき見たばかりの自分の顔を思いだそうとしているのですが、なかなか浮かばないうちに、かつて写真で見た自分の顔が浮かんできます。

自分の顔ではなく、正確に言えば、写真に写ったものです。べつに正確にいうべきものでもないのかもしれませんが。

自分の顔を思いだそうとして、さっき鏡で見たばかりの顔の像ではなく、写真の像が優勢になってくるともう駄目です。そちらに意識が行くのか、写真の像ばかりが、頭か臉の裏か知りませんが、そこに浮かんでくるのです。

その写真というのは、証明書に貼るために撮ったものです。数年ごとに取り替えなければならない写真があって、数か月前に見た「最新の」私を撮った写真が頭に浮かびます。私の写真というと、それくらいしかないのです。

「ずれ」と気配

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。

正確に言えば、時間ではなく、「ずれ」なのです。抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「いま」との「ずれ」として感知するしかない気がします。

この「ずれ」こそが私にとって具体的な自分の像なのかもしれません。残念ながら、「それ」は見えませんが、「それ」の気配を感じることはできます。

その「気配」に親しみを覚えます。愛おしくてたまらないくらいです。「自分」とは「気配」なのかもしれません。

写っているもの

以上、映っているものとしての自分つまり鏡像、写ったものとしての自分つまり写真の像、鏡に映っている「前」と「いま」の「ずれ」としての自分、そして「気配」としての自分——四つの自分についてお話ししました。

もう一つの自分を見ることができるようなのですが、残念ながら見たことはありません。

スマホの自撮りの画面に写っているものとしての自分のことです。

私には自前のスマホがありません。外出するときにスマホを借りて、電話機として使うだけです。それ以外の機能については使ったことがないので、知りません。

*

私のイメージする自撮りとは、要するにリアルタイムで見る写真です。リアルタイムに写っている自分の姿ということになります。しかも、動画として見ることもできるそうです。

リアルタイムで見る鏡像と、過去の自分が写った写真の中間に位置するものとして考えていますが、よく分かりません。

【挿入話】鏡の前では見るのではなくビビる

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。正確

に言えば、時間ではなく、ずれなのです。抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれとして感知するしかないとも言える気がします。

この場合のずれは印象であって計測も検証もできません。その意味で、このずれは「似ている」に似ています。念のために言い添えますが、鏡だから「似ている」に似ているわけではありません。鏡には「似ていない」も映るのです。

「似ている」を見るためには、同時に「似ていない」も見ていなければならないということです。ここは似ている、ここは似てないというふうに見ていないと、見えないとも言えます。

白と黒の細かい点からなる絵や写真（文字でもいいです）は、濃淡はあるにせよ、白の点と黒の点を同時に見ていないと形が見えないと思われませんが、それと似ているのではないのでしょうか。

*

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこです。先を越されないように必死で見ていなければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかないのです。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になります。

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものです。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものはあえて見ないだけの体感的な知恵がそなわっているようです。というか、おそらく見えないのです。

ずればかりがやたら目につく。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれません。映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言えるでしょう。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかし

いと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのです。

免許証とか証明書の写真が好例です。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないでしょうか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていとも言える気がします。

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができていて、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分。まあ、かわいい。この子、誰？
なんてぐあいに天使を見る人もいます。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ています。似ているけど、自分ではない誰か。いまの自分以外に自分はいないはずなのに、自分がそこに映っている――。

＊

人は鏡や鏡に似たものに取り憑かれているとしか思えません。

鏡に我が身を映し、どんなに頑張ってみたところで、しょせん鏡像は幻でしかない。鏡に映った像と、実像あるいは実物とは似ているが、同じではありません。鏡像を見て我が身を知ろうというのは、冷静に考えれば正気の沙汰ではない気がします。

絵や写真や映画や動画は、鏡に似ています。人はそれらを前にして、鏡に面すると同じ反応をします。見る、見入る、かんがえこむ、かんがみる。ただ見るだけではないということです。物思いにふけったり、考えるのです。

＊

飛躍します。

絵、写真、映画、動画は、実は自分を映すためのものではないでしょうか。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分なのです。広義の自分。複数形の自分。おそらく赤ん坊にとっての「自分」と同じ。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをする。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊なのです。

＊

鏡の前で、人は普通ではない精神状態になります。簡単に言うと、緊張してびびるのです。恐怖でおののくと言え、言い過ぎでしょうが、それに近い気がします。

鏡を前にして、人はビビるしかない――。

したがって、鏡の前の人は見ているわけではありません。ビビっているのです。だから自分が見えないのです。見えていると思っただけです。見えていない自分なんて気味が悪くて受け入れられないということでしょう。そんな荒唐無稽な、つまり馬鹿な話は拒否してしまうのです。

こういうことはよくあります。人が自分を守るために備わった習性だと思われます。錯覚や自己暗示を利用して、メンタルが受けるダメージを阻止するのです。

＊

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するから、当然のこと。鏡は自然に増えるわけがない。人がつくる。

つくるだけはない。似せて、真似てつくる。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。

世界は鏡に満ち満ちている。人は、ふだんは、それに気づかない。意識しない。だから、よけいに増えていく。

言葉も鏡。人も鏡。人は自分に似たものを真似てどんどんつくっていく。

＊

人はそこにはないものを見ます。鏡、絵、写真、動画が、そうです。見えないはずのものを見ることもあります。可視化とか見える化なんて手品を発明したりもします（手品ですから種はあります、見えないものを見る化しているのではなく、見えにくいものを見るように錯覚させているだけです、だいたいにおいて「見える」とはヒト固有の視覚機能を用いた錯覚であり錯視なのです、他の生き物と比較して相対的なものであり、絶対的なものではなく限定付きだという意味です、簡単に言いますと、見える化とは制作者（作者がいるんです）が見せたいテーマを図解にしたものです、あくまでも絵なのです、えっ、なんて言わないでくださいね、うまい絵にだまされない人はいません、だまされた時点で絵だと思っていないからです、いま言っている「見える化」の絵には、写真や映画やビデオも含まれます、あれらは人が作った絵です、撮影や現像や編集や加工や修正をなさっている人はあれらが作られた絵だと知っているはずですよ）。

見えないものを見るのですから、人は見えているはずのものを見ていないことがあっても不思議ではない気がします。

＊

見えないものを見る場合の「見えないもの」というのは、たとえば、意味やメッセージや筋書き（物語）やテーマや思想のことです（どれもが自分がすでに知っているお馴染みのもので見新しいものはありません、知らないものを人が見ることはありません、というか知らないものは見えないのです、だから知っているものに置き換えて見ます）。そこには映ったり写っていないにもかかわらず「つい見てしまうもの」なのです。

つい見てしまう、意味やメッセージや筋書き（物語）やテーマや思想に共通する点は何でしょうか？ ぜんぶ自分が見たいものだという共通点があります。自分が見たいものを、つい見てしまうのです。それが「見えないもの」です。

その「見えないもの」を見ているとき、人はたぶん「どこかに移っている」と思われます。鏡や写真や画面のある「ここ」や「そこ」にはいないという意味です。

難しい話ではありません。不思議な話でもありません。いまのあなたがそうです。

気がつきましたか？ お帰りなさい。

では、また行ってらっしゃいませ。

【※「挿入話」はここまで、です。】

移っている

話を戻します。

鏡を覗きこむとき、人は映っているというよりも移っているのではないのでしょうか。

身体は映っているのかもしれませんが、心や気持ちや魂は移っているのではないのでしょうか。

「どこか」に移っているのかもしれませんが。

その「どこか」は「何か」や「誰か」と同様に、保留の言葉です。特定はできないから「どこか」と保留するしかない気がします。

そこにはないものを見てしまう、置き換えてしまう

人はそこにはないものを見てしまいます。鏡、絵、写真、動画が、そうです。見えないはずのものを見てしまうこともあります。つまり置き換えてしまうのです。

*

.

●

*

●

●

＊



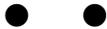
＊

以上、三組の二点が描いてありましたが、その各二点に人は何かを見てしまいます。

・



たとえば、平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えて見ることがあるでしょう。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに関連を呼びさます気がします。



上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。



今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

こうした連想も、置きかえでしょう。置き換えは関係性とも言えます。関係性には実

体はありません。抽象的な概念です。その実体のないものを、人はたとえば、二つの大きさの異なる点に見てしまうのです。

とっかかり

「何か」に、「それではない何か」を見てしまう。

その「それではない何か」がとっかかりです。何かを見るとき、人には「とっかかり」が必要です。「見えてしまうもの」、つまり「置き換えてしまうもの」が必要だとも言えます。

「とっかかり」がないと不安になるからかもしれません。「とっかかり」とは、意味や関係性や筋書き（物語）のようなものとイメージしています。

上の三組の二点で見たように、「そのもの」を見るのはとても難しいのです。「何か」に置き換えてしまいます。

＊

その「何か」とは、自分がすでに知っているもの、自分が無意識に見たいもの、見ることで自分が安心するものです。

（大切なことなので繰り返しますが）ざっくりと言えば、意味や関係性や筋書き（物語）のようなものとイメージしています。

それはたぶん「見る」のでも「見える」のもなく、むしろ「見てしまう」、正確に言えば「置き換えてしまう」のです。

「見てしまう」のですから、無意識にとっさに見てしまうのです。ここがいちばん大切だと思います。

上の各二点という、いわば「空っぽ」に何を「見てしまうか」つまり「置き換えてしまう」は人それぞれで、本人の言葉による証言以外に確認はできません。つまり検証はできませんが、各人の証言をもとにある程度のコンセンサスが形成されることは大いにありえます。

＊

じっさい、そうなっている気がします。みなさんも、自分のまわりを観察なさってみてください。

もちろん、そのコンセンサスも、局所的なもので、いくつかの集団に分れるだろうし、その集団の成員もつぎつぎと変わる気がします。私の周囲を観察した結果ではそうなっています。

何が覚えてしまうかは、ふいに頭に浮かぶ印象（なにしろ「見てしまう」つまり「置き換えてしまう」のです）ですから、各人もよく分かっていないからでしょう。刻々と変わる可能性も大です。

自分という気配

話を鏡に戻します。

鏡に映っているもの（つまりいわゆる自分の顔）を目にすると、私はどこかに移っています。そんな私は頭で自分の顔だと知っているもの、つまり知識（情報でもいいです）としての自分を目の当たりにしてビビってしまいます。

「これは自分なんだ」と、鏡に映った像（私自身ではありません、像であり影です）を「自分」に置き換えてしまいます。私が人間だからでしょう。

頭では、鏡の像だと分かっています。知ってもいます。でも、納得はしていないようです。不安とおののきの中にも言えます。

鏡を前にした私はふつうの状態ではないのです。あえていえば、どこかに「移っている」のです。

そんな私にとって自分とは気配なのです。

*

不安とおののきの中にいる。平たく言えば、ビビっている私は、よく目をつむります。自分の気配に耳を澄ませます。自分の体の動き、体の中、体の表面、体のまわりで起こっていること、生じていることに集中しようと努めます。

目をつむったまま、自分の手と指でできる限り、自分の体をあちこち触ってみます。舌に意識を集中して自分の口の中を舌でさぐることもあります。嗅覚に集中してみることもあります。

五感はそれぞれを意識的に集中しないとなかなか感知できません。意外と難しいのです。自分というものが、これほどままならない、つまり思いどおりにならないものなのかと苛立つこともあります。

*

目をつむっているから、当たり前だと言われそうですが、この気配としての自分が、鏡に映っている影とはぜんぜん違うことは確かです。目に映っている自分だけが自分ではないと言いたいです。

自分が見えないという私事にお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

*

この記事は、三本の記事の一部を再編成し加筆したものです。

#私小説 # 小説 # 鏡 # 写真 # 自撮り

それない、ぶれない、あやまらない

＊

それない、ぶれない、あやまらない

星野廉

2022年4月28日 15:07

間違う、誤る、たがう、違う、ちがう。
外れる、はずれる、はずれる、はずす、ずれる、ずる。
逸れる、それる、そらす、反れる、反らす。
曲がる、まがる、曲げる、まげる。曲解、誤解。
しくじる、失敗。
誤る、あやまる、誤り、あやまり、過ち、あやまち。

合う、合っている、正しい、正す。修正、訂正、改正。

本物、偽物・贋物、偽者、模造品。

真偽、正誤。

＊

何から逸れないのでしょうか？ 何から違（たが）わないのでしょうか？ 何から外れないのでしょうか？ 何からずれないのでしょうか？

何に合わせるのでしょうか？ 何に沿っていけばいいのでしょうか？

目次

決まりに沿う

見えないもの、見えなくて動かないもの

言葉の綾、レトリック

千鳥足でふらふら気ままに

固定化を指向するもの

杓子定規なものの不自然さ

決まりに沿う

決まり、決まったもの、決めたものから、逸れない。外れない。違わない。

決まり、決まったもの、決めたものに、合わせる。沿っている。

沿うべきもの、合わせるべきものは、動かないものでなければなりません。動くものに合わせたり、沿うのはきわめて難しいからです。

ふらふらしたもの、不安定なもの、揺らぐもの、ぶれるもの、まちまちなものでは、駄目なのです。

*

そりゃあ、そうでしょうね。

でも、そんなものって自然界にあるでしょうか？

私が見たところでは、自然界は動くもの、揺らぐもの、移り変わるもの、予測不能なもの、不確定なものに満ち満ちています。万物流転です。

——その動きには規則性があるのよ。じつは決まっているの。不安定に見えるだけで、じつは安定した動きに沿っているのよ。

見えないもの、見えなくて動かないもの

見えないし、五感で知覚できないけど、動かないものがある。それが世界を、いや宇宙を支配している。普遍的で客観的な真実や真理や法則があるの。

ほんまかいな、そうかいな。で？

とにかく、そうなのよ。信じてちょうだい。悪い目にはあわせないから。信じる者は

救われるって言うでしょ？

(見えないし体感できないけど、信じるしかないもの。私はそういうものに嫌悪感を覚えます。私は信じるのではなく自分で考えたいのです。信じている振りはできます。「信じています」と言うこともできます。これまでそうしてきたことは何度もあります。でも、心売り渡すことはできません。ここでは本音の話をしています。)

*

見えないし、体感できなくて、動かないものがあるから、それに合わせましょう。それからそれないようにしましょう。それにそった考え方をするのです――。

嫌な予感がします。私がこれまで避けてきたもののようです。

論理とか数学とか公式とか法則とか科学とか、そういうものの匂い(臭いとは書きません)に似ています。

論理とか数学とか法則とか科学はいいのです。げんに私は物理学が好きで独学で勉強しています(笑われそうですが、言葉を考えるときに自分なりに物理学のモデルを意識する場合があります)。

そういう領域自体はいいのですが、そういう領域「っぽさ」とか、そういう領域「らしさ」が嫌なのです。

どうということかと申しますと、客観的で普遍的だから万能だ、信じないのは変だみたいな、その領域の枠と限界性を考慮しない議論に傾くことです。こうした傾向は、研究者よりも部外者に多い気がします。

*

とはいえ、そうした領域は避けてきたのでよく知りません。ただ端で見たことはあります。たとえば、証明とか立証とか、式を立てるとか、証明するとか、そんな言い回しを覚えています。

ある領域の枠組みと限界性を見るのには、使用されているレトリックを検討するのがもっとも有効だからです。とくに注目すべきなのは、どのような置き換えがおこなわれているか（何が何に置き換えられているか）です。どんな学問でも置き換えという作業があります。そもそも数や言葉を用いての記述や、数式やグラフや図解は置き換えです。

たとえば、数学でも、ある対象（事象）を処理するために、置き換えが頻繁におこなわれていますが、これが数学のレトリックです。どんな思考も置き換えが基本になります。したがって知覚（おもに視覚）の制約を受けることになります。普遍性や客観性はそうした制約があつての話なのです。

いま述べたのは、いかにもド文系っぽい発想だという気がします。きっと、そうなのでしょう。

言葉の綾、レトリック

証明は明らかにするのでしょうか。立証するとは、立てるのでしょうか。式を立てるというくらいですから、立てるのでしょうかね。

そういう言葉の綾とかレトリックは、形であり模様ですから目に見えます。

私は私らしく、言葉の綾を見ていきます。

立てると言い回しにめっちゃくちゃ感じるものがあります。分かりやすいのです。

＊

だいたい、立てたり、立つのは、見せたいからなのです。

「見て見て」、「すごいっしょ?」、「どや!」、「こんなものですわ」、「もっと立てましようか?」

見るほうも、同調します。褒め称えます。

「すごい!」、「お見事」、「たくましいわ」、「厳かですね」、「す、素敵すぎます」、「参りました」

私に言わせると、不自然なのです。立てて見せて、それに感動するなんて、そんな演出されたギャグに私には付きあえません。

やらせに同調するとか、マウント行為への忖度は嫌なのです。

*

証明みたいに明るくするのも、だいたいは見せたいし、見たいから明るくします。当たり前ですよ。暗いほうがいいという人もいますけど.....。真っ暗は困りますが、ほの暗いほうが適度に想像力を刺激されて個人的には好きです。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

そもそも、ああいうものって陰でこっそりしませんか？ 明かりの煌々かついたところでなんて恥ずかしくてできません。赤裸々とか、真っ昼間とか、あからさまとか、私は苦手ですね、はい。

思うように行動できません。ええ、そうですとも。やっぱり薄暗いところがいいです。そのものずばりとか、包み隠さずぜんぶよりも、ちょっとだけ派です。

話が逸れてきました。逸れるほうが好きなんです。それたり、ずれたり、はずれたり、タイミングをはずしたり、ちょっとふざけてまげたり、あやまちをおかすほうが、よくないですか？

千鳥足でふらふら気ままに

目に見えなくて、動かなくて、ぶれない筋。それに沿って、逸れないように、従う、導かれる。

証明によって導かれるなんていう、言い回しとかレトリックがありますが、導かれるんですね。導かれる、リードされる……。嫌ですね。自分で気ままにいきたいです。

リードする人、リーダーなんて興味はないですね。そもそも代理でしょう？　それが何か代理じゃなくなっていないですか？　私たちが選んだ代理がお代理さまみたいに偉くなって、ひな壇を作っているなんていうギャグには付きあえません。

＊

見えないものに導かれるなんて、考えようによっては、あれですけど、導かれるというのが嫌です。あれよあれよと運ばれるのは楽ちんでいいですよ。

でも、命令される感じは嫌なんです。

それに沿わないと、駄目なんでしょう？　動かないのですから、杓子定規ということじゃないですか。窮屈です。私には無理。例外を認めない感じですね。無理です。

プログラミングみたいに融通がきかないいんでは？　私はあれが苦手で、できれば無縁で生きていきたいです。これまでがそうでしたから、これからもそうでありたいです。この先はそれほど長くはないみたいですが、だからこそ、ふらふら千鳥足でいきたいです。

固定化を指向するもの

分かりますよ。

プログラミングみたいな融通のきかない、つまりぶらぶらふらふらを認めない、例外を認めない論理とか公式とか法則に従って、動いている機械や仕組みや計器やシステムがあるらしいのですよね。

こちらが、その機械や仕組みに合わせて杓子定規にしないと正しく作動しないのですよね？　それはそれでいいのです。私だってその恩恵にあずかって生きていることは承知しています。

でも、言葉の世界にまで、そういう窮屈な理屈を持ち込まないでほしいのです。言葉の世界には言葉の世界の論理（比喻です）と文法（比喻です）があるのです。それを体系的な論理とやらに従わせるのは、それこそ非論理的ではないでしょうか。

＊

別の世界なんです。言葉の世界と数（すう・かず）や公式の世界とは別個のものなんです。

さらにいうと、現実の世界（そんなものがあるとして）、思いの世界（そんなものがあるとして）、数学や科学の世界（そんなものがあるとして）、言葉の世界（そんなものがあるとして）は、それぞれ別物だと思うのです。それぞれに独自の論理（比喻です）と文法（比喻です）があるのです。

思うだけですけど。

＊

もっと飛躍しますね。しかも、論理的な展開はしません（これまでもそうでしたけど）、というかできませんので、この先は直感を頼りに連想で書きます。

＊

見えなくて動かない決まりというのは、固定化を指向する名詞に似ています。見えて動きまくっているものというのは、動詞に似ています。

名詞的なものは（名詞じゃありませんよ）自然界になくて——見えなくて、でもいいです——、自然界は動詞的なものに満ち満ちている気がします。

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっ

とすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。比喩的に言うと動詞は地に足が付いているのです（名詞は出不精で動きたがらない）。

（拙文「空から降ってくる言葉」より引用）

杓子定規なものの不自然さ

名詞の不自然さは、論理の不自然さと重なって、私には感じられます。論理の不自然さというのは、文字の異物感と重なって私には見えるんです。

文字の異物感は、人の作るもので自然に帰らないものが圧倒的に四角い形をしている異和感（違和感ではなく）にも似ています。

とうとうにこの星に現れたもののような感じと云えばいいのでしょうか。地球外的な異物性と云えばいいのでしょうか。不自然であり、反自然にも思えるほどです。

＊

表情、身振りという視覚言語と、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）という四つを私は言葉として考えています。

表情、身振り、音声は、発せられた瞬間に消えますが、文字だけが残ります。消さない限り居座るのです。これが私には驚きです。不思議でなりません。

＊

要するに、不思議なだけです。訳が分からないだけなんです。

間違う、誤る、たがう、違う、ちがう。

外れる、はずれる、はずれる、はずす、ずれる、ずる。
逸れる、それる、そらす、反れる、反らす。
曲がる、まがる、曲げる、まげる。曲解、誤解。
しくじる、失敗。
誤る、あやまる、誤り、あやまり、過ち、あやまち。

こうした言葉のイメージが自然であり、私にはしっくりします。

*

その一方で、

合う、合っている、正しい、正す。修正、訂正、改正

というのは、嘘くさいです。

何に合わせるのでしょうか？ 正しいって窮屈じゃないですか？ 杓子定規なものに従いたくはありません。だいいち、不自然じゃないですか。杓子定規なものが自然界にありますか？ 体感できますか？

そもそも「正しい」って決まっているんですか？

誰かが決めたのなら、ノーサンキューです。「決まっている」のでしたら、考えなくてもそうなっているという意味でしょうから、何とも言えません。

見えなくて、体感できなくて、なすすべがないものに興味はないですね。そんなものがあつたとしても、わざわざ言葉にしたいとも思いません。仮にそんなものがあるとして、名づけて、手なずけられるわけがありません。私なら、保留します。放っておくという意味です。

いまはそれしか言えません。

*

それない、ぶれない、あやまらない――。

似てるわ。

何かや誰かに似ているはさておき、そんなものは自然界にはありません。不自然です。少なくとも、私は見たことも体感したこともありません。理想として求めたいとも思わないです。

やっぱり嫌です。嫌いです。

人それぞれですけど。

*

今回の記事は、「なすがまま、されるがまま」という記事の続編に当たります。

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれませんが。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

*

レトリックの多いとりとめのない文章にお付き合いいただき、どうもありがとうございました。こういう理系の領域がらみの、ややこしいテーマのときには、レトリックを駆使するしかありません。

私は、レトリックこそが、「それない、ぶれない、あやまらないもの」に対抗できる手段ではないかと本気で信じているのです。

連休のある方は、よい連休をお過ごしください。

国語がすき # 日記 # 散文 # 言葉 # 漢字 # ひらがな # 文字 # 名詞 # 動詞 # 連想
レトリック

「それない、ぶれない、あやまらない」世界

＊

「それない、ぶれない、あやまらない」世界

星野廉

2022年4月29日 11:54

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれませんが。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。
(拙文「それない、ぶれない、あやまらない」より引用)

目次

機械を動かす

錯覚を利用してしなやかな動きを作り出す

模造物

人が機械に似る、機械になる

杓子定規に憧れる

辻褄合わせ

不自然なもの

自然から、それてぶれてあやまった

人間化する機械、機械化する人間

機械を動かす

「それない、ぶれない、あやまらない」がないと機械は動かない。いま文字を書いているこの画面も、このパソコンも、「それない、ぶれない、あやまらない」仕組みで動いているのでしょ

「それない、ぶれない、あやまらない」で動いているものには「それない、ぶれない、あやまらない」指示と命令しか通じません。もちろん指示し命令するのは人ですから、人が機械に合わせるわけです。

新しい機械を作るたびに、新たな「それない、ぶれない、あやまらない」仕組みを作る必要があります。新しくできた機械にはそれに応じた「それない、ぶれない、あやまらない」指示と命令をしなければ正しく動いてくれません。

「それない、ぶれない、あやまらない」指示と命令は簡略化されて、研究者や開発者以外の、一般のユーザーや消費者にも使えるようになってきているのはみなさんご存じのとおりです。

みなさんの目の前にある端末がそうですね。「それない、ぶれない、あやまらない」ものの「それない、ぶれない、あやまらない」部分が隠されているわけです。

つまり、ややこしさやぎこちなさが消えて自然に見えるし、手や指で操作してもしなやかでスムーズに感じられるのですから、じつにうまくできています。

機械の機械っぽさを隠して消すことが、機械の進化であり洗練だと言えます。機械が人間っぽくなるのです。

錯覚を利用してしなやかな動きを作り出す

自然界にある自然でしなやかな動きを人が作るためには、「それない、ぶれない、あやまらない」が必要です。自然界のしなやかな動きは、分断された細かな直線を並べることによって作りだせます。

分断を細分化すればするほど、ぎざぎざや凹凸が消えてなめらかな動きを作り出すことができるのですから、それは視覚の錯覚に頼った捏造と言えますが、一般的には再現と呼ばれています。

再現と捏造は異なりますが、再現のほうがかっこいいからでしょう。人は体裁をととも気にするのです。いまや人は、あらを隠すのにかなり上達しています。

聴覚を用いた錯覚を利用しても、同じような再現、つまり捏造がおこなわれています。ごちない不自然な音も、細分化することでしなやかで自然な音に錯覚されるという意味です。

現在、仮想現実という名前で、視覚と聴覚だけでなく、他の知覚も、錯覚を利用して再現、つまり捏造しようという試みに拍車が掛かっているのは、みなさんご存じのとおりです。

模造物

自然界にあるものの模造物は、「それない、ぶれない、あやまらない」によって作りだせます。模造物ですから、似ているだけでじつは違うわけですが、大差がない、つまりその差が知覚できなければ人は合格とします。

いい意味でも悪い意味でも大ざっぱで適当なところがあります。

自然界にあるものの模造物は、「それる、ぶれる、あやまる」によって、「それない、ぶれない、あやまらない」を使って作られている、と言えるでしょう。

「それる、ぶれる、あやまる」とは人のことです。とはいえ、「それる、ぶれる、あやまる」存在である人には、「それない、ぶれない、あやまらない」な部分があるからこそ、こんなことが起きているはずで。

人とは、「それる、ぶれる、あやまる」時々/ところによって「それない、ぶれない、あやまらない」である、と言うべきでしょう。まばらでまだら状なのです。両方の性質を兼ねそなえているとも言えます。

人が機械に似る、機械になる

人は自分の「それる、ぶれる、あやまる」部分をどれだけでも小さくして、「それない、ぶれない、あやまらない」部分を大きくしていきたいと願っています。

自分の「それない、ぶれない、あやまらない」部分が大きければ、思いどおりになると考えているからです。要するに、人間が機械のようになれば（機械っぽくなれば）、万事が効率よく進むという考え方です。人は自分のままならなさ（人間らしさ）に手を焼いているからです。

これは「それる、ぶれる、あやまる」部分は無駄という発想に他なりません。「それる、ぶれる、あやまる」が多い人たちは排除されたり処分されていきます。あるいは、自分自身の「それる、ぶれる、あやまる」部分を消そうとしたり、なかったことにしようと努めます。

あっさり書きましたが、恐ろしいことです。

この排除と処分と隠蔽を効率よくおこなうためには、「それない、ぶれない、あやまらない」リーダー（たち）が、「それない、ぶれない、あやまらない」人たちを「それない、ぶれない、あやまらない」ように指示し命令するのが理想です。

お察しのとおり、独裁のことです。なお、現在の独裁が民主主義から生まれていることは注目すべき事実だと思います。

独裁と民主主義の両方の根っこに「それない、ぶれない、あやまらない」への指向があるからだと思像しています。それほど根深く根強い仕組みなのです。

杓子定規に憧れる

「それない、ぶれない、あやまらない」は人に見えない仕組みとして、人の作ったありとあらゆるものに仕組まれているようです。人が杓子定規に考えた結果、一見杓子定規ではないもの——隠されているのです——がつぎつぎと作りだされ、あちこちにあふれていると考えられます。

「それない、ぶれない、あやまらない」ものに満ちている、「それない、ぶれない、あやまらない」世界です。ただし、そうは見えないところが大切な点です。

手本が自然だから、「それない、ぶれない、あやまらない」という不自然な部分を隠しているから、そう見えないのかもしれませんが。あるいは、見えていても見ていないとも考えられます。人はこのすっとぼけが得意だからです。

いずれにせよ、「それない、ぶれない、あやまらない」は見えないのです。観念であり抽象なのでしょう。観念と抽象は、普遍や客観と呼ばれることがあります。それが錯覚や混同なのかは不明です。

杓子定規な指示や命令によってしか動かない機械がこれだけうまく行っているのですから、人が自分も杓子定規になりたいと思うのは当然の成りゆきでしょう。

人は自分たちの作りだした杓子定規に合わせ、杓子定規に慣れ、杓子定規が自然だと錯覚し、自分たち自身が杓子定規になるように邁進しているのかもしれませんが。

人は杓子定規に憧れひれ伏すようになります。その結果、何よりも辻褃合わせを優先しはじめます。

辻褃合わせ

「辻褃を合わせる」とは、「それない、ぶれない、あやまらない」に合わせることでありますが、「それない、ぶれない、あやまらない」は人が作ったものです（決めたとも言えるでしょう）。「それない、ぶれない、あやまらない」は、ほとんどの場合が言葉で表されます（言葉を使うのですから、「決めた」と言っているでしょう）。

現実や思いにくらべて、言葉がいじりやすいからです。現実も思いも、思いどおりになりませんが、言葉はいじりやすいので、言葉だけは思いどおりになると、人は高をくくっている節があります。

じっさいには、人は言葉におどらされています。言葉は人の道具でも下僕でも奴隷でもなく、自立している、つまり人から離れていて、人の外にあるからだと考えられます。

言葉は意外とままならないものなのです。このままならさは、「それない、ぶれない、あやまらない」の自立性（人から離れて、人の外にあること）と通底しているように思えてなりません。

人は、自分がままならないもののされるがままになっていることにもっと敏感であっていいと私は思います。

とはいえ、人が人ではないもの、しかも見えないもの——「それない、ぶれない、あやまらない」という仕組みのことで——に合わせていくのですから、その事態をすくい取り、とらえることはきわめて難しいでしょう。

自然界で、不自然（人のことです）が不自然（「それない、ぶれない、あやまらない」のことで）を作りだし、しかも不自然を作りだした不自然がその不自然に憧れ、ひれ伏し、その真似をしようとしている。

そうした過程がエスカレートしている。そうも言える気がします。

不自然なもの

私の言う不自然なものの性質を挙げてみます。

・残る。しかも残りつづけて自然に帰らない。イメージとしては文字です。物質からなる染みや痕跡という具象であり具体でもある文字はなかなか消えません。形という抽象でもあるために空間的にも時間的にも伝わるからです。インターネットによって複製と拡散（両方とも「伝わる」です）が同時になったことが「残る」に拍車を掛けています。文字が残ることと、人の作った四角いもの（建造物や製品や商品）が自然に帰らない形で居残っていることは、よく似ている気がします。

・固定化する。イメージとしては名前です。名づける行為です。名づけによる固定化は、見えません。抽象であり観念だからです。この見えない固定化が、「それない、ぶれない、あやまらない」という見えない仕組みと深くかかわっている、あるいはその根っこにある気がしてなりません。

不自然なものが目に見える形で残ること、同時に目に見えない形で固定化すること、この両方の性質を兼ねそなえているのが不思議であり、不気味でなりません。

自分ででっちあげたイメージを不思議がり不気味に感じているのですから世話ないですけど。

自然から、それてぶれてあやまった

人は「それない、ぶれない、あやまらない」を作りだし、自らがそうでありたいと願っているようですが、そもそも人は自然から逸脱した生き物です。

逸脱しているとは、それている、ぶれている、あやまっていることです。外れているとも言えます。何から外れているのかというと、繰り返しになりますが、自然からに他なりません。とほうもなく、自然からはずれてずれているのが人間なのです。

「それて、ぶれて、あやまっている」存在が、「それない、ぶれない、あやまらない」を作り出したのです。このように言うとギャグに聞こえますけど。

上で述べたように、「それない、ぶれない、あやまらない」は見えない固定化という点で不自然なばかりではなく、目に見える形で残る、しかも自然に帰らない、という不自然な現象を起こしていることはきわめて深刻な事態です。

地球上の他の生き物たちも巻き添えにしているからです。

「それて、ぶれて、あやまっている」存在が、「それない、ぶれない、あやまらない」を作りだしてしまい、さらには自分の作ったものを模倣しはじめて、それにブレーキが掛からなくなっている――。

この事態に対し、なすすべもないのでしょうか。なすがままになるしかないのでしょうか。

人間化する機械、機械化する人間

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれない。

もしそうであれば、機械がどんどん人間っぽくなる一方で、人間がだんだん機械っぽくなるというギャグ的な事態をまねく気がします（そして、いつか逆転するとか……）。もう、そうなりかけていませんか。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

#漢字# ひらがな# 文字# 名詞# 機械# 連想# レトリック# 自然# 不自然

人間の入形（ひとがた）化、入形（ひとがた）の人間化

＊

人間の形（ひとがた）化、人形（ひとがた）の人間化

星野廉

2022年4月30日 08:31

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれない。

もしそうであれば、機械がどんどん人間っぽくなる一方で、人間がだんだん機械っぽくなるというギャグ的な事態をまねく気がします（そして、いつか逆転するとか.....）。もう、そうなりかけていませんか。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

(拙文「「それない、ぶれない、あやまらない」世界」より引用)

＊

人は、「それる、ぶれる、あやまる」自分を持てあますどころか、嫌悪しているのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものに導かれたい、身をゆだねたい、支配されたいのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものになりたいのかもしれない。

究極の「それない、ぶれない、あやまらない」を目指しているのかもしれませんが。

まわりを見ていると、そんな気がしてならないのです。

＊

不死

目次

作る、似る、なる

自然をいじる、加工する

人間の非人間化

作る、似る、なる

人は思う、思いに似せて作る。

発明、創作、芸術、文学、科学技術

＊

人は自然のものに自分を見る、人を見る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人は自分に似せたものを作る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人が自分の作ったものをまねる、自分の作ったものに似る、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

＊

人が作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛す、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人が自分に似せて作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛する、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

＊

ナルキッソス、エーコー、ピュグマリオン、ゴーレム、『フランケンシュタイン』に出てくる名のない怪物、ドリアン・グレイ、ピグマリオン、トム・リプリー（パトリシア・ハイスミス作『太陽がいっぱい（リプリー）』）

＊

人間の人形化、人形の人間化

人間の物化、物の人間化

擬人、擬物

人間の機械化、機械の人間化

人間のフィクション化、フィクションの人間化

人間の作品化、作品の人間化

人間の神化、神の人間化

人間の動物化、動物の人間化

人間の仮想現実化、仮想現実の人間化

＊

道具、玩具、呪術、魔術、魔法、機械、人工頭脳、人工知能、仮想現実

＊

不死

自然をいじる、加工する

絵、絵に描いたように美しい、人形（にんぎょう・ひとかた）、玩具、愛玩動物・家畜

(品種改良)、映像、二次元、写真のように綺麗

人工的な美、自然にはない美しさ、不自然な美しさ

写真や映画やデジタル画像を模倣する作られた演出された現実

修正、編集、改良、交配、デザイン・設計、外科手術、整形手術

人は見えないものに魂を売りわたし、見えるが至上の世界に没入していく。

見るために見えないものが必要な生き物は、おそらく自然から逸脱してしまった人だけ。

＊

サイボーグ、不老長寿、美容整形、容姿端麗、皮膚が異常になめらか、染み一つない肌、しなやかな動き、理想的なプロポーション、健康

神話、擬人、伝説、伝承、口承、物語、文字、写本、印刷、フォトコピー

落書き、壁画、描写、写生、模造、複製

小説やテレビドラマや映画のような筋書きの日常、会話、人生

＊

自然を作る、人工の自然

不死は究極の不自然（反自然というべきかもしれませんが）であり、究極の人工（人工には必ず目的があります）であり、究極の「それない、ぶれない、あやまらない」（しかも見えません、永遠に目にすることはできないでしょう）ではないでしょうか。

究極ですから、不死は、たぶん人のオブセッションになっています。人が言葉を相手にしているからだと思います。言葉は人を不死に誘うからです（不死という夢に誘うのです）。とくに不自然の権化である文字です。だから、人は文字から離れられないのです。

人間の非人間化

マスゲーム、軍隊、制服、合唱、規則、行進、一糸乱れぬ

法律、戒律、一本化、画一化、支配、階級、階層、代議制、党支配、政党政治

私は文字になりたい、小説の中で生きていたい、映画になりたい、キャラクターになりたい、登場人物になりたい

現実逃避、ボバリズム、ボヴァリー夫人、ドン・キホーテ

人形になりたい、人形のような肌がほしい

*

私は論理になりたい、哲学になりたい、私は数学になりたい

私は詩になりたい、私は言葉になりたい、私は物語になりたい、私は小説になりたい

私は音楽になりたい、私はあの楽曲になりたい、私は音符になりたい、私は音になりたい、私は声になりたい、私は声だけになりたい

私はゲームになりたい、私は世界になりたい、私は地球になりたい、私は山になりたい、私は海になりたい、私は川になりたい

私は犬になりたい、私は猫になりたい、私は金魚になりたい

私はカラスになりたい、私は白鳥になりたい、私はゴキブリになりたい、私はウィルスになりたい

人は、名づけたものにしかなりたいと思わないのではないのでしょうか。呼びかけ、話しかけることは、人にとってとても大切です。

名前と顔のないものには人は話しかけられません。さらに大切なことは、何かに話しかけたとき、人はそのものになっています。正確に言えば、なりきっています。

*

私はあなたになりたい、私はあの人（異性）になりたい、私はこどもになりたい、私はこどもに戻りたい、私は二十年前の私になりたい、私は別人になりたい、私は私になりたい、私は本当の私になりたい

もはや名前のないものになりたいと思うようになる人。自分には名前はないはずです。自分は世界とのかかわりあいのない場にしかいないからです。かかわりのない場では名は意味を成しません。

*

自分と「自分」が離れていく。

分れた自分。別れた自分。取り戻せない自分。たどり着けない自分。

「見える」だけがある世界。

#言葉# 文字# 人形# 機械# 連想# レトリック# 自然# 不自然# 自分# 名詞# 名前# 想像# 創造# 小説# 芸術# フィクション

うつすためには、うつらなければならない

＊

うつすためには、うつらなければならない

星野廉β

2022年5月8日 14:10

人はうつるとうつすに嗜癖している。対象が、映像、文書、音声に関係なく、現在は「うつす」「うつる」が、端末さえあれば誰でもきわめて容易にできる時代になっている。嗜癖するなというのが無理なのである。

(拙文「うつるはうつる」より引用)

目次

映像や文書や音声をうつす

人がうつる

うつすためには、うつらなければならない

映像や文書や音声をうつす

うつすためには、うつらなければならない。

何かを、うつす、移す、映す、写すためには、自分が移らなければならない。

何かを、移す(配布・引用・拡散)、映す(撮影・投影)、写す(引用・複製・録画・録音・保存)するためには、自分が移らなければならない。

「うつす」の対象を映像と文書と音声に拡大すると、表記がややこしくなってくる。和語に漢字をまじえたり、和語に相当する漢字を用いた熟語を併記するからだ。

現在、「うつす・うつる」はさまざまな作業や処理をふくむ時代になっている。とりわけ、インターネットの普及は、「うつす・うつる」の対象を、映像と文書と音声にまで広

げ、デジタル情報化するという形で一本化し、さらには、パソコンやスマホやタブレットという簡略化された操作が可能な端末の一般化するにいたっている。

ユーザーであるはずのヒトが、機械の操作に追いついているかという点、はなはだ疑問に思わざるをえない。

人がうつる

心がうつる、思いがうつる、意識がうつる、気持ちがうつる、魂がうつる、身体がうつる、知覚がうつる。

心をうつす、思いをうつす、意識をうつす、気持ちをうつす、魂をうつす、身体をうつす、知覚をうつす。

心がはなれる、思いがはなれる、意識がはなれる、気持ちがはなれる、魂がはなれる、身体がはなれる、知覚がはなれる。

心がつく、思いがつく、意識がつく、気持ちがつく、魂がつく、身体がうつく、知覚がつく。

人が移るとするのは、ここでは超常現象や神秘体験ではなく、誰もが日常に体験するだろう行為や状態を指している。

たとえば、文章を読み書きしているさいには、人の意識はふつうではない状態にある。これは、自然界にはないという意味で、文字が不自然なものだからにほかならない。そもそも人が文字を相手にしなければならぬ必然はない。文字は人が作ったものなのである。

文字の読み書きをするさなかの人は、文字を並べる、つまりつづる作業と、文面を考える作業と、直接には作文とかかわりのない思いの中を行ったり来たりしていると考えられる。

集中力の問題なのかもしれないが、大ざっぱに言って、いま挙げた三つの作業と状態が、まばらに入り乱れている気もする。はっきりと分れているのなら、入れ替わってい

るのだろうし、まばらであったりだまだらであったりするのであれば、同時にある三つの領域が濃淡の波のように意識と身体を訪れているのかもしれない。

いずれにせよ、移ったり、揺らいだり、離れたり、くっついたりしているように思える。

意識や心や気持ちや思いや魂というものは、見えないし、実体もないだろうし、確認も検証もできないから、とりあえず言葉でそう呼んで、いじっているにすぎない。

印象やイメージの問題なのである。

うつすためには、うつらなければならない

うつすためには、うつらなければならない。

和語は感覚的に体に訴えてくるとはいえ、多義的なために頭で整理するにはとりとめのない印象を与える。また、言葉を使うことは、言葉の世界の論理と文法に身をまかせることだとはいえ、どうしても現実世界の論理と文法に当てはめたい気持ちになる。

単純に考えてみよう。

何かを移すためには、人は自分が移らなければならない。

何かは何であってもいい。石ころであっても、文字であっても、人であっても、ペットであってもいい。それを移す、つまり移動させるためには、それとその動作に意識を移さなければならない。

意識は一面ではなくても、枠があって意識できる部分は限られていると思われる。視界のようなものと考えるといいかもしれない。視界には枠があり、枠の外は見えない。

枠の中にあるもの全部が見えているかということ、そんなことはなく、視点や視線と呼ばれている意識の点や線があるような気がする。とはいっても、視点や視線がそそがれている部分が見えているのかもまた疑問である。

そもそも「見る・見える」とは言葉であって、その言葉が指ししめす事物があるとは限らないし、「見損ねる」「見落とす」「見えない・見ない」「見誤る」もある。

＊

人が何かを移すさいには、人はどこかに移っている。人の意識だけでなく、身体の一部も移っている気がする。移っているというのは、意識されていないとも言える。

意識が意識されていないと言えばトートロジーであるとか矛盾だと考えるのは、矛盾である。言葉と事物が対応していない、つまり言葉の世界と現実の世界が対応していないことから考えて矛盾である。

言葉の世界の論理と文法は、現実世界の論理と文法や、論理と呼ばれている辻褄の世界の論理と文法とは異なり、対応していない。矛盾という言葉の喚起するイメージははなはだあやしい。

したがって、人が何かを移すさいには、人の意識や身体の一部も移っている、つまり意識されていない気がする。

＊

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっ

とすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。比喩的に言うと動詞は地に足が付いているのです（名詞は出不精で動きたがらない）。

（拙文「名詞的なもの、動詞的なもの」より引用）

（拙文「空から降ってくる言葉」より引用）

#言葉 #日本語 #音声 #文字 #大和言葉 #和語 #漢字 #動詞 #名詞#意識

人の外にあって、人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で「外」であるもの

＊

人の外にあって、人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で「外」であるもの

星野廉

2022年7月9日 07:55

言葉は謎です。謎だらけで訳が分かりません。これまで私は言葉について記事を書いてきましたが、それは言葉がどういうものか分からないからです。

私は分からないことについてしか記事を書きません。そんなわけで、分からないままに記事を書きはじめます。それでいて記事を書きおえたときには、依然として分からないままである場合がほとんどです。

また次の記事を書くことになります。その繰り返しです。

＊

分からないときには、分かろうとしたり知ろうとしたり悟ろうとはしません。調べたりもしません。気づこうと努めます。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうはずっと大切に思えます。

目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

＊

私にとって、言葉とは話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけではありません。表情と身振りも言葉です。記号や標識を含めてもいいでしょう。

言葉はいまここにあります。いつもいてくれます。おそらく死に際までいてくれる気がします。言葉は、物心のつくまえから、私といっしょにいる友なのです。

そのように私といっしょにいてくれる言葉というものについて、誰々が何と言ったか、何々という本や作品や文章に何と書かれているか、私は興味がありません。

自分のまわりにある言葉を観察する、自分のまわりにいる人がどう言葉と向きあっているかを観察する。このほうが私にははるかに大切なのです。

＊

言葉を知ろうとするとか、言葉を分かってもらうのではなく、いまここにある、いまここでいっしょにいてくれる、言葉のありように気づきたいのです。

具体的には、どうしたらいいのでしょうか。

繰り返して恐縮ですが、自分が言葉にどう向きあっているのかをひたすら観察し、自分のまわりにいる人たちが言葉にどう向きあっているのかをひたすら観察する。それしかないようです。

観察すると、不思議なことが起こっているのに気づきます。当たり前だと思っていたことが不思議だと気づきます。

この「気づく」は「分かる」ではない気がします。分けることも、理屈をつけることも、人に伝えることもできそうにないからです。

私にとって、「気づく」とは「分かる」というよりも不思議だと実感し、不思議さを噛みしめることなのです。

＊

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

こんなものは他にありますか。

言葉は外にあるときにしか確認できません。確認とは、自分だけでなく他人といっしょに目にし、あるいは耳にして、認める（見留める）という意味です。

話し言葉（音声）、書き言葉（文字）、表情、身振り、記号や標識を思いうかべてください。

外にある言葉に目や耳を向けるのであれば、他の人といっしょにできそうです。中にあるものは、残念ながら、見えません。聞こえそうにもありません。

自分の中にある言葉（出てくるのですから中にあると思われます）は、自分にも他の人にも見えませんし、他の人の中にある言葉も見えません。出てきてはじめて見えるし聞こえます。

外にある言葉について他人と伝えあうとすれば、言葉を使うしかないでしょう。ある言葉がどう見えるかやどう聞こえるかを別の言葉で伝えあうのです。ややこしくて途方に暮れますよね。笑いそうにもなります。

笑ってもいいでしょうが、そのややこしさというか不思議さを嘯みしめたいと思います。

＊

言葉は見たり聞くものと言うより、気づくものなのかもしれません。

繰り返しますが、私にとって「気づく」とは「分かる」というよりも不思議だと実感し、不思議さを噛みしめることなのです。

何をもって、言葉のありようの不思議さを、です。

これほど難しいことはない気がします。難しいのは言葉が外にある「外」だからだと諦めるしかないのかもしれない。

*

目に見えないものは目の前にある。宙や彼方にではなく、目の前にある。私は自分にそう言い聞かせます。言い聞かせて励ますしかないようです。

目に見えないものは目の前にあるとは、言葉に限らない気がします。

目の前にあって見えない、のです。不思議です。

どう考えても分かりません。

#言葉 # 話し言葉 # 書き言葉 # 文字 # 表情 # 身振り # 記号# 標識 # 気づく

信じる時、人は一瞬変になる。

＊

信じる時、人は一瞬変になる。

星野廉

2022年7月10日 07:46

目次

賭けと占いの根底には格好悪さがある

背後にある「何か」に身をゆだねる

めっちゃ気持ちよかったことを体が覚えている

賭けと占いと決断は近い

信じる時、人は一瞬変になる

好きなようにしてちょうだい

非人稱的でニュートラルなものは、外にある

賭けと占いの根底には格好悪さがある

「賭け事や占いは好きですか？」と尋ねられたとしましょう。かりに好きだと答えるさいに、何か気おくれに似た気持ちをいだきませんか？ 就職試験の面接、または多くの人たちを前にした公の場で、「はい、好きです」と素直に答えられるでしょうか。

好きだと口にするのには勇気が要りますね。どうしてなのでしょう。賭けは博打、占いは迷信といったイメージがあるからかもしれません。それだけではなく、もっと深いところに「気おくれに似た気持ち」の源があるのではないかと私は思います。

＊

「賭ける」と「占う」の背後には、「負ける」つまり「降伏」と、「任せる」つまり「服従」があるのではないのでしょうか。負けたりお任せするなんて格好が悪いのです。では、何に「負け」、何に「任せる」のでしょうか？

これは、それぞれの人が何を信仰しているかにも、関係がありそうです。ただし、この国には一神教が生活・文化・政治などあらゆる面で強い影響力をもつという、宗教的に濃密な風土はありません。なにしろ、年末年始にはキリスト教の教会、神社、お寺を平気で「はしごする」という、宗教的に希薄な風土が存在する国です。

とはいえ、欧米でも、占いに関しては、自分の信仰する宗教とは別のレベルで接する人たちがほとんどですので、賭け、占い、宗教をあまり強く結びつけて考える必要はないのかもしれませんが。

背後にある「何か」に身をゆだねる

賭けと占いにおいて、何に自分の身をゆだねるか？ この問いには、次のような答えが予想されます。

神、神々、仏、先祖、霊、教祖、超越者、天、イワシの頭、宇宙、宇宙の摂理、人知を超えた力、運命、カルマ、確率、あるいは「無」……。

詳しくはないのですが、たとえば、競馬、宝くじ、血液型占い、星占いを考えてみましょう。お馬さん、数字、血液型、星の運行自体に、自分の身をゆだねるのはないようです。そうした表面あらわれている現象や物事そのものというよりも、むしろその背後にある「何か」に身をゆだねているという気がします。

いずれにせよ、人は一瞬だけ本気で身をゆだねます。賭けや占いですから、瞬時か短時間です。長期的見地に立った宗教ではないのです。

*

本気に身をゆだねないのなら、賭けたり占ったりしなければいいのです。本気で賭けてなんぼ。本気で占ってなんぼ。ただし一瞬です。私は熱心な茶柱信者なのですが、馬鹿馬鹿しいとか、最近ぜんぜん当たっていないなあと思いつつ、占うときには一瞬信じます。全身全霊をもって茶柱に賭けています。

一瞬じゃなきゃ、アホらしくてやりません。「ああアホラシ」と我に返る寸前でとめるのです。寸止め。とほいうものの、その一瞬は、本気だし真剣なのです。頭の中も真っ白のはずです。

めっちゃ気持よかったことを体が覚えている

賭けも占いも、つねにかなうわけではありません。一瞬本気で賭けたり、一瞬本気で占いを信じて占った結果、外れたということはよくあります。そういうときには後悔します。馬鹿なことをしたと自己嫌悪を覚えることもあるでしょう。

でもまた賭けるし占うのは、なぜでしょう？ 一瞬あるいは短時間、めちゃくちゃ気持ちはよかったからにちがいません。さもなきゃ、またやりません。我に返ってからは忘れてしまっても、めっちゃ気持よかったことを体が覚えているのです。体はお利口さんなのです。

身も蓋もない言い方で恐縮ですが、その行為に依存しているとか嗜癖しているとも言えますね。とほいうものの、依存とか嗜癖と口にしたとたん、脳内物質がどぼどぼ分泌されるという例の話に行き着き、話が終わりがちになることに注意しましょう。

これが見えぬか！ 思考停止、判断停止、営業停止、ピーッ！ そのあなた、停止線からどいて！ 黄門さまの印籠と同じです。

賭けと占いと決断は近い

ここで、賭けと占いに近い行為である、決断について考えてみましょう。

この場合の決断とは軽いものではなく、真剣な決断、つまり一か八かの瀬戸際に置かれたさいの決断です。ほとんど賭けと同義であり、占いに頼って任せるしかないような、せっぱ詰まった決断だと思ってください。

こういう心理状態のときには、せっぱ詰まっていますから、「何か」に賭けています。「何か」は分からないし知らないままに、「何か」にすがっています。全面降伏しています。

*

賭けたり、占ったり、何らかの決断をするさいに、背後にある「何か」に、身をゆだねるとするのなら、これは大変なことです。「背後にある」のですよ。「何か」なのですよ。これじゃ、「わけが分からない」ではありませんか？

じつは人間はこの「わけの分からない」「何か」に初めから負けっぱなし、全面降伏しているのです。圧倒的に「強い・崇高な」存在という意味です。こうなると、対処するための切り札は一つしかありません。

信じるのみです。信じることで対峙するしかないという意味です。

信じるとき、人は一瞬変になる

信じるとき、人は一瞬あるいは短時間、自分を何かにゆだねます。心ここにあらず。目は宙を見ている。思考停止、判断停止。営業停止。忘我。頭の中が真っ白。言葉になんねー。

普通ではないのです。正常ではないとか、正気ではないとは言いませんが、尋常ではないことは確かでしょう。その意味では発情に似ているかもしれません。生物の生態を記録したテレビ番組を見ていると、発情期にある生物はたしかに変です。どう見ても普通じゃありません。

ところで、ヒトには発情期がなく、むしろ常時発情しているという話を聞いた覚えがありますが、あれは空耳ないし幻聴だったかもしれませんが、万が一そうであるなら、ヒトは全員で頭（こうべ）を垂れて大反省会をしなければならなくなるでしょう。

まさか、人間さま、ホモ・サピエンスとあろうものが……。なにしろ、月に仲間を送りこんだこともあるし、2000年問題も切り抜けたみたいだし、地球の気温を何度か高くしているのです。常時発情してぼーっとして正常な判断ができないなんて、ありえない。

そう信じたいですよ。人情として。

話を「頭の中が真っ白。言葉になんねー」にもどします。ただし、その状態は一瞬またはごく短い間の出来事だと思ってください。もしこういう尋常ではない心の状態におちいるとするなら、人が一瞬「外」にいるからではないでしょうか。absent-minded、心ここにあらず、お留守、「ここ」つまり中にはいないのです。

意識だけが体から切り離されたようなイメージです。意識がどこかに飛んでしまっている感じ。意識か心か精神か魂か知りませんが、どこかに移ってしまうのです。

好きなようにしてちょうだい

賭けたり、占ったり、決断するさいには、その直前には、多かれ少なかれせっぱ詰まった精神状態にあるはず。苦しくて、つらいのです。重みに耐えている感じ。その重荷を何かに預け、託したときの解放感を想像すると、さぞかし爽快で気持ちがいいでしょうね。

すべてお預け、すべてお任せ。全面降伏。好きなようにしてちょうだい。ああ、さっぱりした。ぷっふぁーっ。言葉になんねー。

こうした解放された喜びは誰もが日常的に経験しています。お酒を飲んでいるとき、喜怒哀楽がマックスに高まった状態、カラオケでいい気持ちになって心がぶっ飛んでいるとき、湯船に浸かって「はあっ」となっているとき、排泄が終わって「はあっ」となっているとき……。あと、あの時もそうでしょう。

超常現象とか、危ない薬物を摂取したときとか、神秘体験とか、憑依とか、そういう大げさな話ではありません。身も蓋もないほど、ありふれた話なのです。

こういうとき、人は外にいます。私に言わせると、非人称的でニュートラルなものに身をゆだねているのです。「外にあるもの」に身をゆだねる、身を任せる、徹底して負けている。全面降伏です。ワンコのへそ天のイメージ。好きなようにしてちょうだい。

非人称的でニュートラルなものは、外にある

「何か」とか、「外である」とか、非人称的でニュートラルなものとは、たとえば言葉、具体的には音声と文字が挙げられます。あと表情や身振りといった視覚言語もそうですね。広義の言葉です。

誰もが生まれたときから、外にあって、ときどき外から中へ入り外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外」であるもの。

言葉のほかには、筋書きや物語とか、人を動かしている「何か」がそうですね。音楽にはぜんぜん詳しくないのですが、旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

これらの「何か」は人にとって、生まれた直後から経験している親しいものなのです。このニュートラルな「何か」は、抽象と具象を兼ねそなえているため、具体的なものとして外にありながら、同時にその抽象の側面が人の中に入ったり出るといった稀に見る特性があります。

その「何か」がつねに外にありながら、同時に（あるいは並行して）人の中に入ったり出たりするとき、人はたぶん一瞬あるいは短時間乗っ取られるのです。あるいは、意識を失ったり意識が薄れるのです。要するに変になるのです。怪しげな言い方で恐縮ですが、そんな気がします。

人は、その「何か」に、日常的に経験する「賭ける」という行為をおして接しています。しかも、この「賭ける」は、いわゆるギャンブルという意味での「賭け」だけに起きる行為ではなく、さまざまな意識レベルにあるありふれた状態なのです。

おそらく、その状態は、言葉（話し言葉、書き言葉、広義の歌、表情、動作）と深くかかわっているだろう。そんな気がしてなりません。

その意味で「賭ける」は人にとって根源的な身振りであり行為と言えるでしょう。そ

んなわけで、生後間もない赤ちゃんだって賭けているし、ある意味で占ってもいるので
すが、このことについては、機会を改めてお話しするつもりです。

#言葉 # 非人称 # ニュートラル # 賭け # 占い # 決断

目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が
「化けている」のではないか、とも考えられるわけ
です。

＊

**目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」のではないか、とも考えられるわけです。

星野廉

2022年7月12日 08:07**

目次

物をどう見るかの問題とも言えるでしょう

話はがらりと変わりますが、

話を仮面にもどしますが、

話は飛躍しますが、

さて、核心に入ります。

物をどう見るかの問題とも言えるでしょう

仮面と人形の共通点は何でしょう？

難しく考えないでください。両方とも、「人面○○」や「何かに浮かんで見える○○像」の一種、または「人面○○」や「何かに浮かんで見える○○像」のチャンピオンみたいなものだと考えてみましょう。

「人面○○」や「何かに浮かんで見える○○像」とは、トイレの壁の模様とか、天井の染みとか、池の鯉とか、川辺に転がっている石とか、写真の隅っことか、車を正面から見た時なんかに、人間の顔や姿や形を見てしまうことです。錯覚と言えば錯覚だし、神秘と言えば神秘です。人によっていろいろな解釈ができるでしょう。

それに対し、仮面やお面、そして人形やキャラクターなどは、そのものズバリ、人が意図的に人間の顔や体を真似て作るものですね。真似て作ったと言っても、それは物なのです。作った物であれ、自然界にある物であれ、物をどう見るかの問題とも言えるでしょう。

もとは、ラスコーやアルタミラの洞くつの絵みたいに、土の壁なんかには人の顔や形、あるいは狩りの獲物の動物などを描いていたのでしょうか。それとも、人の顔や形に似ている石ころや岩や木切れを見て少し細工してみたり、土や砂や粘土で顔や形を作って、「ほほーっ」とか「ぎゃははーっ」とか「ひえーっ」とか叫んで、騒いでいたのでしょうか？

こうしたものは、お絵描きと工作のどちらが先か、という問題ではなく、同時発生的に起こったのかもしれないね。

そういうのが高じると、人形やお面に行き着くって感じがしませんか？ 人形と言えば、ひな祭りが頭に浮かびます。おひな様も、男女の内裏びなだけを飾るごく質素なものから、ひな壇とセットになっている車一台が買えるくらいの豪華なものまであります。

話はがらりと変わりますが、

「タモちゃんのお代理様」とかいうコーナーが、テレビ番組の「笑っていいとも！」でありましたね。松本小雪とかいう人とタモリが、視聴者の相談に答えるという企画だったような覚えがありますが、あれって、かなり昔の話のはずです。

ところで、なんで、「お代理様」だったのでしょうか？ 視聴者の代理として、疑問に答えていたからでしょうか？ 深読み、またはこじつけをすると、「お代理様＝お内裏様」になります。意味深ですね。

人形についてのちほど触れるとして、まず仮面やお面について考えてみましょう。

お面の場合には、能面ぐらいになると、かなり高価だし、国宝級のものもあります。また、世界中の人たちが、さまざまな素材のお面を作っています。

「面」という言葉に、自分はとても興味を持っています。「面」は「かお」や「つら」のことです。「人形は顔が命」という言い方があるくらいですから、人にとってはとても大切なものだという気がしてなりません。

もしも、あなたの目の前に、いきなり人の顔が「にゅーっ」と出てきたら、不気味ですよね。顔って、自分自身の首の上にもあるのに、実に気味が悪いんです。だから、「人面〇〇」で大騒ぎしたりします。キリストやマリアの像や、観音像が何かに浮かんだとって、大騒動になる場合もあります。なぜでしょう？

顔から考えてみます。個人的な意見を申しますと、顔＝面＝皮膚＝皮で、「厚みがない」・「薄っぺら」だからだと思うんです。言い換えると、実体がないみたいに見える。まるで幽霊です。のっぺらぼうのお化けです。

また、ぺらぺらだから被ることができます。身にまとうことができる被り物です。つまり、自分でないものに「化ける」ことができる。逆に言うと、目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」のではないか、とも考えられるわけです（「考えられる」だけです）。

こういうのを「表象の働き」とか「象徴の仕組み」とか呼んでいる人もいるみたいです。要するに、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることなのです。言葉がそうですね。言葉は「言葉でないもの」の代わりに人が使っているものです。単純に考えてください。本物の花の代わりに「花という言葉」を使うという意味です。

お金も、表象＝象徴ですね。お金は価値の象徴だとも言えます。したがって、その額によってさまざまなものの代わりになります。ほぼすべてのものがお金で買えるという意味では、お金はほぼすべてのものの象徴だと考えることもできます。そう思うと、お金ってすごいですね。

だから、みんなが欲しがるのでしょ。

しかもお金は洗えます。洗濯機で回して出所を消すこともできるそうです。まさにのっぺらぼう。

だから、世界をぐるぐると駆けめぐるのでしょ。そうだとしか考えられません。

話を仮面にもどしますが、

「仮面」とか「能面」を見て、気味が悪いと感じる時がありませんか？

最高に不気味なのは、何と言ってもデスマスク。デスマスクもマスクデス。自分は、一度だけ、お能を観に行ったことがあるのですが、あまりにも退屈なので途中で眠ってしまいました。能面を、デパートの催しで間近に見たことがあります。もちろん、展示してあるものでしたが、見る位置によって「表情」が変わって見えるのです。ミステリアスなものを感じました。

「表情」という言葉があります。個人的な意見なのですが、「表情」も一種の「仮面」だと思います。文学的な言い方ですが、「表情をまとう」なんて表現もあるくらいです。「表情を浮かべる」という言い方なら、日常会話でも出てきますね。ポイントは、表情は「浮かんでいる」ということです。要するに、内心は分からない。ベール（被い）に包まれている。

やっぱり、「表情」は一種の「仮面」ではないでしょうか。演劇で考えてみましょう。劇場でのお芝居にしろ、テレビドラマにしろ、映画にしろ、劇は「ステージ＝舞台」や「スタジオ」で行われます。観客との間が離れているわけですから、濃いめの「メイク＝お化粧」をしますね。「化粧」は文字通り、「化ける」ことです。役者は「化ける」ことによって、喜怒哀楽などの表情を誇張し、隔たりのある場所にいる観客に伝えるわけです。

すると、「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「表象」＝「象徴」という、つながりが見えてきます。同時に、これらのものに、どこか「あやしい＝怪しい＝妖しい＝面妖（めんよう）」というイメージが備わっているのも、何となく分かる気がしませんか？

「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「表象」＝「象徴」に、もう一つ付け加えたいものがあります。「かつら」です。広辞苑によると、「かつら」は「かずら」「かづら」でもあるとのこと。分かったずら？ 「かつら」も、一種の「象徴」だと言えそうです。人形は顔が命。オヤジはヅラが命。政治家と公務員はおもてヅラが命。言えてませんか？
中身とづらがずれている。よくできたづらほど値が張る。しかも鉄面皮。

かつら、お面、仮面、お化粧、表情、顔つき——こうしたものは、さきほど書きました「表象の働き」とか「象徴の仕組み」という言葉でひっくりめることができそうです。要

するに、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることです。ぶっちゃけた話が、何かに「化ける」ことです。もう少しお上品に言うと「装う」ことです。

どうして、人間は、Aの代わりに「Aではないもの」を用いる、などという奇妙なことをするのでしょう？

個人的な意見を申しますと、人間が地球で威張っていることと関係があるような気がします。「威張る」というのは、文字通り「権威」をからだに「張る」こと。つまり、「虎の威を借りる」ということです。

以上のことから「虎の威」とは「虎の衣」に他ならず、雷さまがはいている虎の「皮」のパンツと同じだと言えそうです。また、パンツは「メンツ＝面子」に似ています。これも駄洒落ですが、意外と言えてませんか？

ひょっとして、人は「面子＝体面＝面目」のために、象徴をまとうのではないのでしょうか？

そう言えば、この記事の初めのほうで取り上げた、おひな様もえらそうにしていますね。実際、えらいお方らしいです。内裏雛（だいらびな）は、高貴なお方のお人形。だから、ひな壇の上のほうに控えていらっしゃるのです。

話は飛躍しますが、

「ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きものです。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよいます。そのうようよに「壇＝段」がある、つまり格付けされているのです。なお、お役所では、ハンコぺたぺたのペーパーワークが主な仕事になっています。ペーパー＝紙の先祖は、草木の皮や生き物の皮だったそうです。パピルス（ペーパーの語源らしいです）や羊皮紙なんて、小学校で習った覚えがありませんか。

「ひな壇」は「虎の威＝衣」と二点セットで、クラス分けしたり、棲み分けして、暮らすわけです（今は駄洒落です、念のため）。これが代々続けば、例の二世、三世、そして世襲ということになります。仲間うちで「虎の威＝衣」を譲ったり譲り合えば、天下り、

渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「虎の威=衣」は「虎の位」でもあります。ペーパーからキャリアまで、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物まで、多岐にわたる種類があります。

引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえます。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんで、これがご奉公なの？ 公僕、最後のご奉公ってわけですか？ ここまで来ると、もうめちゃくちゃではないでしょうか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり騒がないが不思議です。

「タモちゃんのお代理様」は、やっぱり言えていると思います。

さて、核心に入ります。

人間は人間よりも、もっともっと偉い存在がいて、自分がその代理を務めたいという、願望=欲求=祈り=野望を持っているのではないのでしょうか？

Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面を被り、表情を真似て、時にはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、こんなふうに化ければ、〇〇様なんて呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

そんな具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。そして、ますます図に乗る。

どうして、こうなっちゃったんでしょう？ 昔々と関係ありそうです。

たとえば、次のような具合です。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」「作物が駄目にならないように、大雨が止み

ますように」「ニワトリとブタが増えますように」「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」「今度の戦（いくさ）に勝てますように」「あいつとの賭けに勝てますように」「お父さんの怪我が早く治りますように」「娘がいいところにお嫁に行けますように」「亡くなった後に天国に行けますように」「元気が出ますように」

というふうに庶民が願い、祈ります。すると、虎皮のパンツをはき、お化粧品をするか仮面を被り、かつらをつけた代理人がしゃしゃり出て来て、えらそうに次のように言います。

「お任せあれ。任せとき。大丈夫。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ この間は、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなった時には、代理人は即座に仮面を外し、お化粧品を落とし、表情をしおらしくして、かつらも外して、「わたしは、単なる代理でございます」と言って、責任を転嫁すればいい。

または、「あんたの信心が足りんからじゃ」と、これまた責任を転嫁すればいい。

このように、「代理人＝代行者」は、実に気楽でいい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イッツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマンイズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

なんて、恥も外聞もなくおふざけをしてしまいましたが、「代理」とか「代理人」というのは、実はかなりシリアスで怖い問題なんです。だって、そういう仕組みや人たちによって世界は動かされているんですから。

嘘じゃありません。テレビのニュースや新聞をご覧ください。代理、代理人、仮面、虎皮のパンツ、仮装、お化粧品、かつら、作り顔、顔芸ばかりです。だまされないように、気を付けましょう。

とはいうものの、じつは本物や中身や真実や事実や現実なんてものがないのが、これまた困った問題なんです。でも、こういうややこしい話はやめておきます。

仮面とお面についてはそういうことなのですが、人形については日をあらためて考えてみたいと思います。

#顔 # 仮面 # 人形 # 表象 # 代理

意思が「決める」のではなく、むしろ「決まる」。

＊

意思が「決める」のではなく、むしろ「決まる」。

星野廉

2022年7月14日 07:54

おそらく、その状態は、言葉（話し言葉、書き言葉、広義の歌、表情、動作）と深くかかわっているだろう。そんな気がしてなりません。

その意味で「賭ける」は人にとって根源的な身振りであり行為と言えるでしょう。そんなわけで、生後間もない赤ちゃんだって賭けているし、ある意味で占ってもいるのですが、このことについては、機会を改めてお話しするつもりです。

(拙文「信じる時、人は一瞬変になる。」より)

目次

赤ちゃんは信号を発している

偶然と必然のからみとしての賭け

願いや祈りは着実に届き、かなうものなのか

当たり前ではなく、むしろ賭けなのである

意思が「決める」のではなく、むしろ「決まる」

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれている

赤ちゃんは信号を発している

赤ちゃんは健常であれば、さまざまな形の「信号」を、おもに五感を総動員して、発信し、受信つまり知覚しています。そのさいに、赤ん坊は、「賭け」と「占い」という行為のなかへと、否応なしに、いわば「投げ込まれている」と言えそうです。

それほど、ヒトの赤ちゃんという存在は無力なのです。

＊

生後、あるいは孵化後数時間で、おとなのミニチュアのような容姿となり、立ち上がったり、動き回ったりする、たとえば、お馬さんの赤ちゃんや、イカさんの赤ちゃんを思い浮かべれば納得できると思います。

もちろん、程度の差はあります。ある期間中、お母さんの腹部にある袋で保護されているカンガルーさんの赤ちゃんや、巣の中で毛の薄い頼りなげな姿で巣立ちまで過ごしている鳥類の赤ちゃんも確かにいますね。

なお、ヒトの赤ちゃんのよるべなさや無力さには、ネオテニー（幼形成熟）という現象が関係しているという説があるそうですが、言葉を知っているだけでどういう意味なのかは知りません。

語弊を覚悟で言いますと、ヒトは「早産」し、子を「未熟児」として産むということだと想像しています。だから、自立するまでに長期間を要するという理屈みたいです。

偶然と必然のからみとしての賭け

ヒトの赤ちゃんが「賭けたり」「占っている」というのは、赤ちゃんが「信号」を合図として発することから始まります。

「オギャー」と叫んだり、笑みを浮かべたり、じっとまなざしを向けるという合図の「信号」を、おとなが期待や欲求というメッセージとして受け取るのです。

期待や欲求は、これから先の出来事に向けられていますね。このことから、「賭ける」と「占う」との関連が分かるでしょう。未来を指向しているのです。

＊

生後三か月の赤ちゃんに意志や意思があるかは尋ねたことがないので知りませんが、よるべない無力な赤ちゃんが泣いたり笑みを浮かべているのは、偶然と必然のからみの中に投げ込まれているようなものです。

偶然と必然のからみとは、賭けのことです。

赤ちゃんの泣き声と笑みがまわりの大人たちに信号を送る。その身返りとして、お乳をもらったりおしめを替えてもらうことができるかどうかは、赤ちゃんにとって賭けなのです。

＊

ここで大切な点は、赤ちゃんの泣き声と笑みはニュートラルな信号であることです。信号がニュートラルだというのは、信号が無色透明かつ中立的な存在であり、赤ちゃんの意思や意志とは本来は無関係だいう意味です。

言葉と似ています。というか、赤ちゃんの泣き声、笑み、表情は視覚言語の一部である、言い換えると言葉だというべきでしょう。

すべての赤ちゃんが、タイミングよくお乳をもらったりおしめを替えてもらっているわけではありません。事故や育児放棄や虐待や貧困や災害を考えると想像できると思います。世界的なレベルで考えるとさらに分かります。戦争です。

願いや祈りは着実に届き、かなうものなのか

赤ちゃんは運と偶然の中で、その意志や意思に関係なく「賭け」ている、つまり「賭け」を余儀なくされているのです。

じつは、おとなもそうなのです。

あなたの日々の願いと祈り（赤ちゃんにとっての泣き声と笑みに相当するものです）は着実に届いているのでしょうか？ その願いと祈りは報いられ、身返りを得て、実現しているのでしょうか？

あなたは無意識のうちに、あるいは自分の意思に関係なく、賭けを余儀なくされては

いないでしょうか？ あなたは日々、そして一刻一刻、この瞬間にも賭けていないでしょうか？

＊

信号のになうメッセージが意味を持ち、ある特定の目的の実現に向かうかどうかは、きわめて不安定な基盤に立っています。不安定な基盤に立っていなければ、メッセージはつねに然るべきところに届き、思いは実現しているはずですが。

なのに、願いや祈りや思いは宙づりにされます。宙ぶらりん。掛かって、懸かって、架かって、賭ける。

信号がニュートラルであるというのは、信号のメッセージが正しく然るべきところに届く保証はないという意味です。

ツバメのひなの泣き声や動作が、信号としてメッセージを持ち、それが然るべき相手、つまりツバメの親に届くかどうかは、偶然と必然のからみの中にあるのです。

ツバメのひなのそばにいるかもしれない、クモやスズメやダニには、その信号のメッセージは伝わりません。天敵であるカラスや猛禽類には別のメッセージとして伝わるでしょう。「食べ物だ」というメッセージです。

ヒトにも別のメッセージを与えるにちがひありません。これはヒトに似て複雑で気まぐれです。信号の意味やメッセージは必然や当然のものでは、ぜんぜんないわけです。これをニュートラルとか非人称的と私は呼んでいます。

話し言葉である音声、書き言葉である文字、広義の視覚言語の一部である表情や身振りも、ニュートラルで非人称的なものだと私はとらえています。

いまニュートラルで非人称的なものと言いましたが、あくまでもとりあえずの仮の名であり、じつは名づけることはできなく、「何か」としか保留できないものであり、外にある「外」なのです。人の思いどおりにはなりません。

当たり前ではなく、むしろ賭けなのである

ヒトの赤ちゃんを例に取れば、現在の日本という国の比較的恵まれた好条件や好環境を基準にするかぎりにおいて、安定した基盤に立った信号のやりとりがおこなわれていると言えるにすぎません。

一方で、この惑星の圧倒的多数のヒトの赤ちゃんたちと、ヒト以外の生き物たちの赤ちゃんたちは、きわめて「きわめて不安定な基盤」に立っているのです。

赤ちゃんが泣けば、お乳をもらえる、そしておしめを替えてもらえるというのは当たり前でも必然でもないのです。

いわゆる生存率という確率を思い出してください。親がそばにいないで放って置かれる、つまり無視されたり、逆に天敵に存在を察知される危険性の方が多かたりするのです。

幸いな者だけが殖える、増える。とはいうものの、それが果たして幸いかどうか。これも賭けでしょう。赤ちゃんの「賭ける」と「占う」が、いかに危ういものであるかが体感できるかと思いますが、現在の日本を基準にすると体感しにくいかもしれません。

大切なことなので繰り返しますが、当たり前が当たり前ではないし、必然や自然や確実でもないという意味です。

むしろ、常時、賭けの中にいるのです。何があって、おそらくあらゆる存在が、です。ヒトやキツネに踏まれる石もです。生きている生きていないに関係なくです。万物流転。万物賭博。万物占象（うらかた）。

意思が「決める」のではなく、むしろ「決まる」

いったん発信された「ニュートラルな信号」は確率に大きく左右されていると言えます。信号のニュートラル性とは、信号がつねに確率に左右されている状態だとも言い換えることができるでしょう。

確率。この言葉のイメージから、赤ん坊も「賭けたり」「占ったり」していると私は思っています。もちろん、おとなもです。おそらく、この惑星のあらゆる生き物がそうなのでしょう。

日々おこなっている、あるいはおこなうことを余儀なくされているものとして、ヒトの場合には、賭ける、占うに加えて、日常的な種々の決断も含めていような気がします。

「思う」は、ささやかな決意の不断の積み重ねではないでしょうか。意思決定などという大げさな話ではなくて。

意思が「決める」のではなく、むしろ「決まる」のです。外にある「何か」に助けられて決まるのです。外に助けられるとき、たぶん人は一瞬気を失っています。一瞬ですから気づかないかもしれません。

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれている

ニュートラルな「信号」を次のように言うこともできるでしょう。

誰もが生まれたときから、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外であるもの」。

言葉（話し言葉、書き言葉、表情、身振り）のほかには、筋書きや物語とか「賭ける」という行為とか、人を動かしている「何か」がそうでしょう。音楽でいう旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

どれもが、決めるのではなく、決まるのです。決めているように見えて、決まっているのです。

＊

このニュートラルな「信号」は、抽象と具象を兼ねそなえているため、その抽象の側面が人の中に入ったり出るといふ稀に見る特性があります。そのとき、人はたぶん一瞬、あるいは短時間乗っ取られるのです。あるいは、意識を失ったり意識が薄れるのです。

このように言うと、いかにも怪しげな言い方で恐縮なのですが、これは「何か」に身を任せて、賭けている結果だと考えると分かりやすいのではないのでしょうか。

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれているのですから、一瞬あるいはごく短時間だけ、普通の心理状態でなくなることは確かだと思います。

(普通ではないという意味では発情とか性行為中と似ている気がします。そもそも特定の発情期のないヒトは、つねに発情しているのですたっけ？　いまのはレトリックであり比喩です。とっぴな言い方をして申し訳ありません。最近とても気になるのです。人は常時我を忘れていないのか、と。忘我、夢中、霧中、茫然自失。「ヒトは」とか「人は」なんて言いましたが、とりあえずは自分のことです。)

「何か」が入ってきて普通ではなくなっている。これは、おどろおどろしい話ではなく、むしろさまざまな意識のレベルにある、ありふれた状態である気がします。

「何か」、これは外から来た「外」でしょう。ままならない、つまり思いどおりにならない「何か」なのです。

#言葉# 信号# 非人称# ニュートラル# 賭け# 占い# 決断# 偶然# 必然# 赤ちゃん

黒いカラスは白いサギ

＊

黒いカラスは白いサギ

星野廉

2022年7月30日 08:00

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

こんなものは他にありますか。

(拙文「人の外にあって、人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で「外」であるもの」より)

目次

言葉をいじるのは簡単、現実をいじるのは困難

最高権力者の言葉

いったん外に出した言葉を撤回するのは難しいというか恥ずかしい

投稿＝複製＝拡散＝流通＝保存が、ほぼ同時に一瞬のうちに起きる時代

言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる

面子を捨てる勇気を持つ

言葉を崇め、その前にひれ伏す

言ってしまった以上、広まってしまった以上、回収して取り戻すわけにはいかない

いわば言葉の一人勝ちなのかもしれない

言葉をいじるのは簡単、現実をいじるのは困難

黒いカラスは白いサギ——。このフレーズを見て、何を連想なさいますか？

詩の一部に見えるかもしれません。広告のコピーとか、なにかのキャッチフレーズかなと思う人がいても不思議ではないでしょう。黒を白（または白を黒）と言いくるめるとか、「鷺を烏」という言い回しを連想する人もいるでしょう。

隠喩や寓意を読む人がいても驚きません。人それぞれです。

「黒いカラスは白いサギだ。」という文にして、この文をいじってみましょう。「白いサギは黒いカラスだ。」「黒いカラスは白黒のパンダだ。」「白いサギは白いハトだ。」「黒いカラスは白いサギではない。」「きょうから、黒いサギを白いサギとする。」

こんなふうには、言葉は簡単にいじることができます。言葉を使えば何とでも言えるからです。一方で、目の前に黒いカラスがいたとして、それを白いサギに変えることはきわめて難しいどころか、不可能だと考えられます。現実には簡単にはいじれないのです。

言葉は簡単に思いどおりになるが（思いの中でいじれるという意味です）、現実にはそう簡単には思いどおりにならない。そんなふうには言えそうです。

最高権力者の言葉

「黒いカラスは白いサギだ。」と、誰が言ったとします。笑われるのが落ちかもしれませんが、でも、これを口にしたのが、国の最高権力者だったら、どうでしょう。最高権力者はどんな権限も持っているはずで、この権限には、法律にのっとって人を殺める権限も含まれます。あっさり書きましたが、恐ろしい状況ですね。

とはいうものの、そんな恐ろしい状況は世界のあちこちに見られません。権力とか権限とか権利というものは、しばしばこうした恐ろしい形で立ちあらわれ、しかもそれが継続している——みなさんがご承知のとおりです。誰もが、合法的に自分や家族を拘束されたり、拷問を受けたり、殺められたくはありません。

人類の歴史は、まさにそうした状況の連続であり積み重ねだと言えそうです。

いったん外に出した言葉を撤回するのは難しいというか恥ずかしい

言葉をいじるのは簡単です。ところが、いったん出た言葉をいじるのはとても難しいのです。

これは、言葉が人の外にあって、ときどき人の中に入ったり出たりするにもかわら
ず、人の思いどおりにならないという意味で、人にとって「外（外部）」だからにほかな
りません。ややこしい言い方をして、ごめんなさい。少しずつ説明していきます。

言葉をいじるのが簡単だというのは、外にある言葉が、人の中に入ったときに起こり
ます。脳でも思いでも思考でも何でもかまいませんが、人の中に入っている言葉を人は
いじることができます。何とでも言えるという意味です。

＊

たとえば、「黒いカラスは白いサギだ」と言えます。その言葉が人の外に出ると、たち
まちその言葉は人から離れます。「離れる」というのは「固まる」とか「残る」とも言え
るでしょう。いったん口にした、あるいは文字にした言葉は簡単に言いなおせない、撤
回できないという事態におちいるのです。

私なんかしょっちゅう言いなおしたり撤回したりしていますが、そうした行為をする
と恥ずかしいとか、信頼を失うとか、頭が悪いと思われるのが嫌だとか、面子にかかわ
るとか考える人が意外と多いようです。

そういう恥ずかしがり屋さんとかプライドが高い人（几帳面で生真面目なのかもしれ
ません）にとって、言いなおしたり、書きなおしたり、撤回するのはかなり難しいよう
です。

投稿＝複製＝拡散＝流通＝保存が、ほぼ同時に一瞬のうちに起きる時代

これが最高権力者だったら、どうでしょう。そこまでいなくても、そこそこ権力や
権限がある人の場合には、いったん口にしたたり書いたりした言葉や文章や文書を直した
り、撤回するのは、やはり難しいように想像します。

いったん外に出た言葉は、固まるし残るからですが、いまはインターネットでの発信
や言葉の流通が広くおこなわれています。

投稿＝複製＝拡散＝流通（引用・翻訳）＝保存が、ほぼ同時に一瞬のうちに起きると
いう事態に敏感でありたいと思います。

言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる

大切なことなので、繰り返しますが、言葉をいじるのは簡単です。言葉を使えば何
とでも言えるからです。事実、虚偽、推測、妄想、幻覚に関係なくです。

たとえば「黒いカラスは白いサギだ」と言えます。最高権力者がそうだと決めること
もできます。最高権力者の言うままに議会で議決されることもあります。それに嫌々な
がら従わなければならない国民がいます。自分から進んで従う国民もいます。

人を拘束したり殺めたり隔離する権限をもった人間に反抗することは、即犯行になる
からです。

面子を捨てる勇気を持つ

一方で、いったん外に出た言葉は外にあるからこそ、なかなか自分の思いどおりになっ
てくれません。誰の思いどおりにもなりません。ままならないのです。最高権力者も、外
にある言葉には手を焼きます。

【※最高権力者の場合には、「黒いカラスは白いサギだ」の代わりに、隣国にレッテルを
貼る（たとえば「○○は□□だ」とか、隣国との関係（国内の少数民族や少数集団でも
いいです）について標語を掲げる（たとえば「△△政策」）と考えると分かりやすいと思
います。いずれにせよ、言葉であることがポイントです。】

いったん出た言葉のままならさに対する唯一の方策は、面子を捨てる勇気を持つこと
だという気がします。

捨てるのに勇気が必要なほど、人にとって面子は大切なのです。それほど大切な面子って何なのでしょう？ 言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる。これが面子をたもつことです。

面子をたもつというのは、現実に沿うのではなく筋を通そうとして、言葉のままならさに屈している状態です。敵や誰かや相手に屈しているではありません。

＊

「黒いカラスは白いサギだ」が固定されるのです。すると、そのフレーズに合うような言葉をつぎつぎに出さなければならなくなります（整合性をもたせるという意味です）。誰がって、そのフレーズを最初に外に発した人です。以後は辻褃合わせ地獄におちいります。

辻褃合わせは言葉だけ（口先だけ）のレベルにとどまらず、行動で示さなければなりません（実行する、つまり既成事実を積みあげる）。しかも、ぶれてはならないのです。

（※この場合の「既成事実を積みあげる」とは、具体的には、黒いカラスあるいは白いサギを抹殺していく、「間違った」記述のある事典や辞書や教科書や学術書を改ざんする、異議を唱える学者やジャーナリストを処分する（消すことです）という措置が、過去に取られ、現在もおこなわれています。）

その言葉を発した人が最高権力者である場合には、辻褃合わせをするために、その側近や部下だけでなく、国民が総動員される事態になります。リーダーはそうやってリーダーシップを発揮するわけです。

リーダーシップが発揮される場が、国家的イベント（さまざまなケースが考えられます）ですが、もっとも恐ろしく不幸な「大イベント」は戦争にほかなりません。

言葉を崇め、その前にひれ伏す

言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる——。これが露わになるのは、戦争

や大災害が起きているときです。目の前の現実よりも、あるいは人びとの生活や命よりも、言葉の上での辻褃合わせが優先される。あっさり言いましたが、恐ろしい事態です。

言葉を崇め、言葉にひれ伏しているのです。

誰がそうするのかというと、人びとの上に立っているリーダー（たち）です。たった一人の場合もありますね。たった一人の辻褃合わせのために、地域だけでなく、世界が付き合わされ、地球が危機に瀕するという状況にいたります。

辻褃合わせの「辻褃」、筋を合わせるの「筋」、こうしたものは人が発し、いったん放たれると、人から離れた外にあります。外にあるからままたまならない、つまり思いどおりにならないのです。

ままたまならない言葉を前にしてリーダー（たち）も途方に暮れているにちがひありません。現実よりも言葉にとらわれて右往左往しているのですが、その素振りは見せません。面子があるからです。

言ってしまった以上、広まってしまった以上、回収して取り戻すわけにはいかない

あの人（たち）は現実を見ていません。辻褃と筋を見ています。辻褃も筋も言葉として立ちあられます。言葉として複製＝拡散＝保管されます。情報やプロパガンダは言葉として世界中で流通します。

いまや情報の真偽の境が不明になっていることは、みなさんがご存じのとおりです。なぜでしょう？ 言葉をいじるのが簡単だからです。

ところが、人がいじって発信する言葉は、つぎつぎと人の外に出ていく過程で、ますます人の手を離れたものになっていきます。

言ってしまった以上、文字になってしまった以上、広まってしまった以上、回収して取り戻すわけにはいかないのです。これが辻褃であり、面子なのであり、要するに「固

まった言葉」なのであり、しかも思いどおりにならない、つまり訂正も撤回もできない言葉なのです。

その結果として、自分（たち）が招いた非常事態下に、リーダー（たち）が、さらなる辻褃合わせ、つまり面子をたもつことに血道を上げ、現実への対応がないがしろにされるのは、みなさんをご承知のとおりです。

いま、げんにそれが起きています。

そうだとすれば、リーダー（たち）が敵だと名指しているものは敵ではないことになります。そもそもこうした状況では武器をもって戦わなければならない敵などいないのではないのでしょうか。

言葉が敵だと言っているわけではありません。言葉をもってしまった存在が向かわざるをえない、言葉に特有の仕組みや仕掛けこそが敵だという気がします。

その仕組みまたは仕掛けとは、言葉が人の中において簡単にいじれることと、いったん人の外に出た言葉が固まって残りしかも広がることだと思えます。

いわば言葉の一人勝ちなのかもしれない

この仕組みは、人の外にあるものであり、言葉を用いる誰もが免れないニュートラルな存在だと考えられます。誰もが言葉とかがわる日々の現場で経験しているという意味です。

失言、言い間違い、「言葉が足りなかった」（過去形であることに注目してください）、「言葉が多すぎた」、「言葉遣いが不適切だった」、言葉の一人歩き、誤解、曲解、嘘、契約不履行、言った言わない、売り言葉に買い言葉、口喧嘩、議論、裁判、牽強付会、罵り合い、コミュニケーションの不全などなど。

相手が悪いというよりも、人が言葉とその言葉のありように対し徹底して無力なのです。人は言葉とその仕組みにひれ伏すしかないと言えるでしょう。

いわば言葉の一人勝ちのような状況なのかもしれません。

こう言うと身も蓋もない話になりますが、人は面子を捨てる勇気を持ち、当事者同士が歩み寄り、辻褃合わせの連鎖を断ち切ることで、言葉の仕組みに対抗できる気がします。きわめて難しいことではあります。

いずれにせよ、上で述べたリーダー（たち）の敵を巡っての勘違いに世界が付き合い合されていると考えると、悲しいどころか激しい憤りを覚えます。やるせなさも感じますが、いちばん怖いのは、無力感だと思います。

きわめて重大で複雑な話をきわめて短絡的に扱い、申し訳ありませんでした。この記事では、言葉とそのありようだけに的を絞っていますが、各言葉が発せられるまでの過程には、そしてその背景には、それぞれに錯綜した個別の要因があるのは言うまでもありません。

#言葉 #文字 #辻褃 #面子 #権力 #情報

意味のある影、意味のない影

＊

意味のある影、意味のない影

星野廉

2022年8月5日 08:12

影も陰も姿も像も反射も、すべてがかげと呼ばれていることに気づきます。
(拙文「「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれませんが。」より)

目次

影をうつす、影がうつる

一対一に対応する目映い影

言葉という影が、影という言葉に

正確に、細かく、うつす

現実をうつす

「似ている」の世界、「同じ（同一）」の世界

もっともっと鮮明にうつす

作られた影

筋書きやストーリーのある影

影に影を投影する

筋書きも、目的も、意味もない影たち

影をうつす、影がうつる

影といえば、映画や写真を避けて通るわけにはいきません。

幼いころに映画館で見た映画を思い出します。映画館が真っ暗なのです。いまの映画館は明るいです。

真っ暗な中で見る映画に惹きつけられ魅惑された記憶がかすかにあります。かすかで断片的なのですが、強烈なわくわくをともなう思い出なのです。

映画も本来は銀幕上に投げられた「影」なのです。その影に、人はいろいろなものを投影し重ねるわけです。影に影を重ねる映画の鑑賞はじつにスリリングな体験だと思います。

銀幕上の影に、言葉という影を重ねる行為もです。

＊

写真も影ですね。

私は映画にも写真にも疎いので、知っていることだけを頼りに書いてみようと思います。この記事のためにあえて調べ物はしないという意味です。

できるだけ、いまここにあるもので、ああでもないこうでもない、ああだこうだを試みるつもりです。

映画、写真、映画用のカメラ、写真を撮るためのカメラ、望遠鏡、顕微鏡、影絵、幻灯、スライド、複写機。

思いつくままに並べましたが、広げすぎたみたいです。それぞれの仕組みについてはよく知りません。まったく知らないものもあります。ただわくわくします。

私は研究者でも探求者でもないので、分からないという気持ちと不思議だという思いを大切に、楽しみながら書いてみます。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうがずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

分からないときには知ろうとしたり分かろうとするのではなく、気づかないものに目を向ける。これが私には合っているようです。横着なのでしょうね。

一対一に対応する目映い影

話を映画と写真に絞ります。ざっくりと両方とも影だという前提で話を進めます。映画と写真で思いだすのが、写像という言葉です。中学か高校か覚えていないのですが、たしか数学の授業で聞きました。

ぼんやりとしたイメージは、AというグループとBというグループがあって、それぞれの構成要素が一対一で対応しているとか、多対一とか、そんな話だったと記憶しています。

調べれば真偽が明らかになるのですが、あえて調べずに、いま述べたイメージに沿って書いてみます。

大切なのは、一対一で対応するという話です。とても刺激的なイメージです。

昔の写真で、すごい解像度のものをテレビで見たことがあります。モノクロで見るから古い写真なのですが、細部が半端じゃなく鮮明なのです。鉱山の写真だった気がします。

集合写真もあったのですが、百人近い人たちが会しているのです。その一人ひとりの顔がそれなりにはっきりと写っていました。

写真は影なのに目映いくらい映えるのです。「映る」は「映える」。人が写し映した人工の影だから、映えるし生えるし栄えるのです。

一対一に対応することを押しすすめた、人のつくる影はあまりにも目映く、人が追いつけないくらいに鮮明なのです。

言葉という影が、影という言葉に

ここで頭の整理のために、「うつる・うつす」を使って作文をしてみます。言葉は文の中で生きるからです。「うつる・うつす」とは？　なんて考えても何も出てきそうにありません。

写真に姿が写る。母と写っている写真はこれしかない。このページに裏ページの絵が写っている。

板書をノートに写した。写本。写経。筆写。書写。複写。写生。

鏡に顔が映る。水面に木の姿が映る。影が壁に映る。障子に人の影が映る。この辺はテレビがよく映らない。テレビにあなたの家が映ったよ。目に映る像。

プロジェクターを壁に直接投影する。プロジェクター映像を白い壁に映す。映写機。

＊

難しいですね。こういうのは苦手です。辞書や用字用語集を参照しないと作文できません。大ざっぱな表記と言葉の使い方がつかめたので、これでよしとしましょう。

＊

影には「物の姿」という意味もあるのですね。

上の例文を見ていると、言葉は影だどつくづく感じます。影という言葉が言葉という影に擬態して、表情豊かに影の舞と言葉の揺らぎを演じている。そんな気がします。

言葉という音声の波や文字の形にも、影という光の濃淡にも、それが外にある限りは意味がないのです。それでいて、外にない限りは見て確認することができない。意味は人の中にある揺らぎではないか。そんな気がしてなりません。気がするだけです。

影は言葉をなぞる。言葉は影をなぞる。なぞるはなぞ、鏡にうつる影のように永遠に解けない謎。

影を前にして、人はなぞるしかなさそうです。

正確に、細かく、うつす

上の作文を見ていると、話が大きくなり、どんどん広がりそうな予感がするので、なるべく広げないようにします。

私にとっていちばん大切というか興味深いのは、一対一に対応することなのです。

映画も写真も一対一に対応させるのが目的で作ったものだという気がします。言い換えると、風景や物を正確に、しかも細かく、そのままに「うつす」ということでしょう。

「そのまま」というのは曖昧な言い方ですが、今回は深入りしないでおきます。これを本気で考えるのは素人には無理だという気がします。わくわくしないし、楽しくもなさそうです。

現実をうつす

物や風景を写真という形で、一対一に対応させる。

あっさり書きましたが、すごいことです。気が遠くなりそうになります。現実を「うつす」、つまり写し映し移すわけです。そんなことが可能とは思えないだけに、すごいなあと感心してしまう自分がいます。

うさんくさいのです。荒唐無稽にも感じられます。平たく言えば、「うっそー！」です。「ありえない」です。「よく言うよ」とも思います。

似ていると同じ（同一）は違います。

影は「似ている」の世界にいる（ある）と言えそうです。器具や器械や機械をつかわないと「同じ（同一）」を確認できない人間も「似ている」の世界に生きているのでしょう。

人は「似ている」という印象の世界（見える世界）から「同一（同じ）」の世界（観念の世界）を夢見ているのかも知れません。

もっともっと鮮明にうつす

一対一に対応する。

うーむ。対応するのでしょうか。すかすか、まだら、まばらならできる気がします。解像度の問題でしょうか。

これくらい鮮明なら、ま、いっか。ここまでそっくりなんだから、ほぼ同じっぼい。いや、もっともっと、くっきりはっきり、リアルに。

欲張れば切りがないと思います。贅沢を覚えるとエスカレートしそうです。これ以上を望みたいとは思いません。

作られた影

写真や映画は作られた影です。地面や水面にうつった影とはそこが違います。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうね。

何を見るためにでしょう。「そっくり」を見るためではないでしょうか。

「そっくり」を見るためには、正確で細かくなければなりません。解像度を高めるわけです。これは切りがありません。もっともっとになります。

(何にそっくりなのかといえば、現実にそっくりなのであり、同時にそれは人にそっくりであり、自分にそっくりなのだという気がします。このことについては、いつか記事として書いてみたいです。)

*

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

無限に広がった紙やスクリーンにうつすわけにはいきません。人間、そこまで欲張ってはならないでしょう。

映画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間ですが、これは長いものを編集したもののようです。たとえば、ディレクターカットとか言いますよね。完全版も聞いたことがあります。トレーラー（予告編）もあります。

いろいろな編集が可能だけど、最終的にとりあえず作られ配給されたのが「作品」みたいです。それぞれ、長さ、つまり上映時間が異なると考えられます。

いずれにせよ、作られた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいません。

やはり作りものなのです。うさんくささがつきまといます。

筋書きやストーリーのある影

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。

写真であれば目的やテーマです。つまり記念写真だとか、エロ写真だとか、可愛い動物とか、報道写真とか、ブロマイドとか（死語ですか？）、カボチャの成長の記録とか、

指名手配とか、漠然と「涼しげな風景」とか、キャプションみたいなのです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック……、あとが続きませんが、いろいろありそうです。とにかく、目的やテーマのほかに、話というかストーリーがあります。

ネットなんかの動画であれば、情報カメラによる映像とか、お笑いとか、ユーチューバーの動画とか、PVとか、MVとか……、目的やテーマやジャンルや用途があります。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的やストーリーがあって作られているわけです。

＊

鏡像というのも、じつは作られた影ですね。そもそも鏡は作るものです。丹念に磨きあげて作ります。作られたものに映る影は特別なものであるはずですよ。

自然界で水面を覗きこむのとは一線を画してしかるべきだと思われまふ。

鏡には枠があります。何らかの目的があつて、作られているし、それぞれの目的があつて各人が枠のある鏡を覗きこむわけですよ。目的があるのですから、その始まりと終りという時間的な枠もあります。

お化粧、試着、顔色を見るため、歯磨き、うっとりするため、白髪を確認するため、毛の残り具合を確認するため、口内炎の状態を見るため、鼻毛を抜くため……。

ぱっとしない目的とストーリーですけど、ドラマがあることは確かですよ。じつに人間くさいドラマですよ。

＊

作られた影には作られたストーリーとドラマがある。

なんてまとめることができるかもしれません。したがって、筋書きがあるとも言えますし、フィクションであるとも言えそうです。

「そのまま」撮ったと言っても、ある視点から撮影したのであり、機器を用いる以上、修正と調整と加工と編集なしには撮影と再生はありえません。

また、作意も作為もノイズもアクシデントも、撮る者の意図なしに生じるものですから、撮ったものは（写し映したものは）、どうしてもフィクション（作り物）であり、偶然の産物になります。

こうしたことは、私のような素人がここで指摘するたぐいの話ではなく、現場で撮っていらっしゃる当事者の方々がいちばんよくご存じのはずです。

＊

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ (play)、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのは。どきどきするのは。ぞくぞく、あらら、という感じ。撮る側ではなく見る側の私はそれを楽しむだけです。

影に影を投影する

作られた影には、作られたストーリーがあるという話でした。そう考えると、やっぱり現実ではないわけです。作った物ですから当然です。フィクション、虚構です。

ましてや、一対一に対応しているなんて、まさにフィクションでしかないわけです。

＊

現実
現実。現実と写真は違う。現実と映画は違う。写真は写真。映画は映画。ですよ
ね。

現実
現実。現実と絵画は違う。絵画は絵画。ですよ。

現実
現実。物は物。言葉は言葉。言葉は現実ではない。言葉は物ではない。ですよ。

＊

とはいうものの、写真や映画という人工的な影に、人は自分を投影したり、現実を投影したり、世界を投影したりするのでしょうか。影に影を見ているとも言えそうです。

影に心を投影する。影に心を投げて、そこに心の影を見る。

わくわく、ぞくぞくする話であることは間違いありません。

筋書きも、目的も、意味もない影たち

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画——こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きていくと疲れることがあります。

外に出て、たとえば木々が地面や水面に落とす影たちを見ると、ほっとする自分がいることも確かです。その影たちには意味がないのです。ストーリーも目的もありません。ただそこに「ある」あるいは「いる」だけです。

＊

外に出なくても、屋内でまわりを見まわせば、意味のない影たちがいます。さまざまな家具や製品という人工物の影のことです。いま私のいる居間にはいろいろな光源があ

り、いろいろな物たちがあちこちに影を投げたり落としています。

映ったり写ったり移ったりする影たちもいます。誰かが動けば、何かが動けば影は移ります。揺れます。時の経過とともにもうつります。そうでなくても、つねにかすかに震えているのが分かります。

そこには筋書きもドラマもありません。

意味に疲れているからでしょうか。私は最近、意味のない影たちの意味のない揺らぎに心を動かされます。ほっとするのです。

影を前にして、人は迂回するしかなさそうです。おそらく言葉という影にまどわされながら、でしょう。人が（に）先立つ影に、人が導かれるはずがありません。人は影には追いつけません。気づくのにも遅れるのです。全体像を目にすることさえできないのです。

ぼけーっと影をながめながら生きる。これは人に備わった健全な知恵だと思います。さもなければ壊れるでしょう。だから、ぼけーっとしているのです。私のことです。手遅れかもしれませんけど。

#言葉 # 日本語 # 影 # 鏡 # 絵 # 文学 # 芸術 # 映画 # 写真 # 意味 # 迂回

文字に異物を感じる時

＊

文字に異物を感じる時

星野廉

2022年8月13日 16:12

いずれにせよ、言葉を入れたり出したりする部分が、ひととき繊細で精巧にできていることに驚かないではられません。私がとくに感心するのは手と指です。手が意思表示や治療に用いられることもあるのに注目してのことです。手というものが不思議でありません。

いちばん気がかりなのは、耳や口や目と違って、手と指が自分の目で見えることです。自分から出てきて自分の目で見える文字（音声や表情や身振りは見えません）と似ています。

（拙文「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より）

私の趣味は言葉とそのありようの観察なのですが、文字ほど不思議なものはありません。考えれば考えるほど不思議だし不気味にさえ感じる場合があります。文字に異物を感じると言えばお分かりいただけるでしょうか。

私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある、表情と身振りも言葉だと思って生活しています。

言葉のうち、文字だけが興味深い動きをしたり、ありようを見せてくれる場合を挙げていきたいと思います。

目次

文字だけが見える

文字だけがしつこく残る

文字は複製として存在し続ける

文字は「あらわれた」、そして「あらわれる」

文字を習得するには多大な時間と労力を要する

疑心暗鬼を生ず

文字だけが見える

音声、表情、身振りは発すると同時に消えていきます。しかも、発している本人には見えません。鏡やカメラを使えば別ですけど。自分の顔を直接見たことがないのと似ている気がします。ふだんは意識しないという意味です。

どんどん消えていく言葉を人は発し、受けとるわけですが、これもよく考えると不思議ですね。世界が不思議だらけに思えます。

文字は自分から出ていくところが見えます。つまり肉眼で確認できます。声や表情や身振りはそういうわけにはいきません。よく考えると不思議です。頭の上辺では分かりますが、頭の奥で分かっていない感じ、ましてや体感などできない感じなのです。

幼いころからとろいと言われてきました。そのうち物分かりが悪いとも言われるようになり、気がつくとなんか分らず屋と言われて、いまに至ります。その通りだと思います。異議なしです。

話をもどしますが、言葉（声）が出ていく口、言葉（文字と声）が入ってくる目と耳、言葉（身振りや表情）を出すときに動かす手や腕や顔のうち、その出ていくさまが自分の目で確認できるのは、手の指や手や腕くらいではないでしょうか。これも不思議です。

出ていくところはふつう見えませんが、出て残っているのを目で確認できるところはうんちに似ていませんか？

文字だけがしつこく残る

ここで拙文を引用させてください。

＊

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「〇〇はあらわれる」という言い方をする「〇〇」を挙げ、いったん「あらわれた」後にどうなるかを考えてみます。

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたくに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

いったい、何を言いたいのかと申しますと、次のようになります。

・言葉は、うんちにきわめてよく似ている。

(拙文「【小話】出たものは「静止」してはいないという話」より)

＊

以上が引用ですが、いまでは考えが変わっています。

文字は「あらわれる」という感じではなく「出る」ように思えますが、しつこく居座る気がします。その点がうんちとは違います。大違いです。

文字以外の、「発して」すぐに消える音声と表情と身振りについては、「出る」ように思えますが、文字だけがやっぱり変なのです。

文字は複製として存在し続ける

文字は複製でしか存在できないと言っても言いすぎではない気がします。文字のオリジナル、つまり現物とか実物とか本物というのは、よく考えると、ナンセンスなのです。文字は複製であってなんぼという意味です。

(.....)

文字の複製や引用は、同じ、つまりほぼ同一になります。それが文字の抽象性なのです。抽象だから複製をしても偽物（似せたもの）どころか同じという理屈になります。驚くべき性質ですね。こんなもの、ほかにありますか？ 私は考えるたびに腰を抜かしています。

(拙文「偽物っぽくない偽物」より)

最大の違いは、残った文字は複製であり、複製として存在し、複製として存続し、複製としてさらに複製を産むという点です。

いま書いた上の文を見ていると、不思議でなりません。「文字」を「○○」に変えてみるとよく分かるでしょう。

最大の違いは、残った○○は複製であり、複製として存在し、複製として存続し、複製としてさらに複製を産むという点です。

フクセイ.....ですよ？ 産む？ えっ！？ それって何のことですか？ そう言いたくなります。

文字は不思議だし、只者ではないし、ひょっとすると上の引用文で挙げた「真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、○○の神様、救世主、影響、才能、成果、結果」と同様に「あらわれる」のではないか。そんなふうに感じています。

もしそうだとすれば、言葉にしては不自然なのです。いかにも作りものめいているとか、うさんくさいとかいかがわしいとか、取って付けたような雰囲気がある感じがしてなりません。

そもそも文字は後付けっぽいのです。

文字は「あらわれた」、そして「あらわれる」

狭い意味での言葉（話し言葉と書き言葉）を持つ以前の段階では、ヒトにとって表情や身振りが言葉であり（ほんまかいな）、ある意味ではダイレクトに（うさんくさい言い方でごめんなさい、私もうさんくさいと思います）世界と触れあっていたのかもしれませんが。

やがて（適当な言葉ですね）、話し言葉を持つようになり、見よう見まねで言葉を身につけ、ヒト同士でつかよようになった（まるで見てきたような嘘）。話し言葉をヒト以外の生き物や森羅万象にまで当てはめる（拙文「【戯言】あなたと呼びかけて手なずける」）ようになった（文字どおり戯言です）。この辺から変になり、ぶるぶる震えることを覚えます（嘘つけ）。

なぜか（いい加減ですね）、書き言葉を持つようになって、もともとヒトに備わっていた「何かに何かを見る」に拍車がかかり、何かが移ってくる、何かに乗っ取られるという事態が生じ（もー、勝手にしてください）、ヒトは言葉の世界に生きるようになります。

（拙文「中に入ってきたときに、中で起きること」より）

＊

以上の引用は戯言なのですが、もしそんなふうに人が言葉を身につけてきたとするなら、文字はいちばん遅れて出てきたわけです。遅れて出てくるなんて、いかにももったいぶっているし、偉そうに思えませんか。

やっぱり「あらわれた」のことはないでしょうか。めちゃくちゃこじつけて申し訳ありません。私の文章からこじつけを取ると何も残らないのです。

文字は人類の歴史において遅れて「あらわれた」いわばスーパースターなのであり、いまも「あらわれる」、つまり「あらわれつづけている」なんて気がします。

ここだけの話ですが、文字は異星からやって来たのではないかなんて、想像というか空想することがよくあります。「唐突にあらわれた」感が半端ではないのです。怪しいし妖しいし不気味でなりません。こんなことを考えている私が、です。

文字を習得するには多大な時間と労力を要する

文字は後付けなのです。人類には無文字でいくという選択もあったのです。ないなら
ないで済ませることができたのであり、そのほうが豊かで幸せだったかもしれないとま
では言いませんが（書きましたけど）、ある意味では不自然なのです。ひょっとすると反
自然かもしれせん。

あなたは文字に恨みでもあるの？　なんて言われそうですが、あるのです。私は文
字の読み書きにとっても苦労しました。読み書きを覚えるのが、嫌で嫌で仕方なかったの
です。

識字率という言葉があるように、世界各地で、それからこれまでの歴史の中で、文字
の読み書きができないために苦労したり、ハンディを負ったりした人たちが数えきれな
いほどいたし、いまもいるにちがいません。

文字を習得するにはかなりの時間がかかります。どの言葉も覚えるのに時間がかか
りますし、一生かけて覚えていくものですが、文字の習得に要する時間と労力は群を抜
いています。

それでも必死に覚えようとしてます。さきほど挙げた識字率という言葉があることが、
文字の学習の特殊性を物語っているでしょう。以前に学習塾で教えていたころに、文字
の読み書きだけが著しく苦手な生徒さんを相手に四苦八苦したことを思い出します。

ふだん喋っている分にはじつに感性豊かで聡明なお子さんでした。学習障害という言
葉がなかった時代の話です。不思議でした。

疑心暗鬼を生ず

文字に対して覚えるこの異物感は何なのでしょう。というか、なぜ文字が異物だと感
じるのでしょうか。なぜかは分かりません。分からないから、この記事を書いている気も
します。

私の記事はいつもそうです。分からないから書くのです。書きながら分かるのではないかという淡い望みをいだきながら見切り発車するのですが、最後はやっぱり分からないままに終わります。

文字の異物感は、人の作るもので自然に帰らない（還らない）ものが圧倒的に四角い形をしているという違和感にも似ています。自然界には四角いものがめったにありません。

とうとうこの星に現れたもののような感じと云えばいいのでしょうか。地球外的な異物性と云えばいいのでしょうか。不自然であり、反自然にも思えるほどです。

整理します。

- ・文字の習得には、とほうもない時間と労力がかかる。
- ・学習障害として文字の読み書きだけができない人がいる。
- ・人類には無文字社会という選択もあった。
- ・話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りと言葉と考えた場合に、文字がいちばん遅く出てきた。個人レベルでも、文字の習得が後になりがち。
- ・文字だけが見える、しかも残る。
- ・複製として存在し広まり継承される。
- ・スーパースターとして最後にあらわれた。それでいて、あちこちであられ続けている。
- ・産む。産み続ける。

それなのに、いや、そうだからでしょうか、人は文字に取り憑かれているかのように文字をながめています。ぺらぺらの紙に見入ったり、ぺらぺらの紙を束ねて閉じたものが棚に並べられていたり、国のいちばん大切なものとして保管されているのです。人類の歴史ではそうなる間もない現象だと聞きます。

いまでは、インターネット上で文書（文字の集まり）の投稿と複製と拡散と保存がほぼ同時に起きているようですが、これは印刷物の普及よりもずっと最近の出来事です。

いまでは誰もがぺらぺらの板を携帯して、それに見入っているじゃないですか。しきりに指で擦りながら……。尋常ではありません。

ご先祖さまたちが見たら、「何やってるの？」と首を傾げるどころか、ぶったまげた挙げ句に、呆れて嘆きますよ。「そんな変なことをやっているのは、あんたらだけよ。ひょっとして、何かに取り憑かれたんじゃないの？」って。

そう言われても、板をいじるのに夢中で取り付く島もないという。

＊

そうした驚くべき状況が当り前に感じられるのは、どういうことなのでしょう。私たちは麻痺しているのでしょうか。何か大切なことを失念しているのかもしれませんが、もしかして、それに気づいていないとか……。

文字は見えるのに、じつは見えなくなっているのではないか。そんな疑念が頭をもたげます。文字の肝心な点が見えない、つまり気づかれないように仕組みられているのではないか——そんな自分でも危ういと感じられる疑心に襲われるのです。

ここまで来ると、被害妄想とか強迫観念じみていて、自分でも不安なのですが、これ以上文字のことは考えるなという意味だったりして……。そう考えるのがいちばん危うそうですね。

誰か、いや「何か」の仕業——妄想なのでしょう。もうそうなってたりして。もうそうなら、めっちゃくちゃ怖い。こんな駄洒落をぶちかましているのですから、まだ大丈夫でしょうか。

研究者でも探求者でもないのに文字のことを考えても一つもいいことがないのに、こんなことを考えているのです。文字だけでなく言葉とそのありように興味があって、観察するのが趣味なだけです。こういうやばい話は、勘弁してほしいです。

人から出て残る文字は複製であり、複製として存在し、複製として存続し、複製としてさらに複製を産む——。

ひょっとして、文字は自ら増殖しているのではないのでしょうか？ ヒトを利用し、ヒ

トに寄生して……。だって、現にいまも殖えつづけていますよ。あちこちに巣があるみたいだし。ヒトが放った文字は、ヒトから離れ、いつかこの星を乗っ取るのではないのでしょうか。

*

毎日暑いですね。

文字をダシにした怪談でしたが、少しは涼しく感じられましたか？ 「ぜんぜん」とかおっしゃらないでください。私、泣きますよ。

残暑お見舞い申し上げます。

#文字# 言葉# 異物# 複製# 寄生

人は人のつくるものに似ていく PART I

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
